氷上郡市島町

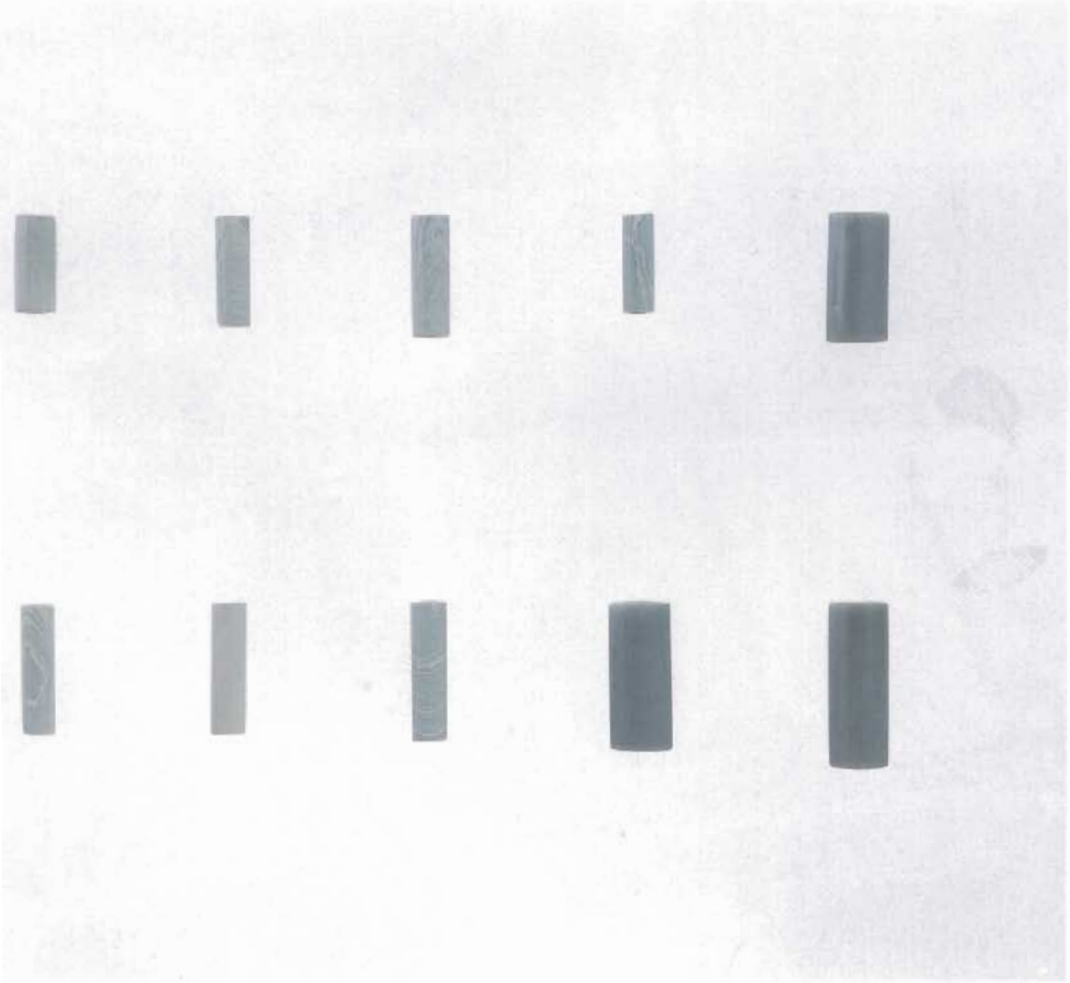
的場遺跡・上ノ段遺跡

—(国)175号特殊改良第一種事業に伴う発掘調査報告書—

調査地遠景（南から）

的場遺跡A・B地区（南から）

上ノ段遺跡A地区（東から）



上ノ段遺跡A地区周溝墓・SK14出土碧玉製管玉

例　言

1．本書は、氷上郡市島町上竹田に所在する的場遺跡・上ノ段遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、(国)175号特殊改良第一種事業に先立つもので、兵庫県柏原土木事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成４年度に分布調査、平成７年度に確認調査、平成８年度に全面調査を実施した。なお、全面調査については、㈱共伸工業に作業委託を行った。

3．整理作業は、平成12・13年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が同事務所にて実施した。なお、遺物写真については㈱タニグチ・フォトに委託した。

4．調査は道路事業用に設置されている基準点（国土座標第Ⅳ系）を基に実施した。

5．標高は東京湾平均海水準を基準とした。

6．本書の編集・執筆は池田征弘が行った。ただし、第５章の出土玉類の自然科学的分析については藁科哲男（京都大学原子炉実験所）氏に御寄稿いただいた。

7．本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水）に保管する。

8．発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。

石崎善久、荻野正太郎、下山文孝、徳原多喜雄、肥後弘幸、福島孝行、松井忠春、山田義三、八瀬正雄、藁科哲男

本文目次

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経過……1
第2節　発掘調査の経過……1
第3節　整理作業の経過……1

第2章　遺跡をとりまく環境……2

第3章　的場遺跡の調査

第1節　遺跡の概要……6
第2節　遺構と遺物……6

第4章　上ノ段遺跡の調査

第1節　遺跡の概要……13
第2節　A地区の遺構と遺物……13
第3節　B地区の遺構と遺物……20

第5章　自然科学的分析

第1節　的場遺跡出土の結晶片岩様緑色岩製小玉の産地分析(藁科哲男)……25
第2節　上ノ段遺跡出土の管玉の産地分析(藁科哲男)……32

第6章　まとめ

第1節　弥生時代前期の土器について……46
第2節　弥生時代後期の的場遺跡……48
第3節　弥生時代後・末期の上ノ段遺跡……50
第4節　奈良時代の的場遺跡・上ノ段遺跡……52
第5節　中世後期の上ノ段遺跡……54

挿図目次

第1図　遺跡の位置……2
第2図　周辺の遺跡分布図……4
第3図　的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製小玉（76380）の蛍光X線スペクトル……28
第4図　上加世田遺跡出土玉類石材のESR信号……29
第5図　的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製小玉の信号（Ⅲ）のESRスペクトル……29
第6図　結晶片岩様緑色岩製玉類の使用遺跡分布図……31
第7図　花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル……33
第8図　原石産地不明碧玉製管玉および玉材の使用圏と産地同定できた碧玉製管玉類使用遺跡……34
第9図　上ノ段遺跡出土管玉230（76381）の蛍光X線スペクトル……38
第10図　上ノ段遺跡出土管玉234（76382）の蛍光X線スペクトル……38
第11図　上ノ段遺跡出土管玉233（76384）の蛍光X線スペクトル……38
第12図　上ノ段遺跡出土管玉231（76385）の蛍光X線スペクトル……38
第13図　上ノ段遺跡出土管玉232（76386）の蛍光X線スペクトル……39
第14図　上ノ段遺跡出土管玉235（76387）の蛍光X線スペクトル……39
第15図　上ノ段遺跡出土管玉236（76388）の蛍光X線スペクトル……39
第16図　上ノ段遺跡出土管玉237（76389）の蛍光X線スペクトル……39
第17図　上ノ段遺跡出土管玉238（76390）の蛍光X線スペクトル……40
第18図　上ノ段遺跡出土管玉239（76391）の蛍光X線スペクトル……40
第19図　碧玉原石のESRスペクトル（花仙山、玉谷、猿八、土岐）……41
第20図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル……42
第21図　上ノ段遺跡出土管玉の信号（Ⅲ）のESRスペクトル……43
第22図　突帯文系土器・弥生前期土器出土遺跡の分布……47
第23図　集落の立地……49
第24図　竪穴住居跡の床面積……49
第25図　兵庫丹波地域の弥生後・末期墳墓……51
第26図　カマドが隅にある住居跡と「青野型甕」の分布……53
第27図　瓦質土器擂鉢の分布……55
第28図　出土土器の構成……56

表　目　次

第１表　調査一覧……1
第２表　遺跡分布図地名表……5
第３表　その他のピットの出土遺物……9
第４表　的場遺跡遺物一覧表(1)……11
第５表　的場遺跡遺物一覧表(2)……12
第６表　Ａ地区ピット出土の遺物……19
第７表　Ｂ地区ピット出土の遺物……20
第８表　上ノ段遺跡遺物一覧表(1)……21
第９表　上ノ段遺跡遺物一覧表(2)……22
第10表　上ノ段遺跡遺物一覧表(3)……23
第11表　上ノ段遺跡遺物一覧表(4)……24
第12表　上加世田遺跡、的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製遺物による遺物群の元素比の平均値と標準偏差……27
第13表　的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製小玉の元素比組成……28
第14表　的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製小玉の上加世田群、的場群の推定確率……30
第15表　上ノ段遺跡出土管玉の出土位置……32
第16表　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値……36
第17表　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値……37
第18表　上ノ段遺跡出土管玉の分析結果……40
第19表　上ノ段遺跡出土管玉の産地推定結果……41
第20表　上ノ段遺跡出土奈良時代土器個体数……52
第21表　瓦質土器擂鉢出土遺跡……54
第22表　上ノ段遺跡中世遺構出土遺物個体数……56

巻頭図版目次

図版１　上：調査地遠景（南から）
下：的場遺跡A・B地区（南から）

図版２　上：上ノ段遺跡A地区（東から）
下：上ノ段遺跡A地区周溝墓・SK14出土碧玉製管玉

図 版 目 次

図版１　調査区配置図
図版２　的場遺跡　全体図
図版３　的場遺跡　A・C地区平面図
図版４　的場遺跡　B地区平面図
図版５　的場遺跡　土層断面図
図版６　的場遺跡　SH01平面図・断面図
図版７　的場遺跡　SH02平面図・断面図
図版８　的場遺跡　SH03・04平面図・断面図
図版９　的場遺跡　SB01平面図・断面図
図版10　的場遺跡　SB02平面図・断面図
図版11　的場遺跡　SA01平面図・断面図
図版12　的場遺跡　SK10平面図・断面図
図版13　的場遺跡　落ち込み平面図・断面図
落ち込み内遺物出土状況平面図・断面図
図版14　上ノ段遺跡　全体図
図版15　上ノ段遺跡　地形断面図
図版16　上ノ段遺跡　A地区平面図
図版17　上ノ段遺跡　B地区平面図
図版18　上ノ段遺跡　A地区周溝墓平面図・断面図
図版19　上ノ段遺跡　A地区周溝墓主体部平面図・断面図
図版20　上ノ段遺跡　A地区周溝内貼石平面図・断面図
A地区周溝断面図
図版21　上ノ段遺跡　A地区SK14・15平面図・断面図
図版22　上ノ段遺跡　A地区SK16・20平面図・断面図
図版23　上ノ段遺跡　A地区SH01平面図・断面図
図版24　上ノ段遺跡　A地区SK01・13平面図・断面図
図版25　上ノ段遺跡　A地区SK02平面図・断面図
図版26　上ノ段遺跡　A地区SD01・02平面図・断面図
図版27　上ノ段遺跡　A地区SA01・SE01・SK03平面図・断面図
図版28　上ノ段遺跡　A地区SK07・08・09・10・24平面図・断面図
図版29　上ノ段遺跡　A地区SK27・近世墓地平面図・断面図
図版30　上ノ段遺跡　B地区西北部ピット群平面図・断面図
図版31　上ノ段遺跡　B地区土坑平面図・断面図
図版32　的場遺跡　SH01～03出土遺物
図版33　的場遺跡　SH04・ピット出土遺物
図版34　的場遺跡　SK10出土遺物
図版35　的場遺跡　落ち込み・包含層出土遺物
図版36　的場遺跡　包含層出土遺物
図版37　上ノ段遺跡　A地区弥生墳墓群出土遺物
図版38　上ノ段遺跡　A地区SH01・SK02出土遺物
図版39　上ノ段遺跡　A地区SK02出土遺物
図版40　上ノ段遺跡　A地区SD01出土遺物
図版41　上ノ段遺跡　A地区溝・井戸・土坑出土遺物
図版42　上ノ段遺跡　A地区溝・土坑出土遺物
B地区ピット・土坑出土遺物
図版43　上ノ段遺跡　包含層出土遺物

写真図版目次

写真図版１　調査地全景

写真図版２　上：調査地遠景（南から）

下：調査地遠景（北から）

写真図版３　上：調査地遠景（南から）

下：調査地遠景（東から）

写真図版４　的場遺跡　A・B地区全景

写真図版５　上：的場遺跡　A地区全景（北から）

中左：的場遺跡　A地区全景（南から）

中右：的場遺跡　C地区全景（北から）

下：的場遺跡　B地区全景（北から）

写真図版６　上：的場遺跡　SH02(東から)

中：的場遺跡　SH03(南から)

下左：的場遺跡　SH03土器出土状況（南から）

下右：的場遺跡　SH03土器出土状況（東から）

写真図版７　上左：的場遺跡　SH04(南から)

上右：的場遺跡　SH04土器出土状況（南から）

中左：的場遺跡　SH04土器出土状況（南から）

中右：的場遺跡　SH01土器出土状況（南から）

下：的場遺跡　SH01(東から)

写真図版８　１段目左：的場遺跡　SB01(南から)

１段目右：的場遺跡　SB02(北から)

２段目左：的場遺跡　SK10東半（東南から）

２段目右：的場遺跡　SK10東半（東北から）

３段目左：的場遺跡　SK10西半土器出土状況（東南から）

３段目右：的場遺跡　SK10西半土器出土状況復元（東南から）

２段目左：的場遺跡　SK10土器出土状況復元（東南から）

２段目右：的場遺跡　SK10土器出土状況復元（東北から）

写真図版９　上：的場遺跡　落ち込み（東から）

中左：的場遺跡　落ち込み土器55出土状況（西から）

中右：的場遺跡　落ち込み結晶片岩様緑色岩製小玉出土状況（北から）

下左：的場遺跡　落ち込み土器56出土状況（西から）

下右：的場遺跡　落ち込み土器57出土状況（西から）

写真図版10　上：上ノ段遺跡　遠景（東から）

中：上ノ段遺跡　A地区全景（南から）

下：上ノ段遺跡　B地区全景（南から）

写真図版11　上：上ノ段遺跡　A地区墳墓群全景（西から）
　　下：上ノ段遺跡　A地区周溝墓（北から）
写真図版12　上：上ノ段遺跡　A地区周溝墓主体部（西から）
　　中：上ノ段遺跡　A地区周溝墓北側周溝（西から）
　　下：上ノ段遺跡　A地区周溝墓西側周溝内貼石（南西から）
写真図版13　上：上ノ段遺跡　A地区周溝墓SK14(南から)
　　中左：上ノ段遺跡　A地区周溝墓SK14土器出土状況（西から）
　　中右：上ノ段遺跡　A地区周溝墓SK14管玉出土状況（東から）
　　下左：上ノ段遺跡　A地区周溝墓SK15(北から)
　　下右：上ノ段遺跡　A地区周溝墓SK20(西から)
写真図版14　上：上ノ段遺跡　A地区周溝墓SH01(南から)
　　中：上ノ段遺跡　A地区周溝墓SH01(西から)
　　下：上ノ段遺跡　A地区周溝墓SH01カマド（西から）
写真図版15　上：上ノ段遺跡　A地区SK01(北から)
　　中：上ノ段遺跡　A地区SK02(東から)
　　下：上ノ段遺跡　A地区SK02土器出土状況（西から）
写真図版16　上：上ノ段遺跡　A地区東部（北から）
　　中：上ノ段遺跡　A地区北部（南から）
　　下：上ノ段遺跡　A地区SD01(南から)
写真図版17　上：上ノ段遺跡　A地区SD01・02入口部（東から）
　　中：上ノ段遺跡　A地区東部ピット群（北から）
　　下：上ノ段遺跡　A地区西部ピット群（西から）
写真図版18　上：上ノ段遺跡　A地区SK24(東から)
　　中：上ノ段遺跡　A地区SK27(南から)
　　下左：上ノ段遺跡　A地区SK27銅銭出土状況（南から）
　　下右：上ノ段遺跡　A地区SE01(東から)
写真図版19　上：上ノ段遺跡　B地区西北部ピット群（西から）
　　中左：上ノ段遺跡　B地区SK01(北から)
　　中右：上ノ段遺跡　B地区SK02(北から)
　　下：上ノ段遺跡　B地区SK16(南から)
写真図版20　的場遺跡　SH01・02出土遺物
写真図版21　的場遺跡　SH03・04出土遺物
写真図版22　的場遺跡　SH04出土遺物
写真図版23　的場遺跡　SH04・SK10出土遺物
写真図版24　的場遺跡　SK10出土遺物
写真図版25　的場遺跡　SK10出土遺物
写真図版26　的場遺跡　SK10出土遺物
写真図版27　的場遺跡　ピット・落ち込み出土遺物

写真図版28　的場遺跡　落ち込み出土遺物
写真図版29　的場遺跡　包含層出土遺物
写真図版30　的場遺跡　包含層出土遺物
写真図版31　上ノ段遺跡　A地区周溝墓・SK20出土遺物
写真図版32　上ノ段遺跡　A地区SK14～16・SH01出土遺物
写真図版33　上ノ段遺跡　A地区SK01・02出土遺物
写真図版34　上ノ段遺跡　A地区SK02出土遺物
写真図版35　上ノ段遺跡　A地区SK02出土遺物
写真図版36　上ノ段遺跡　A地区SD01出土遺物
写真図版37　上ノ段遺跡　A地区溝・ピット・井戸・土坑出土遺物
写真図版38　上ノ段遺跡　A地区土坑出土遺物
写真図版39　上ノ段遺跡　A地区SK27・B地区ピット出土遺物
写真図版40　上ノ段遺跡　B地区ピット・土坑出土遺物
写真図版41　上ノ段遺跡　包含層出土遺物
写真図版42　上ノ段遺跡　包含層出土遺物

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

国道175号は明石から舞鶴まで続く南北の幹線道路である。市島町竹田付近より以北では集落内を縦断している箇所が多いため、兵庫県柏原土木事務所では、集落を迂回するバイパスとして、(国)175号特殊改良第一種事業を計画した。これに伴って兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所では文化財の有無を確認するために分布調査（遺跡調査番号 920394）・確認調査（遺跡調査番号 950268～950271）を実施した。

平成４年度には下竹田～中竹田区間について分布調査を行い、９地点について埋蔵文化財包蔵地が存在することを確認した。平成７年度にはそのうち南部に位置する№６～９地点について確認調査を行い、その結果２地点（№８・９地点）で遺跡の存在することが明らかとなった。そこで兵庫県柏原土木事務所より依頼を受け、的場遺跡（№９地点）および上ノ段遺跡（№８地点）の全面調査を行うこととなった。

第２節　全面調査の経過

調査は事業対象地のうち里道および用水路を除く部分を対象に行った。調査面積は的場遺跡：1840㎡、上ノ段遺跡：2602㎡ である。的場遺跡A・B地区より調査を始め、上ノ段遺跡B地区、上ノ段遺跡A地区と調査を進めた。的場遺跡C地区は当初計画には含まれていなかったが、加えて最後に調査をおこなった。調査は重機により表土・盛土を除去したのち、人力にて包含層を掘削し、精査を行って遺構の検出に努めた。検出された遺構については写真の撮影(航空写真を含む)、実測図の作成などを行った。

第１表　調査一覧

遺跡調査番号	調査の種別	調　査　担　当　者	調　査　期　間
920394	分布調査	種定淳介・山田清朝・中村　弘・所崎明雄	平成５年３月24日・25日
950268～950271	確認調査	山上雅弘・服部　寛	平成７年10月２日～５日
960086・960087	全面調査	池田征弘・野村展右	平成８年５月９日～11月27日

第３節　整理作業の経過

平成12年度は、平成７年度調査で出土した遺物28l入りコンテナにして39箱分について、当事務所にて接合・復元・実測・写真撮影などを行った。平成13年度は、遺構図および遺物実測図についてトレース・レイアウトを行った。

整理作業は整理普及班菱田淳子の補助のもとに池田が行い、金属器の保存処理については整理普及班加古千恵子・岡本一秀が行った。また、上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

柏原　美音　　古谷　章子　　吉田　優子　　喜多山好子　　石野　照代　　早川亜紀子
蔵　　幾子　　島村　順子　　大仁　克子　　小寺恵美子　　藤川　紀子　　津田　友子
岡井とし子　　三好　綾子　　蓬莱　洋子　　垣本　明美　　野上　裕子　　三島　重美

第2章　遺跡をとりまく環境

氷上郡市島町は兵庫県中東部に位置し、京都府側は福知山市・三和町に接している。市島町には日本海側へ流れる由良川の支流である竹田川が福地山方面から連なっている。さらに竹田川を春日町方面に遡って東南方に向かうと瀬戸内海側へ流れる加古川水系との分水界が位置している。この標高の低い分水界を通じた交通路は「氷上回廊」と呼ばれ、瀬戸内海側と日本海側の南北を結ぶ重要なルートであったと評価されている。

市島町は竹田川を中軸とし、この竹田川と竹田川に流れ込む前山川・鴨庄川・美和川などの支流よって周囲の丘陵が開析され、段丘や沖積地が形成されている。このような段丘や沖積地上で人々の生活が営まれてきた。このうち、的場遺跡は前山川によって形成された扇状地、上ノ段遺跡は竹田川と前山川によって形成された段丘上に位置している。

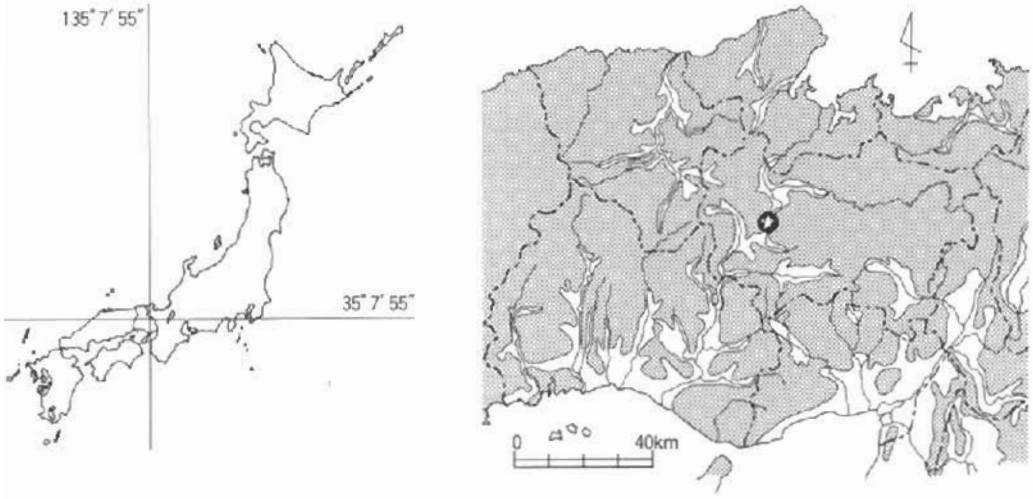
旧石器・縄文時代

この地域に人が住み始められたのは3万年前頃である。春日町七日市遺跡（25）では、4.5ヘクタールもの範囲にわたってAT下位層から3万年～2万5千年前の石器ブロックが多数検出されている。狩猟のためのキャンプ地と考えられている。市島町梶原遺跡（13）でも石器ブロックが検出されている。その他は市島町上ノ段遺跡（2）や福知山市長田遺跡（74）でわずかに石器が出土しているのが知られるのみである。

縄文時代になっても遺跡の内容がわかるほどの遺跡はほとんど見られない。春日町国領遺跡（31）では土器は出土していないが、草創期と考えられる石器ブロックが検出され、石器製作跡と考えられている。福知山市武者ヶ谷遺跡（75）では縄文草創期の土器が採集されている。そのほか、福知山市奥野部遺跡（90）で有舌尖頭器、市島町十ノ貝遺跡（5）、市島町梶原遺跡、春日町多利遺跡（21）、福知山市半田遺跡（82）、福知山市上野平遺跡（103）などで後期の土器や石器などがわずかに見つかっている。市島町高坂古墳群（4）では晩期の土坑が検出されている。

弥生時代

弥生時代でも前期の遺跡はまだ少ない。氷上町横田遺跡（48）では土坑から弥生土器が出土している。



第1図　遺跡の位置

青垣町応相寺遺跡では弥生土器、突帯文系土器、打製石斧などが溝から出土している。市島町的場遺跡(1)では落ち込みから弥生土器、突帯文系土器、結晶片岩様緑色岩製小玉などが出土している。その他、市島町上ノ段遺跡、春日町七日市遺跡から弥生土器がわずかに出土している。

弥生時代中期になると沖積地の微高地上に大規模な集落が認められる。春日町七日市遺跡(25)や福知山市興・観音寺遺跡(105)では2・3群の集落域と墓域が想定されている。Ⅳ期には小規模な集落も散見され、市島町上田遺跡(12)では住居跡、市島町的場遺跡・市島町梶原遺跡でも土器が出土していることから、近辺にⅣ期の集落が存在する可能性がある。福知山市東南部では丘陵縁辺部でも集落が認められる。奥谷西遺跡(67)・ケシケ谷遺跡(68)などでは住居跡、宮遺跡(69)では周溝墓が検出されている。またこの時期では銅鐸(春日町野々間遺跡〔28〕)や銅剣形石剣(春日町野村遺跡〔29〕、福知山市興・観音寺遺跡)の出土も注目される。

後期になると大規模な集落が衰退し、春日町国領遺跡(31)、市島町的場遺跡、福知山市松ヶ端遺跡(83)、福知山市石原遺跡(104)などのような微高地上に形成された小規模な集落が多く検出されている。またこの時期には丘陵上に墳墓が造られるようになることが多くなってくる。春日町東山墳墓群(24)・柏原町向山墳墓群(58)、青垣町ボラ山1号墓などがその例である。市島町上ノ段遺跡(2)はそれに続くもので、福知山市域でも大道墳墓群(81)・宝蔵山墳墓群(99)などが見られる。

古墳時代

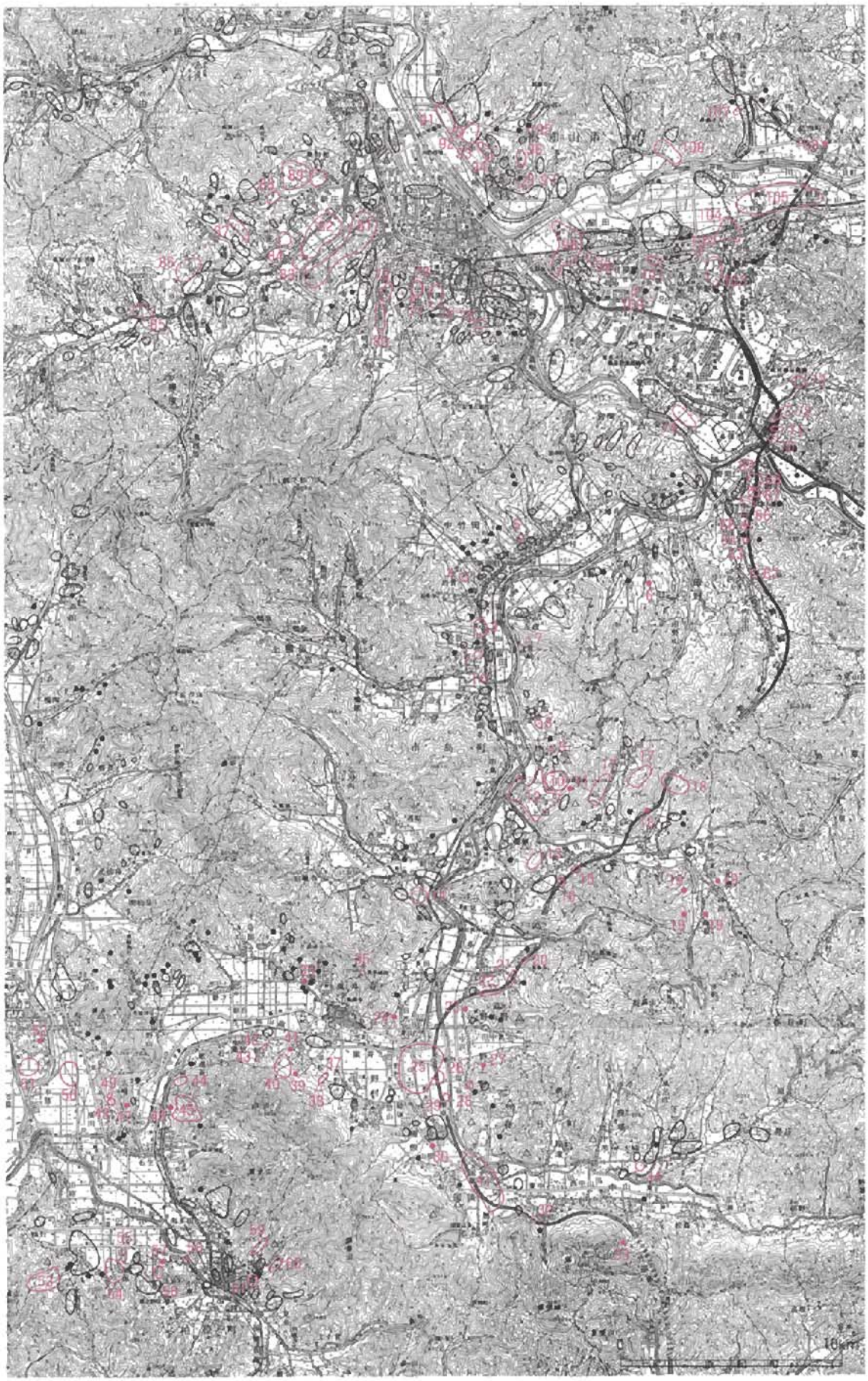
古墳時代に入ると規模の大きい古墳が築かれる。福知山市広峰15号墳(77)は全長40mの前方後円墳で、「景初4年」銘の盤龍鏡が出土している。氷上町親王塚古墳(46)は直径42mの円墳で、三角縁神獣鏡が出土している。小規模な古墳については広峰古墳群・寺ノ段古墳群(76)や豊冨谷丘陵遺跡群内の古墳群など、弥生の方形台状墓系の墳墓が見られ、氷上郡内では氷上町横田山古墳(47)や氷上町明治山古墳(52)などのような箱式石棺などがある。

その後、福知山市周辺では八ヶ谷古墳(100)や妙見1号墳(87)などの方墳や、直径70mの円墳である綾部市私市円山古墳(108)などが大規模な古墳が認められるが、氷上郡では竪穴式石室より捩文鏡が出土した直径10mの円墳である市島町久良部1号墳(8)が知られるのみである。小規模な古墳については、5世紀後半～6世紀中頃までは木棺や石棺を埋葬施設とする古墳が多くみられ、市島町高坂古墳群(4)・春日町松ノ本古墳群(20)・春日町多利向山古墳群(22)などが調査されている。

6世紀中頃には春日町多利向山C－2号墳(22)・春日町火山10号墳(37)などで、この地域に横穴式石室が導入される。春日町坂古墳群(44)・柏原町藤の目古墳群(59)・柏原町東奥古墳群(60)など大型の石室や氷上町北野古墳群(45)、柏原町七ツ塚古墳群(57)、福知山市下山古墳群(89)など大規模な群集墳が認められ、市島町内でも6世紀後半の高坂1号墳(4)が調査されている。

古　代

古代においてはこの地域は丹波国氷上郡に、福知山市は天田郡に属し、的場遺跡・上ノ段遺跡は氷上郡のうち竹田里あるいは前山里に属すると考えられる。7世紀以降、古墳にかわり寺院や役所が造られるようになる。寺院については市島町三ツ塚廃寺(10)、福知山市和久寺跡(88)、福知山市多保市廃寺(73)などである。氷上郡内ではその他に春日町野上野瓦窯跡(27)・柏原町柏原陣屋下層遺跡(61)、柏原町波尼遺跡・山南町井原遺跡などで瓦が出土しているが、伽藍の存在は確認されていない。役所については氷上町市辺遺跡や春日町七日市遺跡・山垣遺跡(26)は出土した木簡の内容から氷上郡衙とその別院の一部と考えられている。その他、市島町梶原遺跡、市島町上ノ段遺跡、市島町十ノ貝遺跡では竪



第２図　周辺の遺跡分布図

穴住居跡、市島町的場遺跡、市島町安下・堀壁遺跡（3）、柏原町柏原陣屋下層遺跡、氷上町横田遺跡では掘立柱建物跡が検出されている。また、市島町鴨庄窯跡群（16～19）は7～8世紀にかけての30基程度の窯跡が知られている。氷上郡の中心的な須恵器生産地と考えられる。

中　世

春日町下三井・庄境遺跡（34）〔10世紀〕、春日町七日市遺跡〔11～12世紀〕、福知山市大内城跡（66）〔12～16世紀〕、福知山市上ヶ市遺跡（106）〔12世紀〕、春日町多利・前田遺跡（21）〔12～13世紀〕、国領遺跡〔12～13世紀〕などでまとまった建物群が検出されている。当時の盛んな開発を示すもので、このうち下三井・庄境遺跡は淳和院領三井庄、大内城跡は池大納言家領六人部庄、上ヶ市遺跡は松尾社領雀部庄と関連するものと考えられている。

14世紀以降の集落はあまり明確ではないが市島町的場遺跡、市島町上ノ段遺跡、市島町十ノ貝遺跡などが認められる。またこの時期には春日町黒井城跡（35）をはじめとする山城がつくられ、春日町朝日城跡（43）・春日町火山城跡（38）では調査がなされている。

第2表　遺跡分布図地名表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
市島町		28	野々間遺跡	55	挙田A古墳群	83	松ヶ端遺跡
1	的場遺跡	29	野村遺跡	56	清蔵谷遺跡	84	今市遺跡
2	上ノ段遺跡	30	棚原桜塚古墳	57	清蔵谷古墳	85	石場遺跡
3	安下・堀壁遺跡	31	国領遺跡	58	向山墳墓群	86	額塚古墳群
4	高坂古墳群	32	河津館跡	59	藤の目古墳群	87	妙見古墳群
5	十ノ貝遺跡	33	中山窯跡	60	東奥古墳群	88	和久寺跡
6	石原遺跡	34	下三井・庄境遺跡	61	柏原陣屋跡下層遺跡	89	下山古墳群
7	友政城跡	35	黒井城跡	福知山市		90	奥野部遺跡
8	久良部古墳群	36	稲塚大塚古墳	62	山田古墓	91	庵我遺跡
9	鹿集城跡	37	火山古墳群	63	洞楽寺遺跡・洞楽寺古墳	92	高田山経塚
10	三ツ塚廃寺跡	38	火山城跡	64	小屋ヶ谷古墳・後正寺古墓	93	中遺跡
11	天神窯跡	39	平松神社窯跡群	65	後青寺古墳・後青寺城館跡	94	老川遺跡
12	上田遺跡	40	平松古墳群	66	大内城跡	95	賀茂野窯跡群
13	梶原遺跡	41	平松片山古墳	67	奥谷西遺跡	96	池ノ奥古墳群
14	長者ヶ野遺跡	42	朝日八幡山古墳群	68	ケシケ谷遺跡・仁田城跡	97	稲葉山古墳群
15	喜多墳墓群	43	朝日城跡	69	宮遺跡・城ノ尾城館跡	98	土師遺跡
16	鴨庄窯跡群南支群	氷上町		70	多保市遺跡	99	宝蔵山墳墓群
17	鴨庄窯跡群岩戸支群	44	坂古墳群	71	薬王寺古墳群・多保市城跡	100	八ヶ谷古墳群
18	鴨庄窯跡群上牧支群	45	北野古墳群	72	多保市城跡	101	中坂古墳群
19	鴨庄窯跡群北奥支群	46	親王塚古墳	73	多保市廃寺跡	102	仏山古墳群
春日町		47	横田山古墳	74	長田遺跡	103	上野平遺跡
20	松ノ本古墳群	48	横田遺跡	75	武者ヶ谷遺跡	104	石原遺跡
21	多利遺跡	49	横田北古墳群	76	寺ノ段古墳群	105	興・観音寺遺跡
22	多利向山古墳群	50	市辺遺跡	77	広峰古墳群	106	上ヶ市遺跡
23	二間塚古墳	51	犬岡遺跡	78	広峰遺跡	107	奉安塚古墳群
24	東山古墳群	52	明治山古墳	79	向野古墳群	綾部市	
25	七日市遺跡	柏原町		80	向野西古墳群	108	私市丸山古墳
26	山垣遺跡	53	七ツ塚古墳群	81	豊冨谷丘陵遺跡群		
27	野上野瓦窯跡	54	挙田遺跡	82	半田遺跡		

主要参考文献

氷上郡埋蔵文化財調査団・奈良大学文学部考古学研究室『氷上郡埋蔵文化財分布調査報告書(1)～(3)』1994～1996年

福知山市教育委員会『京都府福知山市遺跡地図』 1994年

春日町歴史民俗資料館・兵庫県埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡と氷上回廊』 2000年

第３章　的場遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

遺跡の立地　的場遺跡は、氷上郡市島町上竹田字的場・柳溝に所在する。市島町を南北に流れる竹田川の支流である前山川の氾濫によって形成された扇状地性の微高地上に位置する。扇状地は調査地の西約100mに位置する前山川の蛇行部を扇頂として東方に広がり、微高地の範囲は南北約150m、東西約200m程度である。遺跡の範囲もほぼそれに近いものとすれば、今回の調査区は遺跡の広がる微高地の東部を南から北に向かって縦断しているものと考えられる。

調査区　用水路および農道部分を境に南側をA地区、北側をB地区とし、A地区に隣接して拡張した部分をC地区として調査を行った。

層序　A地区では砂礫層、シルト層をベースとしてその上に遺物を包含層する黒褐色シルト質細砂層、耕土が堆積している。B地区もA地区とほぼ同様であるが、南部は黒褐色シルト質細砂層が削平されており、全体的に厚く盛土がなされている。遺構は黒褐色シルト質細砂層より掘り込まれているようであるが、この面での遺構の検出は困難なため、その下の砂礫層、シルト質極細砂層で検出を行った。

検出された遺構　時期は弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代後期、７世紀後半、14世紀の大きく５つに分かれる。

弥生時代前期は、明瞭な遺構は検出されていないが、B地区北端の扇状地の縁辺に位置する部分で落ち込みを検出した。

弥生時代後期は、竪穴住居跡４棟を検出した。住居跡は地形的により高いA地区を中心として微高地全体に散漫に分布している。なお、住居跡埋土や包含層中からはわずかに中期の土器も出土していることから、近辺に中期の集落が存在する可能性もある。

古墳時代後期は、A地区西北隅で検出された土壙墓と考えられる遺構（SK10）のみである。

７世紀後半は、A地区東南部で検出された掘立柱建物跡（SB01・02）がこの時期のものと考えられる。この建物跡の北側にあたるA地区東北隅の包含層から比較的多くの土師器・須恵器が出土している。

14世紀は、C地区で柵列（SA01）やピットなどが検出されている。

第２節　遺構と遺物

(1)竪穴住居跡

SH01（B地区）〔図版６・32　写真図版７・20〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形はやや楕円に近い直径約7.0mの円形である。検出面よりの深さは25cm程度である。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、屋内高床部、柱穴を検出した。

周壁溝　南側から東側にかけて検出された。

中央土坑　いびつな円形で、長径88cm、短径80cm、深さ40cmである。

屋内高床部　住居の南端の主柱穴外に設けられている。床面との比高差約10cmである。

主柱穴　5本である。各柱穴の径・深さはP08：33cm・41cm、P86：35cm・32cm、P87：50cm・41cm、P88：50cm・40cm、P89：40cm・28cmである。柱痕を確認したのはP89のみで径23cmである。

出土遺物　床面・埋土ともに出土遺物はわずかである。1・2は床面から、3は埋土から出土したものである。1は弥生土器長頸壺である。胴部上半にヘラ記号をもつ。2は弥生土器直口壺である。口縁部はいびつで、端部は丸味を帯びている。3は弥生土器甕である。口縁端部はやや拡張し、端面に擬凹線文が施されている。

SH02（A地区）〔図版7・写真図版6・20〕

検出状況　西側約1／3が調査区外である。

形状・規模　平面形は直径約6.5mの円形である。検出面よりの深さは10cm程度であるが、西側の壁面でみると少なくとも25cm以上ある。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、焼土、柱穴を検出した。

周壁溝　南東部で一部途切れている。

中央土坑　いびつな円形で、長径100cm、短径95cm、深さ25cmである。

焼土　P72のすぐ北側に位置し、長40cm・幅10cmである。

主柱穴　4本である。各柱穴の径・深さはP67：33cm・35cm、P81：33cm・35cm、P72：30cm・38cm、P69：45cm・24cmである。柱痕を確認したのはP72・69で、径はP72：19cm、P81：25cmである。

出土遺物　床面・埋土ともに出土遺物はわずかである。4・7は床面から、6・8は主柱穴P69から、5は埋土から出土したものである。その他、床面から台石が出土している。4・5は弥生土器壺である。4はやや横に膨れた球形の体部をもつ。5は凹線文と波状文が施されている。Ⅳ様式のもので、混入遺物と考えられる。6は弥生土器器台である。上下2段交互に円形の4方から透かし穴が穿たれている。7は小型の弥生土器鉢である。8は弥生土器蓋である。

SH03（A地区）〔図版8・32　写真図版6・21〕

検出状況　北側約2／3が調査区外である。

形状・規模　平面形は円形で、直径約8.5m程度と推定される。検出面よりの深さは20cmである。

屋内施設　周壁溝のみを検出した。

周壁溝　北側が途切れている。

出土遺物　床面の壁際に近い位置から比較的多くの土器が出土している。図示したものはすべて床面出土のものである。9・10は弥生土器甕である。9は口縁端部を拡張せず、端部に面をもつ。10は口縁端部を上方に拡張している。11は弥生土器広口壺である。口縁はハの字に開き、端部は尖り気味である。12は弥生土器水差形土器である。肩部に把手をもつ。体部は球形に近い。13は弥生土器高杯である。口縁部は外反して開く。脚部はハの字状に開くと思われる。14は弥生土器脚部である。

SH04（A・C地区）〔図版8・33　写真図版7・21～23〕

検出状況　ほぼ全体を検出した。ただし、A地区調査時には住居跡と認識していなかったため、黒褐色シルト質細砂層が厚く堆積していた北東部は十分に検出できていない。

形状・規模　平面形は直径約6.0mの円形である。残りのよい西側では検出面よりの深さは20cm程度である。

屋内施設　周壁溝、中央土坑、柱穴を検出した。

周壁溝　西側から南側にかけて検出された。本来は全周していたと考えられる。

中央土坑　いびつな円形で、長径40cm、短径35cm、深さ25cmである。

主柱穴　2本のみ検出したが、本来は4本であったと考えられる。各柱穴の径・深さはP14：38cm・25cm、P16：43cm・36cmである。

出土遺物　床面および埋土から多数の弥生土器が出土した。住居が廃絶した跡もゴミ捨て場として利用されたと考えられる。16～20・22・24が床面から、15・21・23が埋土から出土したものである。15・16は弥生土器甕である。15は口縁端部を拡張せず、端部にやや丸味をもつ。16は口縁端部を大きく拡張し、端面に擬凹線文をもつ。17は弥生土器底部である。18～21は弥生土器長頸壺である。口縁部がゆるやかにハの字状に開くもの（18）、端部を上方につまみ上げるもの（20）、端部が外方に強く開くもの（21）などがある。22～24は弥生土器高杯である。22は口縁部が外反して開く。脚部はハの字状に開き、6方に円形透かし穴をもつ。23は脚部がハの字状に開き、3方に円形透かし穴をもつ。脚柱部は中実である。24は脚柱部が筒状である。

(2)掘立柱建物跡・柵列・ピット

SB01（A地区）〔図版9　写真図版8〕

検出状況　建物の東部は調査区外である。

形状・規模　桁行3間、梁行2間以上の側柱建物である。柱穴間の心々距離は桁行方向で南北両側が2.0m、中央が2.7m、梁行方向で2.25mである。建物の主軸方向はN15.5°Eである。

柱穴　平面形は円形のものや隅丸方形のものがある。直径は60cmから45cmのものが多い、P10は100cmと大きい。深さは30～20cmである。柱痕を検出できたのは2基で、その径は28cmである。

出土遺物　P10から須恵器・土師器、P15から土師器、P23から須恵器・土師器、P28から土師器が出土しているが、細片のため時期を判別することはできない。

SB02（A地区）〔図版10　写真図版8〕

検出状況　建物の東部は調査区外である。

形状・規模　桁行2間以上、梁行2間の側柱建物である。柱穴間の心々距離は、桁行方向で1.7m、梁行方向で2.35mである。建物の主軸方向はN14°Eである。

柱穴　平面形は円形のものが多い。直径は60cmから40cmのものがある。深さは44～22cmである。柱痕を検出できたのは2基で、その径は28～21cmである。

出土遺物　P30から土師器が出土しているが、細片のため時期を判別することはできない。

SA01（C地区）〔図版11・写真図版27〕

検出状況　柵列の西側は調査区外で、遺構は西側に延びる可能性がある。また柵列の北側に位置するP08・11などは同時期の遺物を出土しており、1連の遺構である可能性がある。

形状・規模　1列4間分を検出した。柱穴間の心々距離は2.0～1.4mと不揃いである。柵列の主軸方

向はN2.5°Eである。

柱穴　平面形は円形である。直径は43cm～24cmのものがある。深さは45～25cmである。柱痕を検出できたのは4基で、その径は25cmである。

出土遺物　P02から土師器皿（26）・瓦器碗、P03から土師器皿（27）・鍋（28）、P06から土師器片、P08から土師器皿・鍋・須恵器片、P09から土師器片・須恵器片が出土している。時期は28の鍋から14世紀頃のものと考えられる。

その他のピット

以上に取り上げたもの以外にも多数のピットを検出したが、十分に建物などを復元することができなかった。SH02（A地区）を切るかたちで検出されたピットの中にはP75のように7世紀代の須恵器杯G（25）を含むものがあり、このあたりにその時期の遺構が存在する可能性がある。

第3表　その他のピットの出土遺物

地区	遺構名	出土遺物	地区	遺構名	出土遺物	地区	遺構名	出土遺物
A	P04	土師器片	A	P55	土師器片	A	P79	須恵器片、土師器片
A	P08	須恵器片、土師器片	A	P61	土師器片	A	P80	須恵器片、土師器片
A	P14	土師器片	A	P67	土師器片	A	P82	土師器片
A	P16	土師器片	A	P68	土師器片	C	P09	弥生土器甕片
A	P17	土師器高杯脚、土師器片	A	P72	土師器片	C	P10	土師器片
A	P19	土師器片	A	P74	土師器片	B	P01	土器片
A	P21	土師器片	A	P75	須恵器杯G（25）	B	P02	土器片
A	P29	土師器片	A	P76	土師器片	B	P03	土器片
A	P41	土師器片	A	P77	須恵器片	B	P05	土器片
A	P48	土師器片	A	P78	土師器片	B	P06	土器片

(3)土壙墓SK10（A地区）〔図版12・34　写真図版8・23～26〕

検出状況　全体を検出することができたが、調査中に一部分を盗掘された。出土遺物の配置・構成を考えると、土壙墓の可能性が考えられる。

形状・規模　長さ2.2m、幅0.9mのやや隅の円い長方形の土坑である。検出面からの深さは17cmであるが、壁面の断面からみると25cm以上の深さは有していたと考えられる。

出土遺物　調査中に床面南半を盗掘により荒らされたため遺物の出土状況が定かでない部分がある。盗掘された遺物は遺構脇に放置されていた。遺物の接合状況から見ると、完形個体以外に持ち去られたものはないと考えられ、持ち去られたものがあるとしても、盗掘部分のスペースと遺物の出土量から考えれば、杯1・2個程度であろう。

床面南半では須恵器杯身5、杯蓋6、有蓋高杯3、無蓋高杯1、鼎1が出土した。盗掘を受けた部分では東寄りに有蓋高杯が置かれていたことが盗掘前に観察され、その西側に杯類が置かれていたと推定される。床面北半では北壁付近で長頸壺1、横瓶1が出土した。埋土には径3cm以下の焼土塊（47）が含まれていた。

29・32・34・35・37・38は須恵器杯蓋である。天井部の調整は29が回転ヘラケズリである以外は、ヘラ切りでほとんど調整を施さないものである。胎土・焼成の状態から32・35が類似する。30・31・33・36・39は須恵器杯身である。底部の調整は30・31が回転ヘラケズリ、33・36・39がヘラ切りでほとんど

調整を施さないものである。胎土・焼成の状態から30・31が類似する。38の杯蓋と39の杯身は焼成時からのセットである。40～42は須恵器有蓋高杯である。2段2方の長方形透かしをもつ。対応する蓋は出土していない。43は須恵器無蓋高杯である。2段2方のスジ状透かしをもつ。44は須恵器甕である。45は須恵器長頸壺である。46は須恵器横瓶である。

(4)落ち込み〔B地区〕〔図版13・35　写真図版9・27・28〕

検出状況　扇状地の縁辺に位置する。北西方向からの洪水によって形成された落ち込み状の地形である。

形状・規模　西側は南側のみ段になっているが、東側はやや溝状になっている。深さは南肩で45～30cm程度である。

出土遺物　明瞭に落ち込みとして取り上げることができたのは弥生時代前期の土器（54～57）、結晶片岩様緑色岩製の小玉（62）である。落ち込み南縁の溝状部分から出土した。上層の弥生後期の包含層と区別して調査できなかった部分から出土した48～53の突帯文系の土器や58～61の弥生時代前期の土器もこの遺構から出土したものである可能性が高い。

48～61は突帯文系土器の深鉢である。48～52は口縁端部外面に縁帯を貼り付けたもので、48・50は縁帯の下端をゆるく筋状につまみ上げている。51は縁帯部に右下がりの線状の刺突、52は2段の方形の刺突をもつ。53は外方を向く端面に半截竹管による刺突が施されている。

54～61は弥生土器の広口壺である。54は頸部に4条以上のヘラ描沈線文、胴部上半に4条のヘラ描沈線文を2単位もつ。56は頸部に1条の貼付棒押圧突帯をもつ。57は胴部に3条のキザミ目突帯をもち、頸部に6条のヘラ描沈線と5列の円形刺突が交互に配されている。58は頸部に2条以上の貼付突帯と2条以上の貼付棒押圧突帯が交互に配されている。59は胴部に3条以上の貼付突帯をもつ。60は頸部に2条以上の貼付突帯をもつ。61は弥生土器の甕である。口縁部は如意形で、端部は残存部が少ないためキザミの有無は分からない。頸部に7条のヘラ描沈線文をもつ。

62は結晶片岩様緑色岩製の小玉である。両面とも孔側に向かってくぼんでいる。色調はヒスイと類似し、透明感のある緑色がベースで、部分的に白味がかった部分が混じっている。(石材の分析は第5章第1節を参照)

(5)包含層〔図版36　写真図版29・30〕

検出状況　A・B両地区とも遺構面上に遺物を含む黒褐色シルト質細砂層が堆積していた。特に弥生時代後期の遺物は住居跡付近とB地区北端の包含層に見られ、奈良時代の遺物はA地区東北隅でまとまって出土している。

出土遺物　弥生時代後期と奈良時代の遺物が多く含まれていたが、弥生時代後期の遺物は住居跡ほど残りのよいものは少ないので、主としてA地区東北隅で出土した奈良時代の遺物（70～84）を取り上げる。

63～68は弥生土器である。63・64は甕である。65は壺である。口縁端部は上下に大きく拡張され、端面に連続渦巻文をもつ。66は無頸壺である。67はミニチュアの鉢である。68は鉢である。外面に突帯をもつ。69は高杯の環状の把手である。

70～81は須恵器である。70～72は杯Iである。73・74は杯Bである。75は台付碗である。76・77は杯B

蓋である。76は受部の内面にかえりをもち、77はかえりをもたない。78・79は杯G蓋である。79のつまみは剥離している。80は壺Kである。81は甑である。外面下端の四方が穿孔される。

82～84は土師器である。82は碗である。83・84は甕である。84の口縁部内面はヨコナデが強く施されている。

85は敲石である。86は砥石である。全面使用されている。

第4表　的場遺跡遺物一覧表（1）

番号	器種	器形	地区	遺構名	層位	口径	器高	底径	その他の法量	色調	調整および備考
1	弥生土器	長頸壺	B	SH01	床面	10.8	23.8	4.0	腹径15.3	5YR7/8橙	外面はタテハケ、口縁部内面及び底部内面はヨコハケ、体部内面はケズリ、体部上位にヘラ記号
2	弥生土器	壺	B	SH01	床面	12.75				5YR5/3にぶい赤褐	口縁部はヨコナデ、口縁部内面は部分的にヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面はケズリ
3	弥生土器	甕	B	SH01	埋土	12.1			腹径13.1	7.5YR7/4にぶい橙	口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はケズリ
4	弥生土器	壺	A	SH02	床面			5.4	腹径17.8	2.5YR7/8橙	体部中位はミガキ、底部外面はタテハケ、底面はミガキ
5	弥生土器	壺	A	SH02	埋土					10YR8/3浅黄橙	体部上位に3条の沈線と波状文
6	弥生土器	器台	A	SH02	P79			14.68		7.5YR8/1灰白	外面はタテハケ後ミガキ、内面上位はヨコハケ、下位はタテハケのちナデ
7	弥生土器	鉢	A	SH02	床面	10.45	7.8	4.9		7.5YR8/4浅黄橙	体部外面はヨコハケ、体部内面及び脚部はナデ
8	弥生土器	蓋	A	SH02	P79				つまみ径3.8	10YR6/4にぶい黄橙	内面はハケ、つまみ部はナデ
9	弥生土器	甕	A	SH03	床面	14.1	19.85	5.1	腹径16.0	10YR8/3浅黄橙	口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はケズリ、底面はナデ
10	弥生土器	甕	A	SH03	床面	13.9	10.8	4.7	腹径14.0	10YR8/2灰白	口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面は摩滅、底面はハケ
11	弥生土器	壺	A	SH03	床面	10.8				10YR7/6明黄褐	口縁部内外面ともヨコナデ
12	弥生土器	水指形土器	A	SH03	床面			4.0	腹径14.65	7.5YR8/4浅黄橙	体部外面上半はミガキ、体部外面下半はヨコナデ、体部内面はナデ、底面はナデ
13	弥生土器	高杯	A	SH03	床面	26.56				5YR7/6橙	杯部は摩滅、脚部外面はタテハケのちミガキか、脚部内面はナデ
14	弥生土器	脚	A	SH03	床面			7.7		10R6/6赤橙	外面はミガキ、内面はナデ
15	弥生土器	甕	A-C	SH04	床面	15.0				5YR7/6橙	口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ
16	弥生土器	甕	A-C	SH04	床面	16.4	(20.6)	4.3	腹径18.9	10YR8/2灰白	口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はケズリ、底部外面はナデ
17	弥生土器	底部	A-C	SH04	床面			4.35		7.5YR8/4浅黄橙	内面はケズリ、外面はタテハケ、底面はナデ
18	弥生土器	長頸壺	A-C	SH04	床面	15.4	30.5	5.15	腹径15.8	7.5YR8/4浅黄橙	外面はタテハケ、頸部内面はヨコハケ、体部内面はケズリ、底部外面はナデ、底部は穿孔
19	弥生土器	長頸壺	A-C	SH04	床面			4.0	腹径15.0	5YR7/6橙	外面は摩滅、内面下位はタテハケ、内面中位はヨコハケ
20	弥生土器	長頸壺	A-C	SH04	床面	8.0				5YR7/6橙	内外面とも摩滅
21	弥生土器	長頸壺	A-C	SH04	床面	15.2				5YR7/6橙	口縁部内外面および頸部内面上半はヨコナデ、頸部内面下半はケズリ、頸部外面はミガキ
22	弥生土器	高杯	A-C	SH04	床面	22.0	20.1	19.6		10YR8/4浅黄橙	外面は摩滅
23	弥生土器	高杯	A-C	SH04	埋土			13.0		5YR7/6橙	外面とも摩滅、外面にタテハケが残る
24	弥生土器	高杯	A-C	SH04	埋土					10YR8/4浅黄橙	内外面とも摩滅
25	須恵器	杯G	A	P75	埋土	(11.2)	4.8			N6/0灰	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ
26	土師器	小皿	C	P02	埋土	7.8	1.7			10YR8/2灰白	口縁部内面はナデ、その他はユビオサエ
27	土師器	小皿	C	P03	床面	(7.8)	1.45			10YR8/3浅黄橙	口縁部内面はナデ、その他はユビオサエ
28	土師器	鍋	C	P03	床面					2.5YR7/4淡赤橙	口縁部内外面ともヨコナデ、体部外面は平行タタキ
29	須恵器	杯蓋	A	SK10	床面	12.7	3.6			N6/0灰	天井部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ、天井部外面にヘラ記号
30	須恵器	杯身	A	SK10	床面	11.2	3.8		受部径13.5	N7/0灰白	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ、31と同類
31	須恵器	杯身	A	SK10		11.1	4.15		受部径13.8	N6/0灰	底部外面は回転ヘラ削り、その他は回転ナデ、受部に重ね焼きの痕跡あり、30と同類
32	須恵器	杯蓋	A	SK10		12.3	3.9			5B6/1青灰	天井部外面はヘラ切り後部分的に粗いナデ、その他は回転ナデ、35と同類
33	須恵器	杯身	A	SK10		11.6	3.8		受部径13.6	N3/0暗灰	底部外面はヘラ切り、その他は回転ナデ、受部に重ね焼きの痕跡あり
34	須恵器	杯蓋	A	SK10		13.2	3.8			N7/0灰白	天井部外面はヘラ切り、その他は回転ナデ
35	須恵器	杯蓋	A	SK10		12.35	3.4			N6/0灰	天井部外面はヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデ、32と同類
36	須恵器	杯身	A	SK10		11.25	3.7		受部径13.45	N7/0灰白	底部外面はヘラ切り、その他は回転ナデ、受部に重ね焼きの痕跡あり
37	須恵器	杯蓋	A	SK10		12.7	4.1			N7/0灰白	天井部外面はヘラ切り、その他は回転ナデ
38	須恵器	杯蓋	A	SK10	床面	12.5	4.3			N7/0灰白	天井部外面はヘラ切り後粗いナデ、その他は回転ナデ、39とセット

第５表　的場遺跡遺物一覧表（2）

番号	器種	器形	地区	遺構名	層位	口径	器高	底径	その他の法量	色調	調整および備考
39	須恵器	杯身	A	SK10		11.3	3.65		受部径13.55	N6／0灰	底部外面はヘラ切り後粗いナデ、その他は回転ナデ、38とセット
40	須恵器	有蓋高杯	A	SK10		14.9	19.15	14.9	受部径17.7	N4／0灰	内外面とも回転ナデ、脚部に2方2段透かし
41	須恵器	有蓋高杯	A	SK10		14.65	20.0	14.9	受部径17.8	N6／0灰	内外面とも回転ナデ、脚部に2方2段透かし
42	須恵器	有蓋高杯	A	SK10		14.55	19.9	15.15	受部径17.2	N6／0灰	内外面とも回転ナデ、脚部に2方2段透かし
43	須恵器	無蓋高杯	A	SK10		11.9	14.5	10.85		N6／0灰	内外面とも回転ナデ、脚部に2方2段スジ状透かし
44	須恵器	甕	A	SK10	床面	12.6	15.25		腹径9.8	N6／0灰	底部外面～体部下半外面はカキ目、その他は回転ナデ
45	須恵器	長頸壺	A	SK10	床面	7.85	19.1		腹径14.5	N6／0灰	底部外面～体部下半外面はカキ目、その他は回転ナデ
46	須恵器	横瓶	A	SK10	床面	10.1	20.8		腹径24.3	N6／0灰	体部外面の2／3はタタキ後カキ目、体部外面の2／3はタタキ後部分的にナデ、体部内面は当て具痕、口縁部内外面は回転ナデ
47	焼土		A	SK10							
48	縄文土器	深鉢	B	包含層		(27.7)			腹径27.8	7.5YR5／4にぶい褐	内面と体部外面はナデ、口縁部外面はヨコナデ
49	縄文土器	深鉢	B	包含層						10YR5／4にぶい黄橙	内外面ともナデ
50	縄文土器	深鉢	B	包含層						10YR6／4にぶい黄橙	内外面ともナデ
51	縄文土器	深鉢	B	包含層						10YR6／2灰褐	外面はナデ、内面はヨコナデ、突帯部に刺突
52	縄文土器	深鉢	B	包含層						10YR6／4にぶい黄橙	内外面ともナデ、突帯部に刺突
53	縄文土器	深鉢	B	包含層						5YR6／6橙	内外面ともナデ、口縁部外面に刺突
54	弥生土器	広口壺	B	落ち込み		20.7				10YR8／3浅黄橙	頸部外面はタテハケ、頸部内面はナデ、口縁部内外面はヨコナデ、頸部に5条以上の沈線、口縁端面に凹線
55	弥生土器	広口壺	B	落ち込み					腹径24.0	2.5Y7／4浅黄	外面は横方向ミガキ、胴部上半に4条の沈線2単位
56	弥生土器	広口壺	B	落ち込み		12.4			腹径20.6	5YR7／6橙	摩滅のため調整不明、頸部に棒圧痕文突帯
57	弥生土器	広口壺	B	落ち込み		11.4			腹径16.2	10YR7／4にぶい黄橙	頸部内面～胴部外面はミガキ、胴部内面上半には指頭圧痕、胴部には3条の刻目突帯、頸部には6条の沈線と5条の円形刺突
58	弥生土器	広口壺	B	包含層						7.5YR7／6橙	摩滅のため調整不明、頸部に2条の突帯と2条の棒状圧痕突帯
59	弥生土器	広口壺	B	包含層					腹径(26.0)	7.5YR8／4浅黄橙	摩滅のため調整不明、胴部に3条の突帯
60	弥生土器	広口壺	B	包含層		(19.8)				10YR8／4浅黄橙	摩滅のため調整不明、頸部に2条の突帯
61	弥生土器	甕	B	包含層						10YR6／4にぶい黄橙	摩滅のため調整不明、体部上端に2条の突帯
62	玉	小玉	B	落ち込み					径7.5mm		結晶片岩様緑色岩製
63	弥生土器	甕	B	包含層		13.5				10YR8／2灰白	口縁部はヨコナデ、体部内面はケズリ、体部外面は摩滅
64	弥生土器	甕	B	包含層				4.4		2.5Y4／1黄灰	外面はタタキ、内面はナデ
65	弥生土器	壺	A	包含層						5YR7／6橙	内面はヨコナデ、外面は縦方向のミガキ、口縁端面に渦巻き文
66	弥生土器	無頸壺	A	包含層		5.6	6.0		腹径8.6	10YR7／4にぶい黄橙	外面～体部内面はナデ、底部内面はハケ
67	弥生土器	ミニチュア鉢	A	包含層		5.4	3.8	2.1		7.5YR7／6橙	内面はハケのちナデ、外面は摩滅
68	弥生土器	台付鉢	A	包含層						5YR5／6明赤褐	内面はヨコハケのちナデ、外面はタテハケのちナデ
69	弥生土器	高杯	A	包含層						7.5YR7／4にぶい橙	外面は摩滅
70	須恵器	杯I	A	包含層		10.8	3.9	8.2		N4／0灰	底部内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ
71	須恵器	杯I	A	包含層		(10.4)	3.2	(7.8)		5Y7／1灰白	底部内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ
72	須恵器	杯I	A	包含層		11.3	3.3	6.5		2.5Y8／2灰白	底部内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ
73	須恵器	杯B	A	包含層		15.3	3.9	9.3		5Y7／1灰白	底部内面～体部外面は回転ナデ、底部外面中央部はヘラ切り、底部外面外縁部はヘラケズリ
74	須恵器	杯B	A	包含層		11.2	3.6	8.6		5Y7／1灰白	底部内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り
75	須恵器	台付椀	A	包含層				6.1		N6／0灰	内外面とも回転ナデ、底部内面中央は仕上げナデ
76	須恵器	杯B蓋	A	包含層		15.8	2.8			7.5Y6／1灰	頂部は回転ヘラケズリ、縁部内外面はヨコナデ、内面中央部は仕上げナデ
77	須恵器	杯B蓋	A	包含層		15.8	2.75			N5／0灰	頂部は回転ヘラケズリ、縁部内外面はヨコナデ、内面中央部は仕上げナデ
78	須恵器	杯G蓋	A	包含層		10.5	2.6			5Y6／1灰	頂部は回転ヘラケズリ、縁部外面～内面は回転ナデ
79	須恵器	杯G蓋	A	包含層		11.0	2.9			2.5Y8／1灰白	頂部中央はヘラ切り、頂部外縁は回転ヘラケズリ、縁部外面～内面は回転ナデ
80	須恵器	長頸壺	A	包含層		9.2				2.5Y6／1黄灰	内外面とも回転ナデ
81	須恵器	甑	A	包含層				10.2		2.5Y7／1灰白	外面はカキ目のちナデ、内面下部は回転ナデ、内面上部は斜め方向のナデ
82	土師器	杯	A	包含層		9.9	3.95			7.5YR5／4にぶい褐	底部内面はナデ、体部内面～口縁部外面はヨコナデ、体部外面～底部外面はナデ
83	土師器	甕	A	包含層		(29.0)				7.5YR6／6橙	外面は摩滅
84	土師器	鍋	A	包含層		(28.1)				10YR6／4にぶい黄橙	口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はケズリ
85	石器	敲石	B	包含層							4面に敲打痕
86	石製品	砥石	A	包含層							全面を使用

第４章　上ノ段遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

遺跡の立地　上ノ段遺跡は、氷上郡市島町上竹田字上ノ段に所在する。遺跡の位置する前山川から北側の竹田川左岸には高位・中位段丘が広がっている。そして、これらの段丘が開析されて、小さな尾根が竹田川にむかっていくつも突き出たかたちになっている。上ノ段遺跡はこれらの小さな尾根のうち最も南側に位置している。段丘崖下からの比高差は約５ｍと南方への眺めは非常に良好である。今回の調査区はこの尾根の先端から約100m山側のところを横断するように設定されている。

調査区　里道部分を境に南側をＡ地区、北側をＢ地区とした。

層序　基本的に表土・耕土を除く堆積層はほとんど認められない。南東部の突出した部分にのみ弥生時代前期から奈良時代にかけての包含層が堆積している。地山は黄色シルト質極細砂層であるが、南側の低い部分には部分的に黒色シルト質極細砂層が堆積している。

検出された遺構　時期は弥生時代後・末期、奈良時代、室町時代、江戸時代の大きく５つに分かれる。

弥生時代後・末期は、Ａ地区南端の段丘崖に面した部分で墳墓群が検出された。調査区の東南隅で周溝墓１基が検出され、周溝外のすぐ西側に東西方向の木棺墓２基（SK14･20）と南北方向の木棺墓１基（SK15）が位置している。さらにその６ｍ西側で東西方向の木棺墓１基（SK16）が検出された。周溝墓の東側は段になって落ちている。

奈良時代は、Ａ地区南東端でカマドをもつ竪穴住居跡１棟（SH01）が検出された。また、この住居跡の周囲からは土坑３基（SK01・02・13）が検出されている。

室町時代は、Ａ・Ｂ両地区で遺構が検出された。Ａ地区は南北方向の区画溝（SD01・02）で東西に分割されている。溝の西側では柵列（SA01）、井戸（SE01）、ピットなどが検出された。溝の東側は溝に設けられた陸橋部付近で南北に分かれる。南側では土坑（SK03・07・08・10）などが検出され、北側ではピットが検出されている。調査区の東北部は大きく削平されており、遺構は残存していない。

Ｂ地区は近世の削平のため、西北部でのみこの時期の遺構が残存している。土坑（SK01・02）やピットが検出された。Ａ地区と比べて、ピットの深さは深く、遺物も多く出土している。土地利用の差が伺われる。

江戸時代は、Ａ地区では墓が検出された。調査区の中部で木棺墓１基（SK27）、北部で溝に囲まれた墓（SK28～30）が検出された。Ｂ地区では削平された部分で土坑（06～08・13）、埋桶（SK15）などを検出した。調査前まではＡ地区の里道寄りに妙見堂とそれに附属する墓地・経塚（明治29年建立）が位置していたが、堂と経塚については包含層より経石（241）を採取できたのみで、遺構として検出することができなかった。

第２節　Ａ地区の遺構と遺物

(1)弥生時代後･末期の遺構

周溝墓〔図版18～20・37　写真図版11・12・31〕

検出状況　南・東端を除き大部分を検出した。南側は段丘崖、東側は段状に下がっている。

形状・規模　平面形は正方形に近い。溝の内法で東西13mで、南北は12mと推定される。墳丘の盛土は認められなかった。

附属施設　中央に主体部１基、東西北の三方で周溝を検出された。

主体部　主体部は東西方向である。棺は長さ2.5m、幅0.8mの箱形の組み合わせ式木棺と考えられる。掘方は長さ3.3m、幅2.0mで、西側の隅が突出し、東辺がやや膨らんでいる。東側の隅付近には深さ６cm程度の浅いピットが存在する。棺内の床面からは鉄剣（93）が出土した。剣の切先は西側を向いている。棺内の埋土からは碧玉製管玉７個（95～101）が出土し、掘方直上および棺内埋土からは同一固体の弥生土器壺（87）の破片が散布した状態で出土した。なお、主体部の埋土はすべて水洗洗浄をおこなった。

周溝　段丘崖である南側を除き３方に溝がめぐっている。ただし、東側は調査区の端にあたり、溝の東肩を明確にすることはできなかった。西側溝の幅は約1.5m、北側溝の幅は約2.5mである。深さは60～40cmである。西側溝の中央部では径30cm以下の礫が貼り石状になった部分が認められ、さらにこの部分から南側にかけてかなりの転石が認められた。貼石状の部分付近では弥生土器長頸壺（88）が出土している。

出土遺物　87は小型の壺である。口縁部は丸味を持ちながらやや受け口状に立ち上がる。口縁部外面に擬凹線をもつ。88は長頸壺である。体部は横に大きく膨らみ、長い頸部をもつ。口縁部外面に擬凹線をもつ。

93は鉄剣である。背に稜は認められず、ヘラ状を呈している。刃部の茎に近い部分は刃が付けられておらず、刃が付けられているのは先端より10.5cmまでである。茎に目釘孔は認められない。

95～101は緑色凝灰岩製管玉である。いずれも両側穿孔である。95・96は外面に研磨面が残っている。色調はやや白味がかった緑色に白色部分がマーブル状に混ざっている。石材は女代南B群に同定された（石材の産地については第５章第２節を参照）。

SK14〔図版21・37　写真図版13・32〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　掘方の平面形は隅丸長方形で、長2.62m、幅1.32m、深さ0.2mである。棺の痕跡は確認できなかったが、わずかに中央が丸く凹んでいることから、刳り抜き式の木棺であった可能性が高い。

出土遺物　棺内床面から碧玉製管玉３個（102～104）が出土した。棺外掘方内から弥生土器甕１個（91）が出土した。口縁部はほぼ完形で、破片はそれほど散乱していなかった。

91は弥生土器甕である。口縁端部は上方に拡張し、上面に面をもつ。端部外面には擬凹線をもつ。

102～104は碧玉製管玉である。すべて両側穿孔で、色調は濃緑色である。石材の産地は同定できなかったが、すべて同一の産地と考えられる。（石材の産地については第５章第２節を参照）

SK15〔図版21・37　写真図版13・32〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　掘方の平面形は隅丸長方形で、長2.66m、幅0.9m、深さ0.3mである。棺の痕跡は確認できなかったが、わずかに中央が丸く凹んでいることから、刳り抜き式の木棺であった可能性が高い。

出土遺物　棺中央部の埋土上層から弥生土器甕１個（92）が比較的まとまって出土した。

92は弥生土器甕である。口縁端部は上方につまみ上げたように拡張する。平底の底部は非常に小さい。

SK16〔図版22・37　写真図版32〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　掘方の平面形は隅丸長方形で、長2.46m、幅0.84m、深さ0.12mである。棺の痕跡は確認できなかった。地山には礫が多く含まれているため、底面の形状はいびつである。

出土遺物　埋土から弥生土器甕１個（89）が出土した。口縁端部はやや開き気味に上方へ拡張する。

SK20〔図版22・37　写真図版13・31〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　掘方の平面形は隅丸長方形で、長2.3m、幅0.94m、深さ0.26mである。棺は組合式木棺である。長1.5m、幅0.42mである。

出土遺物　棺内床面から鉄製鉋（94）が出土した。先端は西側を向いている。西半の掘方直上から弥生土器甕１個（90）が散乱して出土した。

90は弥生土器甕である。口縁は単純口縁で、くの字に外反して開く。

94は鉄製鉋である。茎の断面は方形で、腹面に木棺材が付着している。

(2)奈良時代の遺構

SH01〔図版23・38　写真図版14・32〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は南北4.58m、東西3.8mの長方形である。検出面よりの深さは30cm程度である。

屋内施設　造り付けカマド、土坑、周壁溝、柱穴を検出した。

造り付けカマド　東壁北よりの位置で検出された。焼土面と左袖が検出され、煙道は認められなかった。焼土は壁より約50cm内側のところに位置している。

土坑　カマドのない３方の隅で検出された。いずれも住居跡床面より深さ10cm程度と浅い。

周壁溝　東壁のカマドの両側でのみ検出された。幅は33cm、深さは４cmである。

主柱穴　西壁よりの２本が主柱穴であったと考えられる。各柱穴の径・深さはP４：30cm・36cm、P17：30cm・16cmである。

出土遺物　床面からは土師器杯A（107）、カマドの崩壊土中から土師器甕（109）、埋土から須恵器杯B（105）、須恵器壺、須恵器甕、土師器杯A（106）、土師器甕（108）などが出土した。出土個体数は須恵器杯B：１、須恵器壺：１、須恵器甕：１、土師器杯A：４、土師器甕：８である。

105の須恵器杯Bは転用硯として使用されている。106の土師器杯Aの内面には往復連続放射状暗文をもつ。108の土師器甕の口縁部外面と109の土師器甕の口縁部内面には強いヨコナデが施されている。

SK01〔図版24・38　写真図版15・33〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は南北2.9m、東西2.6mの長方形で、南東部が突出したような形状である。検出面よりの深さは36cm程度である。中央部径90cmの範囲が焼けており、最下層と中層に炭化物層が認められた。遺物は下層の４層から出土したものが多い。

出土遺物　埋土の下層から須恵器（110～113）・土師器が出土した。出土個体数は須恵器杯A：1、須恵器杯B：1、須恵器杯B蓋：2、須恵器皿A：1、須恵器壺：1、土師器甕：1である。

110は須恵器杯Bである。111は須恵器皿Aである。112は須恵器杯B蓋である。113は須恵器壺Aである。

SK02〔図版25・38・39　写真図版15・33～35〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は直径3.9m前後の不整円形である。検出面よりの深さは1.3mと深い。埋没の過程で2回礫が投げ入れられている（5層の下と8層）。

出土遺物　埋土から多くの須恵器(115～121)・土師器(122～140)が出土した。115、118、120、121、124、125、127、130、136、137は上層（4層以上）、117、119、123、129、131～133、135、138は中層（5層及び5層下の礫面）、116、122、126、128、134は下層（7層以下）から出土したものである。特に埋土の中層から径20cm以下の礫とともに出土したものが多い。

出土個体数は須恵器杯A：7、須恵器杯B：9、須恵器杯I：2、須恵器杯B蓋：6、須恵器甕：2、須恵器壺：1、土師器甕・鍋：18、土師器甑：1、土師器把手：3である。

115・117は土師器甕である。116の口縁部内面は強くヨコナデが施されている。116・118は土師器鍋である。いずれも口縁部内面は強くヨコナデが施されている。122・123は須恵器杯Aである。大・小2型式に分かれる。124～126は須恵器杯Iである。128～133は須恵器杯Bである。大・中・小の3型式に分かれる。134～137は須恵器杯B蓋である。134は受部内面にかえりをもち、135～137は受部内面にかえりをもたない。138は須恵器壺A蓋である。139・140は須恵器甕である。

SK13〔図版24・38　写真図版33〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は直径1mの円形である。

出土遺物　埋土から土師器甕（114）が出土した。

(3)室町時代の遺構

SD01・02〔図版26・40・41　写真図版16・17・36・37〕

検出状況　南北方向の部分をSD01、東西に曲がった部分をSD02として調査した。本来は一体の遺構である。北端部は調査区の外側に延びている。江戸時代の遺構である近世墓地（SK28～30）、SK27、SD04などに切られている。溝の北端はB地区西北部のピット群のところまで延びていないことから、里道からB地区の削平を受けた部分までの間で、東西方向に曲がるか、途切れているものと考えられる。

形状・規模　南北方向の区画溝である。延長約60m分を検出した。南側より約20mのところに東側へ突出した陸橋部が設けられている。溝の断面は逆台形である。溝の幅は2m前後で、深さは40～25cm程度である。陸橋部分のみ幅1m、深さ約10cm に狭まっている。陸橋部の幅は2.5mで、東側に向かってスロープになっている。

出土遺物　埋土からは多量の瓦質土器や土師器、青磁、丹波、砥石、鉄製品などが出土している（141～165）。出土土器の個体数は瓦質土器擂鉢：55、瓦質土器火鉢：2、瓦質土器香炉：1、瓦質土器蓋：

1、瓦質土器小壺：1、土師器皿：3、土錘：1、丹波焼擂鉢：1、丹波焼甕：1、青磁碗：1である。特に瓦質土器擂鉢の占める割合がきわめて高い。

141～145・158～162は瓦質土器擂鉢である。いずれも使用されていない。擂目は櫛描きのもの(141～145・160)、一本引きのもの（161・162)、施されないもの（158・159）がある。146・147は瓦質土器火鉢である。平面は円形である。146は浅鉢で、外面口縁部下に区画をもつが、文様は施されていない。148は瓦質土器香炉である。外面にスタンプでS字文が施されている。149は瓦質土器小壺である。163は瓦質土器蓋である。150は土錘である。151は丹波焼擂鉢である。内面は使用により磨り減っている。152は青磁碗である。見込みにスタンプ文をもつ。

153・154は砥石である。155～157は鉄製品である。155は刀子である。156は鏃である。

SA01〔図版27　写真図版17〕

検出状況　柵列の南側は調査区外で、遺構は西側に延びる可能性がある。

形状・規模　1列6間分を検出した。柱穴間の心々距離は南側4間が2.3m、北側2間が2.7mである。柵列の主軸方向はN5°Wで、区画溝SD01・02とほぼ同じである。

柱穴　平面形は長60cm、幅40cm程度の長方形のものが多い。深さは15cm以下と浅く、掘立柱ではなく、礎石の痕跡であるかもしれない。

出土遺物　柱穴からの出土遺物は認められなかった。

SE01〔図版27・41　写真図版18・37〕

検出状況　西端は調査区外である。

形状・規模　平面形は長径3m以上、短径1.9mの胴の張った楕円形を呈している。深さは1.9mと深いが、湧水層には達していない。地山はシルト質であるため、水はたまりやすく、溜井戸と考えられる。

出土遺物　埋土から瓦質土器擂鉢（166～168)、土師器皿（169)、丹波焼などが出土している。出土土器の個体数は瓦質土器擂鉢：4、土師器皿：4、丹波焼擂鉢：1、丹波焼甕：1である。瓦質土器擂鉢の擂目には櫛描きのもの（166・167)、一本引きのもの（168）がある。

SK03〔図版27・41　写真図版38〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は長2.1m、幅1.5mの不整形である。深さは15cmである。埋土には炭・焼土塊が比較的多く含まれている。

出土遺物　埋土から瓦質土器擂鉢、土師器皿、土錘（170）などが出土している。出土土器の個体数は瓦質土器擂鉢：5、土師器皿：1、土錘：1である。

SK07〔図版28・41　写真図版37・38〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は長3.1m、幅1.5mの不整形である。深さは30cmである。

出土遺物　埋土から瓦質土器擂鉢（172～175)、瓦質土器香炉（176・177)、土錘などが出土している。出土土器の個体数は瓦質土器擂鉢：21、瓦質土器香炉：2、土錘：1である。瓦質土器擂鉢の擂目には

櫛描きのもの（172～174）、一本引きのもの（175）がある。瓦質土器香炉の外面にはスタンプで花文が施されている。

SK08〔図版28・41　写真図版38〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は長2.4m、幅2.1mの不整形である。深さは20cmである。

出土遺物　埋土から瓦質土器擂鉢（178～180）、土師器皿（181・182）、土錘（183・184）などが出土している。出土土器の個体数は瓦質土器擂鉢：10、土師器皿：3、土錘：2である。瓦質土器擂鉢の擂目は櫛描きである。

SK09〔図版28〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は長1.1m、幅0.8mの不整形である。深さは20cmである。

出土遺物　埋土から瓦質土器擂鉢が出土している。

SK10〔図版28・41　写真図版38〕

検出状況　全体を検出した。南端を時期不明の土坑に切られている。

形状・規模　平面形は長2m、幅1.1mの不整形と考えられる。深さは30cmである。

出土遺物　埋土から瓦質土器擂鉢、青磁蓮弁文碗（171）が出土している。出土土器の個体数は瓦質土器擂鉢：2、青磁碗：1である。瓦質土器擂鉢の擂目は櫛描きである。

SK24〔図版28・42　写真図版18・38〕

検出状況　全体を検出した。SD01の溝内で検出された。

形状・規模　平面形は長1.75m、幅1.6mの不整形と考えられる。深さは25cmである。

出土遺物　埋土から瓦質土器擂鉢、土錘が出土している。出土土器の個体数は瓦質土器擂鉢：2、土錘：1である。瓦質土器擂鉢の擂目は櫛描きである。

(4)江戸時代の遺構

木棺墓SK27〔図版29・42　写真図版18・39〕

検出状況　全体を検出した。SD02を切っている。

形状・規模　主体部は南北方向である。棺は長さ85cm、幅44cmの箱形の組合式木棺と考えられる。掘方は長さ1.3m、幅1.2mである。

出土遺物　棺内床面の西南隅付近からは銅銭6枚（190～195）が出土した。銅銭は寛永通寶である。掘方埋土から丹波焼甕の底部（189）が出土した。

近世墓地SK28～30〔図版29・42〕

検出状況　東部を削平されている。SD01、SD04を切っている。南側の埋葬施設（SK29・30）は改葬のため東半部が掘削されている。

形状・規模　平面形は南北に長い楕円形の溝（SD05）で取り囲まれている。溝の内法で南北11.5mで、東西は4m程度と推定される。埋葬施設は南北方向に並んで3基検出された。

埋葬施設　北側のSK28は箱形の座棺と考えられる。平面は1辺60cmの正方形である。掘方は1辺125cmの正方形で、2段墓壙になっている。深さは60cmである。南側の2基（SK29・30）は桶形の座棺と考えられる。平面は直径120cmの円形である。

周溝　幅は90cm前後で、深さは25cm前後である。

出土遺物　埋葬施設から出土したものはない。周溝埋土から肥前系磁器の広東碗（188）が出土している。

SD04

検出状況　SD01・02の陸橋部付近からA地区北端付近まで延びる南北方向の溝である。SD01の東肩を切り、近世墓地の周溝であるSD05に切られている。

形状・規模　南北方向の区画溝である。延長約40m分を検出した。溝の幅は80cm前後で、深さは20cm程度である。

出土遺物　埋土からは土師器皿、丹波焼徳利、瀬戸美濃焼皿（164）などが出土している。

(5)その他の遺構と遺物

ピット　A地区では北半部の削平を受けた部分以外でピットが比較的多く見られたが、遺物の出土したピットはほとんどない。その多くは建物に関わるものではなく、自然的な要因（木の根など）によるものの可能性が高い。

第6表　A地区ピット出土の遺物

遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物
SP05	土器片	SP09	土器片	SP15	土器片
SP06	土器片	SP10	弥生土器底部	SP16	須恵器捏鉢、杯B、杯蓋、土師器片
SP07	須恵器片、土器片	SP11	土師器甕		
SP08	土器片	SP14	土器片		

包含層〔図版43　写真図版41・42〕

検出状況　基本的に表土・耕土を除く堆積層はほとんど認められない。南東部の周溝墓上にのみ旧石器時代から奈良時代の遺物を含む黒褐色土層が薄く堆積している。

出土遺物　包含層から出土したものは少量である。中世以降の遺物は表土・耕土から出土したもので、奈良時代以前の遺物は南東部の包含層から出土したものである。

218～220は弥生土器壺である。218は体部外面に貼付突帯文、219・220は体部外面にヘラ描き沈線文をもつ。221は突帯文等土器の深鉢である。口縁端部外面に縁帯を作り、2段の刺突を施している。

222は須恵器杯B、223・224は須恵器杯B蓋、225・226は土師器杯A、227は土師器甕である。

228～235は瓦質土器擂鉢である。擂目は櫛描きのもの（228・230～232）、一本引きのもの（233～235）、施されないもの（229）がある。

236～238は剥片である。236はサヌカイト製、237・238はチャート製である。239・240は石鏃であるサヌカイト製である。241は経石である。墨で片面に「妙法蓮」、反対の面に「華経」と書かれている。

第3節　B地区の遺構と遺物

(1)室町時代

SK01〔図版31・42　写真図版19・40〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は長2.9m、幅1.8mの不整形である。深さは北端部25cmである以外は、10cm程度である。

出土遺物　埋土から土師器皿（206～208）、土錘（209）、目貫金具（210）、壁土（211）などが出土している。出土土器の個体数は土師器皿：98、土錘：3である。土師器皿が100個体近くと圧倒的に多い。

SK02〔図版31・42　写真図版19・40〕

検出状況　全体を検出した。部分的に時期不明の土坑に切られている。

形状・規模　平面形は長2.3m、幅0.8mの不整形である。深さは10cm程度である。

出土遺物　埋土から瓦質土器擂鉢（212）、土師器皿（213～214）、土錘（215）、壁土などが出土している。出土土器の個体数は瓦質土器擂鉢：1、土師器皿：15、土錘：1である。

ピット群〔図版30・41　写真図版19・39〕

検出状況　B地区西北部の部分ではピットが多く検出された。削平を受けなかった部分が狭いので、建物を復元することはできなかった。検出面より30cm以上の深さのあるものもあり、遺物を出土したものも多い。

出土遺物　各ピットから出土した遺物は以下の通りである。

第7表　B地区ピットの出土遺物

遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物	遺構名	出土遺物
SP01	土師器片	SP18	土師器片	SP25	土師器片
SP02	土師器片	SP19	土師器皿3（201・202）、壁土	SP26	土師器皿7（225・226）
SP04	土師器皿10（196～198）	SP20	土錘1（222）、土師器片	SP27	土師器片
SP06	土師器皿7（199・200）	SP21	土師器片	SP28	土師器片
SP14	土師器片	SP22	土師器片		

(2)江戸時代

SK06〔図版31〕

検出状況　全体を検出した。この土坑の北側に位置する柵状のピット列は、この遺構に附属するものと考えられる。

形状・規模　平面形は長1.6m、幅1.2mの長方形で、深さは25cmである。

出土遺物　この遺構からは遺物は出土していない。

SK07〔図版31・42　写真図版40〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は長1.35m、幅1.1mの長方形で、深さは15cmである。

出土遺物　埋土から丹波焼甕（217）が出土している。

SK08〔図版31〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は長１m、幅0.9mの長方形で、深さは15cmである。

出土遺物　埋土から陶磁器片、瓦質土器擂鉢が出土している。

SK13〔図版31・42〕

検出状況　全体を検出した。

形状・規模　平面形は径70cmの円形である。擂鉢状に凹み、深さは20cmである

出土遺物　埋土から肥前系磁器皿（216）、紅皿などが出土している。

SK15〔図版31　写真図版19〕

検出状況　全体を検出した。円形の掘方に、木製の桶が据えられている。

形状・規模　掘方は直径１mの円形である。桶は径90cmである。

出土遺物　埋土から遺物は出土していない。

(3)包含層〔写真図版42〕

B地区では表土・耕土を除けばほとんど包含層は存在しなかった。削平を受けなかった西北隅からわずかに土師器や壁土（242～244）が出土している。

242～244は壁土である。直径６cmの円柱状の心材の痕跡を残し、多量の藁を含んでいる。

第８表　上ノ段遺跡遺物一覧表（1）

番号	種別	器形	地区	遺構名	取り上げ	口径	器高	底径	その他の法量	色調	調整および備考
87	弥生土器	壺	A	周溝墓	主体部埋土	8.2		(3.6)	腹径12.7	7.5YR6／4にぶい橙	口縁部内外面はヨコナデ，体部外面はハケ、体部内面はケズリ
88	弥生土器	壺	A	周溝墓	西側周溝	16.8		5.7	腹径29.0	5YR6／8橙	口縁部はヨコナデ、頸部はタテハケ後ミガキ、体部中位外面はヨコハケ，体部下位外面はタテハケ後ミガキ
89	弥生土器	甕	A	SK16	埋土	15.1			腹径13.3	5YR6／4にぶい橙	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテナデ、体部内面はケズリ
90	弥生土器	甕	A	SK20	埋土	14.1			腹径16.2	10YR8／6黄橙	口縁部はヨコナデ，体部外面はタタキ後タテハケ、体部内面はケズリ
91	弥生土器	甕	A	SK14	埋土	15.2		(4.0)		10YR8／3浅黄橙	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテハケ，体部内面はケズリ
92	弥生土器	甕	A	SK15	埋土	13.8		2.3	腹径16.0	10YR8／3浅黄橙	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテナデ、体部内面はケズリ
93	鉄器	剣	A	周溝墓	主体部床面	長19.0		厚0.7			
94	鉄器	?	A	SK20	床面			厚0.7			腹面に木質付着
95	玉	管玉	A	周溝墓	主体部埋土	長0.92	幅0.39	厚0.38	重量0.2g	10GY7／1明緑灰	女代南（B）遺物群碧玉製
96	玉	管玉	A	周溝墓	主体部埋土	長1.04	幅0.33	厚0.32	重量0.2g	10GY7／1明緑灰	女代南（B）遺物群碧玉製
97	玉	管玉	A	周溝墓	主体部埋土	長1.15	幅0.36	厚0.37	重量0.2g	10GY7／1明緑灰	女代南（B）遺物群碧玉製
98	玉	管玉	A	周溝墓	主体部埋土	長0.95	幅0.30	厚0.30	重量0.2g	10GY6／1緑灰	女代南（B）遺物群碧玉製
99	玉	管玉	A	周溝墓	主体部埋土	長1.25	幅0.30	厚0.35	重量0.2g	10GY6／1緑灰	女代南（B）遺物群碧玉製
100	玉	管玉	A	周溝墓	主体部埋土	長1.28	幅0.35	厚0.37	重量0.2g	5GY7／1明緑灰	女代南（B）遺物群碧玉製
101	玉	管玉	A	周溝墓	主体部埋土	長1.32	幅0.35	厚0.35	重量0.2g	7.5GY6／1緑灰	女代南（B）遺物群碧玉製
102	玉	管玉	A	SK14	床面	長1.25	幅0.58	厚0.57	重量0.2g	10GY5／1緑灰	碧玉製
103	玉	管玉	A	SK14	床面	長1.44	幅0.55	厚0.58	重量0.2g	10GY5／1緑灰	碧玉製
104	玉	管玉	A	SK14	床面	長1.60	幅0.54	厚0.53	重量0.2g	10GY5／1緑灰	碧玉製
105	須恵器	杯B	A	SH01	埋土			12.9		2.5Y6／2灰黄	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズリ後ナデ、底部外面に墨痕あり，転用硯

第９表　上ノ段遺跡遺物一覧表（2）

番号	種別	器形	地区	遺構名	取り上げ	口径	器高	底径	その他の法量	色調	調整および備考
106	土師器	杯A	A	SH01	埋土	15.0	2.5	11.6		5YR6／6橙	口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラケズり、体部内面は往復連続放射状暗文、底部内面はナデ、底部外面はユビオサエ
107	土師器	杯A	A	SH01	床面	14.7	3.1	12.7		5YR6／8橙	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、底部外面はユビオサエ，内面は摩滅
108	土師器	甕	A	SH01	埋土	(21.4)				2.5YR5／6明赤褐	口縁部はヨコナデ
109	土師器	甕	A	SH01	焼土内	14.8				2.5YR5／6明赤褐	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテハケ，体部内面はケズり
110	須恵器	杯B	A	SK01	埋土	13.0	3.6	8.5		N7／0灰白	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り、爪形圧痕あり
111	須恵器	皿A	A	SK01	埋土	(14.3)	2.1	(11.1)		N7／0灰白	内面～体部外面は回転ナデ，底部外面はヘラ切り後ナデ，板状圧痕あり
112	須恵器	杯B蓋	A	SK01	埋土	(16.7)				10BG5／1青灰	内面～縁部外面は回転ナデ、天井部外面はヘラ切り後ナデ
113	須恵器	壺A	A	SK01	埋土	11.0			腹径25.4	N7／0灰白	内外面とも回転ナデ
114	土師器	甕	A	SK13	埋土	(19.7)				5YR5／3にぶい赤褐	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテハケ，体部内面はケズり
115	土師器	甕	A	SK02	上層	(21.8)				7.5YR5／3にぶい褐	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテハケ、体部内面はケズり
116	土師器	鍋	A	SK02	下層	30.1			腹径26.1	2.5YR6／6橙	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケ後ユビオサエ
117	土師器	甕	A	SK02	中層	13.9				5YR6／6橙	口縁部はヨコナデ
118	土師器	鍋	A	SK02	上層	(40.3)				2.5YR4／8赤褐	口縁部はヨコナデ
119	土師器	甑	A	SK02	中層	(18.8)				5YR6／6橙	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテハケ
120	土師器	把手	A	SK02	上層					5YR7／8橙	外面は摩滅
121	土師器	杯A	A	SK02	上層	14.0	3.6	13.0		2.5YR6／8橙	口縁部～体部外面はナデ、底部外面はユビオサエ、内面は放射状暗文
122	須恵器	杯A	A	SK02	下層	16.7	2.9	13.1		N6／0灰	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラケズり
123	須恵器	杯A	A	SK02	中層	14.9	3.5	11.2		N6／0灰	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ
124	須恵器	杯I	A	SK02	上層	11.2	3.6	4.0		5Y7／1灰白	内面～体部外面は回転ナデ，底部外面はヘラ切り後ナデ
125	須恵器	杯I	A	SK02	上層	10.4	4.2	7.5		5Y8／1灰白	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ
126	須恵器	杯I	A	SK02	下層	10.7	3.75	5.9		N6／0灰	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ
127	須恵器	杯B	A	SK02	上層	9.7	3.8	6.6		N6／0灰	内面～体部外面は回転ナデ，底部外面はヘラ切り、爪形圧痕あり
128	須恵器	杯B	A	SK02	下層	17.8	6.2	12.2		N7／0灰白	内面～体部外面は回転ナデ，底部外面はヘラ切り、爪形圧痕あり
129	須恵器	杯B	A	SK02	中層	18.2	5.5	12.6		5YR3／4暗赤褐	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り
130	須恵器	杯B	A	SK02	上層	17.6	4.2	11.9		N6／0灰	内面～体部外面は回転ナデ，底部外面はヘラ切り
131	須恵器	杯B	A	SK02	中層	15.8	4.3	11.6		5B5／1青灰	内面～体部外面は回転ナデ，底部外面はヘラ切り後ナデ
132	須恵器	杯B	A	SK02	中層	14.7	4.0	9.8		N5／0灰	内面～体部外面は回転ナデ、底部外面はヘラ切り
133	須恵器	杯B	A	SK02	中層	14.7	4.3	9.2		N6／0灰	内面～体部外面は回転ナデ，底部外面はヘラ切り後ナデ
134	須恵器	杯B蓋	A	SK02	下層	(19.7)				N6／0灰	内面～縁部外面は回転ナデ，天井部外面は回転ヘラケズり
135	須恵器	杯B蓋	A	SK02	中層	17.4	2.4			N6／0灰	内面～縁部外面は回転ナデ，天井部外面は回転ヘラ切り後ナデ
136	須恵器	杯B蓋	A	SK02	上層	17.9				N6／0灰	内面～縁部外面は回転ナデ，天井部外面は回転ヘラケズり
137	須恵器	杯B蓋	A	SK02	上層	15.0				N6／0灰	内面～縁部外面は回転ナデ，天井部外面は回転ヘラケズり
138	須恵器	壺A蓋	A	SK02	中層	14.5				N5／0灰	内面～縁部外面は回転ナデ，天井部外面は回転ヘラケズり、内面に火襷
139	須恵器	甕	A	SK02	中層	(35.2)				N5／0灰	内外面とも回転ナデ
140	須恵器	甕	A	SK02	中層				腹径43.8	N6／0灰	頸部は内外面とも回転ナデ，体部外面は平行タタキ後カキ目、体部内面は同心円当具痕
141	瓦質土器	擂鉢	A	SD01	埋土	25.5				N4／0灰	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ・指頭痕あり、体部内面はナデ、擂目は7本の櫛目
142	瓦質土器	擂鉢	A	SD01	埋土	(28.5)				N6／0灰	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ・指頭痕あり、体部内面はナデ、擂目は7本の櫛目、焼成硬質
143	瓦質土器	擂鉢	A	SD01	埋土					N3／0暗灰	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ・指頭痕あり、体部内面はナデ、擂目は7本の櫛目、波状擂目あり
144	瓦質土器	擂鉢	A	SD01	埋土	(28.9)				10YR8／2灰白	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ・指頭痕あり、体部内面はナデ、擂目は7本の櫛目、波状擂目あり

第10表　上ノ段遺跡遺物一覧表（3）

番号	種別	器形	地区	遺構名	取り上げ	口径	器高	底径	その他の法量	色調	調整および備考
145	瓦質土器	擂鉢	A	SD01	埋土					7.5Y5／1灰	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ・指頭痕あり，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目，波状擂目あり，焼成硬質
146	瓦質土器	火鉢	A	SD01	埋土					7.5YR7／3にぶい橙	内面～口縁部外面はヨコナデ
147	瓦質土器	火鉢	A	SD01	埋土					10YR7／4明黄橙	外面は摩滅
148	瓦質土器	香炉	A	SD01	埋土					N4／0灰	内外面ともナデ
149	瓦質土器	壺	A	SD01	埋土	(6.7)	5.1	(8.4)	腹径（10.5）	5Y7／1灰白	口縁部はヨコナデ，体部は摩滅
150	土師器	土錘	A	SD01	埋土	長3.4	幅1.2	孔径0.5	重量3.7g	5YR5／6明赤褐	
151	丹波	擂鉢	A	SD01	埋土					2.5YR5／3にぶい赤褐	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ・指頭痕あり，体部内面はナデ，擂目は1本引き
152	青磁	碗	A	SD01	埋土			(4.5)		2.5Y7／1明オリーブ灰	高台端部～高台内は露胎．見込みにスタンプ文
153	石製品	砥石	A	SD01	埋土	長14.6	幅3.7	厚2.6		5YR7／4にぶい橙	
154	石製品	砥石	A	SD01	埋土	長13.1	幅1.2	厚3.2		5Y5／1灰	
155	鉄製品	刀子	A	SD01	埋土		幅1.2	厚0.4			
156	鉄製品	鏨	A	SD01	埋土	長7.4	幅2.2	厚1.2			
157	鉄製品	不明	A	SD01	埋土		幅2.2	厚1.2			
158	瓦質土器	擂鉢	A	SD02	埋土	(26.0)				N8／0灰白	口縁部はヨコナデ，体部外面はタテハケのちナデ・指頭圧痕あり，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目
159	瓦質土器	擂鉢	A	SD02	埋土					10YR7／3にぶい黄橙	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ，体部内面はナデ，擂目なし，焼成硬質
160	瓦質土器	擂鉢	A	SD02	埋土					2.5Y7／2灰黄	体部外面はタテハケのちナデ，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目
161	瓦質土器	擂鉢	A	SD02	埋土					10YR8／3浅黄橙	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ・指頭圧痕あり，体部内面はナデ，擂目は1本引き
162	瓦質土器	擂鉢	A	SD02	埋土					10YR7／4明黄橙	内面はヨコナデ，外面はナデ・指頭圧痕あり，擂目は1本引き
163	瓦質土器	蓋	A	SD02	埋土	10.0				10YR7／3にぶい黄橙	縁部はヨコナデ，天井部はナデ
164	瀬戸美濃	底部	A	SD04	埋土			4.8		2.5Y7／2灰黄	釉は黄色，外面は露胎
165	須恵器	浮鉢	A	P16	埋土					N4／0灰	内外面とも回転ナデ
166	瓦質土器	擂鉢	A	SE01	埋土					7.5Y8／1灰白	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ・指頭圧痕あり，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目
167	瓦質土器	擂鉢	A	SE01	埋土					7.5Y8／1灰白	体部外面はタテハケのちナデ・指頭圧痕あり，，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目，底部外面はナデ
168	瓦質土器	擂鉢	A	SE01	埋土	(29.4)				10YR8／4浅黄橙	外面は摩滅，体部外面に指頭圧痕あり，擂目は一本引き
169	土師器	皿	A	SE01	埋土	12.0	2.2	5.8		2.5Y7／3浅黄	外面は摩滅，体部外面に指頭圧痕あり
170	土師器	土錘	A	SK03	埋土	長5.6	幅2.7	孔径0.9	重量33.0g	2.5YR8／2灰白	外面はナデ・指頭圧痕あり
171	青磁	碗	A	SK10	埋土						蓮弁文碗
172	瓦質土器	擂鉢	A	SK07	埋土			10.0		N8／0灰白	体部外面はタテハケのちナデ，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目．見込みの擂目は4本の櫛目底部外面はナデ
173	瓦質土器	擂鉢	A	SK07	埋土					10Y7／1灰	外面は摩滅，見込みの擂目は7本の櫛目
174	瓦質土器	擂鉢	A	SK07	埋土					N7／0灰白	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ・指頭圧痕あり，体部内面はナデ，擂目は6本の櫛目
175	瓦質土器	擂鉢	A	SK07	埋土					N8／0灰白	内外面とも回転ナデ，擂目は1本引き
176	瓦質土器	香炉	A	SK07	埋土	(9.2)				10YR8／2灰白	内外面とも摩滅，外面にスタンプによる花文
177	瓦質土器	香炉	A	SK07	埋土	(10.6)				2.5YR6／4にぶい橙	内外面ともヨコナデ，外面にスタンプによる花文
178	瓦質土器	擂鉢	A	SK08	埋土	(19.6)				7.5Y7／1灰白	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ・指頭圧痕あり，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目，焼成硬質
179	瓦質土器	擂鉢	A	SK08	埋土					5Y8／1灰白	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目，波状擂目あり
180	瓦質土器	擂鉢	A	SK08	埋土					7.5Y5／1灰	体部外面はナデ・指頭圧痕あり，，体部内面はナデ，擂目は7本の櫛目，斜行擂目あり，底部外面に離砂
181	土師器	皿	A	SK08	埋土	(10.0)				10YR7／2にぶい黄橙	口縁部はヨコナデ，底部はナデ
182	土師器	皿	A	SK08	埋土	8.75	2.0			5YR6／4にぶい橙	外面に指頭圧痕あり
183	土師器	土錘	A	SK08	埋土	長6.3	幅4.6	孔径1.4	重量92.0g	5YR8／3淡橙	外面はナデ・指頭圧痕あり
184	土師器	土錘	A	SK08	埋土	長6.3	幅2.8	孔径1.0	重量40.3g	2.5Y8／2灰白	外面はナデ
185	瓦質土器	擂鉢	A	SK24	床面	23.0	10.4	10.2		5Y8／1灰白	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ・指頭圧痕あり，擂目は7本の櫛目
186	瓦質土器	擂鉢	A	SK24	埋土	(25.5)				5Y8／0灰	口縁部はヨコナデ，体部外面はナデ・指頭圧痕あり，擂目は7本の櫛目
187	土師器	土錘	A	SK24	埋土	長6.7	幅4.8	孔径1.6	重量142.3g	7.5YR6／4にぶい橙	外面はナデ・指頭圧痕あり
188	肥前	碗	A	SD05	埋土			6.4			畳付のみ露胎
189	丹波	甕	A	SK27	掘方埋土			10.0		10YR7／2にぶい黄橙	内面～体部外面は回転ナデ，底部外面は不調製・離砂の痕跡あり
190	銅銭	寛永通寶	A	SK27	檀内床面						
191	銅銭	寛永通寶	A	SK27	檀内床面						
192	銅銭	寛永通寶	A	SK27	檀内床面						
193	銅銭	寛永通寶	A	SK27	檀内床面						

第11表　上ノ段遺跡遺物一覧表（4）

番号	種別	器形	地区	遺構名	取り上げ	口径	器高	底径	その他の法量	色調	調整および備考
194	銅銭	寛永通寶	A	SK27	棺内床面						
195	銅銭	寛永通寶	A	SK27	棺内床面						
196	土師器	皿	B	P04	埋土	(12.8)	2.0			10YR8／3浅黄橙	口縁部はヨコナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり
197	土師器	皿	B	P04	埋土	10.4	2.25			10YR7／1灰白	口縁部はヨコナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり
198	土師器	皿	B	P04	埋土	(7.6)	1.4			10YR7／2にぶい黄橙	口縁部はヨコナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり
199	土師器	皿	B	P06	埋土	(11.0)	1.5			10YR7／2にぶい黄橙	口縁部はヨコナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり
200	土師器	皿	B	P06	埋土	(9.8)				2.5Y6／1黄灰	内面はヨコナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり、口縁部は指頭圧痕あり
201	土師器	皿	B	P19	埋土	(10.4)				10YR8／4浅黄橙	口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデ・板状圧痕あり
202	土師器	皿	B	P19	埋土	9.0				10YR8／3浅黄橙	口縁部はヨコナデ、底部はナデ
203	土師器	皿	B	P26	埋土	(10.8)	1.8			10YR8／3浅黄橙	内面はナデ、外面はナデ・指頭圧痕あり
204	土師器	皿	B	P26	埋土	(10.4)	2.1			10YR7／2にぶい黄橙	口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり
205	土師器	土錘	B	P20	埋土	長7.5	幅4.6	孔径1.5	重量140.3g	2.5Y6／1黄灰	外面はナデ・指頭圧痕あり
206	土師器	皿	B	SK01	埋土	12.0	1.7			10YR8／3浅黄橙	外面は摩滅・指頭圧痕あり
207	土師器	皿	B	SK01	埋土	11.0				7.5YR7／3にぶい橙	口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり
208	土師器	皿	B	SK01	埋土	(8.7)	1.2			10YR8／3浅黄橙	内外面ともナデ
209	土師器	土錘	B	SK01	埋土	長7.4	幅4.7	孔径1.6		2.5Y8／1灰白	外面はナデ・指頭圧痕あり
210	銅製品	円貫金具	B	SK01	埋土	長1.25	幅3.5				
211	壁土		B	SK01	埋土						
212	瓦質土器	擂鉢	B	SK02	埋土					2.5Y6／2灰黄	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ・指頭圧痕あり、擂目は1本引き
213	土師器	皿	B	SK02	埋土	(9.9)	2.0			10YR8／3にぶい黄橙	口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり
214	土師器	皿	B	SK02	埋土	10.6				10YR8／3浅黄橙	口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はナデ
215	土師器	土錘	B	SK02	埋土	長7.8	幅4.6	孔径1.5	重量159.6g	10YR8／3浅黄橙	外面はナデ・指頭圧痕あり
216	肥前	碗	B	P05	埋土			7.8			畳付のみ露胎
217	丹波	甕	B	SK07	埋土	(29.2)				2.5YR3／3暗赤褐	内外面とも回転ナデ
218	弥生土器	壺	A	包含層						7.5YR7／6橙	内外面とも摩滅
219	弥生土器	壺	A	包含層						10YR8／4浅黄橙	内外面ともナデ
220	弥生土器	壺	A	包含層						10YR7／4にぶい黄橙	内外面とも摩滅
221	縄文土器	深鉢	A	包含層						10YR5／3にぶい黄褐	内外面ともナデ
222	須恵器	杯B	A	包含層		16.5	5.7	10.5		N5／1灰	体部内面～体部外面は回転ナデ底部内面はナデ、底部外面はヘラ切り後ナデ
223	須恵器	杯B蓋	A	包含層						10Y6／1灰	天井部内面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデ
224	須恵器	杯B蓋	A	包含層		14.0				N8／0灰白	天井部内面は回転ナデ、天井部外面は回転ヘラケズリ後ナデ、縁部は回転ナデ
225	土師器	皿A	A	包含層		(13.8)	3.0	(10.4)		5YR6／6橙	口縁部はヨコナデ、底部外面はナデ
226	土師器	皿A	A	包含層		13.5	2.6	11.1		5YR6／8橙	口縁部はヨコナデ、底部外面はナデ・指頭圧痕あり
227	土師器	甕	A	包含層		(24.0)				5YR5／3にぶい赤褐	口縁部はヨコナデ
228	瓦質土器	擂鉢	A	包含層		27.5	12.9	11.2		N4／0灰	口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ後ナデ・指頭圧痕あり、擂目は7本の櫛目
229	瓦質土器	擂鉢	A	包含層		(28.0)				10YR8／4浅黄橙	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ・指頭圧痕あり、擂目はなし
230	瓦質土器	擂鉢	A	包含層				12.6		5Y8／1灰白	口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ後ナデ・指頭圧痕あり、擂目は7本の櫛目、底部外面はナデ
231	瓦質土器	擂鉢	A	包含層				(11.7)		2.5Y7／2灰黄	体部外面はハケ後ナデ・指頭圧痕あり、擂目は7本以上の櫛目、底部外面はナデ
232	瓦質土器	擂鉢	A	包含層						10Yr8／4浅黄橙	底部外面はナデ、擂目は6本の櫛目
233	瓦質土器	擂鉢	A	包含層						5YR5／3にぶい赤褐	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ・指頭圧痕あり、擂目は1本引き
234	瓦質土器	擂鉢	A	包含層						2.5Y5／1黄灰	口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ・指頭圧痕あり、擂目は1本引き
235	瓦質土器	擂鉢	A	包含層				(12.8)		5Y7／1灰白	体部外面はハケ後ナデ・指頭圧痕あり、底部外面は雲母付着、擂目は6本の櫛目
236	石器	剥片	A	包含層		長2.48	幅1.55	厚0.55	重量2.3g		サヌカイト製
237	石器	剥片	A	周溝墓	主体部埋土	長2.83	幅2.60	厚0.90	重量3.9g		チャート製
238	石器	剥片	A	包含層		長5.32	幅3.55	厚1.74	重量34.1g		チャート製
239	石器	石鏃	A	周溝墓	主体部埋土	長1.85	幅1.48	厚0.35	重量0.5g		サヌカイト製
240	石器	石鏃	A	SK15	埋土	長1.78	幅1.10	厚0.30	重量0.4g		サヌカイト製
241	経石		A	包含層		長4.45	幅2.8	厚0.75			墨書「妙法蓮」「華経」
242	壁土		B	包含層							
243	壁土		B	包含層							
244	壁土		B	包含層							

第5章　自然科学的分析

第1節　的場遺跡出土の結晶片岩様緑色岩製小玉の産地分析

藁科　哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

勾玉、玉、垂玉、管玉などの岩石名の推定は、一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、硬玉、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、緑色凝灰岩（グリーンタフ）などが推測される。それぞれの岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度を求める、色、光沢感、比重、介在物の有無、定性的な成分組成を求めるなどで、岩石名を決める重要な結晶構造、屈折率など鉱物組成を明らかにする情報は得られない。また，肉眼観察で求めた岩石名が岩石・鉱物学界で通用するとは思えない。原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、例えば緑色凝灰岩の管玉と言う岩石名が決められても産地は沢山あり何れの産地か不明である。また、軟らかく加工が容易だと想像できても、実際の硬度、打撃亀裂性などを測定した上で考察しなければ、古代の管玉製作技術に関する資料として無意味である。地学の専門家でも、肉眼観察では、岩石名を間違うことは避けられないと指摘している。岩石名を決定することよりも、どこの産地の原石が使用されているか、産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となり、また産地分析の過程で岩石名決定に関係する情報の一部が得られるが岩石名を特定するには至らない場合が多い。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法[2], [3], [4]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究は蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析より正確に行った例[5]が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭り、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭り、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

産地分析で遺物の原材産地が特定出来なくても得られた分析値と同じ組成の遺物を使用した遺跡の広がりを求めることにより、遺跡間相互になんらかの関係があったと推測できる情報が得られ、将来、原材産地の所在地が明らかになれば原石伝播に関する情報も得られる。今回分析を行った小玉は兵庫県氷上郡市島町上竹田に位置する的場遺跡出土の弥生時代前期の結晶片岩様緑色岩製小玉1個で、産地分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかない

という指標を見つけなければならない。その区別するための指紋である鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。また、原石産地が不明の玉材を使用した遺物についても、遺物同士の指紋を比較することにより、同質の玉材が使用されているか否か判定できる。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している4) 非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比を、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。結晶片岩様緑色玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から玉材産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した5)。

原石産地不明の結晶片岩様緑色岩製玉類の蛍光X線分析

結晶片岩様緑色岩の玉材および玉類は九州南部の遺跡から出土するが、原石産地は不明で、肉眼的に均一な石質ばかりではなく、中には不均一で緑色の部分に石英脈状岩石が貫入しているもの、緑色部分に黄色の微小斑点が見られるもの、結晶並びが明確なもの、またヒスイ様に見える部分など様々である。従って、これら玉類はヒスイ製、軟玉製、滑石製、蛇紋岩製など様々推測されてきた経緯がある。この玉類の岩石名を決定するには、岩石を構成する鉱物の種類を求める必要があり、X線回折など結晶定数から同定する必要がある。蛍光X線分析でこれら玉類から硬玉の主成分組成であるNa元素が検出限界以下であることと、硬玉の比重である3.0以上に達しないとの理由から硬玉の可能性はないと考えられる。また、玉類の比重が2.7以上であることから石材が碧玉の可能性も否定できる。これら玉類の割れ面は平面のものが多く、肉眼観察で結晶に平行な劈開面がみられることから、結晶片岩様緑色岩と仮称する。結晶が一定方向に並んだ岩石は広域変成帯で生成されることから玉材の起源が変成帯の可能性が推測される。広域変成帯ではMgが主成分の蛇紋岩、Mg、Caが主成分の透角閃石とかMg、Ca、Feが主成分の陽起石の軟玉が産出する。玉類に含有されるMg／Siが1.0以下でMgが主成分の蛇紋岩とは言えない。また、Ca／Kの値が1.0以下ではCaが主成分の軟玉とは言えない。滑石鉱床はしばしば蛇紋岩中の小レンズ鉱床となっている場合が多く、滑石は玉類の原材料に使用されるが、出土玉類の中には硬度は約2.5のものも見られ、比重なども滑石、蛇紋石に近いが一致しない。緑色であることを考慮すると緑泥石の比重、硬度に一致する。しかし緑泥石の主成分組成のMg、Feの量が少ない。また、緑泥石の可能性が低い理由としてKの含有量が非常に高いことがあげられる。これら玉類の硬度、比重、Al、K元素の含有量が多いことなどを考え合わせると雲母系と一致すると考えられるが結晶構造による判断が必要である。遺物にCrの含有量が比較的多く含有されている。このクロムがCr３＋として存在していると、緑色になることが知られているため、Crが緑色の原因元素になっている可能性は考えられ、岩石名の決定には様々な鉱物学的分析にもとずいた結果から求める必要がある。鹿児島県加世田市川畑2627-1に位置する上加世田遺跡の縄文時代後期出土の玉材は、これら結晶片岩様の緑色岩を使用した玉造遺跡

第12表　上加世田遺跡、的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製遺物による遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺物群名	分析個数	元素比 Mg／Si	Al／Si	K／Si	Ca／K	Ti／K
上加世田第1群	25	0.359±0.704	0.373±0.062	18.521±1.779	0.287±0.208	0.625±0.202
上加世田第2群	19	0.395±0.346	0.357±0.064	18.508±2.093	0.354±0.312	0.442±0.128
上加世田第3群	59	0.716±0.375	0.260±0.045	17.898±1.578	0.221±0.136	0.422±0.158
上加世田第4群	34	0.662±0.882	0.308±0.294	18.054±1.992	0.228±0.169	0.411±0.252
的場遺物群	45	0.095±0.023	0.339±0.015	20.676±0.540	0.059±0.021	0.237±0.090

遺物群名	分析個数	元素比 K／Fe	Ti／Fe	Cr／Fe	Mn／Fe	Fe／Zr
上加世田第1群	25	1.649±0.886	0.913±0.510	0.910±0.555	0.033±0.020	0.787±0.536
上加世田第2群	19	1.097±0.599	0.452±0.294	0.374±0.369	0.020±0.012	2.842±3.064
上加世田第3群	59	0.820±0.535	0.302±0.213	0.318±0.244	0.015±0.009	3.144±2.437
上加世田第4群	34	0.899±0.590	0.314±0.265	0.324±0.245	0.014±0.009	6.272±13.60
的場遺物群	45	1.966±0.093	0.454±0.154	0.324±0.047	0.010±0.007	4.318±1.337

遺物群名	分析個数	元素比 Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr	Ba／Zr
上加世田第1群	25	0.273±0.104	0.634±0.157	0.033±0.028	63.338±25.035
上加世田第2群	19	0.717±0.653	3.157±3.513	0.049±0.061	161.605±211.1
上加世田第3群	59	0.984±0.439	0.181±0.162	0.097±0.082	57.082±22.78
上加世田第4群	34	1.886±5.936	1.174±2.862	0.255±0.591	121.500±156.3
的場遺物群	45	2.977±0.995	8.079±2.772	0.118±0.117	304.053±224.9

平均値±標準偏差値

で、平成8年度出土の管玉46個、勾玉6個、小玉6個、未製品12個、玉材39個、平成7年以前の調査で出土した玉類40個の合計150個の蛍光X線分析の元素分析の結果を分類して上加世田第1群、上加世田第2群、上加世田第3群、上加世田第4群の4個の遺物群を作った（第12表）。このように4個の遺物群に分類されるのは結晶片岩様緑色岩の原石産地が分類群ごとに4ヶ所存在するのではなく、肉眼観察とESR分析結果から推測して、含有される鉱物の種類が多く、分布が不均一なために玉ごとの元素組成の変動が大きくなったと推測される。各遺跡で出土する結晶片岩様緑色岩製玉類の蛍光X線分析値と上加世田遺跡の4個の遺物群に比較し多変量統計のマハラノビスの距離からT2乗検定することにより上加世田遺跡の玉に一致するか否か同定できる。

的場遺跡出土の結晶片岩様緑色岩製小玉の蛍光X線分析結果と判定

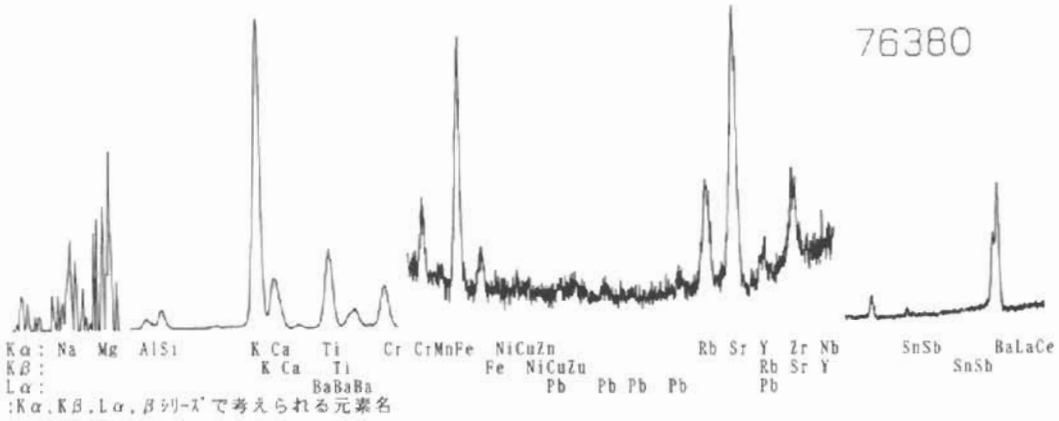
遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で蛍光X線分析を行った。結晶片岩様緑色岩製管玉で観測された元素は、マグネシウム(Mg)、主成分と推測されるアルミニュム(Al)、珪素(Si)および比較的含有量の多い元素はカリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム(Cr)、鉄(Fe)、バリウム(Ba)で、他にカルシウム(Ca)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオビウム(Nb)、マンガン(Mn)の15元素で、蛍光X線スペクトルを第3図に示した。この玉の原石産地を明らかにするためにAl／Si、K／Si、Ca／K、Ti／K、K／Fe、Rb／Fe、Fe／Zr、Rb／Zr、Sr／Zr、Y／Zr、Mn／Fe、Ti／Fe、Nb／Zr、Na／Si、Mg／Si、Cr／Fe、Ba／Zrなどの各元素比値を求め、第13表に示した。また、玉の比重は岩石の種類を同定するときに重要な指標になり、遺物の汚染をさけるために蒸留水を用いたアルキメデス法で測定した結果、小玉の重量は0.20979グラムでかさ比重は2.828になり、上加世田群の遺物原石に多く見られる。また、こ

第13表　的場遺跡出土結晶片岩様緑色管玉の元素比組成

分析番号	元素比									
	Al／Si	K／Si	Ca／K	Ti／K	K／Fe	Rb／Fe	Fe／Zr	Rb／Zr	Sr／Zr	Y／Zr
76380	0.363	21.335	0.064	0.278	1.880	0.594	3.798	2.257	6.623	0.132
JG－1	0.067	3.392	0.774	0.237	0.111	0.263	3.795	0.998	1.345	0.281

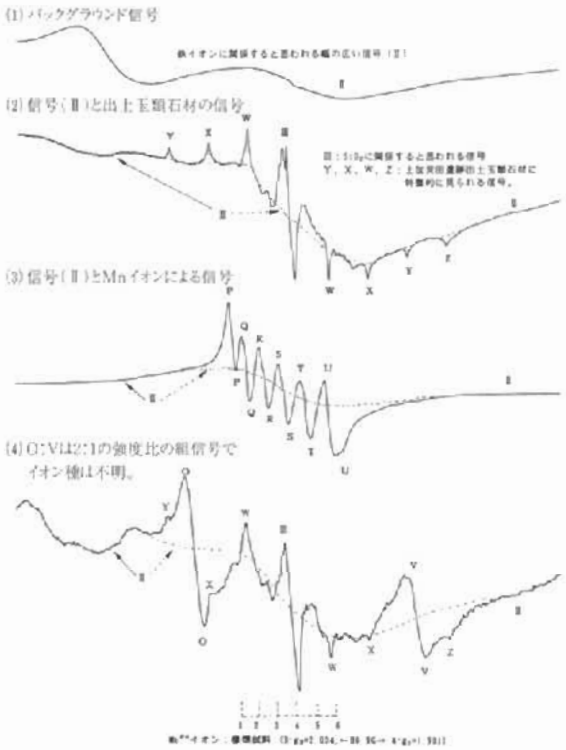
分析番号	元素比							玉重量	かさ比重
	Mn／Fe	Ti／Fe	Nb／Zr	Na／Si	Mg／Si	Cr／Fe	Ba／Zr	グラム	
76380	0.011	0.569	0.016	0.000	0.083	0.288	599.595	0.20979	2.828
JG－1	0.024	0.024	0.079	0.000	0.000	0.001	7.002		

JG－1：標準試料－Ando. A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E.　1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG－1 granodiorite and JB－1 basalt.　*Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

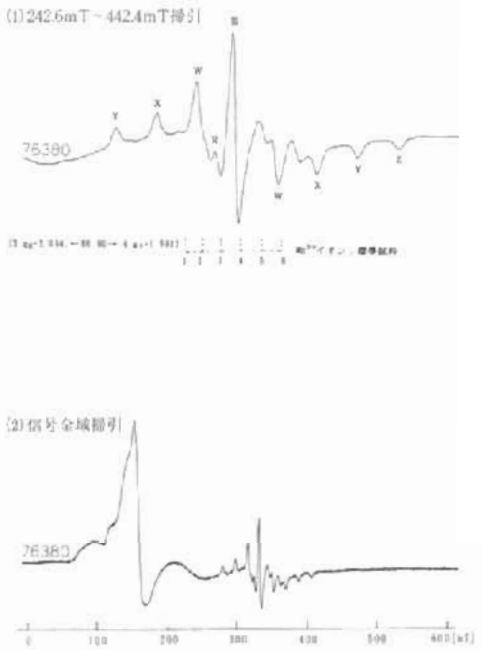


第３図　的場遺跡出土結晶片岩様緑色岩製小玉（76380）の蛍光X線スペクトル

の小玉の元素分析の結果について、上加世田第１，２，３，４群と比較した結果は、信頼限界の0.1%を越えて上加世田第２群に一致したが、小玉の分析場所を変えながら45回分析した中で、信頼限界の0.1%を越えて上加世田第２群に１回のみ一致した。この様に低い確率で１回しか信頼限界を越えなかった理由は、上加世田遺跡の遺物群の中に、小玉と同じ組成の原石は1000個に１個程度しか見られないことに相当する。上加世田遺跡で1000個の小玉が作られ他の遺跡に供給されたときその中の１個が、今回分析した小玉に相当すると理解できる。西日本に広く伝播する玉類であれば1000個以上は作られた可能性は十分に考えられので、今回分析した小玉の玉材は南九州地域で使用されている結晶片岩様緑色岩と同じ原石産地と推測した。また、この小玉と同じ組成の玉類の使用範囲を今後明らかにする目的で、的場遺物群を作り、各地の遺跡から出土する結晶片岩様緑色玉類の組成と比較できるようにした。蛍光X線分析で含有元素がほぼ一致することが明らかになったが、さらに、玉に含有されている鉱物に関する信号を分析するESR分析結果も一致すればさらに正確な同定結果が得られる。



第４図　上加世田遺跡出土玉類石材のESR信号
（結晶片岩様緑色玉類石材、比重3.0～2.7）



第５図　的場遺跡出土結晶片岩様緑色製小玉の信号（Ⅲ）のESRスペクトル
（小玉重量：0.20979g　比重：2.828）

ESR法による産地分析

ESR分析は玉類石材に含有されているイオンとか、玉材が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から玉材産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11㎜以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。ESR分析した小玉のESRスペクトルを第５図に示す。ESR信号を出す常磁性種が一種類ではなく４種類以上あるため、ESR信号は複雑なスペクトルになっている。上加世田遺跡では各玉とか玉材毎に４種類以上の常磁性種の混合比が玉ごとに不均一に含有されている。したがって、ESR信号はこれら常磁性種の合成した形で観測されるためにESR信号のスペクトルの形は玉毎に異なる。ここで大切はことは、上加世田遺跡の玉の信号と分析した管玉の信号を重ね合わせて一致すれば言うことないが、一致しなくても同じ常磁性種が管玉に含有されているか否かが重要である。ESR信号を出す常磁性種の個数の同定を鹿児島県加世田市上加世田遺跡出土の緑色片岩様玉類の分析結果を用いて試み第４図に示した。第４図－(1)のバックグラウンド信号と名付けた信号Ⅱは玉によっては信号形が異なることから複数の鉄イオンの信号で構成されている可能性が推測されるが幅広い信号である。第４図－(2)は幅の広いバックグラウンド信号と上加世田遺跡出土玉類に特徴的なY、X、W、Z、Ⅲの一組になったピーク信号を出す常磁性種とで構成される。信号ⅢにはSiO２に関係した信号が含まれている可能性が推測される。W→Ⅲ、Ⅲ→W、W→Xのピーク間に見られる小さな常磁性種は玉によっては非常に大きな信号になり、W、Y、Ⅲのピークと重なった部分は相互に変形する。また、一組になったピーク信号は、例えばYが測定されれば、残りのピークも他の信号と合成されて変形して確認が困難な場合もあるが必ず存在する。第４図－(3)は幅の広いバックグラウンド信号に、マンガンイオンによると思

われるP、Q、R、S、T、Uの同じ信号強度の6本が一組の信号が合成されてできたESRスペクトルである。Mnイオン濃度が低い状態で、(2)の信号と合成されるとPとかP、Q（Wと重なり変形）のピークのみ確認されR、S、T、Uが変形したために確認できないと推測される場合が多い。第4図－(4)は幅の広いバックグラウンド信号に、少量の(2)が重なっている状態が確認でき、また、信号を出す常磁性種は同定出来ていないが、O、Vのピーク信号は2：1の比で1000ガウス（G）間隔で対になって構成されている。以上最低4種類の常磁性種の存在が確認できた。また、W→Ⅲ、Ⅲ→W、W→Xのピーク間に見られる信号が何種類の常磁性種で構成されているか不明で、まだ上加世田遺跡出土玉類のESR信号を完全に説明できない部分が残っている。分光学的に説明ができなくても、Y、X、W、Z、Ⅲのピークを出す常磁性種が上加世田遺跡出土玉類に共通して存在することを利用すれば玉類石材の産地分析に応用できる。分析した小玉のESRスペクトルの第5図にも上加世田遺跡出土玉類に特徴的なY、X、W、Z、Ⅲの一組になったピーク信号が見られことから小玉の玉材と上加世田遺跡出土玉類の玉材は一致すると判定した。また、第5図－(2)の信号全域掃引の中で100mT（ミリテスラー）～200mTの大きな信号は、この種の玉材に共通にみられる吸収信号で、上加世田遺跡出土玉類に共通にもみられる。産地分析では玉類の蛍光X線分析結果とESR信号結果が同じ石材群に同定されたとき総合的に判定し、玉類がそこの群の原石と同じものが使用されていると推定する。

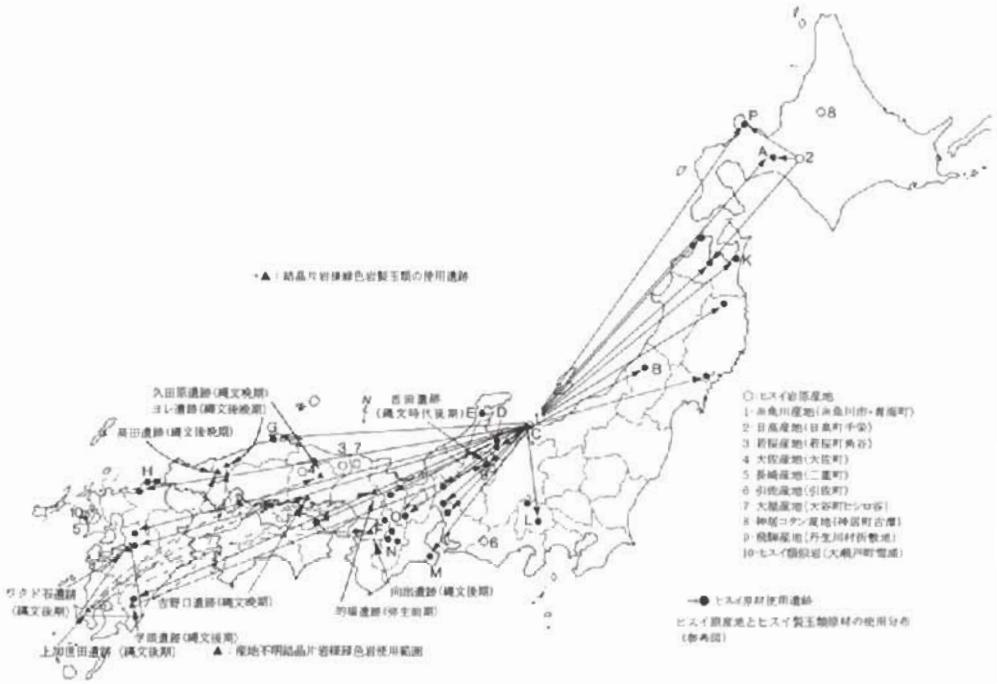
結　論

今回分析を行った結晶片岩様緑色小玉は上加世田遺跡出土玉類と蛍光X線分析結果はAl／Si、Ba／Zr比が非常に大きいなど定性的に一致し、定量的には0.18%の信頼限界ギリギリで上加世田遺物群に同定された。また、この小玉と同じ岩塊で作られた兄弟の玉が他の遺跡で使用されていたときに、発見できるように、的場遺跡の小玉を蛍光X線分析で45回分析し、分析誤差範囲を求めて的場遺物群を作り、原石群に登録した。ESR分析では上加世田遺物群にのみ確認されているY、X、W、Z、Ⅲのピークが見られ、蛍光X線分析とESR分析両方法で一致することから、九州南部で多用されている結晶片岩様緑色岩が使用されていると判定した。上加世田群が4個の遺物群に分類されるのは、群ごとに原石産地が異なる可能性、または共生する鉱物の種類が異なり玉、玉材ごとの元素組成の変動が大きくなったと推測される。考古学者の中では、今回分析した結晶片岩様緑色岩製小玉の原材産地として特に注目されている産地としてはヒスイ類似岩の原産地である長崎県大瀬戸町雪浦産原石と誤解されていることが非常に多い、確かに、肉眼観察では区別が困難で、比重も一致している。この結晶片岩様緑色岩と呼んでいる原材と大瀬戸町の原石の異なる点は、バリュウム元素の含有量が結晶片岩様緑色岩の方が桁違いに多いことで、両者は容易に区別できる。

今まで同定された結晶片岩様緑色岩製玉類は縄文時代後期～晩期に集中していて、今回、分析した的場遺跡の小玉の様式は縄文時代後期～晩期に酷似しているが、弥生時代前期の可能性が出土土器から推

第14表　的場遺跡出土結晶片岩様緑色小玉の上加世田群、的場群の推定確率

分析番号	上加世田遺物群 第1群	第2群	第3群	第4群	的場遺物群	ESR信号	総合判定
76380	0.00%	0.18%	0.00%	0.00%	31%	上加世田群	上加世田遺物群



第６図　結晶片岩様緑色岩製玉類の使用遺跡分布図
（細粒の白雲母の微結晶集合体含む）

測されていることから、縄文時代晩期から伝承した可能性も推測される。結晶片岩様緑色岩製玉類、剥片、加工途中の未製品が出土する遺跡は上加世田遺跡と津和野町高田遺跡で、ワクド遺跡では剥片が確認されている。また、製品のみ使用では、縄文時代後期、晩期または後期～晩期に関係する遺跡で、宮崎県学頭遺跡の丸玉、岐阜県の西田遺跡（上加世田遺跡より直線距離で約800キロメートル伝播）の丸玉に、島根県匹見町のヨレ遺跡の管玉、勾玉、岡山県吉野口遺跡管玉に、大阪府阪南町向出遺跡出土小玉にそれぞれ使用されたことから、結晶片岩様緑色岩も糸魚川地域産硬玉製玉類に匹敵する伝播距離を示す可能性があり、古代人にとって非常に重要な玉類原材であったことが推測される（第６図）。本遺跡出土小玉が九州南部産の玉が伝播した可能性が推測され、本遺跡が九州南部の情報・文化を入手していたと推測できる。

参考文献

1）茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。
長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63-73

2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要　6：1-18

3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。
橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』，14：95-109

4）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学，16:59-89

5）Tetsuo Warashina(1992)、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF，Journal of Archaeological Science　19：357-373

6）番場猛夫（1967）、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録　№18：11-15

7）河野義礼（1939）、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石砿物鉱床学雑誌22：195-201

第2節　上ノ段遺跡出土の管玉の産地分析

藁科　哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

今回分析を行った玉類は管玉で、玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、メノウなどが推測される。一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。これら玉材については岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどくらいであり、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。また原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となるのである。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）や碧玉の原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説であったが、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法[2, 3]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究としては蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用することで産地分析をより正確に行った例[4]が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原材産地推定で明らかになる遺跡から石材原産地までの移動距離、活動範囲は、石器が生活必需品であるので、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではなく、勾玉、管玉は権力の象徴、お祭り、御守り、占いの道具、アクセサリーとして精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれないし、お祭り、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏ではないかと考えられる。このように玉類の産地分析では、石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は、兵庫県氷上郡島町上竹田に位置する上ノ段遺跡出土の庄内併行期の管玉10個で、分析した遺物の出土地区、層位、採取年月日など第15表に示した。これら管玉の分析結果が得られたので報告する。

第15表　上ノ段遺跡出土管玉の出土位置

分析番号	報告番号	調査番号	出土地区	遺構	層位	出土年月日
76381	102	960087	A地区	SK14	床面	96年10月9日
76382	96	960087	A地区	周溝墓主体部棺内	埋土	96年10月22日
76384	95	960087	A地区	周溝墓主体部棺内	埋土	96年10月22日
76385	104	960087	A地区	SK14	床面	96年10月9日
76386	103	960087	A地区	SK14	床面	96年10月9日
76387	97	960087	A地区	周溝墓主体部棺内	埋土	96年10月22日
76388	98	960087	A地区	周溝墓主体部棺内	埋土	96年10月21日
76389	99	960087	A地区	周溝墓主体部棺内	埋土	96年10月21日
76390	100	960087	A地区	周溝墓主体部棺内	埋土	96年10月21日
73691	101	960087	A地区	周溝墓主体部棺内	埋土	96年10月21日

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋である鉱物組成の組合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。よって石器の原材産地分析で成功している[4] 非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

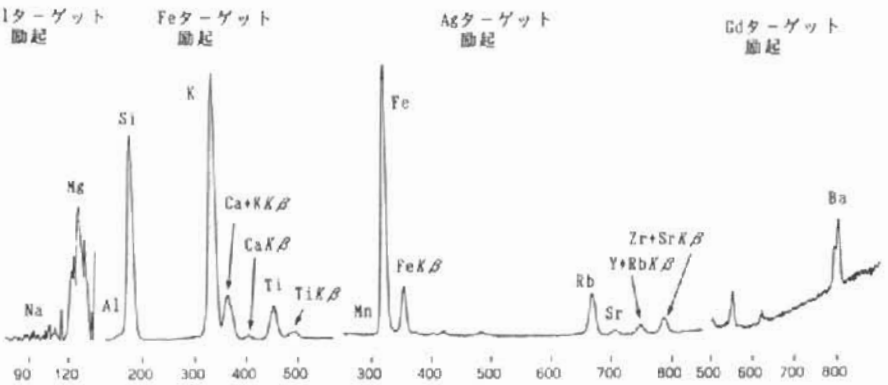
遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比を、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した[5]。

碧玉原石の蛍光X線分析

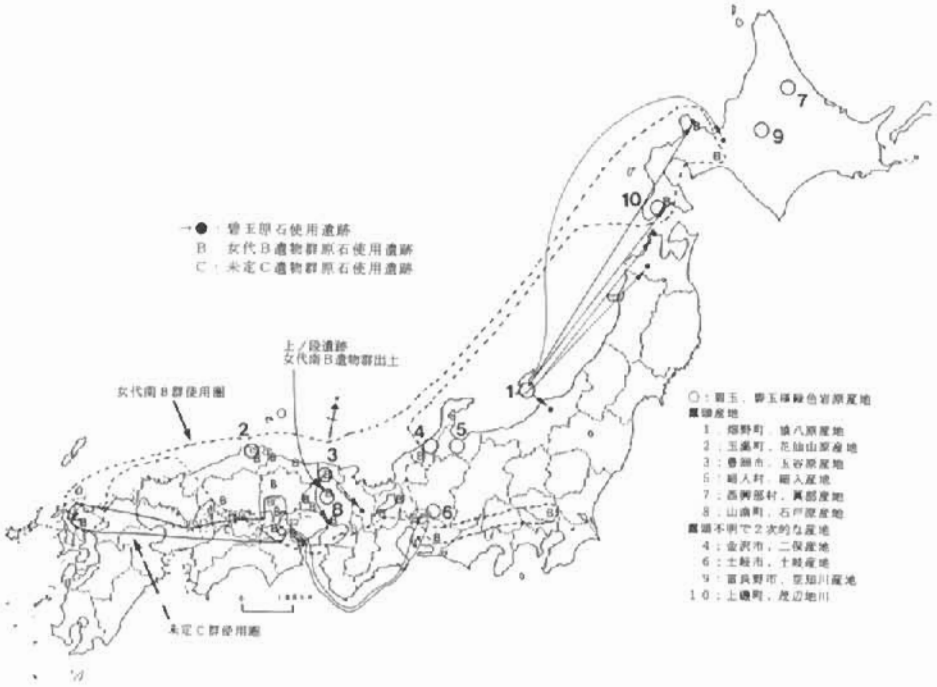
碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を第7図に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの第7図で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al／Si、K／Si、Ca／K、Ti／K、K／Fe、Rb／Fe、Fe／Zr、Rb／Zr、Sr／Zr、Y／Zrである。Mn／Fe、Ti／Fe、Nb／Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いている。

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第8図に示す。佐渡猿八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示



第7図　花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル



第８図　原石産地不明碧玉製管および玉材の使用圏と産地同定できた碧玉製管玉類使用遺跡

し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ケ所か見られるが、今回分析した原石は猿八の各地点から表採したもの、および地元で提供された原石などであり、また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーンタフ層の間に約７cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6～2.5の間のものは31個、2.5～2.4の間は５個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も２個含まれている。原石の比重が2.6～2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても分析した組成上には大きな差はみられなかった。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は②島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は、濃緑色から緑色の緻密で剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、他に硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は7個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は３個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域のものが分析されているのがわかる。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる分析組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、③兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より緻密で優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した玉谷産原石は、比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は４個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、④石川県金沢市

二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。ここの河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。また元素組成は他の産地の組成と異なっており区別できる。しかし、この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が分析した8個は2.25~2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域であり、そこでは赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出している。このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地は、⑦北海道紋別郡西興部村にあり、その碧玉原石は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、⑧兵庫県氷上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.62.5が5個、2.52.4が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質のもの碧玉を多数収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り第16表に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索すると言う目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B（女代(B)）群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。宇木汲田遺跡の管玉に産地未発見の原石を使用した同質の材料で作られた管玉で作った未定C（未定(C)）群をそれぞれ原石群と同じように使用する。また、岐阜県可児市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚(1)、(2)の遺物群、多摩ニュウタウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡などから出土した玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか定量的に判定できるようにし、遺物群を第17表に示した。この他、鳥取県の福部村多鯰池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。最近、兵庫県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉様の玉材は貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、ESR信号および比重（2.35）が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

第16表　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析個数	Al／Si Xav±σ	K／Si Xav±σ	Ca／K Xav±σ	Ti／K Xav±σ	K／Fe Xav±σ
興部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
空知A 1	10	0.049±0.017	1.044±0.299	2.308±0.556	0.484±0.096	0.052±0.012
空知A 2	3	0.019±0.009	0.675±0.377	0.623±0.203	0.172±0.031	0.040±0.007
空知B	2	0.066±0.001	3.927±0.267	0.088±0.004	0.089±0.003	0.283±0.034
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	51	0.006±0.004	0.361±0.131	0.072±0.063	0.098±0.063	0.023±0.005
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山 1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山 2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
茂辺地川	4	0.031±0.002	1.847±0.246	0.077±0.024	0.222±0.052	0.092±0.021

原石群名	分析個数	Rb／Fe Xav±σ	Fe／Zr Xav±σ	Rb／Zr Xav±σ	Sr／Zr Xav±σ	Y／Zr Xav±σ
興部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
空知A 1	10	0.108±0.042	4.658±2.044	0.438±0.089	15.676±4.311	0.054±0.041
空知A 2	3	0.037±0.010	27.651±10.97	1.132±0.759	5.930±3.179	0.349±0.251
空知B	2	0.455±0.010	2.281±0.278	1.035±0.104	0.235±0.084	0.129±0.022
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	51	0.096±0.025	43.067±23.28	4.056±2.545	0.271±0.308	0.159±0.180
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山 1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山 2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
茂辺地川	4	0.190±0.052	5.566±1.549	0.980±0.044	0.300±0.032	0.171±0.051

原石群名	分析個数	Mn／Fe Xav±σ	Ti／Fe Xav±σ	Nb／Zr Xav±σ	比重 Xav±σ
興部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
空知A 1	10	0.078±0.152	0.019±0.005	0.003±0.007	2.495±0.039
空知A 2	3	0.009±0.003	0.006±0.002	0.118±0.167	2.632±0.012
空知B	2	0.015±0.002	0.022±0.004	0.123±0.010	2.607±0.001
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	51	0.001±0.001	0.001±0.001	0.072±0.160	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山 1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山 2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
茂辺地川	4	0.003±0.008	0.016±0.001	0.132±0.069	2.536±0.033

Xav：平均値、σ：標準偏差値

上ノ段遺跡出土の管玉と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類、玉材は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原材産地の同定をするために、(1) 蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

これら玉類の蛍光X線分析のスペクトルを第9～18図に示し、比重および管玉の蛍光X線分析から原材料の元素組成比を求めて結果を第17表に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光X線分析でRb, Sr, Y, Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。また、グリーンタフ製は比重が2.4に

第17表　各原石産地不明碧玉玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

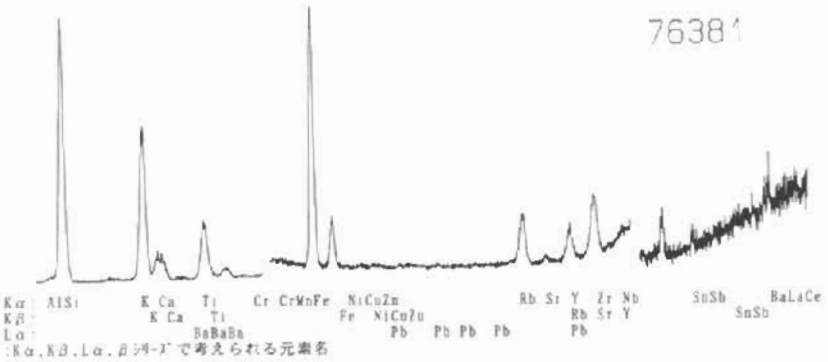
遺物群名	分析個数	Al／Si Xav±σ	K／Si Xav±σ	Ca／K Xav±σ	Ti／K Xav±σ	K／Fe Xav±σ
女代南B	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099
未定C	58	0.030±0.028	4.416±0.618	0.013±0.013	0.207±0.034	0.589±0.130
長塚(1)	47	0.036±0.004	3.525±0.347	0.033±0.005	0.439±0.050	0.204±0.037
長塚(2)	45	0.028±0.007	2.659±0.122	0.010±0.004	0.064±0.003	0.719±0.065
No.200-1	32	0.042±0.004	0.808±0.025	3.588±0.074	0.639±0.016	0.051±0.002
No.200-2	28	0.037±0.004	0.990±0.021	2.384±0.067	0.605±0.029	0.064±0.003
No.200-3	28	0.039±0.003	0.926±0.020	2.527±0.114	1.085±0.059	0.053±0.002
No.200-4	32	0.047±0.007	0.855±0.025	3.771±0.079	1.228±0.035	0.057±0.003
No.200-6	32	0.040±0.006	4.185±0.162	0.031±0.006	0.103±0.003	0.821±0.019
梅田1	40	0.021±0.003	1.204±0.094	0.066±0.017	0.143±0.008	0.065±0.005
梅田2	44	0.032±0.004	2.539±0.246	0.025±0.006	0.522±0.050	0.172±0.035
梅田3	40	0.027±0.003	1.911±0.062	0.020±0.007	0.518±0.010	0.261±0.012
梅田4	38	0.081±0.008	7.149±0.288	0.023±0.003	0.082±0.002	0.558±0.020
上ノ段1	42	0.014±0.002	0.413±0.046	0.054±0.026	0.395±0.040	0.053±0.005
梅田東1	51	0.030±0.007	1.974±0.317	0.026±0.011	0.529±0.061	0.192±0.011
新方1	67	0.062±0.005	1.868±0.115	1.640±0.137	0.733±0.069	0.078±0.012
新方2	30	0.056±0.005	4.152±0.162	0.226±0.181	0.313±0.010	0.212±0.019
新方3	39	0.044±0.008	0.912±0.178	2.416±0.174	0.786±0.267	0.080±0.011

遺物群名	分析個数	Rb／Fe Xav±σ	Fe／Zr Xav±σ	Rb／Zr Xav±σ	Sr／Zr Xav±σ	Y／Zr Xav±σ
女代南B	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047
未定C	58	0.650±0.113	0.583±0.110	0.369±0.035	0.090±0.030	0.070±0.026
長塚(1)	47	0.361±0.040	2.756±0.473	0.980±0.110	0.472±0.083	0.379±0.143
長塚(2)	45	0.832±0.054	0.412±0.038	0.341±0.023	0.036±0.010	0.386±0.242
No.200-1	32	0.042±0.006	1.751±0.149	0.073±0.016	4.665±0.374	0.239±0.026
No.200-2	28	0.072±0.011	1.422±0.075	0.102±0.015	6.680±0.322	0.170±0.017
No.200-3	28	0.053±0.009	1.668±0.093	0.088±0.015	4.455±0.197	0.343±0.031
No.200-4	32	0.118±0.023	1.110±0.129	0.130±0.030	9.626±1.090	0.117±0.025
No.200-6	32	0.692±0.040	0.646±0.037	0.447±0.025	0.207±0.020	0.296±0.026
梅田1	40	0.220±0.029	12.333±0.882	2.710±0.421	0.273±0.374	0.741±0.134
梅田2	44	0.299±0.051	3.517±0.603	2.024±0.053	0.316±0.048	0.283±0.066
梅田3	40	0.430±0.017	3.262±0.209	1.401±0.057	0.338±0.028	0.386±0.048
梅田4	38	0.473±0.026	1.003±0.046	0.473±0.018	0.222±0.032	0.100±0.013
上ノ段1	42	0.223±0.020	3.772±0.448	0.833±0.068	0.077±0.037	0.296±0.053
梅田東1	51	0.219±0.019	2.366±0.474	0.512±0.069	0.072±0.024	0.101±0.042
新方1	67	0.111±0.205	1.610±0.264	0.175±0.018	8.298±0.619	0.078±0.019
新方2	30	0.297±0.018	3.847±0.314	1.137±0.057	0.649±0.095	0.139±0.053
新方3	39	0.086±0.018	1.685±0.413	0.144±0.050	7.449±1.605	0.182±0.056

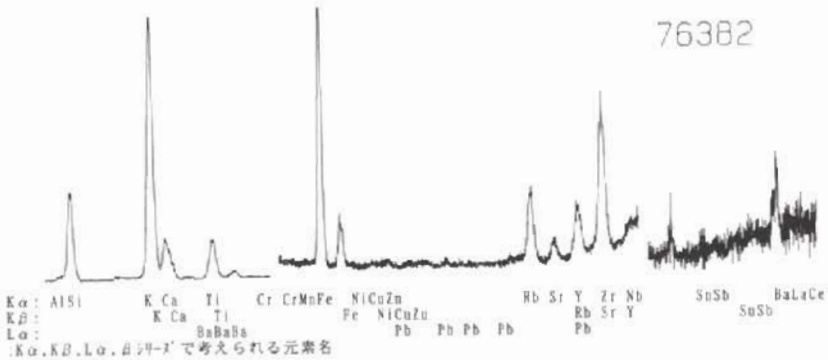
遺物群名	分析個数	Mn／Fe Xav±σ	Ti／Fe Xav±σ	Nb／Zr Xav±σ	比重 Xav±σ
女代南B	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019
未定C	58	0.002±0.001	0.101±0.019	0.019±0.016	2.646±0.023
長塚(1)	47	0.005±0.001	0.094±0.013	0.022±0.016	2.533±0.016
長塚(2)	45	0.004±0.001	0.047±0.004	0.024±0.013	2.569±0.003
No.200-1	32	0.006±0.001	0.033±0.001	0.006±0.009	2.308
No.200-2	28	0.008±0.001	0.038±0.002	0.006±0.010	2.277
No.200-3	28	0.014±0.003	0.058±0.003	0.002±0.005	2.270
No.200-4	32	0.005±0.001	0.068±0.002	0.006±0.008	2.256
No.200-6	32	0.011±0.002	0.082±0.003	0.038±0.026	2.542
梅田1	40	0.001±0.000	0.009±0.001	0.014±0.019	2.579±0.013
梅田2	44	0.005±0.001	0.080±0.011	0.035±0.015	2.531±0.007
梅田3	40	0.005±0.001	0.121±0.005	0.033±0.027	2.511
梅田4	38	0.006±0.001	0.039±0.002	0.039±0.010	2.446
上ノ段1	42	0.006±0.001	0.019±0.001	0.014±0.018	2.636±0.001
梅田東1	51	0.008±0.001	0.095±0.014	0.027±0.018	2.541±0.016
新方1	67	0.050±0.020	0.046±0.006	0.027±0.009	2.290±0.018
新方2	30	0.010±0.003	0.061±0.004	0.032±0.017	2.546±0.011
新方3	39	0.068±0.027	0.057±0.013	0.007±0.007	2.257±0.024

Xav：平均値、σ：標準偏差値
女代南B：女代南遺跡（豊岡市）、未定C：宇木汲田遺跡（唐津市）、長塚(1)、(2)：長塚古墳（可児市）、
No.200-1～6：多摩ニュウタウン遺跡（東京都）、梅田1～4：梅田古墳（兵庫県和田山町）、
梅田東1：梅田東古墳（兵庫県和田山町）、上ノ段1：上ノ段遺跡（兵庫県市島町）、新方1～3：新方遺跡（神戸市）
で使用されている原石産地不明の玉類で作った群

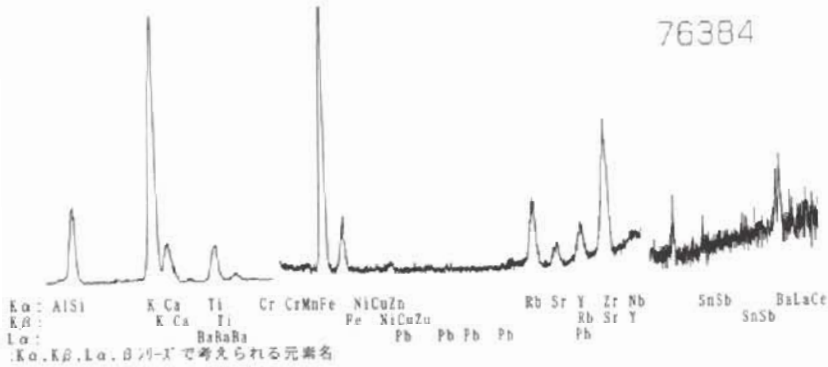
達しない玉材が多い。これら遺物の元素組成比の結果をの碧玉原石群（第16・17表）の結果と比較してみる。分析個数が少なくて統計処理ができる群が作れなかった産地については、原石の元素組成比を今回分析した遺物と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地につい



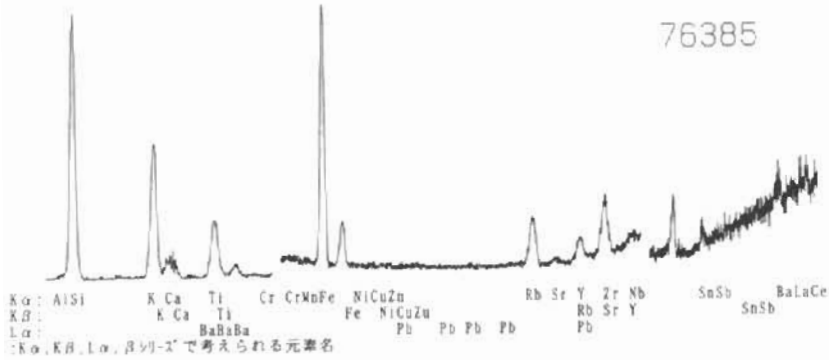
第９図　上ノ段遺跡出土管玉230（76381）の蛍光X線スペクトル



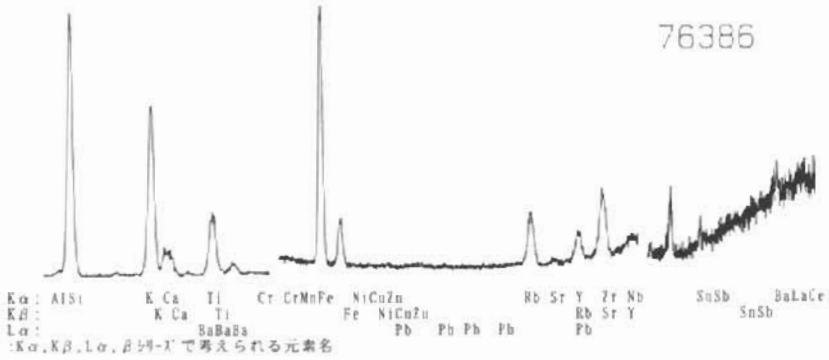
第10図　上ノ段遺跡出土管玉234（76382）の蛍光X線スペクトル



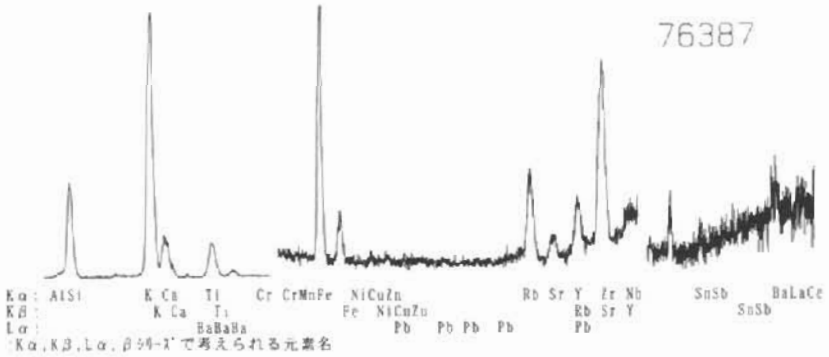
第11図　上ノ段遺跡出土管玉233（76384）の蛍光X線スペクトル



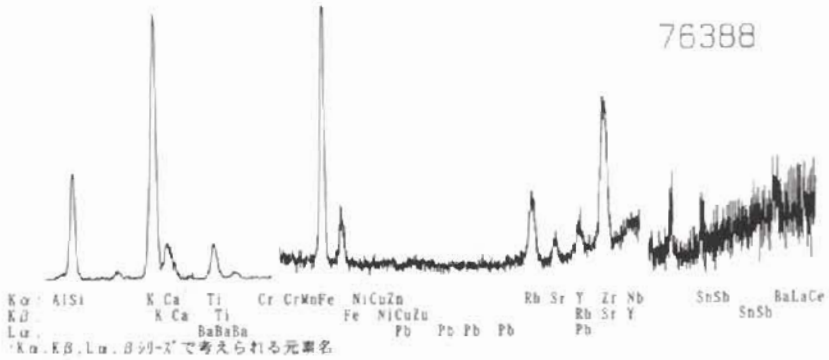
第12図　上ノ段遺跡出土管玉231（76385）の蛍光X線スペクトル



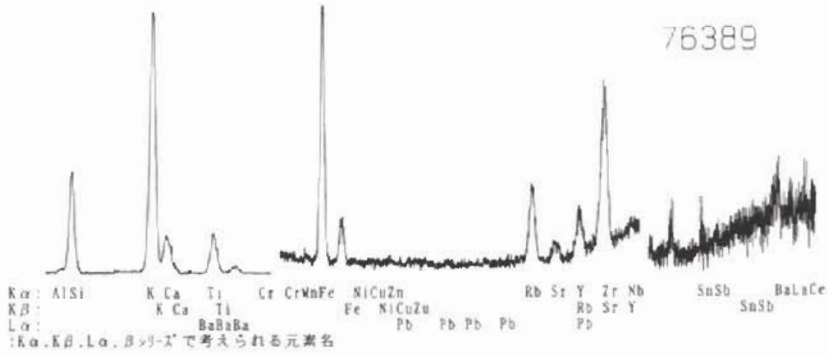
第13図　上ノ段遺跡出土管玉232（76386）の蛍光X線スペクトル



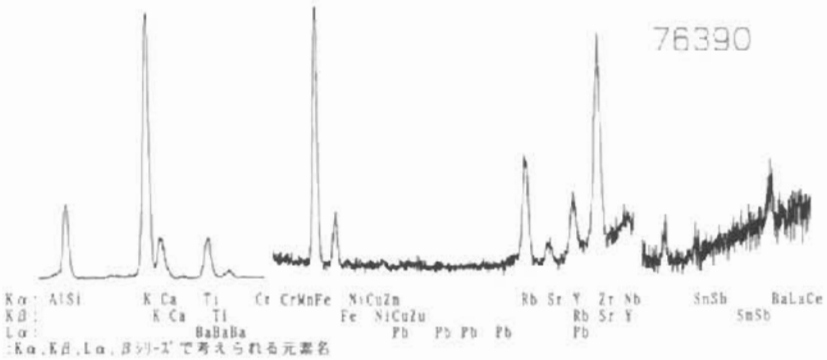
第14図　上ノ段遺跡出土管玉235（76387）の蛍光X線スペクトル



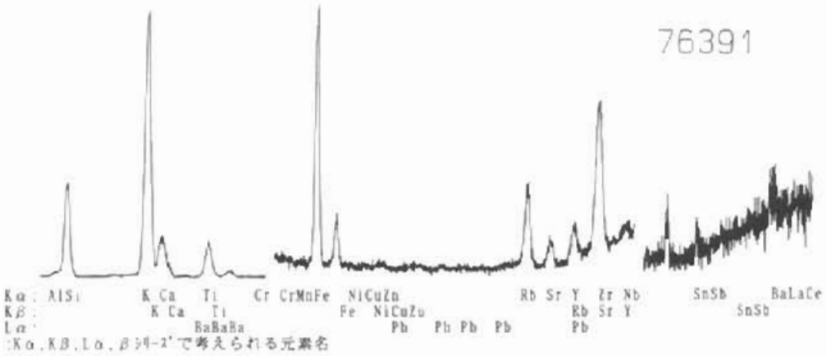
第15図　上ノ段遺跡出土管玉236（76388）の蛍光X線スペクトル



第16図　上ノ段遺跡出土管玉237（76389）の蛍光X線スペクトル



第17図　上ノ段遺跡出土管玉238（76390）の蛍光X線スペクトル



第18図　上ノ段遺跡出土管玉239（76391）の蛍光X線スペクトル

第18表　上ノ段遺跡出土管玉の分析結果

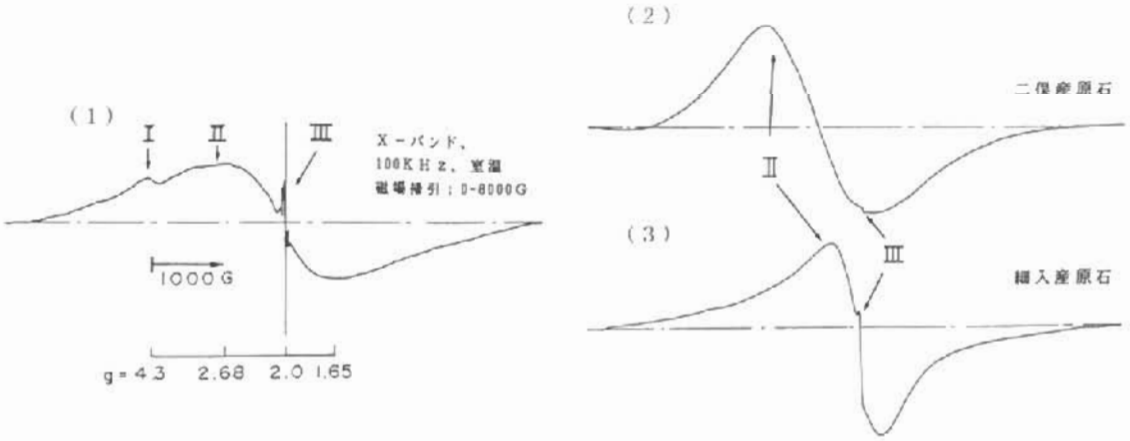
遺物番号	分析番号	元素比 Al／Si	K／Si	Ca／K	Ti／K	K／Fe	Rb／Fe	Fe／Zr	Rb／Zr
1-230	76381	0.017	0.421	0.095	0.387	0.050	0.237	3.451	0.819
2-234	76382	0.025	2.103	0.040	0.160	0.264	0.308	1.498	0.461
3-233	76384	0.036	2.455	0.022	0.146	0.226	0.290	1.672	0.486
4-231	76385	0.014	0.378	0.081	0.464	0.043	0.223	3.956	0.883
5-232	76386	0.015	0.474	0.072	0.379	0.050	0.242	3.234	0.782
6-235	76387	0.033	1.990	0.041	0.123	0.411	0.380	1.158	0.439
7-236	76388	0.032	1.788	0.059	0.142	0.329	0.352	1.350	0.475
8-237	76389	0.029	1.819	0.053	0.153	0.320	0.303	1.408	0.426
9-238	76390	0.032	2.515	0.028	0.157	0.375	0.407	1.194	0.485
10-239	76391	0.025	1.938	0.044	0.137	0.332	0.349	1.346	0.470
JG-1a)		0.067	3.392	0.774	0.237	0.111	0.263	3.795	0.998

遺物番号	分析番号	元素比 Sr／Zr	Y／Zr	Mn／Fe	Ti／Fe	Nb／Zr	重量 gr	比重
1-230	76381	0.079	0.339	0.007	0.018	0.028	0.71668	2.637
2-234	76382	0.131	0.259	0.009	0.040	0.011	0.16938	2.489
3-233	76384	0.146	0.166	0.009	0.029	0.010	0.21231	2.502
4-231	76385	0.095	0.248	0.007	0.020	0.072	0.77914	2.635
5-232	76386	0.065	0.286	0.006	0.020	0.054	0.78928	2.635
6-235	76387	0.114	0.164	0.009	0.048	0.016	0.21522	2.538
7-236	76388	0.126	0.126	0.008	0.040	0.000	0.12443	2.462
8-237	76389	0.118	0.157	0.008	0.040	0.022	0.16525	2.540
9-238	76390	0.096	0.152	0.008	0.054	0.028	0.19280	2.543
10-239	76391	0.144	0.141	0.010	0.040	0.020	0.21533	2.550
JG-1a)		1.345	0.281	0.024	0.024	0.079		

a)：標準試料、Ando. A.. Kurasawa. H.. Ohmori. T. & Takeda. E. (1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG−1 granodiorite and JB−1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192.

第19表　上ノ段遺跡出土管玉の産地推定結果

実測番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率							ESR信号形	総合判定原石産地
		玉谷群	花仙山群	上岐群	猿八群	女代B群	未定C群	上ノ段1群		
1-230	76381	0.0002%	0.0003%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	32%	上ノ段形	
2-234	76382	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$1X10^{-6}$%	1 %	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	女代B形	女代B
3-233	76384	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	0.0003%	8 %	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	女代B形	女代B
4-231	76385	0.032 %	0.004 %	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	13%	上ノ段形	
5-232	76386	0.0001%	0.0005%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	15%	上ノ段形	
6-235	76387	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	0.0003%	8 %	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	女代B形	女代B
7-236	76388	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	0.0001%	1 %	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	女代B形	女代B
8-237	76389	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	0.0003%	2 %	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	女代B形	女代B
9-238	76390	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$1X10^{-6}$%	2 %	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	女代B形	女代B
10-239	76391	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	0.0001%	6 %	$<10^{-10}$%	$<10^{-10}$%	女代B形	女代B

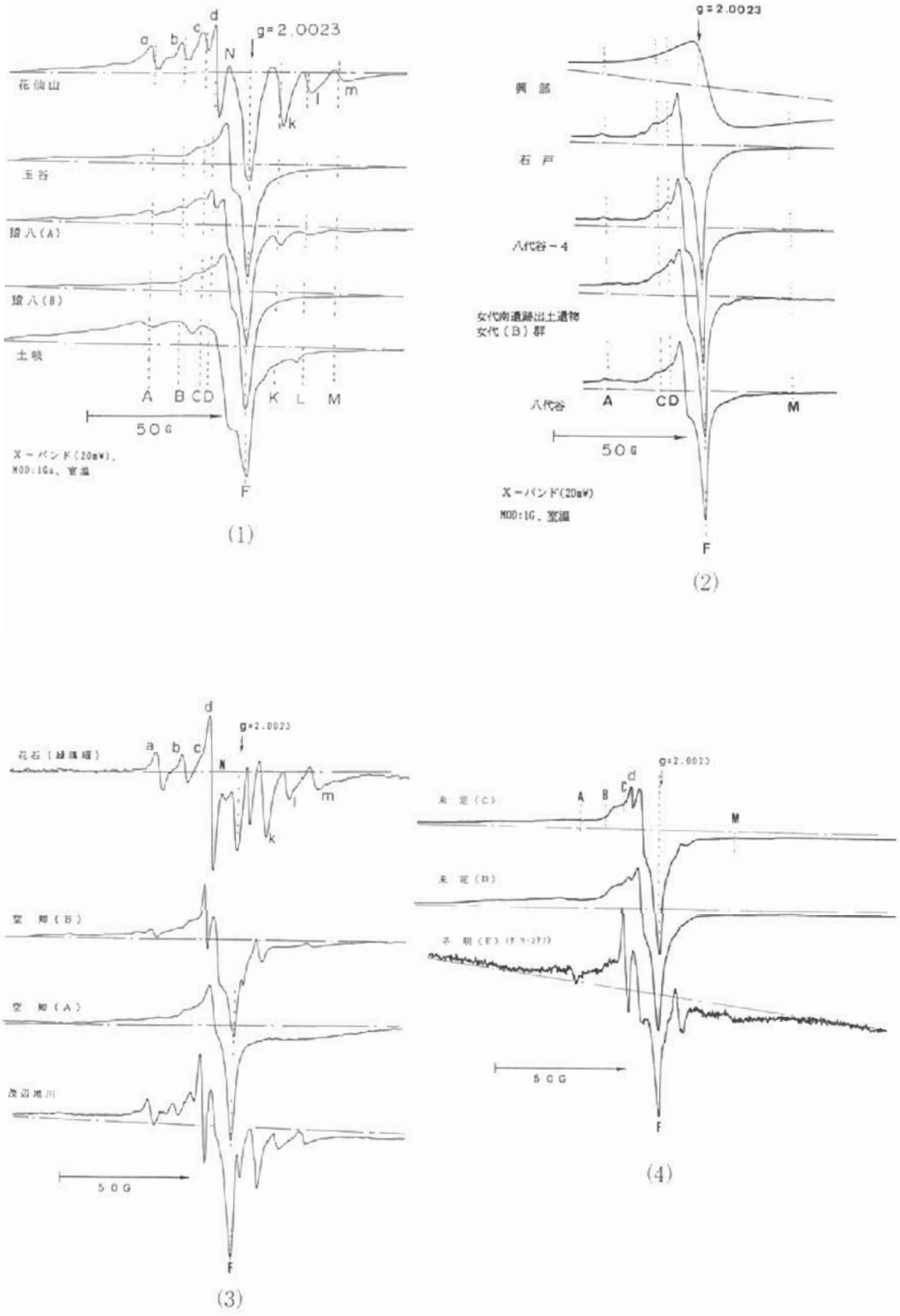


第19図　碧玉原石のESRスペクトル（花仙山、玉谷、猿八、土岐）

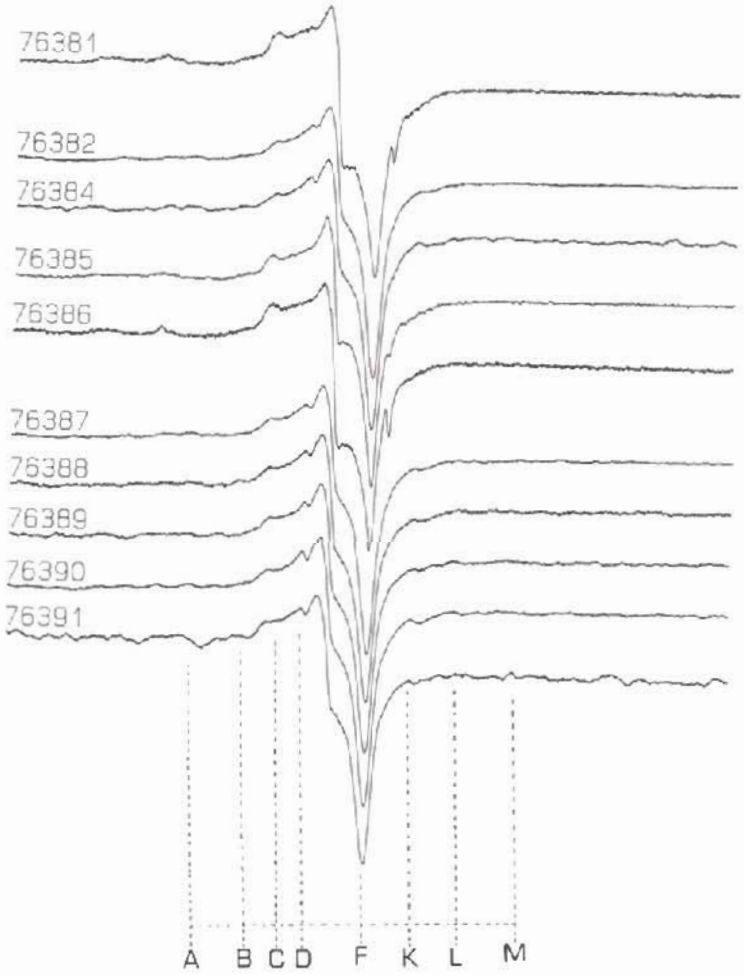
ては、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT２乗検定6)により同定を行ったところ、分析番号76382、76384、76387～76391番の７個は女代南（B）遺物群に信頼限界の0.1%以上で帰属され、女代南（B）遺物群と判定する必要条件は求められた。次に十分条件である他の全ての原石・遺物群（第16・17表）について、信頼限界の0.1%に達しないなど、一致しないこと全ての群について証明しているが、紙面都合上、表４には例として原石・遺物群（第16・17表）の中から一部を抜粋して示した。例示するように玉谷、花仙山、未定C、猿八、土岐の各群に一致する管玉は見られず十分条件が満たされている。従って、これら管玉は女代南（B）遺物群と同質の管玉であることを、必要条件、十分条件を満たして客観的に証明された。分析番号76381、76385、76386番は相互に組成が酷似し、同じ岩塊を玉材として作られた兄弟管玉の様である。この３個の管玉は原石・遺物群の中で花仙山、玉谷群に近い組成を示すが一致せず、未発見の碧玉原石産地の玉材を使用している可能性を推測し、これら３個の管玉を42回分析し、上ノ段１遺物群を作り、他の遺跡で、この玉材で作られた兄弟玉類が同定できるようにした。これら管玉の群への帰属確率の結果を第19表に示した。より正確に産地を特定するためにESR分析を併用して産地分析を行った。

ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。



第20図　碧玉原石の信号（Ⅲ）のESRスペクトル



第21図　上ノ段遺跡出土管玉の信号（Ⅲ）のESRスペクトル

ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11㎜以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。第19図－(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号（Ⅰ）は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号（Ⅱ）と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号（Ⅲ）で構成されたている。第19図－(1)では、信号（Ⅱ）より信号（Ⅲ）の信号の高さが高く、第19図－(2)、－(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉類の中で信号（Ⅱ）が信号（Ⅲ）より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号（Ⅲ）の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。第20図－(1)に花仙山、猿八、玉谷、上岐を第20図－(2)に興部、石戸、八代谷－4、女代（B）遺物群、八代谷および第20図－(3)に富良野市空知川の空知（A）、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号（Ⅲ）のスペクトルを示す。第20図－(4)には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。ESR分析では玉材剥片と管玉のESR信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石だったり、産地不明遺物群のESR信号形と一致した場合、そこの産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した管玉のESR信号（Ⅲ）の結果を第21図に示す。分析番号76382、76384、76387～76391番の7個の管玉は女代南(B)群形に一致し、これら管玉を女代南(B)遺物群と同定しても矛盾しない。分析番号76381、

76385、76386番の管玉のESR信号（Ⅲ）は相互に酷似している。この３個は、D位置の小さなピークがない、D－F間とF－K間の信号の形が女代南（B）形と異なり、下向きのピークがみられるなど独特のESR信号（Ⅲ）の形を示し、管玉の組成を分類する指標として使用できると推測されたために、上ノ段形として登録し、この玉材で作られた兄弟玉類が同定できるようにした。ESRスペクトルが一致した原石産地に管玉の原産地を特定するが、より正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合のみ、そこの群の原石と同じものが使用されているとして総合判定原石産地の欄に結果（第19表）を記した。

結　論

分析した管玉の分析番号76382（96）、76384（95）、76387（97）～76391（101）番の７個の管玉は蛍光X線分析、ESR分析の両結果が女代南（B）遺物群に同定された。また、分析番号76381（102）、76385（104）、76386（103）番の管玉は、原石産地および遺物群に一致する群は見られなかった。しかし、この３個の管玉は蛍光X線分析の結果とESR信号（Ⅲ）の結果が管玉相互に酷似していることから、未発見の同じ岩塊を玉材として作られた兄弟管玉と考えられ、上ノ段１遺物群を作り、他の遺跡でこの玉材で作られた兄弟玉類が存在したとき同定できるようにした。この上ノ段群のESR信号と同じ信号の遺物は、新方遺跡の丁ノ坪地区より出土する玉谷産玉材片とともに、玉材片４個と一致するが、この玉材片の蛍光X線分析の結果は上ノ段遺物群と一致しなかった。上ノ段遺跡で使用されている女代南B群は弥生時代を中心に使用された原石で、豊岡市の女代南遺跡の中期の玉作り過程の石片、滋賀県の筑摩佃、立花遺跡出土の管玉、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉には玉谷産と共に使用されていた。玉谷産碧玉は、京都府の余部遺跡で剥片が出土している。関東地方では埼玉県蓮田市宿下遺跡、東海地方では、清洲町朝日遺跡、新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代の管玉に、畿内地域では東大阪市の、鬼虎川、巨摩、亀井、久宝寺北、久宝寺南遺跡で、また中国地方では、佐用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の弥生前期末～中期初頭の玉材、岡山市の南溝手遺跡および百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第２主体部出土の管玉、東広島市の西本６号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県板野町の蓮華谷古墳群（Ⅱ）２号墳の３世紀末の管玉、香川県善通寺市の彼ノ宗遺跡の末期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、また宇木汲田遺跡の管玉に使用されていた。また、続縄文時代には北海道の上磯町茂別遺跡、余市大川遺跡、千歳市キウス遺跡にまで伝播し、女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに匹敵する広い分布圏を示している。

一方、今だ畿内では使用が確認されていない管玉として、南溝手遺跡の中期前葉の管玉片には、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った原石群の未定C群の原石が使用され、この未定C群は坂出市の龍川・五条遺跡の管玉、今治市の持田町３丁目遺跡の前期の管玉、大和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、吉野ヶ理遺跡の南西サブトレ出土の管玉に使用されている。また、猿八産原石が弥生時代に使用されている遺跡は、北海道余市町の大川遺跡および茂別遺跡の続縄文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大麻22遺跡出土の続縄文（後北C１式）の管玉に、七飯町の大中山13遺跡（続縄文）出土の管玉に使用され、佐渡島以北で主に使用されていることが明らかになっている。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剥片出土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県など日本海側で、これら玉類が日本海の玉材原産地地方で作られ、これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ルートとし

遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡をリレー式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合などが考えられる。未定C群は、最近の予備的な実験で朝日遺跡で使用されている可能性が推測されたことから、推測は空論になるが、未定C群の管玉が韓国で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ルートを通って伊予、備前、讃岐へ流入し現在の東進の限界になっている。朝日遺跡での使用が確実になれば、播磨、摂津、大和、近江を飛び越え、尾張の朝日遺跡に伝播したことが明らかになり東進の限界が一気に300km延びる可能性がでている（第８図）。玉類の産地分析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団（原石群）を作り、原石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、佐渡島猿八産原石が佐渡島以南に本当に伝播していないかを調査し、女代南B群、未定C群、不明の管玉などの原石産地を明らかにし、これら不明の原石群を作ること、また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管玉を数多く分析することが重要で、是非とも各地の遺跡の詳細な碧玉製遺物の科学的調査が必要であるが現在調査が殆ど進んでいないのが現状で、国庫補助での発掘調査には必ず科学的調査も加えるべきだと思う。今回行った産地分析は完全な非破壊で、玉類、碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われます。

参考文献

1）茅原一也（1964）、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報）。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63-73

2）藁科哲男・東村武信（1987）、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要　6：1-18

3）藁科哲男・東村武信（1990）、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』，14：95-109

4）藁科哲男・東村武信（1983）、石器原材の産地分析。考古学と自然科学，16：59-89

5）Tetsuo Warashina（1992）、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19：357-373

6）東村武信（1976），産地推定における統計的手法。考古学と自然科学，9：77-90

第6章　まとめ

第1節　弥生時代前期の土器について

的場遺跡・上ノ段遺跡からは弥生時代前期の土器（弥生土器および突帯文系土器）が出土している。兵庫県内の丹波地域で弥生前期の土器が出土した遺跡は7遺跡あるが、ごく少量の遺物が出土しているにすぎないものが多い。(1) 今回の出土例も、かならずしも良好な出土状態とは言えないが、的場遺跡から出土したものはそのなかでも良好な個体を含んでいる。

弥生土器

的場遺跡では甕1点（61）を除けばいずれも広口壺（54～60）と考えられる。壺の施文方法にはヘラ描き沈線文、貼り付け突帯文、ヘラ描き沈線文＋貼り付け突帯文＋刺突文がある。甕は頸部に7条のヘラ描沈線文をもっている。上ノ段遺跡では壺（218～220）のみである。壺の施文方法がヘラ描き沈線文、貼り付け突帯文であることから、前期新段階のものと考えられる。

主として由良川流域を対象に周辺の状況を見てみると（第22図）、的場遺跡・上ノ段遺跡が所在する氷上郡内では春日町七日市遺跡や加古川水系と水系は異なるが青垣町応相寺遺跡で壺が出土している。壺の施文方法もヘラ描き沈線文・貼り付け突帯文である。的場遺跡・上ノ段遺跡より下流に位置する福知山市や綾部市でも武者ヶ谷遺跡・味方遺跡・馬場池東方遺跡・館遺跡などでも壺が出土している。施文方法はヘラ描き沈線文のものが多いが、館遺跡では貝殻腹縁文のものが出土している。河口部に近い舞鶴市の志高遺跡や浦入遺跡では壺に加えて甕・鉢・蓋など多様な器形のものが出土している。施文方法はヘラ描き沈線文、削り出し突帯文、貼り付け突帯文、擬貝殻腹縁文などがある。

時期的には削り出し突帯文の存在や甕の沈線が多条化していないことなどから前期中段階のなかでも新段階に近いのものと考えられている浦入遺跡を除けば、全て前期新段階のものと考えられる。河口部に近い舞鶴市では甕・鉢・蓋などを含む多様な器形のものが含まれているが、内陸部では壺以外のものが出土する例は少ない。

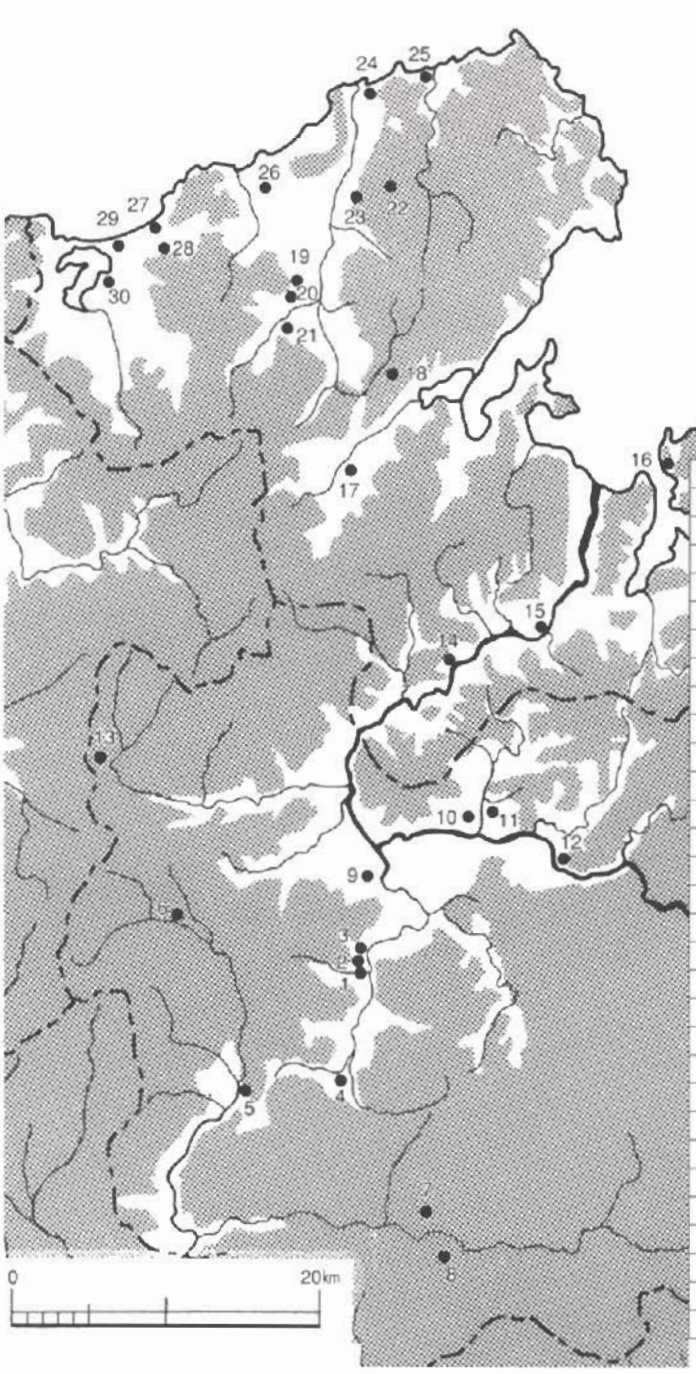
突帯文系土器

以上に取り上げた前期の弥生土器の出土した遺跡では、突帯文系の土器が出土しているものが多く見られる。突帯の形状や施文の方法によっていくつかのバリエーションが認められ、突出した突帯にキザミ目を施すもの（a類）、縁帯状に薄くなった突帯にキザミ目を施すもの（b類）、縁帯状の突帯に刺突を施すもの（c類）、縁帯状の突帯に文様を施さないもの（d類）、明瞭な突帯をもたず口縁端部に刺突が施されるもの（e類）などに分けることができる。

的場遺跡ではb、c、d、e類、上ノ段遺跡ではc類、応相寺遺跡ではa、b、c、d類、武者ヶ谷遺跡ではa、c、e類、味方遺跡ではc類、馬場池東方遺跡ではa類、浦入遺跡ではa、b、c、d類が出土している。型式学的にはa→b→c→d類と変化しているようにも見受けられるが、最も時期の古い浦入遺跡でいずれも出土しており、単純に変化しているのではないようである。ただし、志高遺跡ではⅡ様式の溝からd類が出土しており、突帯文系土器の終末的な状況を示しているものと考えられる。

まとめ

由良川流域では丹後半島沿岸部より一歩おくれて前期中段階の終わり頃に河口部に近い浦入遺跡にみられ、以後新段階にかけて、内陸に広まっていったようである。下流域の浦入遺跡・志高遺跡では弥生土器の甕が使われているのに対して、内陸部の遺跡では弥生土器の甕はあまり出土せず、弥生土器の壺と突帯文系土器の甕がセットとなっている。このことは、内陸部では「縄文人」が弥生文化を受容していったことを色濃く示している。的場遺跡・上ノ段遺跡で出土した弥生時代前期の土器は内陸部への弥生文化の波及状況の一端を知ることができる資料ということができよう。



番号	遺跡名	所在地	突帯文	前期
1	的場	氷上郡市島町	bcde	○
2	上ノ段	氷上郡市島町	c	○
3	高坂	氷上郡市島町	○	
4	七日市	氷上郡春日町		○
5	横田	氷上郡氷上町		○
6	応相寺	氷上郡青垣町	abcd	○
7	口坂本	篠山市		●
8	四ノ坪	篠山市	○	●
9	武者ヶ谷	福知山市	ace	○
10	馬場池東方	綾部市	a	○
11	味方	綾部市	c	○
12	館	綾部市		○
13	荒堀	天田郡夜久野町	a	
14	宮の下	加佐郡大江町	a	
15	志高	舞鶴市	d	●
16	浦入	舞鶴市	abcd	●
17	蔵ヶ崎	与謝郡加悦町		●
18	沖田	丹波郡大宮町	b	●
19	扇谷	丹波郡峰山町		●
20	七尾	丹波郡峰山町		○
21	途中ヶ丘	丹波郡峰山町		●
22	舟木家谷	竹野郡弥栄町		○
23	奈具岡	竹野郡弥栄町		●
24	竹野	竹野郡丹後町		●
25	平	竹野郡丹後町		●
26	離	竹野郡網野町		●
27	松ヶ崎	竹野郡網野町		●
28	浜詰	竹野郡網野町		○
29	南石浜	熊野郡久美浜町		●
30	浦明	熊野郡久美浜町	a	●

●は甕について弥生土器が主体を占めるもの

第22図　突帯文土器・弥生前期土器出土遺跡の分布

第２節　弥生時代後期の的場遺跡

的場遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡４棟で構成される集落が検出された。当地域では南に隣接する春日町の七日市遺跡や国領遺跡（川畑地区）でほぼ同時期の集落が検出されている。以下にこれらの遺跡と対比しながら、遺跡の内容を検討する。

集落の時期

住居跡から出土した土器は春日町国領遺跡の竪穴住居跡出土土器と様相を同じくすると思われる。[2] SH01は国領遺跡の竪穴住居跡３にほぼ等しい。甕（3）はやや拡張された口縁に擬凹線をもち、国領遺跡の32が近い。１・２の直口壺はそれぞれ国領遺跡の24･26と同じ形態である。SH02は甕・壺などの良好な個体は出土していない。強いて挙げれば６の器台が国領遺跡竪穴住居跡３出土のものに近い。SH03は９の甕が国領遺跡竪穴住居跡３の30に近い。口縁端部を上方へつまみ上げる10の甕については類例を見いだせない。全体的には国領遺跡竪穴住居跡３に近いが、やや古い様相を含んでいると思われる。SH04の甕〔16〕は口縁端部が上方に大きく拡張するもので、国領遺跡竪穴住居跡７に近い。

国領遺跡の土器は時期的に３段階に細分されている。的場遺跡は、そのうち後半の古段階にあたる竪穴住居３を前後する時期にあたる。それから考えると弥生時代後期の中～後葉ということができる。

集落の立地

的場遺跡は前山川によって形成された扇状地状の微高地に位置している。集落の位置する微高地は調査地の西側に広くひろがり、かなり平坦である。西側に集落域が広がる可能性や墓域が存在する可能性が考えられる。北側には後背湿地が広がっており、生産域として利用されたのだろう。ただし、現在も蛇行して流れる前山川が近いため洪水の影響は受けやすく、弥生時代前期から14世紀まで継続するものの断続的なのはこのためであろう。

七日市遺跡は竹田川西岸の埋没段丘による微高地や西南の丘陵部からの小河川などによる堆積によって段丘は埋没し、微少な起伏をもつものの全体としては極めて平坦な地形が広くひろがっている。[3] この平坦な地形が遺跡の長期間継続した理由であり、その後集落が営まれなくなった理由であろう。

国領遺跡は他に比べればかなり急な扇状地状の緩斜面に立地する。集落内は細かい微高地を利用して住居を配置している。地形条件が良くないためか、後期以降は中世まで利用はされない。

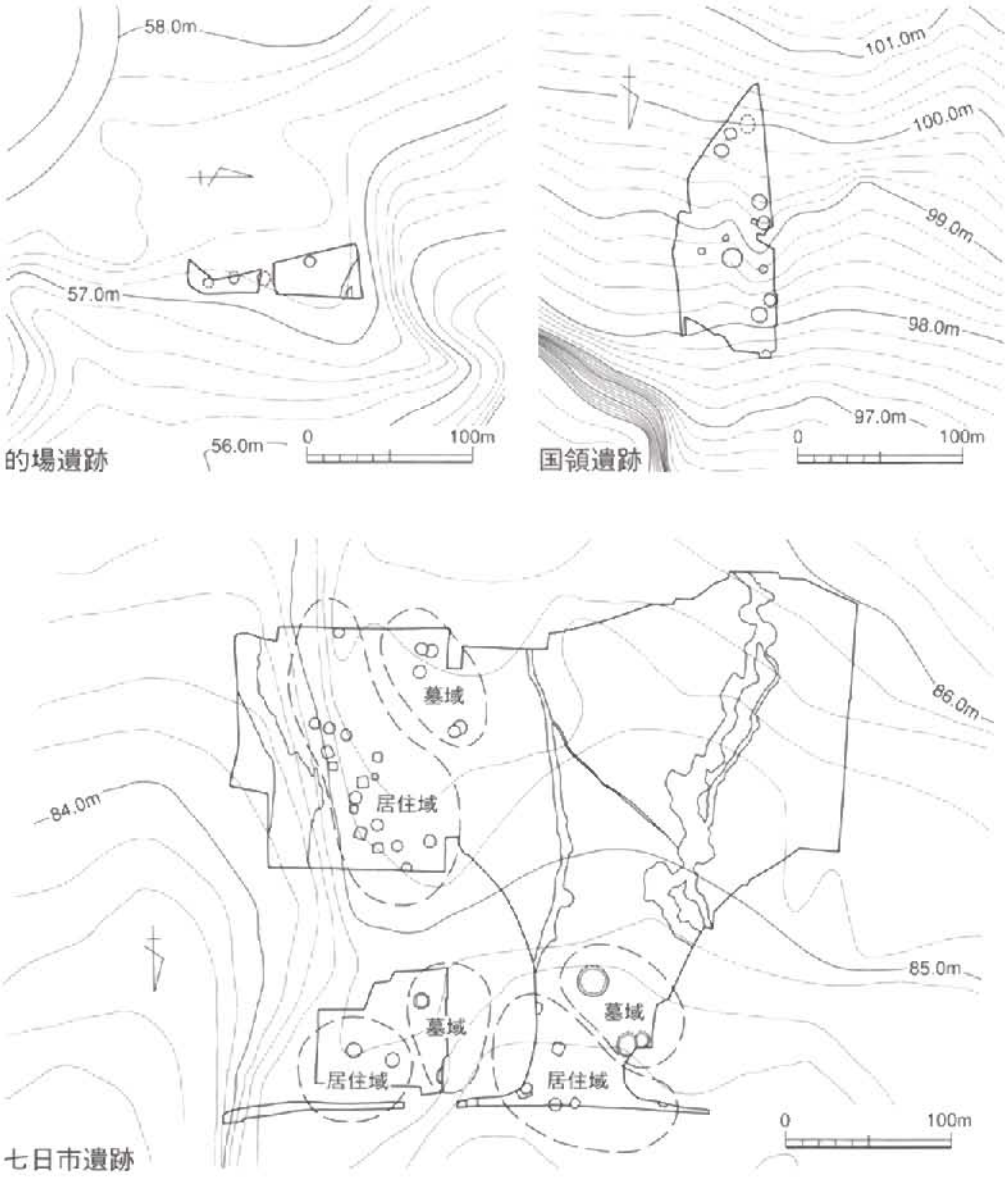
竪穴住居跡

的場遺跡で検出された竪穴住居跡は円形住居のみである。七日市遺跡・国領遺跡では方形住居も検出されている。的場遺跡の住居の規模は床面積57㎡程度のSH03と20～40㎡程度のSH01･02･04があり、大小２規格に分かれるようである。七日市遺跡では床面積30～40㎡の前後に集中し、大きさは比較的均質である。それに対して、国領遺跡では床面積10～20㎡前後のものと40～60㎡前後のものの大小２規格に加えて、80㎡以上の特大のものが加わっている。

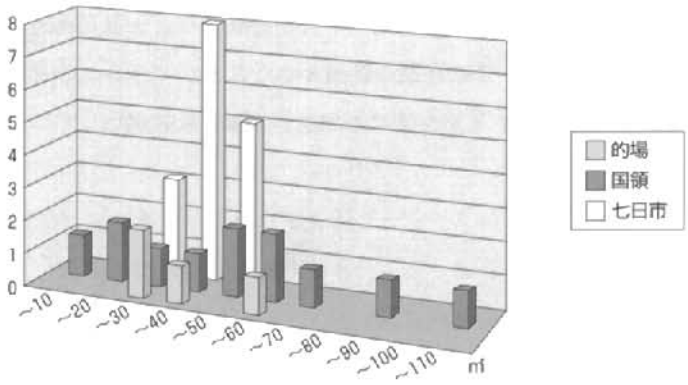
まとめ

七日市遺跡は良好な立地により大規模かつ長期間にわたり継続し、それに対して国領遺跡は条件の良

くない立地に開かれた短期間な遺跡である。住居跡の規格性からみても、平準的な七日市遺跡と分散的な国領遺跡とではその背景となる社会構成の差が想起される。的場遺跡は未調査部分が大きいため確定的ではないが、現状では七日市遺跡と国領遺跡の中間的な様相を示しているものと思われる。



第23図　集落の立地



第24図　竪穴住居跡の床面積

第３節　弥生時代後・末期の上ノ段遺跡

上ノ段遺跡では弥生時代後・末期の周溝墓１基と木棺墓４基で構成された墳墓群が検出された。このような丘陵上に占地する墳墓が丹後・但馬地域の弥生時代後期以降において数多く営まれてきたことが明らかとされているが、近年、兵庫県側の丹波地域においても同種の墳墓の類例が増えつつある（第25図）。(4) 以下にこれらの遺跡と対比しながら、ごく簡単に上ノ段遺跡の墳墓群について検討する。

墳墓の時期

周溝墓　小型の壺（87）と胴が膨れる長頸壺（88）が出土している。複合口縁の屈曲はゆるやかである。庄内併行期の古い段階（多賀Ⅵ－１期古段階）と考える。(5)

SK14　甕（91）が出土している。上方に大きく拡張される複合口縁をもつ。端部には擬凹線が施されている。後期後半のもの（多賀Ⅴ－４期）と考える。

SK15･16　いずれも甕（92･89）が出土している。上方に拡張される複合口縁をもつ。端部には擬凹線はほどこされない。後期後半のもの（多賀Ⅴ－４期）から庄内併行期のと考える。ただし、92は91に比べて底部が小さいことから、91よりやや新しく、89は口縁部が外に開き、92よりやや新しいと考えられる。

SK20　単純口縁の甕（90）が出土している。単純口縁の土器は庄内併行期に使用され、盛行するのは庄内併行期の新しい段階（多賀Ⅵ－２期古段階）である。

墳墓の順序はSK14、SK15、SK16、周溝墓、SK20で、後期後半から庄内併行期にかけて営まれたと考えたい。

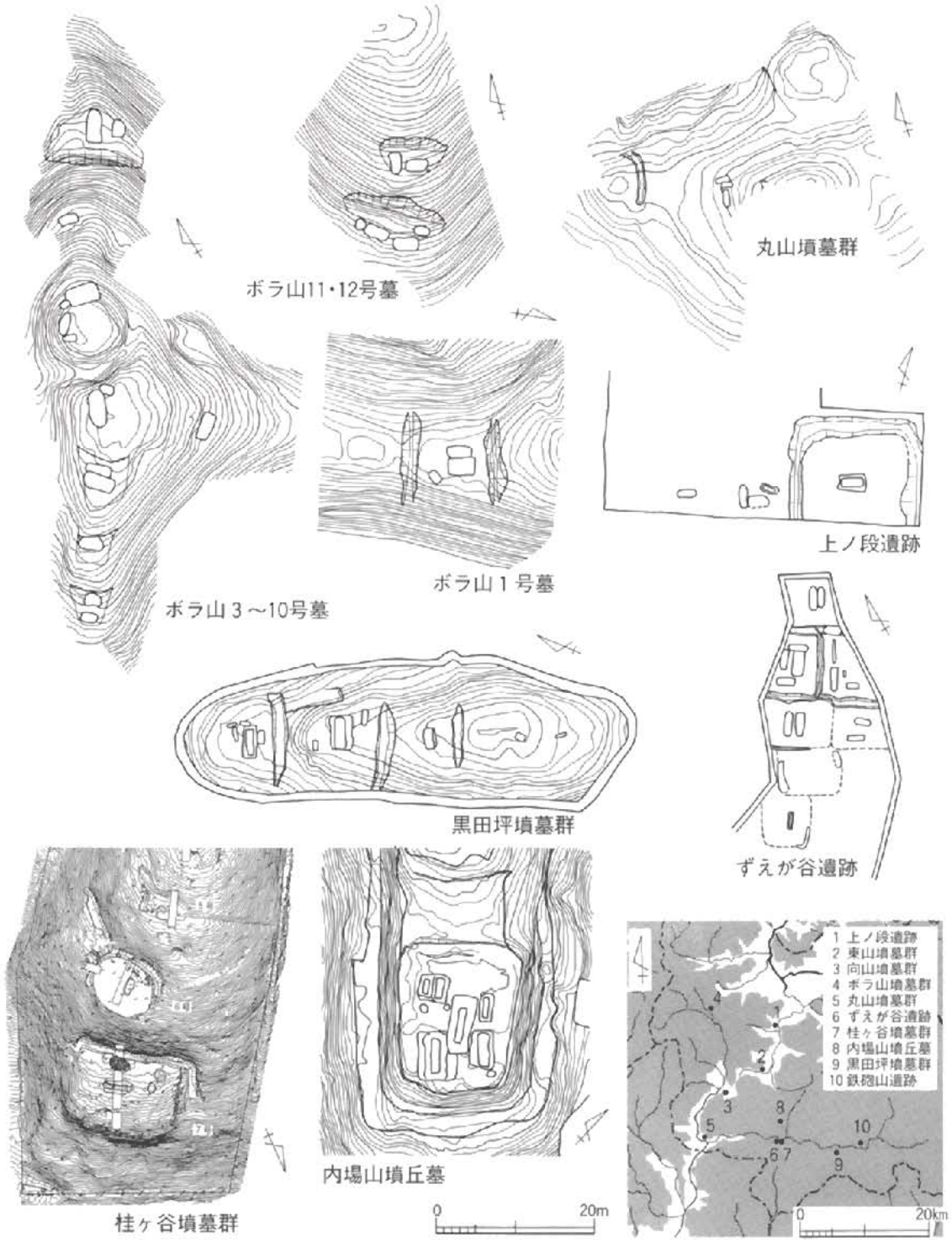
墳墓の形態

後期後半と考えられる上ノ段遺跡SK14～16は埋葬主体SK14・15とSK16の２つの墓と考えられ、SK14･15は東西方向のSK14が中心主体と推定される。SK14･15とSK16の主体部間は６m間隔をあけて造られ、明瞭な区画施設は設けられていない。後期前半より氷上郡青垣町ボラ山３～10号墓、氷上郡山南町丸山墳墓群など丘陵尾根上で墳墓が認められるが、上ノ段遺跡SK14～16と同様、埋葬主体は数m～10数m間隔で設けられ、溝などの区画施設は設けられていない。ただし、これらのなかにはわずかに平坦地が形成されているものがあり、後期後半のボラ山11･12号墓では比較的大きく地山を削平して平坦面を形成している。

庄内併行期前半の上ノ段遺跡周溝墓は１辺12～13mの範囲を方形に区画している。ほぼ同時期と考えられるボラ山１号墓、篠山市黒田坪墳墓群、篠山市ずえが谷遺跡なども溝によって１辺10m弱～10数mの範囲を墓域として区画されており、この時期の特徴ということができる。さらに、庄内併行期後半になると内場山墳丘墓のように規模が１辺20m程度と大きく、地山を削りだして高さのある墳丘を造り出したものが現れる。

副葬品

後期後半の上ノ段遺跡SK14～16では棺内に副葬品をもつのはSK14のみで碧玉製管玉が出土している。墓壙内には甕が破砕供献されている。後期前～後半のボラ山３～12号墓では小玉・管玉類（ガラス製・碧玉製）とともに小型の鉄製品が副葬されたものがある。墓壙内には少数の甕・壺が砕砕供献され、



第25図　兵庫丹波地域の弥生後・末期墳墓

初期の主要なものには壺・高杯などで墓上供献をおこなったものがある。

庄内併行期前半の上ノ段遺跡周溝墓では棺内から剣・碧玉製管玉、墓壙内から小型の壺、溝内から壺が出土している。同時期と考えられるボラ山1号墓や黒田坪墳墓群などの出土例を含めて考えると、剣・斧など前時期と比較すると大型の鉄器が副葬され、墓壙内には小型の壺が破砕供献されることが多くなり、壺・高杯などで墓上供献をおこなわれるものが再び現れる。

その後、内場山墳丘墓にみられるように棺内には大刀をはじめとする多量の鉄器が副葬されるものが現れる。上記のような特別なものを除けば剣など少数の鉄器が副葬され、墓壙内破砕供献は認められず、主要なものには壺・高杯などで墓上供献をおこなうようである。

まとめ

このように、上ノ段遺跡の墳墓群は丘陵上への占地、副葬品の構成、土器供献の方式など丹後地域の影響を受けた当地域の墓葬の状況を示す良好な資料ということができる。

第4節　奈良時代の的場遺跡・上ノ段遺跡

遺跡の時期

市島町内では鴨庄窯跡群において7～8世紀代の須恵器が生産されていたことが明らかとされている。これまでの発掘調査資料や表採資料などによって編年も行われている。(6) ここでは、それらの資料を参照しながら遺跡の年代を考えてみたい。

的場遺跡では掘立柱建物跡の北側の包含層から比較的まとまった遺物が出土している。かえり付きの杯B蓋が主体を占めることから時期的には天神窯にほぼ等しく、7世紀後葉頃のものと考えられる。

上ノ段遺跡では竪穴住居跡や土坑などから比較的まとまった遺物が出土している。SK02ではかえり付きの杯B蓋をもつが、かえりなしの杯B蓋のほうが量的に多いことから的場遺跡包含層に比べてやや新しいものを含んでいる。天神窯～岩戸8号窯に近く、7世紀後葉～8世紀前葉と考えられる。SH01はSK02と同じ時期の8世紀前半でもやや新しい。上ノ段遺跡SK01は上牧7・8号窯に近く、8世紀後葉のものと考えられる。上ノ段遺跡は7世紀後葉から8世紀前葉までと8世紀後葉の2時期に分かれる。

的場遺跡の掘立柱建物

的場遺跡では7世紀後葉頃と推定される掘立柱建物が2棟検出された。2棟は方位をほぼ同じくし、SB02がSB01に対して直交して配置されている。2棟はいずれも遺構が調査区外まで延び、その規模を確定することはできないが、ここで仮に3間×2間と想定するとSB01は床面積30.2m²（6.7m×4.5m）、SB02は床面積24.0m²（5.1m×4.7m）となる。京都府北部の古代集落では20～40m²の側柱建物が主体となしており、(7) また、官衙遺跡と考えられると比較するのも適当ではないかもしれないが、七日市遺跡では検出された数多くの建物跡の中で主体をしめるのが床面積20～40m²の建物跡である。(8) いずれにせよ検出された建物跡は当時の標準的な建物規模である。的場遺跡は7世紀における一般的な集落と考えることができる。

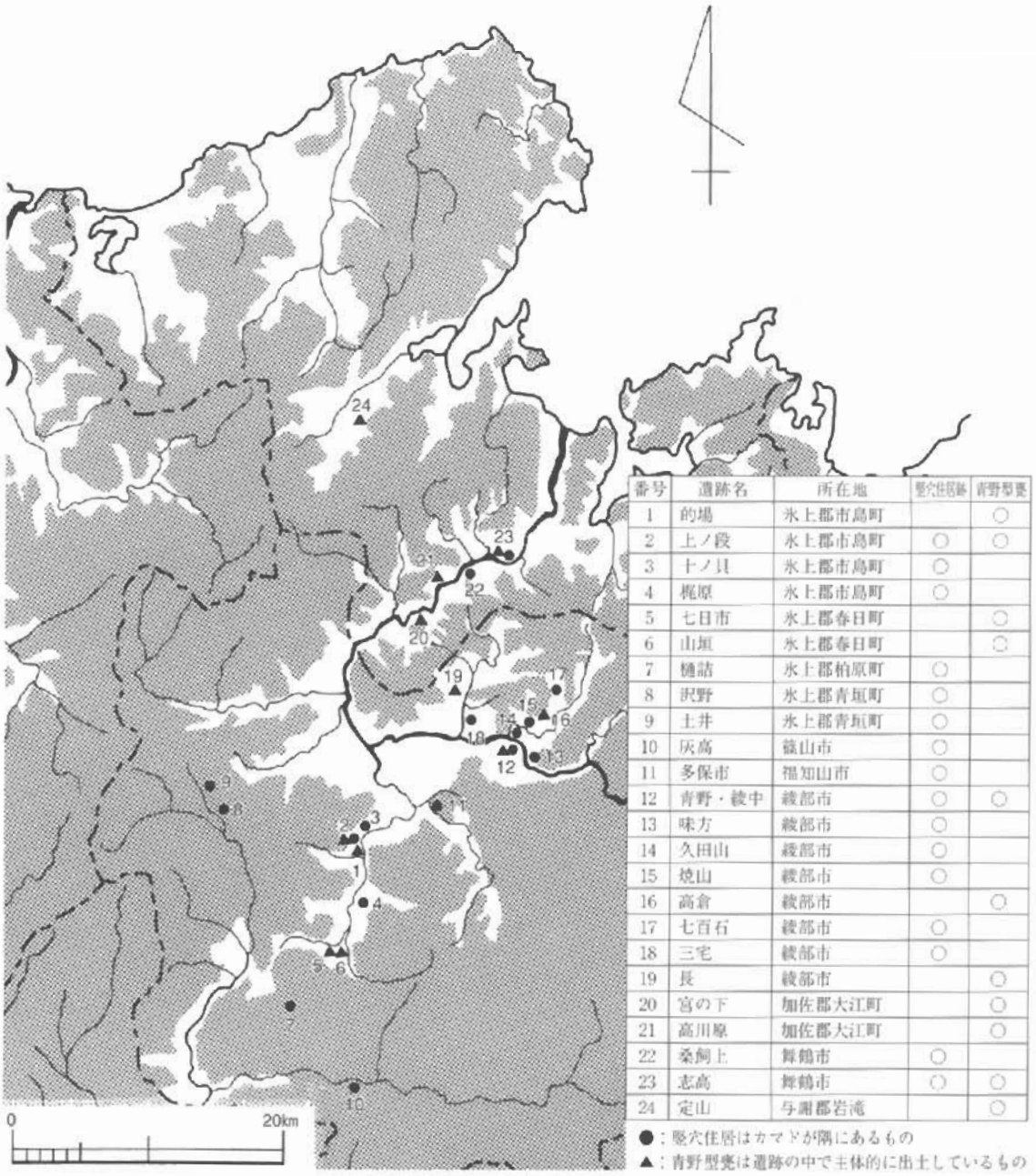
第20表　上ノ段遺跡奈良時代遺構出土遺物個体数

地区名	遺構名	須恵器					土師器			合計
		杯A	杯B	杯B蓋	杯I'	その他	皿	甕・鍋	その他	
A	SH01		1		2	壺、甕	4	8		15
A	SK01	1	1	2		皿A1、壺A1				6
A	SK02	9	9	6	2	甕2、壺		18	甑1、把手3	47
A	SK13							1		1
合計		10	11	8	4	4	4	27	1	69
		37					32			

上ノ段遺跡の竪穴住居跡

上ノ段遺跡では竪穴住居跡１棟と土坑などが検出された。時期的にはSH01とSK02が７世紀後葉から８世紀前葉、SK01が８世紀後葉である。調査区外での遺跡の範囲が判然としないため、その性格は明らかとはしがたいが、遺物の出土量からみると単なる作業小屋程度のものではないだろう。

SH01はカマドが通常と異なり、住居跡の東北隅に設置されているものである。このようなものは兵庫県内では氷上郡市島町・柏原町・青垣町、篠山市で検出され、近年その検出例は増えつつある（第26図）。[9] 時期的には７・８世紀に属するようである。カマドが住居跡の隅に設置されているものについては、これまでに京都府綾部市を中心として検出され、「青野型住居」と呼ばれている。ただし、この「青野型住居」はカマドを住居の中に地山を削り残して作られていることも特徴としている。兵庫県内でこれに合致するのはいまのところ梶原遺跡のみである。また、「青野型住居」と似た分布を示すものに



番号	遺跡名	所在地	竪穴住居跡	青野型甕
1	的場	氷上郡市島町		○
2	上ノ段	氷上郡市島町	○	○
3	十ノ貝	氷上郡市島町	○	
4	梶原	氷上郡市島町	○	
5	七日市	氷上郡春日町		○
6	山垣	氷上郡春日町		○
7	樋詰	氷上郡柏原町	○	
8	沢野	氷上郡青垣町	○	
9	土井	氷上郡青垣町	○	
10	灰高	篠山市	○	
11	多保市	福知山市	○	
12	青野・綾中	綾部市	○	○
13	味方	綾部市	○	
14	久田山	綾部市	○	
15	焼山	綾部市	○	
16	高倉	綾部市		○
17	七百石	綾部市	○	
18	三宅	綾部市	○	
19	長	綾部市		○
20	宮の下	加佐郡大江町		○
21	高川原	加佐郡大江町		○
22	桑飼上	舞鶴市	○	
23	志高	舞鶴市	○	○
24	定山	与謝郡岩滝		○

●：竪穴住居はカマドが隅にあるもの
▲：青野型甕は遺跡の中で主体的に出土しているもの

第26図　カマドが隅にある住居跡と「青野型甕」の分布

「青野型甕」がある。「青野型甕」は口縁部にナデによる凹凸が認められることを特徴的としている。兵庫県内では的場遺跡、上ノ段遺跡のほか、山垣遺跡、七日市遺跡でも確認することができ、煮沸形態の主体を占めていたと考えられる。このように由良川流域にひろがる共通性は、その強い結びつきを示すものと考えることができるだろう。

第5節　中世後期の上ノ段遺跡

中世後期の遺構については、区画溝、柱穴、溜井戸、土坑などが検出された。しかしながら、区画内の状況は削平部分や調査区外であることが多いためよくわからない。検出された遺構からは土師器・瓦質土器・丹波焼・青磁などが出土しているが、特に瓦質土器擂鉢が多いことが特徴的である。

上ノ段遺跡出土の瓦質土器擂鉢

瓦質土器擂鉢は丸味をもつ口縁部にはヨコナデが施され、その内面に凹みをもつことを特徴としている。体部の外面は基本的にはナデが施されるが、ハケ目を残すものもしばしば見られる。擂目は櫛引きで放射状に施されている。櫛目の本数は7本のものが多く、6本のものもある。また、放射状の櫛目に加えて斜め方向の櫛目を施したり、口縁部内面の凹みの下に波状の櫛目を加えたりするものもある。擂目のないものも存在するようである。見込みの櫛目は×字状に施されるものや、×字とその外側に円弧状に施されるものがある。焼成は瓦質のもの、土師質のもの、陶質に近いものなど様々である。今回出土した瓦質土器擂鉢は使用による摩耗は認められず、ほぼ全て未使用と考えられる。

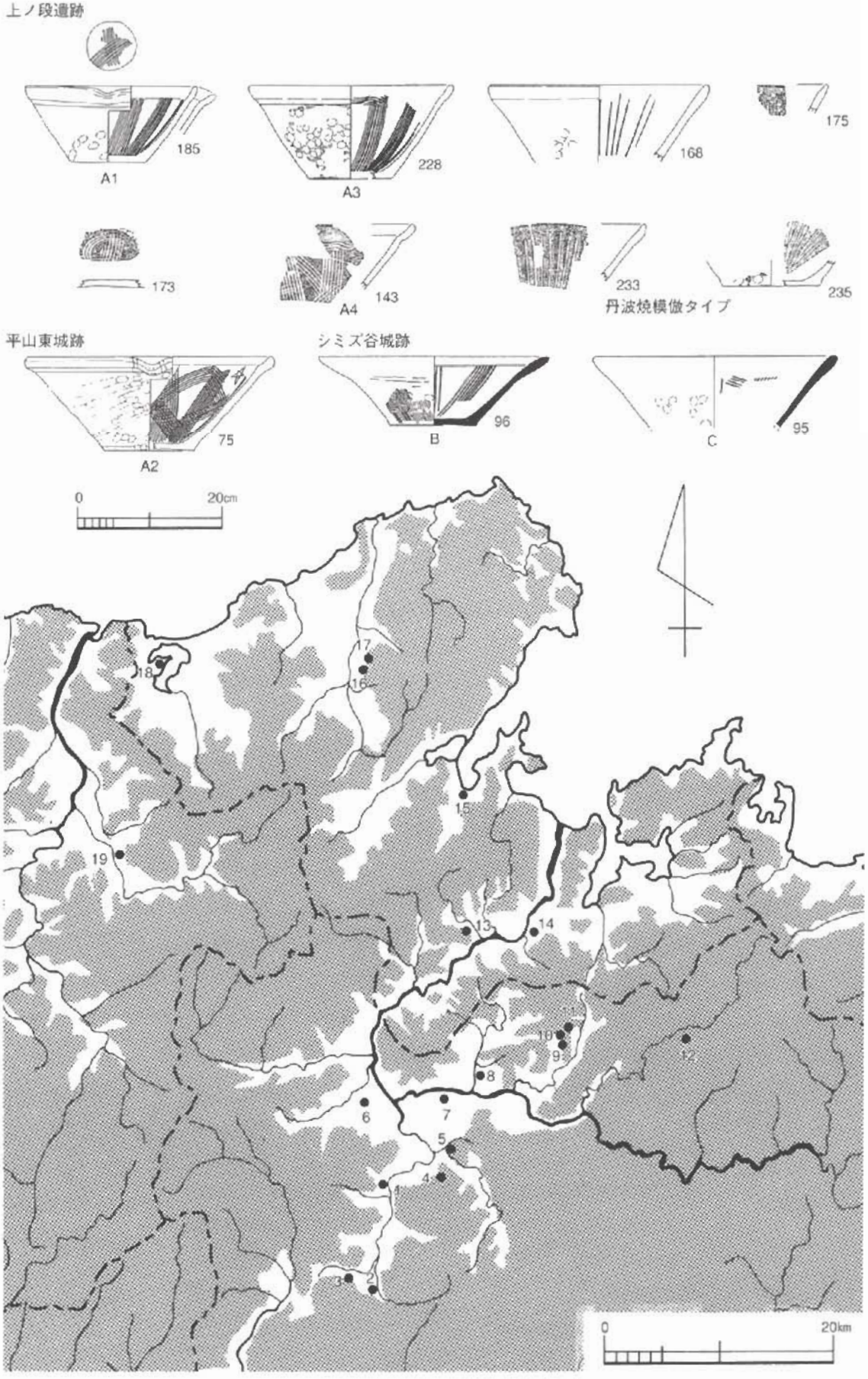
また、上記のものとは異なり丹波焼を模倣したと考えられる擂鉢も出土している。形態的には丹波焼と同一であるが、外面の調整に瓦質土器と同様なハケが用いられたものが認められる。焼成は瓦質のものは確認できないが、土師質に近く軟質である。また、丹波焼と考えられる陶質の製品（151）が使用されているのに対して、瓦質土器擂鉢と同様にいずれも未使用である。

瓦質土器擂鉢の分布と時期

上ノ段遺跡で出土した瓦質土器擂鉢と同様なものは、中丹・丹後・但馬の北近畿地域一円で確認されている。(10) この時期の集落遺跡の調査例が少ないこともあって、城館跡で出土することが多い。製作技法は同じであるが、口縁部の形態にやや異なるものも存在する。口縁部の形態や擂目の施し方から以下のように分類する。

第21表　瓦質土器擂鉢出土遺跡

番号	遺跡名	所在地	分類	番号	遺跡名	所在地	分類
1	上ノ段遺跡	兵庫県氷上郡市島町	A1・A3・A4	11	平山東城跡	京都府綾部市	A1・A2
2	国領遺跡	兵庫県氷上郡春日町	A1	12	上林城跡	京都府綾部市	B
3	火山城跡	兵庫県氷上郡春日町	○	13	大俣城跡	京都府舞鶴市	A1・A2・A3・B・C
4	後青寺城館跡	京都府福知山市	A1	14	久田美遺跡	京都府舞鶴市	B
5	多保市城跡	京都府福知山市	A1	15	宮津城跡	京都府宮津市	A1
6	狸谷城跡	京都府福知山市	A1	16	吉沢城跡	京都府竹野郡弥栄町	A1・A3・B
7	観音寺遺跡	京都府福知山市	B	17	シミズ谷城跡	京都府竹野郡弥栄町	A1・A3・B・C
8	福垣城館跡	京都府綾部市	A1	18	離湖古墳	京都府竹野郡網野町	B
9	鳴間城跡	京都府綾部市	A1	19	宮内堀脇遺跡	兵庫県出石郡出石町	○
10	平山城跡	京都府綾部市	A1・A2				



第27図　瓦質土器擂鉢の分布

A類　口縁部内面に凹みをもつもの

A１類　放射状の擂目のもの

A２類　放射状の擂目に斜め方向の擂目が加えられたもの

A３類　放射状の擂目に口縁部内面の凹みの下に波状の擂目が加えられたもの

A４類　放射状の擂目に斜め方向の擂目と口縁部内面の凹みの下に波状の擂目が加えられたもの

A５類　擂目のないもの

B類　口縁部内面の凹みが沈線状になったもの

C類　口縁部内面の凹みが消失したもの

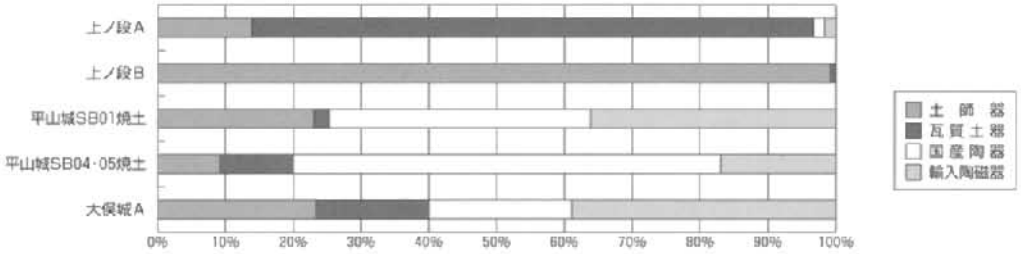
A類は全域で出土しているが、B・C類はやや分布が北側に偏るようである。

時期についてはおおむね中世山城が廃絶する16世紀後葉以前のものであることは確かであるが、丹波・丹後地域の土師器編年が未確立であることと、城館跡の遺物は包含層から出土することが多いことから確定することは難しい。時期について比較的詳しく検討をおこなっている他例を参考にすると、A類のみが出土している平山城跡では16世紀中葉を主体とし、B・C類を含む大俣城跡は1580年前後に廃絶したものと考えられている。各遺跡の主体的な時期に属するとすればA類を16世紀中葉頃、B・C類を16世紀後葉頃のものと考えたい。

第22表　上ノ段遺跡中世遺構出土遺物個数

地区名	遺構名	土師器		瓦質土器								その他	合計
		皿	土鍾	鉢口縁			鉢底部		香炉	火鉢	その他		
				A1・5	A3・4	D	A	D					
A	SD01・02	3		45	6	2	1	1	1	2	小壺1、蓋1	丹波甕片、青磁無文碗1	62
A	SK03	1	1	2	1		1	1					5
A	SK07		1	11	5	2	2	1	2				21
A	SK08	3	2	5	4	1							15
A	SK10						2					青磁連弁文碗1	1
A	SK24		1	2									3
A	SE01	4		1	1	1	1					丹波擂鉢1、甕破片	8
A	SP16											須恵器鉢1	1
A	合計	11	5	66	17	6	7	3	3	2	2	4	116
				89			10						
B	SK01	98	3										101
B	SK02	15	1			1							17
B	SP04	10											10
B	SP06	7											7
B	SP19	3											3
B	SP20		1										1
B	合計	133	5			1							139
合計		144	10	66	17	7	7	3	3	2	2	4	255
				90			10						

擂鉢D類は丹波焼模倣タイプ　右側の合計欄の数値は鉢底部の個体数を加算していない



第28図　出土土器の精成

遺物の構成

上ノ段遺跡での遺物の出土状況を見てみると、A地区では瓦質土器擂鉢が77%、B地区では土師器皿が96%を占め、地区ごとに非常にかたよっている。平山城跡・大俣城跡での遺物の出土状況と比較すると、器種については輸入陶磁器や国産陶器類を欠き、器形については壺・甕類をほとんど欠いていることが特徴的である。さらに、瓦質土器擂鉢が未使用品であることと考えあわせれば、流通段階の途中にある土器製品の集積場の可能性が考えられる。

まとめ

上ノ段遺跡は山陰道から分かれて丹後に至る街道に面し、的場遺跡近辺には「八日市」という地名も残っている。中世後期の上ノ段遺跡はこのような定期市での交易を目的とする、瓦質土器擂鉢や土師器などの土器製品を取り扱った集荷施設であったと考えたい。

(1)第22図の地名表の文献は以下の通り

3．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成10年度年報』1999年、4．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『春日・七日市遺跡(Ⅰ)』1990年、5．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成11年度年報』2001年、6．氷上郡教育委員会『氷上郡埋蔵文化財調査概要報告書Ⅲ』2000年、7．西紀丹南町教育委員会『口坂本遺跡』1981年、8．丹南町史編纂委員会『丹南町史』1994年、9．渡辺誠・鈴木忠司『京都府福知山市武者ヶ谷遺跡発掘調査報告書』1977年、10.「近畿自動車道敦賀線関係遺跡」『京都府遺跡調査概報』第36冊1989年、11.「味方遺跡第2次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第18冊1986年、12.㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年、13.「稚児野遺跡発掘調査概報」『京都府遺跡調査概報』第2冊1982年、14.「三河宮の下遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第2冊1982年、15.『京都府遺跡調査報告書第12冊志高遺跡』1989年、16.㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書第29冊浦入遺跡群』2001年、17.「国道176号線関係発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第54冊1993年、18.中川和哉・山口早苗・松田早映子「沖田遺跡の縄文・弥生遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第82号2001年、19.釋龍雄、坪倉利正、田中光浩、林和廣『扇谷遺跡発掘調査報告』峰山町教育委員会1975年ほか、20.㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年、21.釋龍雄ほか『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』峰山町教育委員会1977年、㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年、22.㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年、23.川西宏幸『京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書』㈶古代学協会1985年、24.㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年、「竹野遺跡第9次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第69冊1996年、25.堅田直「平遺跡調査概要」『帝塚山大学考古学シリーズ1』1968年、26.網野町教育委員会『林遺跡発掘調査報告書』1977年、27.釋龍雄、林和廣「京都府網野町松ヶ崎遺跡調査報告」『史想』14号1968年、28.㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年、29.㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年、30.天野末喜、尾崎正男、神尾恵一、広瀬和雄「浦明遺跡調査報告書」『関考連考古学資料集』第1輯1973年、㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府弥生土器集成』1989年

(2)兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『国領遺跡(Ⅱ)』1993年

(3)兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(1)第2分冊』1990年、春日町歴史民俗資料

館・兵庫県埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡と氷上回廊』2000年

(4)第25図の地名表の文献は以下の通り

2.1996年度氷上郡教育委員会調査、3.1996年度氷上郡教育委員会調査、4．氷上郡教育委員会『ブラ山・ボラ山』1995年、5．兵庫県教育委員会『丸山古墳群－調査の概要－』1977年、6．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『三釈迦山北麓の遺跡』2002年、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『三釈迦山北麓の遺跡を掘る』2002年、7．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成11年度年報』2000年、8．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『内場山城跡』1993年、9．篠山町教育委員会『黒田坪墳墓群』1993年、10．篠山町教育委員会『教育の森構想に伴う遺跡確認調査概要報告書』1992年

(5)多賀茂治「兵庫丹波における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』22 2000年

(6)兵庫県教育委員会『鴨庄窯跡群(1)』1988年、兵庫県教育委員会『鴨庄窯跡群(2)』1991年、丹波三ツ塚遺跡発掘調査団『三ツ塚廃寺跡Ⅲ』1981年、丹波三ツ塚遺跡発掘調査団『三ツ塚廃寺跡Ⅳ』2000年

(7)森下衛「京都府北部の古代集落」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 2001年

(8)兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(Ⅰ)第3分冊』1990年

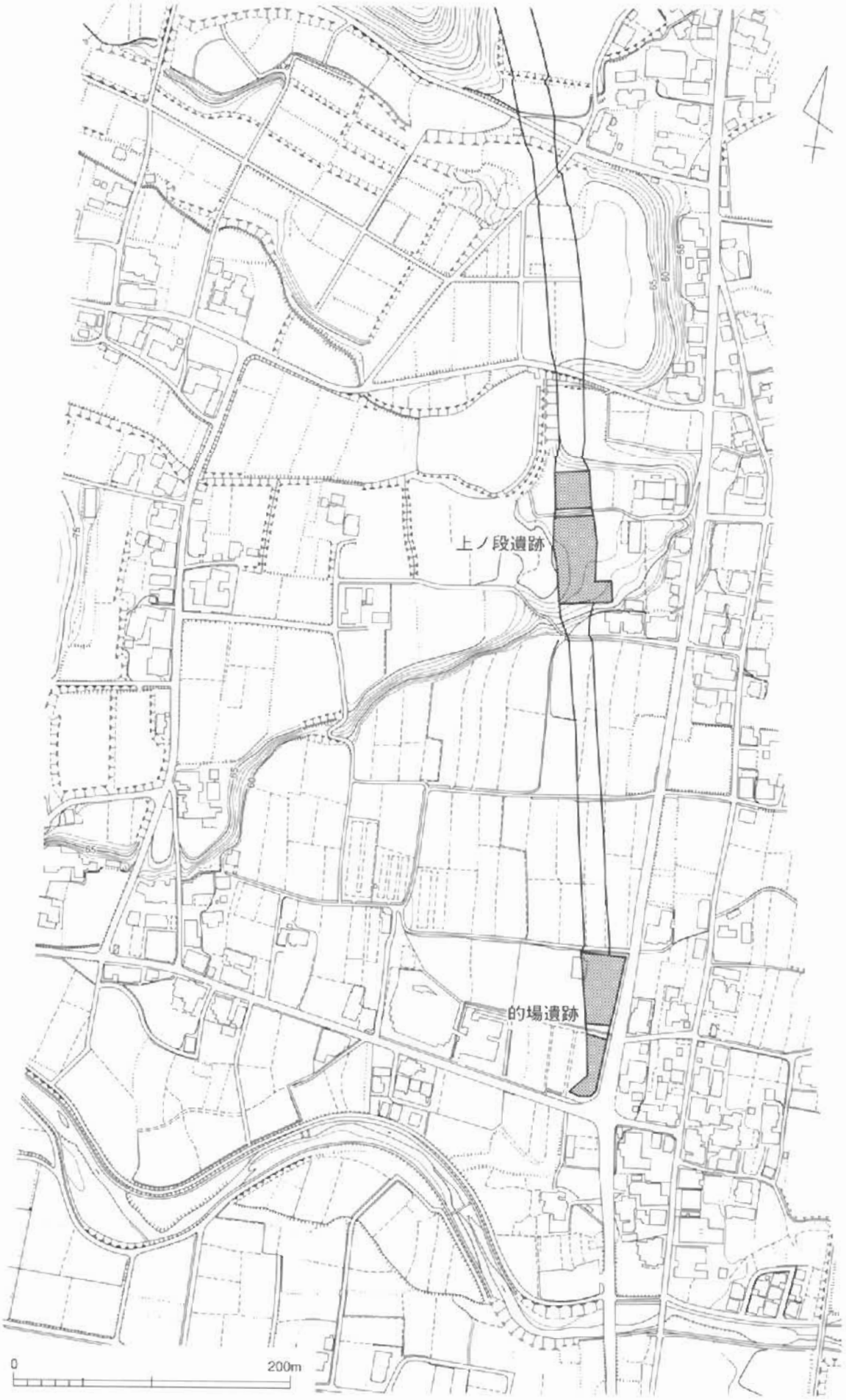
(9)第26図の文献は以下の通り、

3．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『十ノ貝遺跡現地説明会資料』2001年、4．梶原遺跡発掘調査団『梶原遺跡B地区出土の犂』1993年、5．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『七日市遺跡(Ⅰ)第3分冊』1990年、6．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『山垣遺跡』1990年、7．氷上郡教育委員会山田義三氏の御教示による、8．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『沢野遺跡現地説明会資料』2000年、9．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『土井遺跡現地説明会資料』2000年、10．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2002年度調査、京都府下については藤原敏晃「中丹地域における8世紀の竪穴住居跡」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 1987年、近藤豊明「青野遺跡の再検討」『京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』1998年、石崎善久「青野型甕」について」『京都府埋蔵文化財論集』第3集 1996年を参照した。

(10)第27表の文献については以下の通り

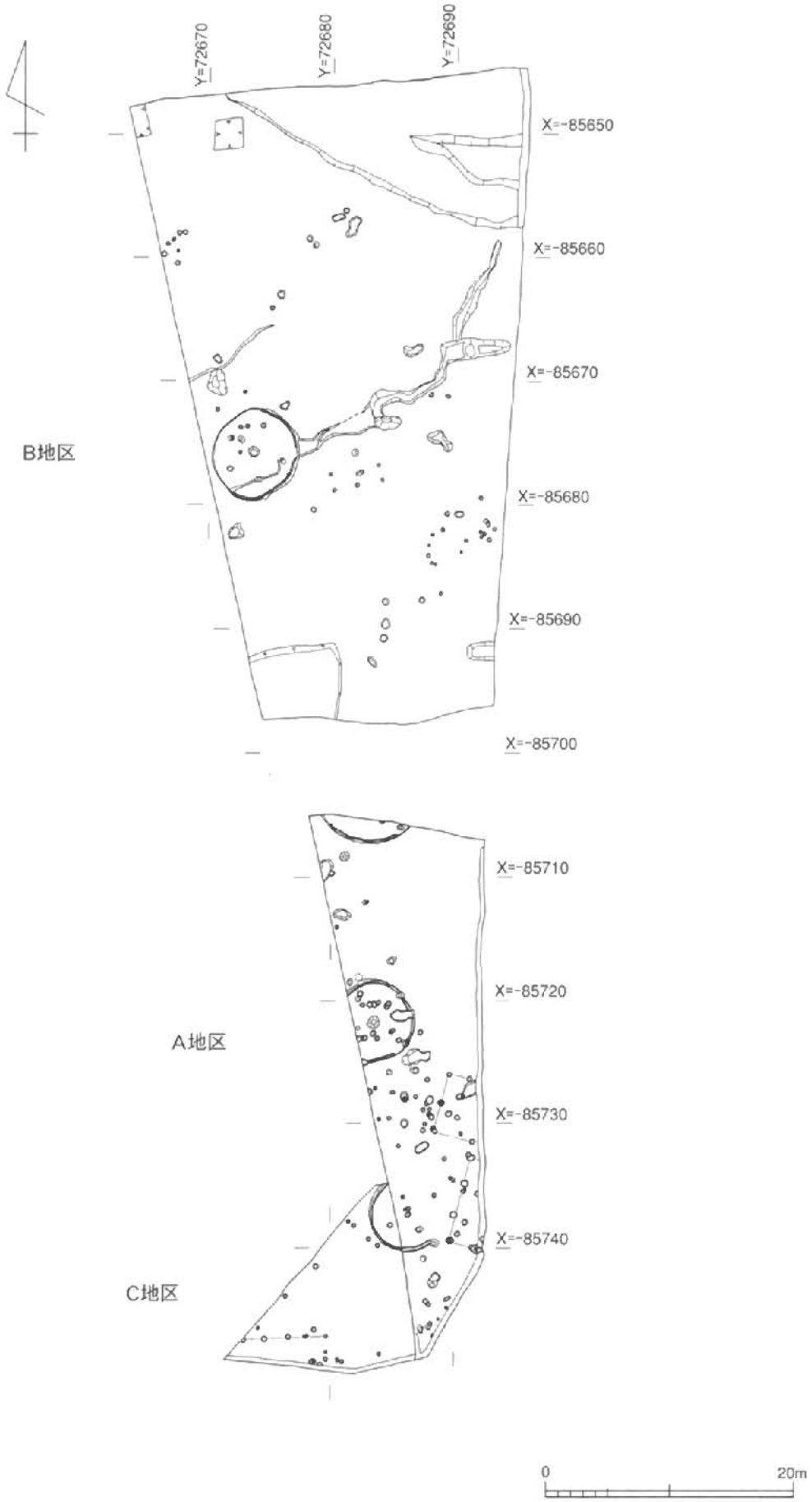
2．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『国領遺跡(Ⅱ)』1993年、3．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成9年度年報』1998年、4・5．㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府京都府遺跡調査報告書』第10冊1988年、6．福知山市教育委員会『福知山市文化財調査報告書』第21集 1993年、7．京都府教育委員会『埋蔵文化財調査概報(1995)』1995年、8．㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第31冊 1988年、9．綾部市教育委員会『綾部市文化財発掘調査報告』第24集 1996年、10・11．㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査報告書』第14冊 1988年、12．綾部市教育委員会『綾部市文化財発掘調査報告』第8集 1981年、13．㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第75冊 1997年、14．舞鶴市教育委員会『舞鶴市文化財調査報告』第14集 1990年、15．宮津市教育委員会『宮津市文化財調査報告』第9集 1985年、16．㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第93冊 2000年、17．㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター『京都府遺跡調査概報』第79冊 1997年、18．網野町教育委員会『京都府網野町文化財調査報告』第7集 1993年、19．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成7年度年報』1996年

図　　版

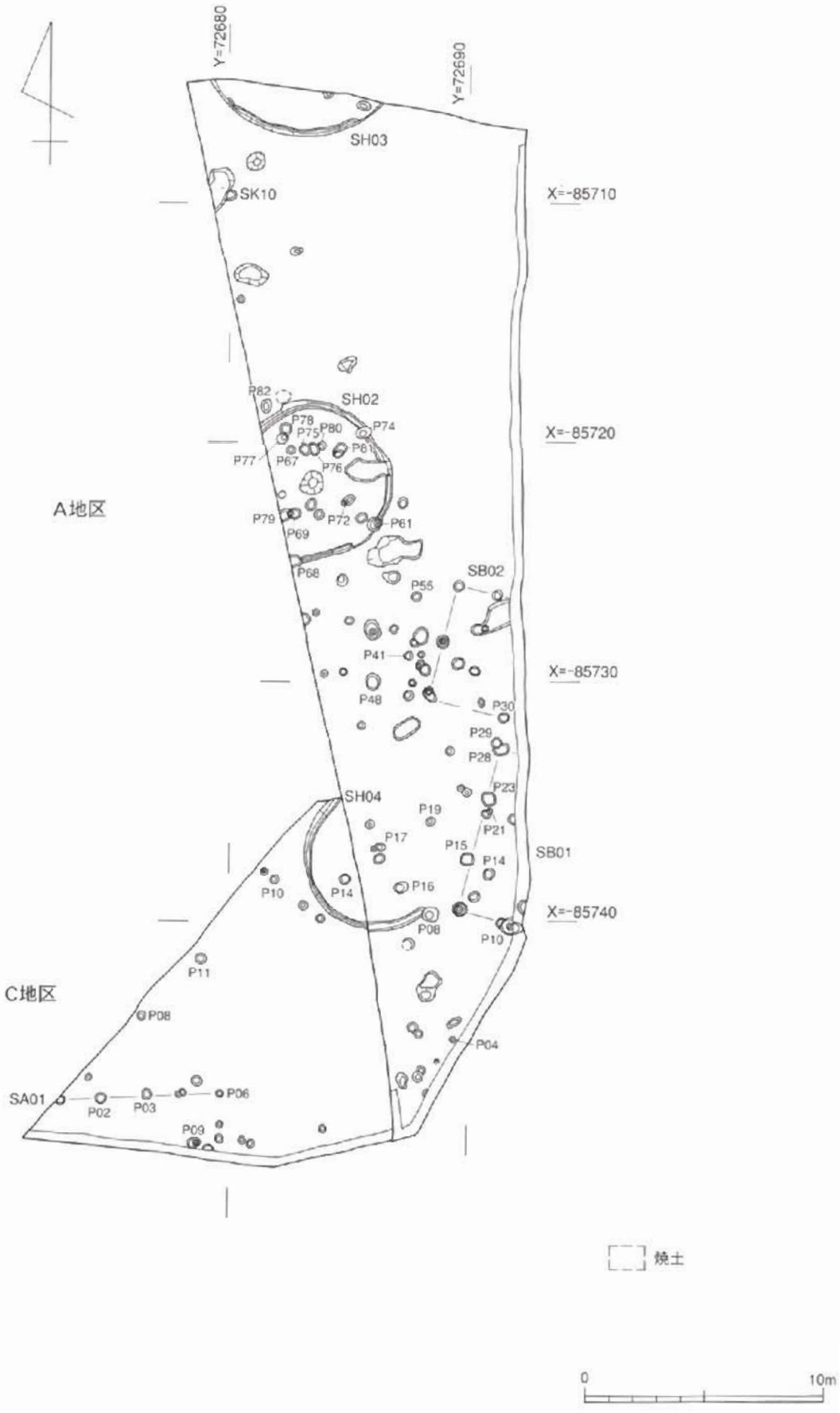


調査区配置図

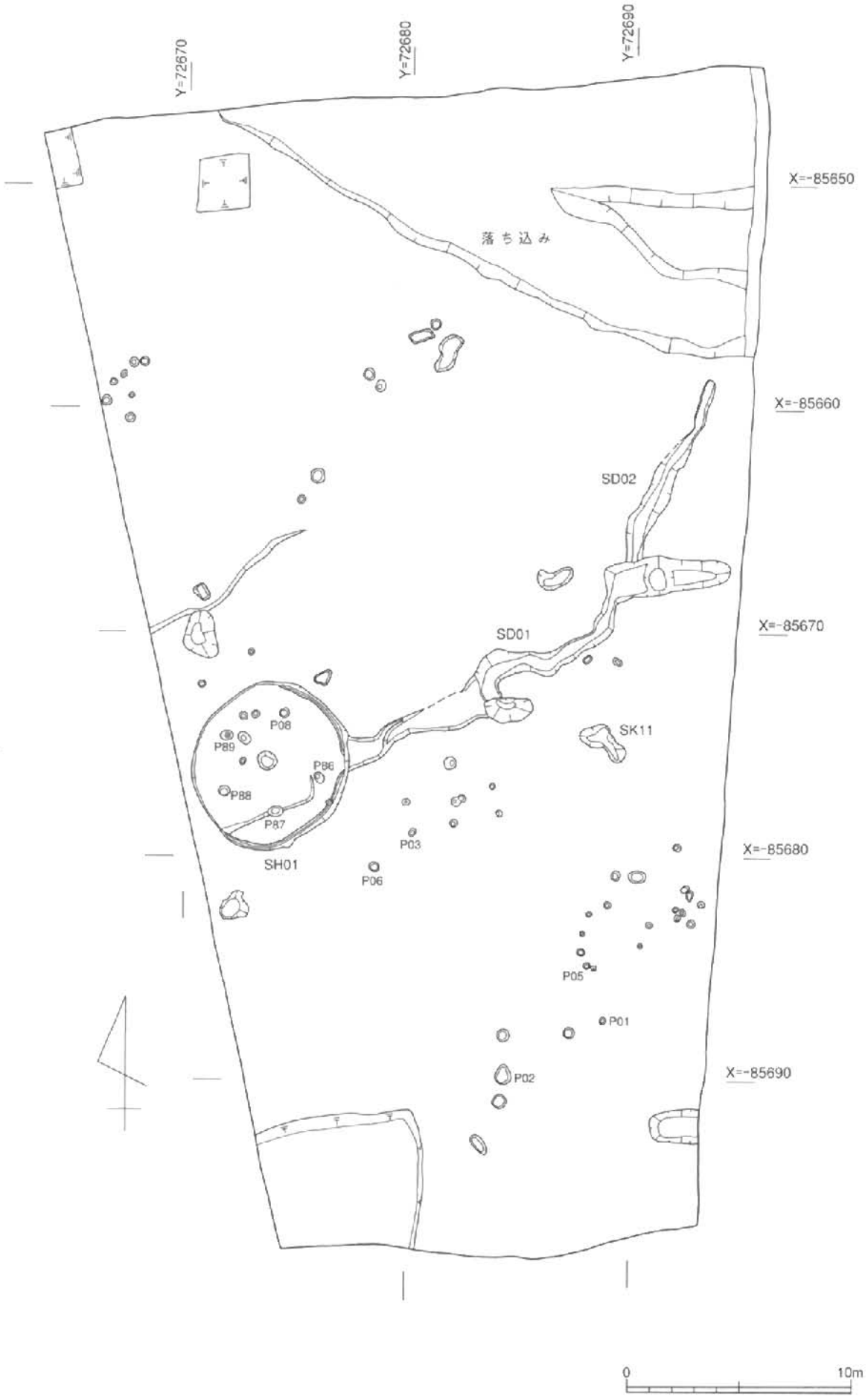
図版2　的場遺跡


Y=72670
Y=72680
Y=72690
X=-85650
X=-85660
X=-85670
B地区
X=-85680
X=-85690
X=-85700
X=-85710
X=-85720
A地区
X=-85730
X=-85740
C地区
0
20m

全体図


Y=72680
Y=72690
SH03
SK10
X=-85710
SH02
X=-85720
A地区
SB02
X=-85730
SH04
SB01
X=-85740
C地区
SA01
焼土
0
10m

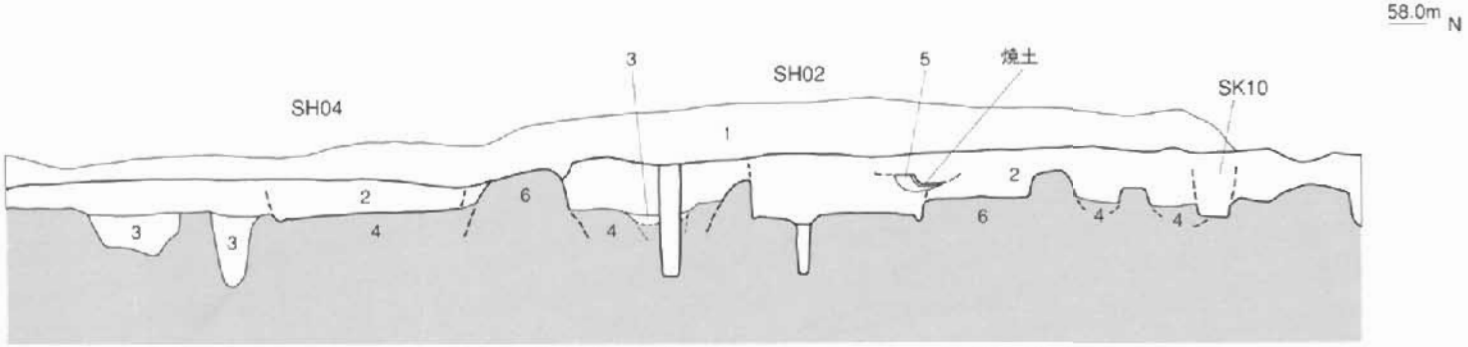
A・C地区平面図


Y=72670
Y=72680
Y=72690
X=-85650
X=-85660
X=-85670
X=-85680
X=-85690
落ち込み
SD02
SD01
SK11
SH01
P08
P89
P86
P88
P87
P03
P06
P05
P01
P02
0
10m

B地区平面図

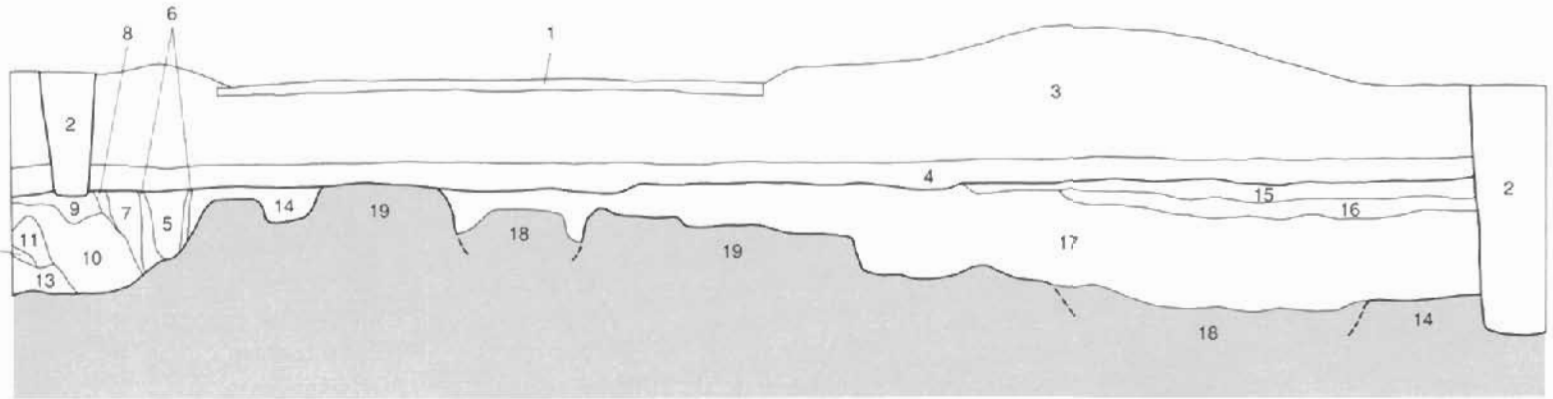
土層断面図

A地区西壁

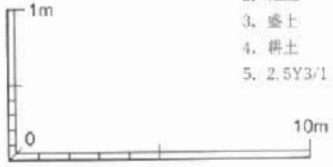


1. 耕土
2. 2.5Y3/1 黒褐 シルト質極細砂
3. 2.5Y3/1 黒褐 シルト
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐 極細砂
6. 砂礫

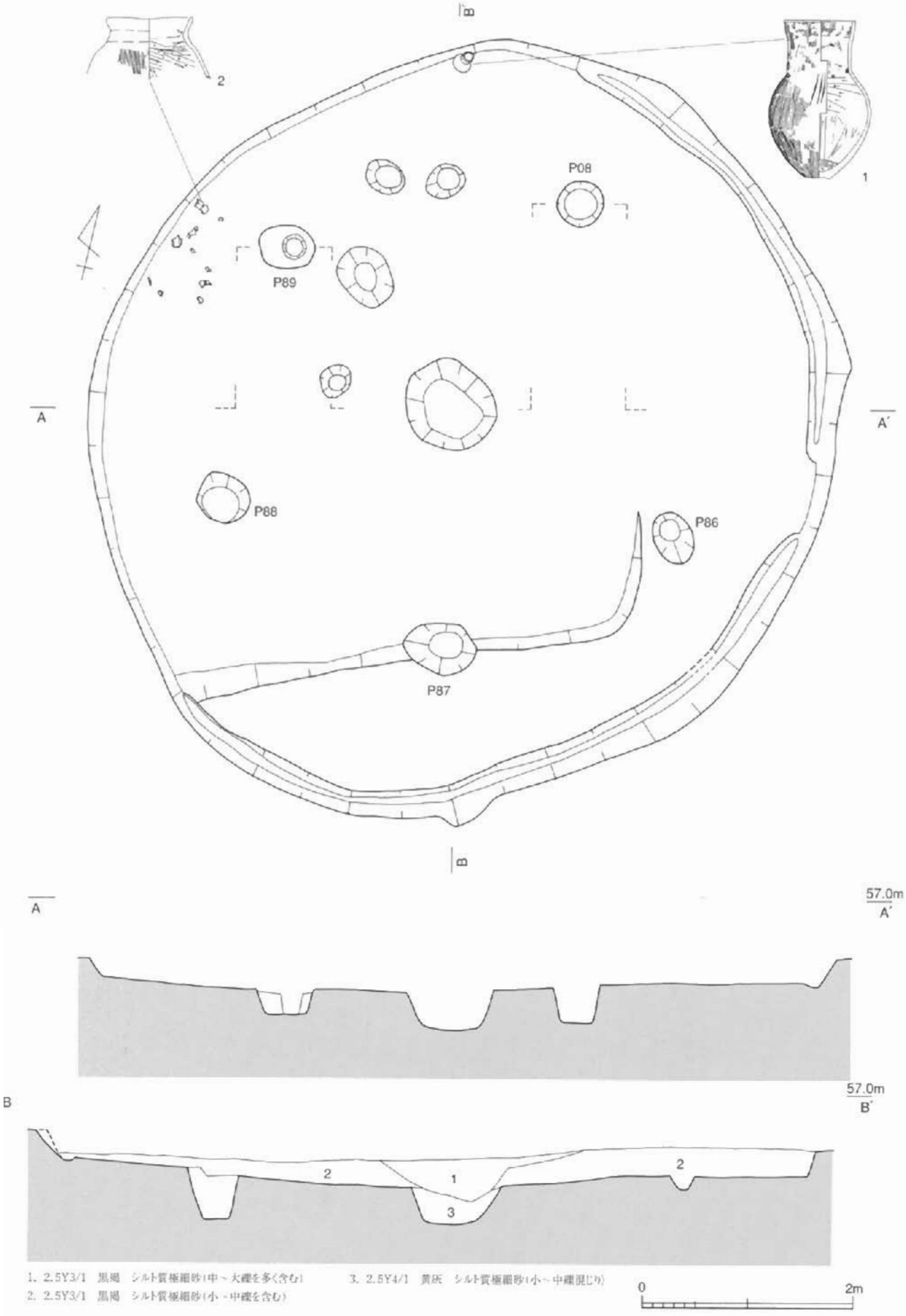
B地区西壁



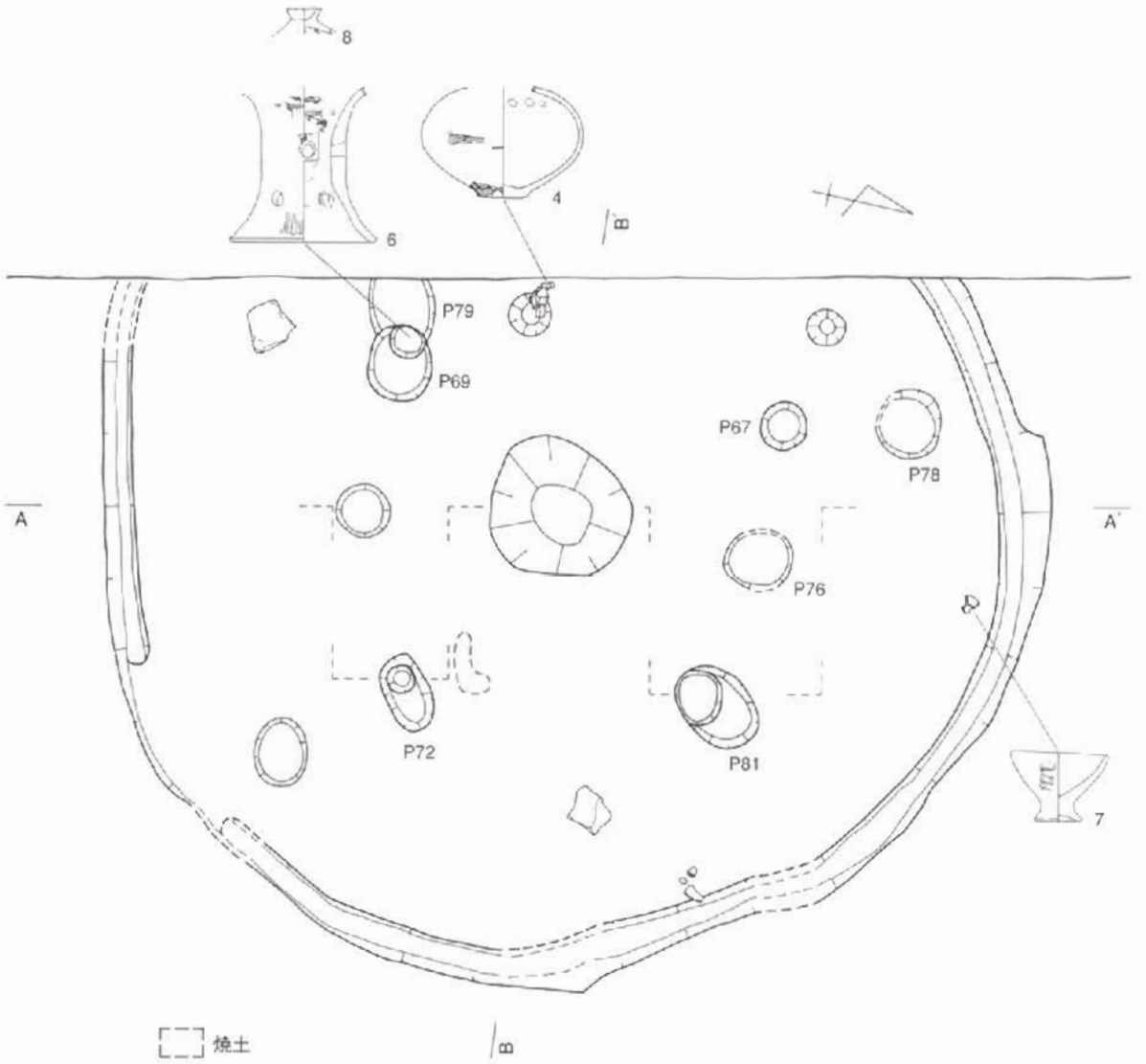
1. アスファルト
2. 撹乱
3. 盛土
4. 耕土
5. 2.5Y3/1 黒褐 シルト質極細砂
6. 2.5Y6/6 明黄褐 シルト質極細砂
7. 砂礫
8. 2.5Y3/1 黒褐 シルト質極細砂
9. 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂(小礫を含む)
10. 砂礫
11. 2.5Y6/4 にぶい黄 細砂
12. 砂礫
13. 2.5Y8/6 黄 極細砂
14. 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂
15. 5Y8/2 灰白 シルト
16. 5Y7/3 浅黄 シルト
17. 2.5Y3/1 黒褐 シルト質極細砂
18. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質極細砂
19. 砂礫

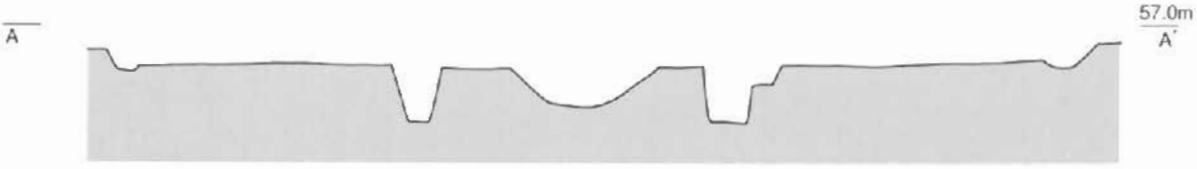


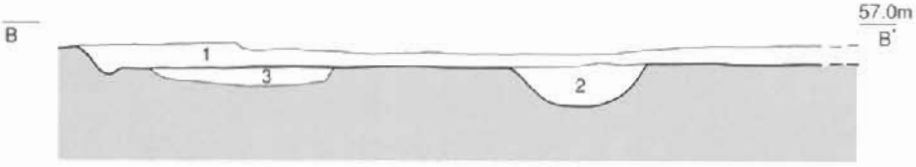
図版6　的場遺跡



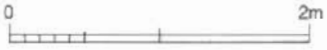
SH01



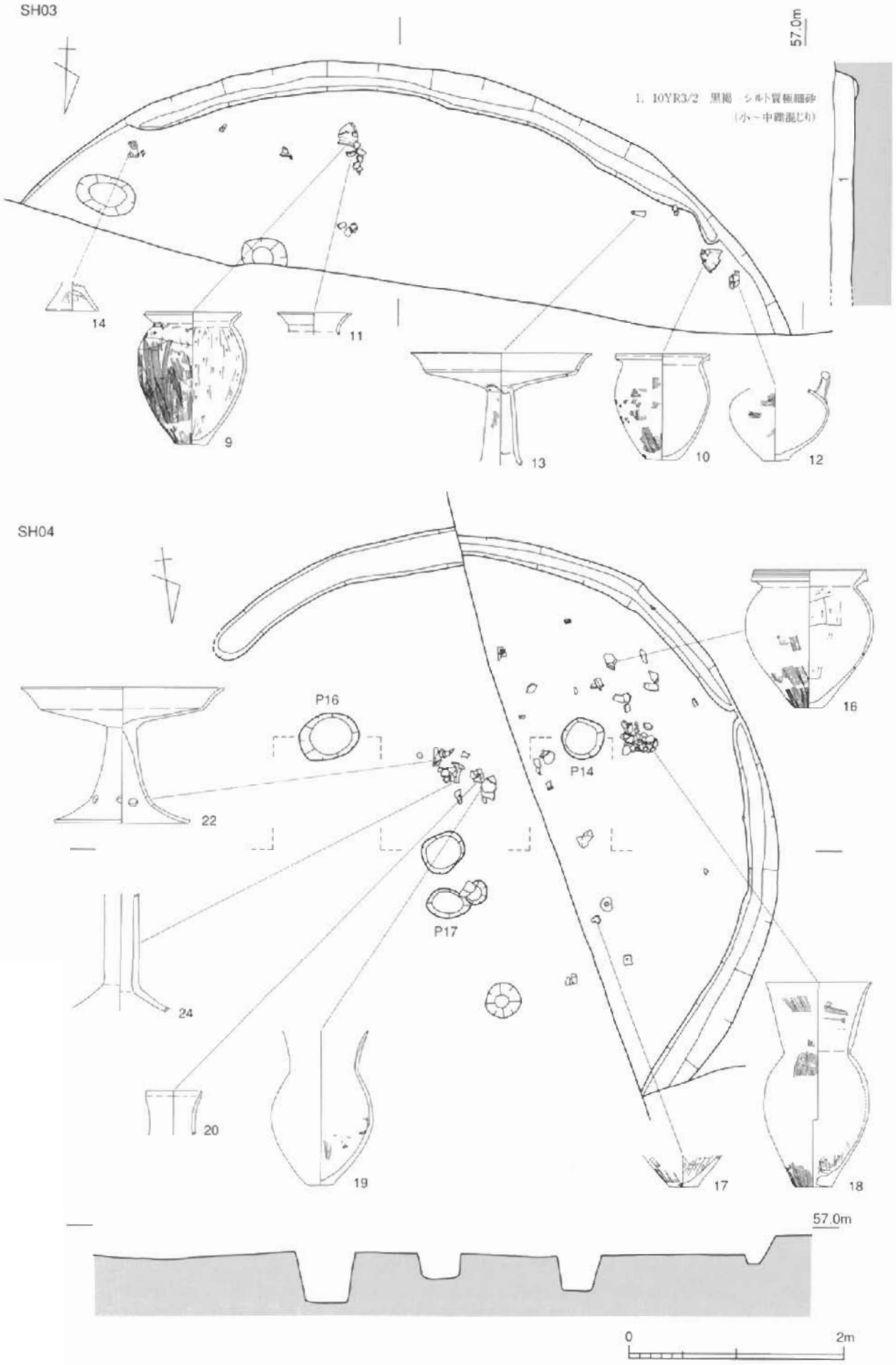




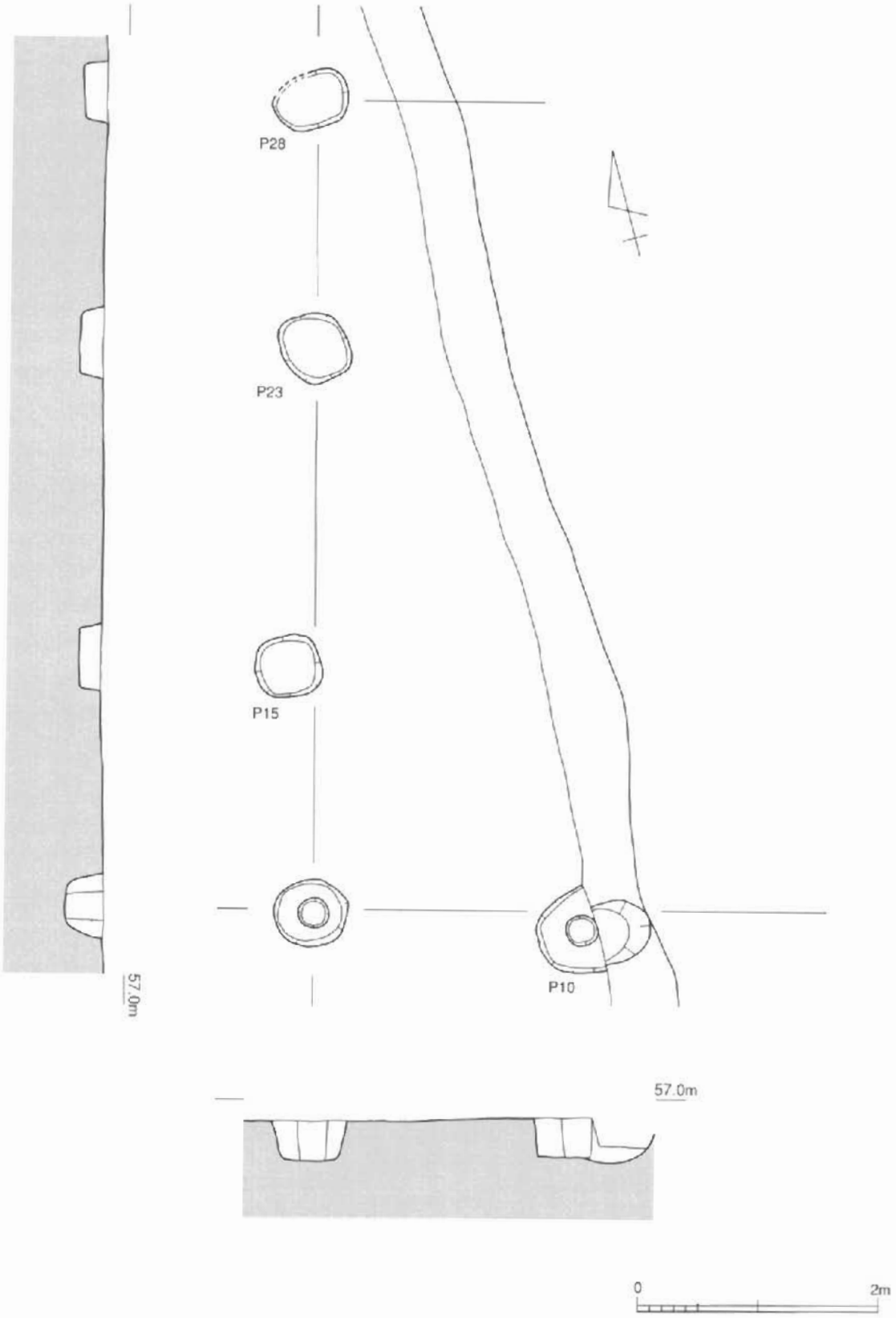
1. 10YR3/2　黒褐　シルト質極細砂(小～中礫混じり)
2. 10YR2/1　黒　シルト質極細砂(小礫混じり)
3. 2.5Y4/3　オリーブ褐　シルト質極細砂



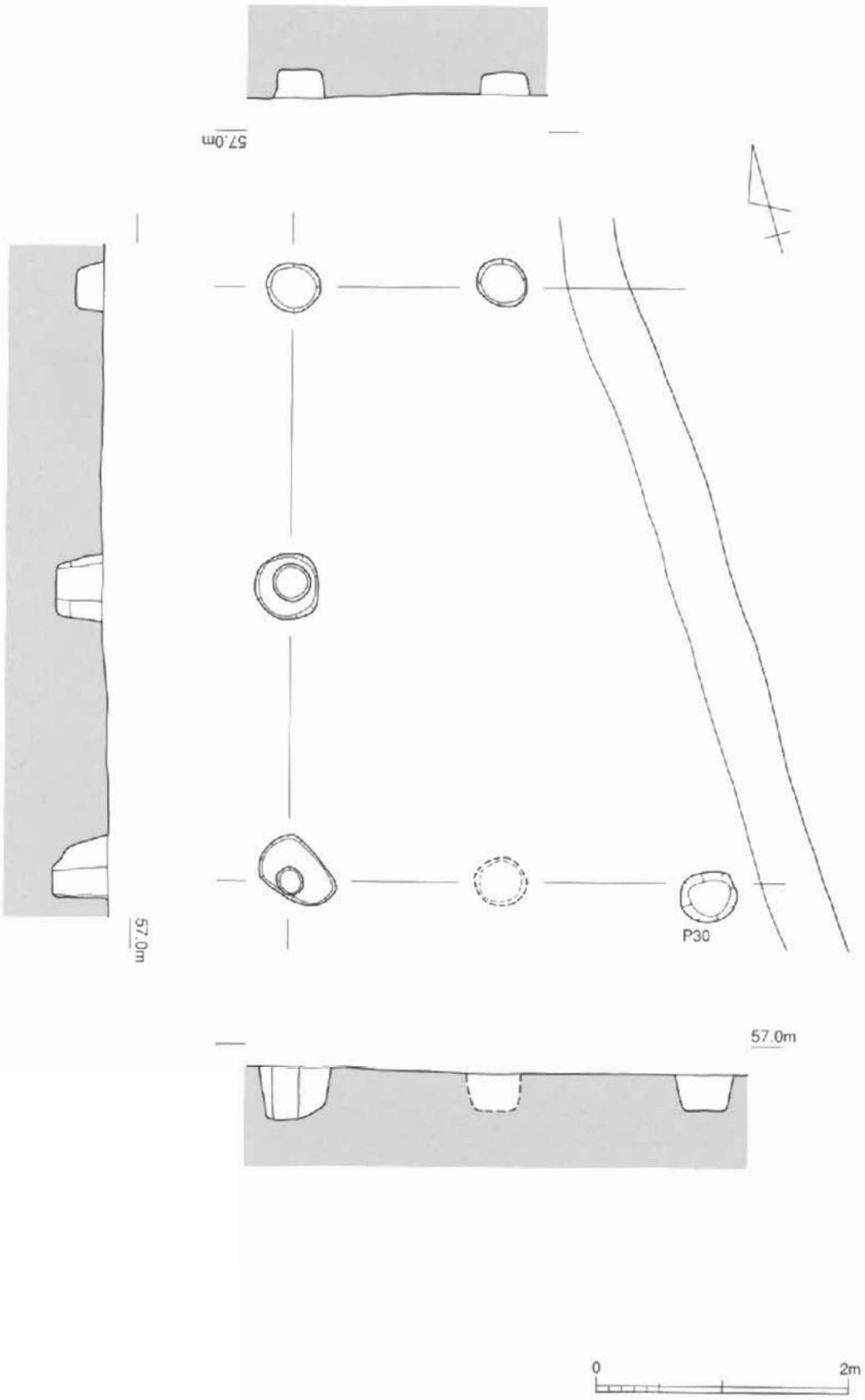
SH02


SH03
57.0m
1. 10YR3/2　黒褐　シルト質極細砂
(小～中礫混じり)
1
14
11
9
13
10
12
SH04
P16
P14
P17
16
22
24
20
19
17
18
57.0m
0
2m

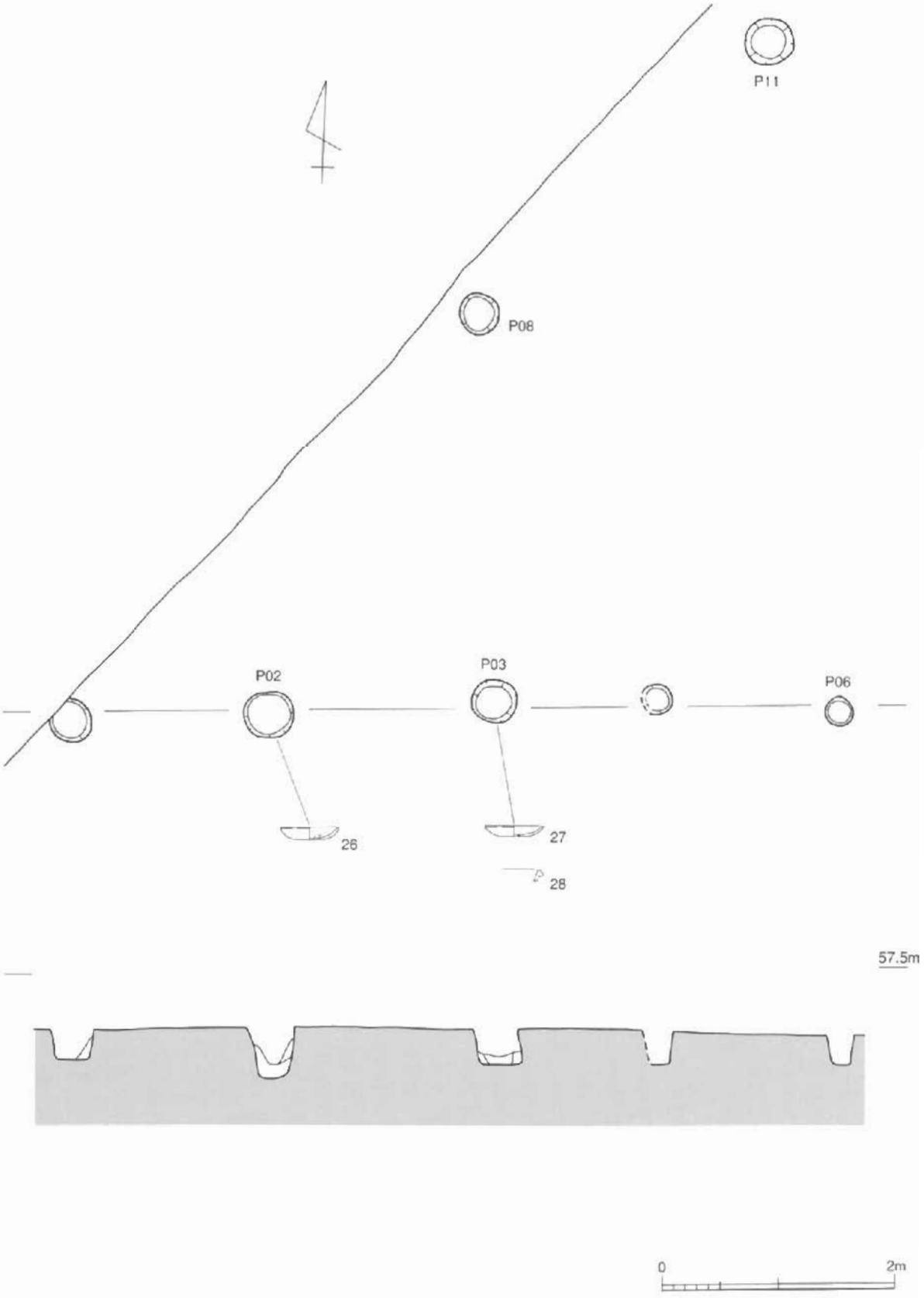
SH03・04



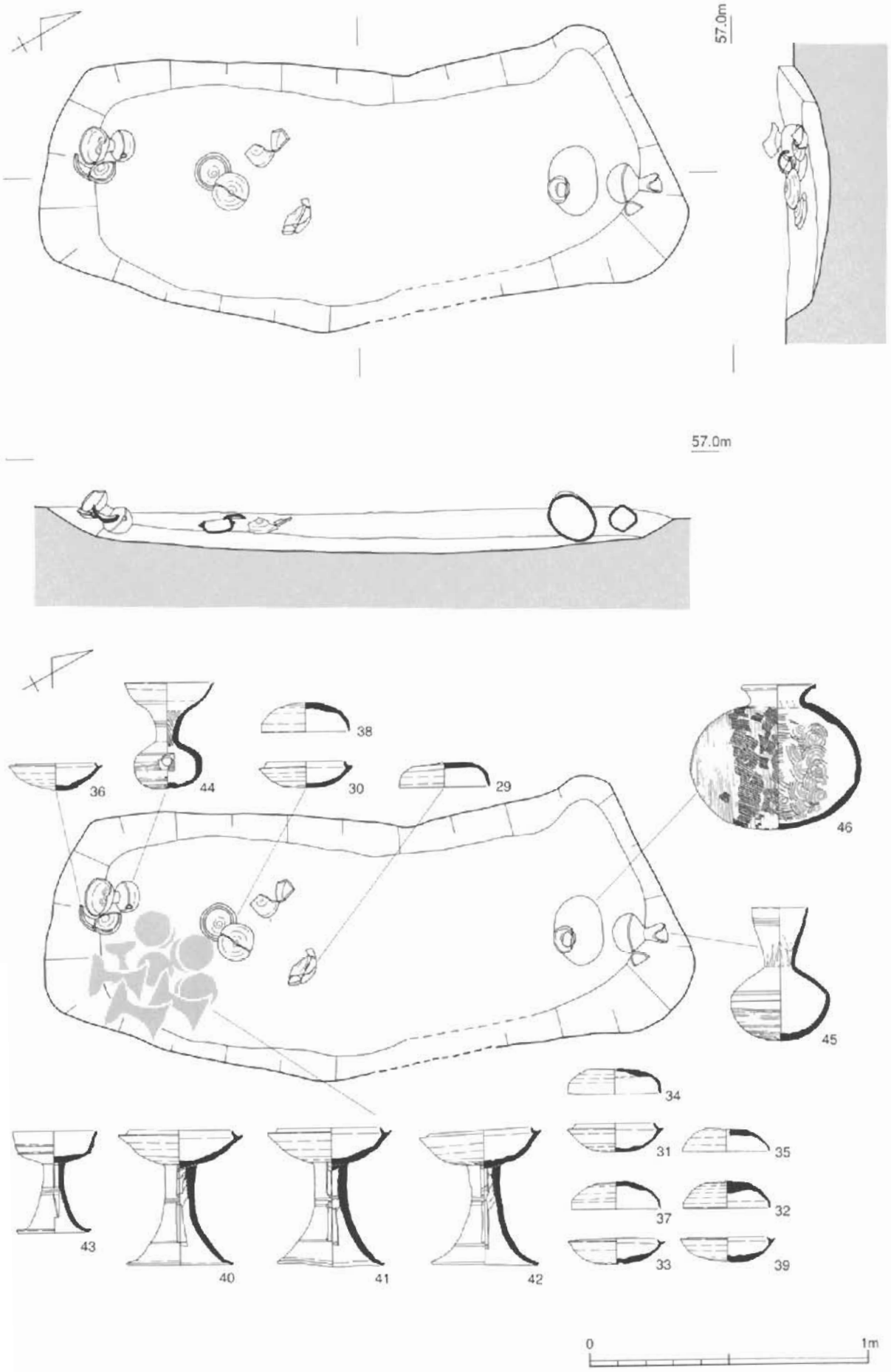
SB01



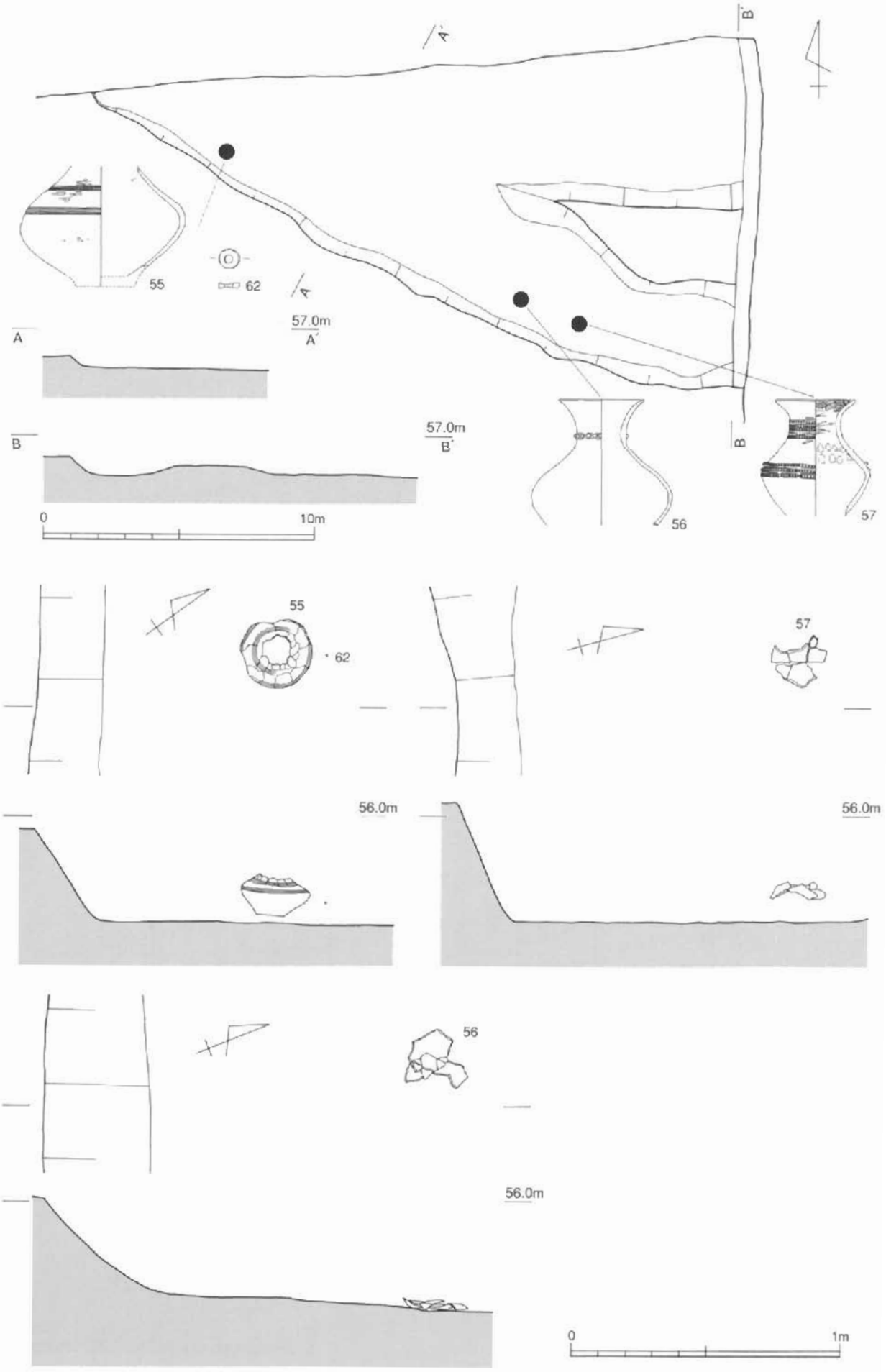
SB02



SA01



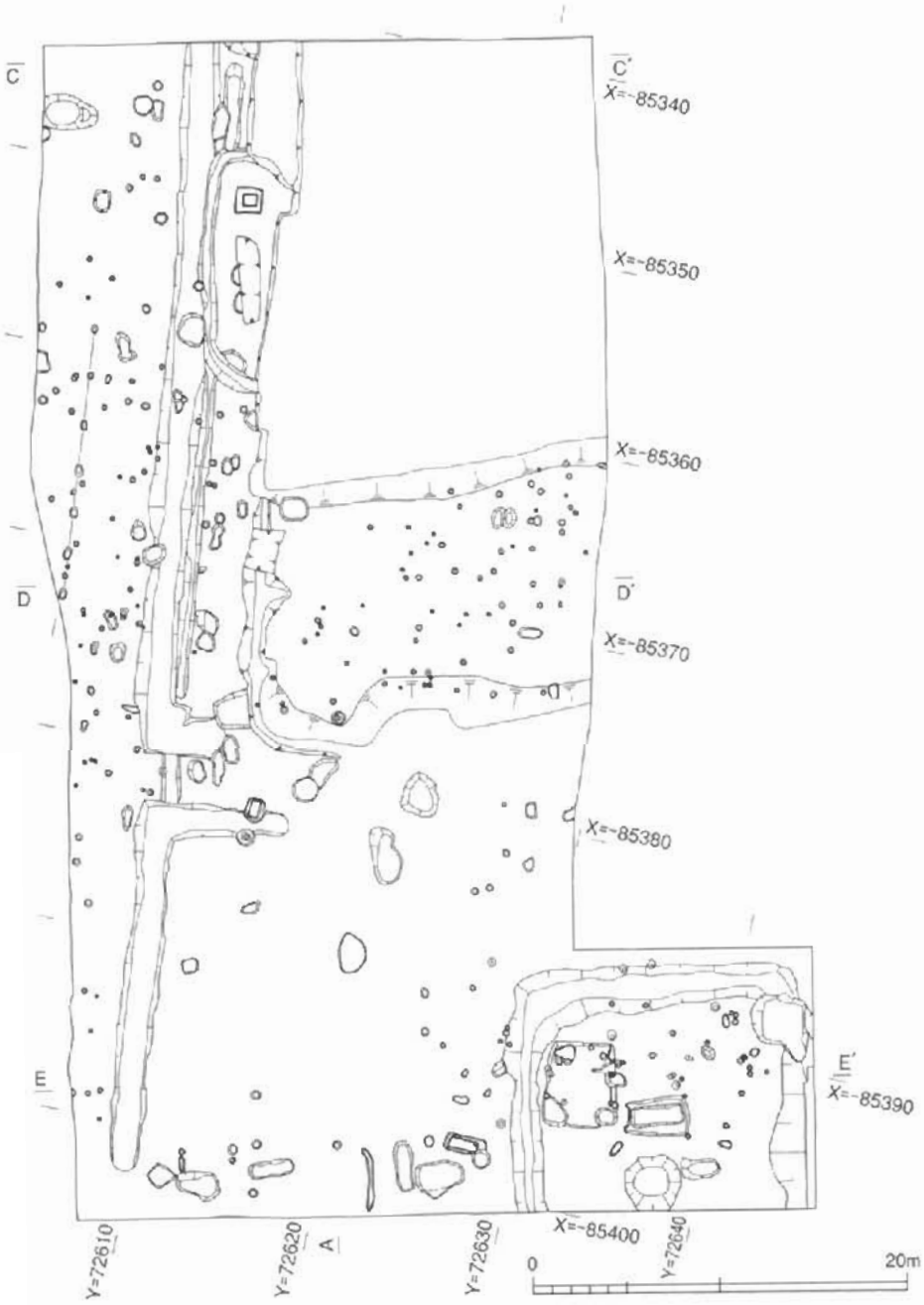
SK10



落ち込み

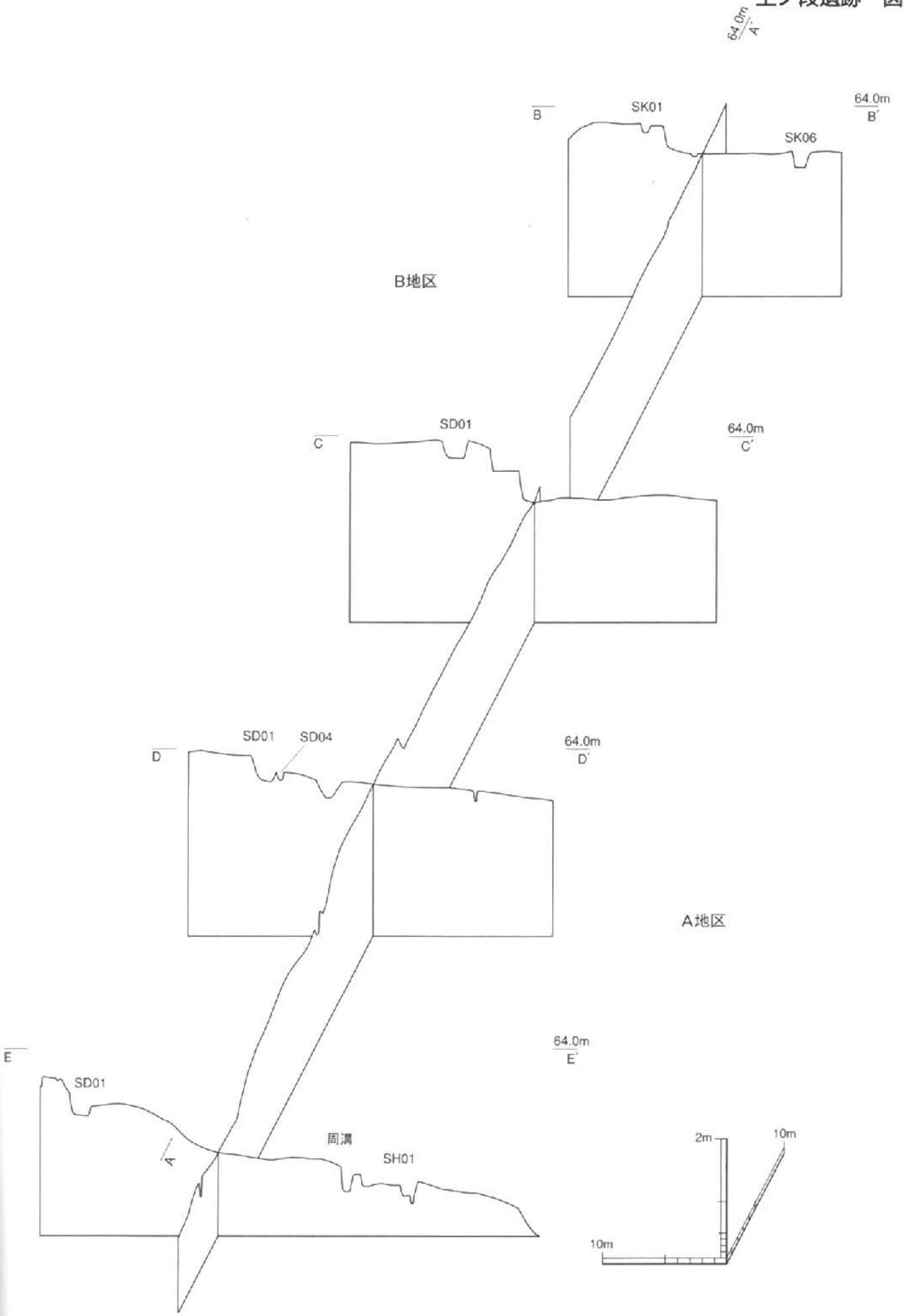
図版14　上ノ段遺跡

B地区



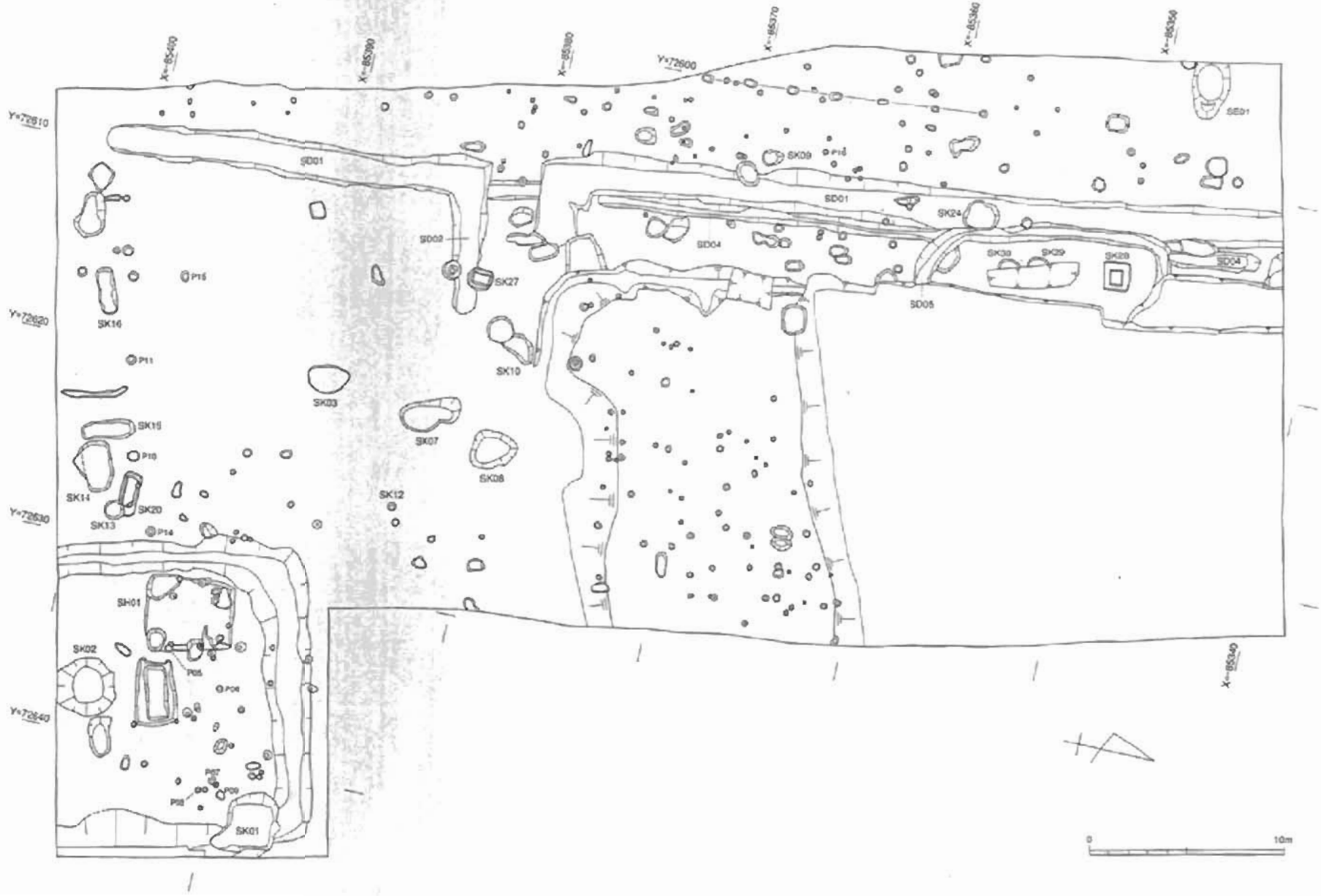
A地区

全体図

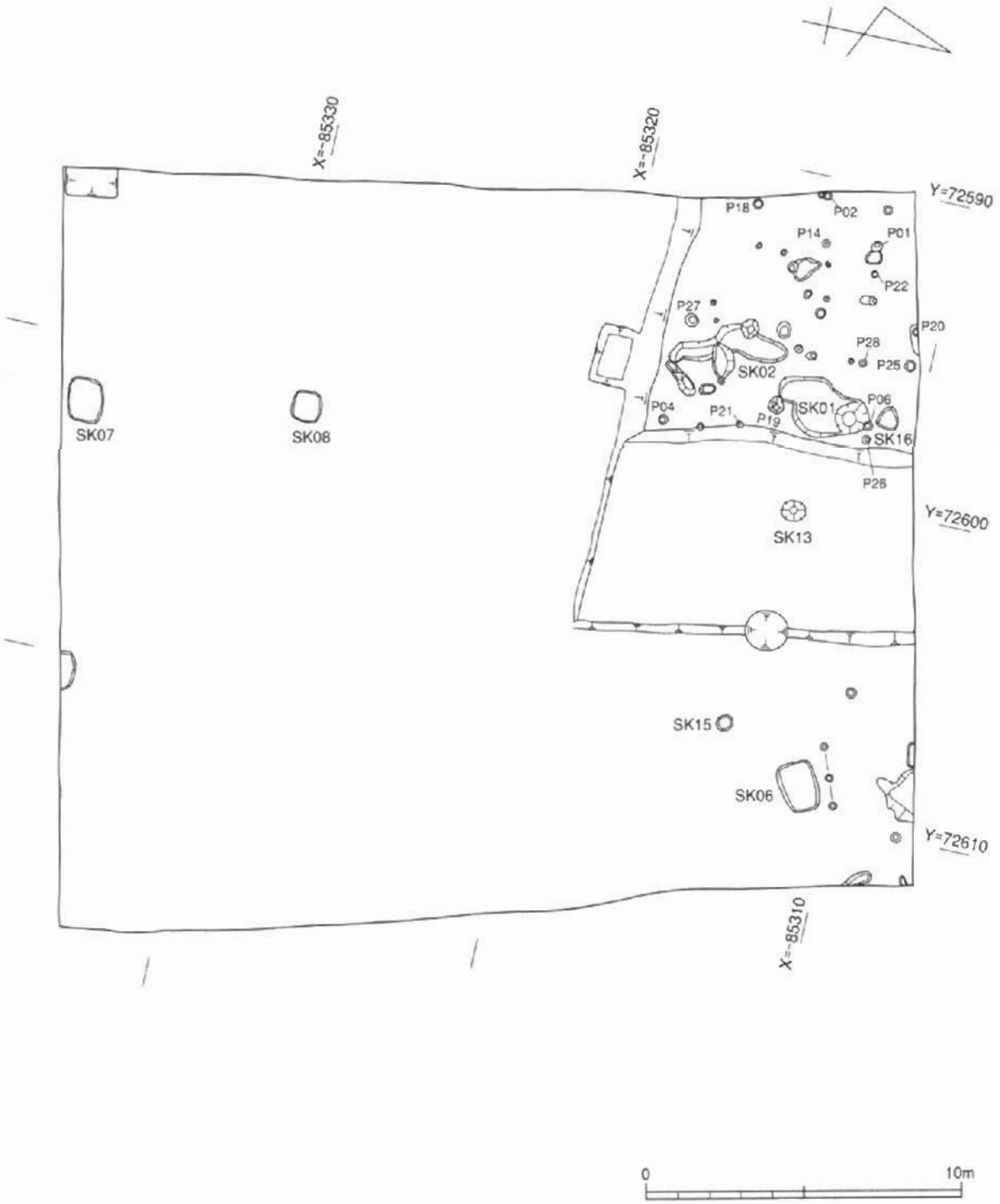

64.0m
A'
B
SK01
SK06
64.0m
B'
B地区
C
SD01
64.0m
C'
D
SD01
SD04
64.0m
D'
A地区
E
SD01
64.0m
E'
A
周溝
SH01
2m
10m
10m

地形断面図

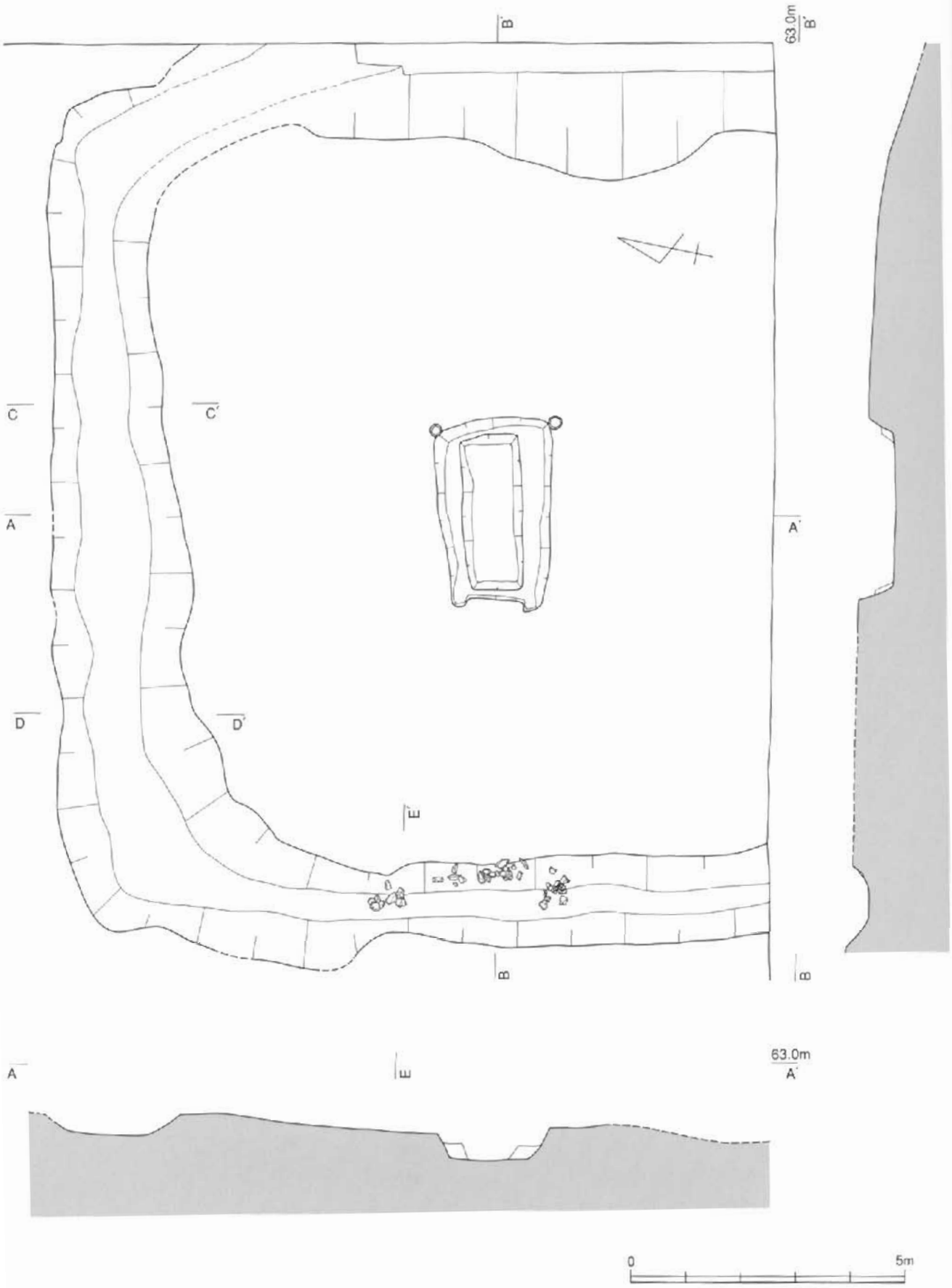
図版16　上ノ段遺跡



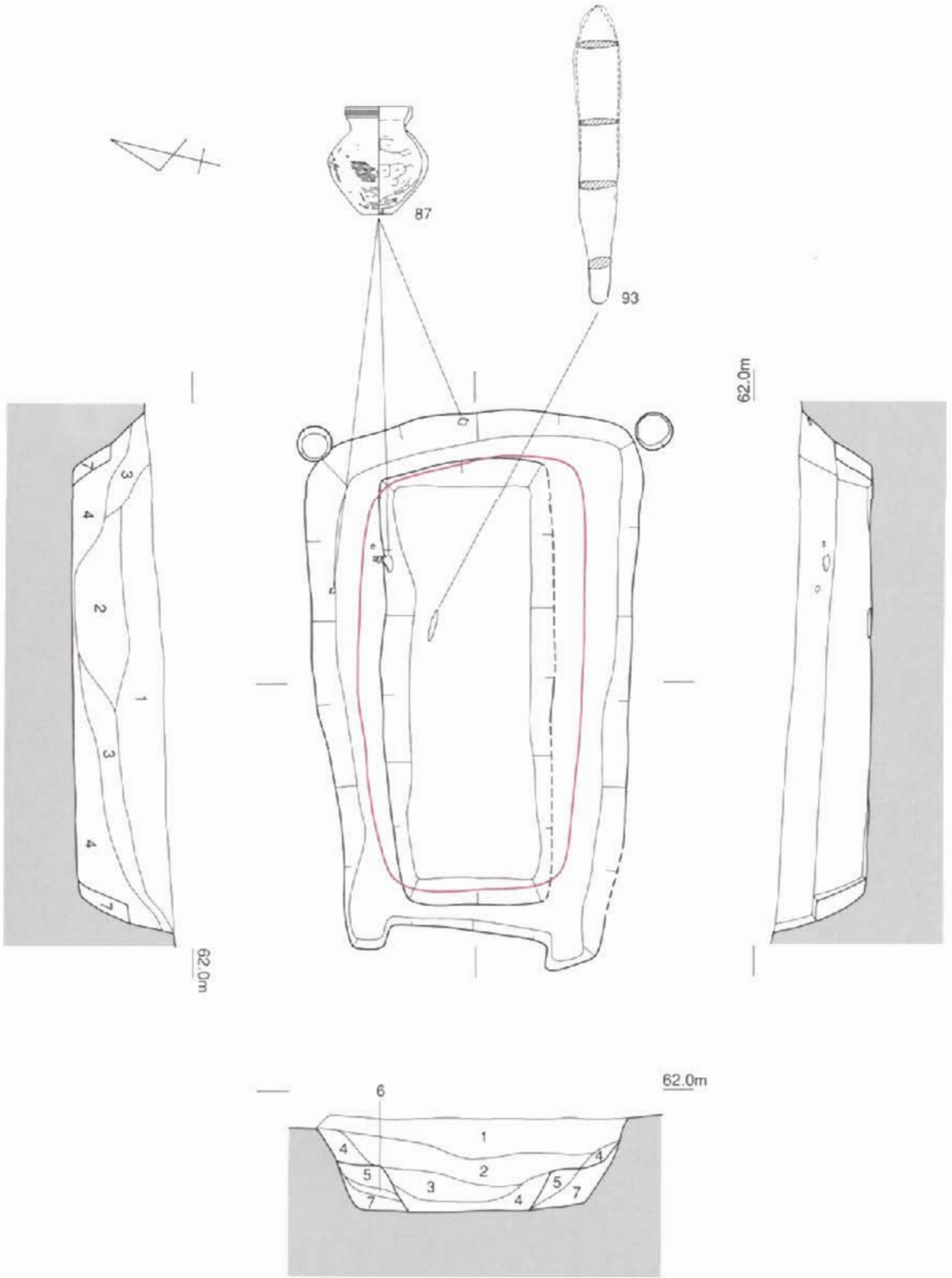
A地区平面図


X=-85330
X=-85320
Y=72590
Y=72600
Y=72610
X=-85310
P18
P02
P01
P14
P22
P27
P20
P28
P25
SK02
SK01
P06
P04
P21
P19
SK16
P26
SK13
SK07
SK08
SK15
SK06
0
10m

B地区平面図



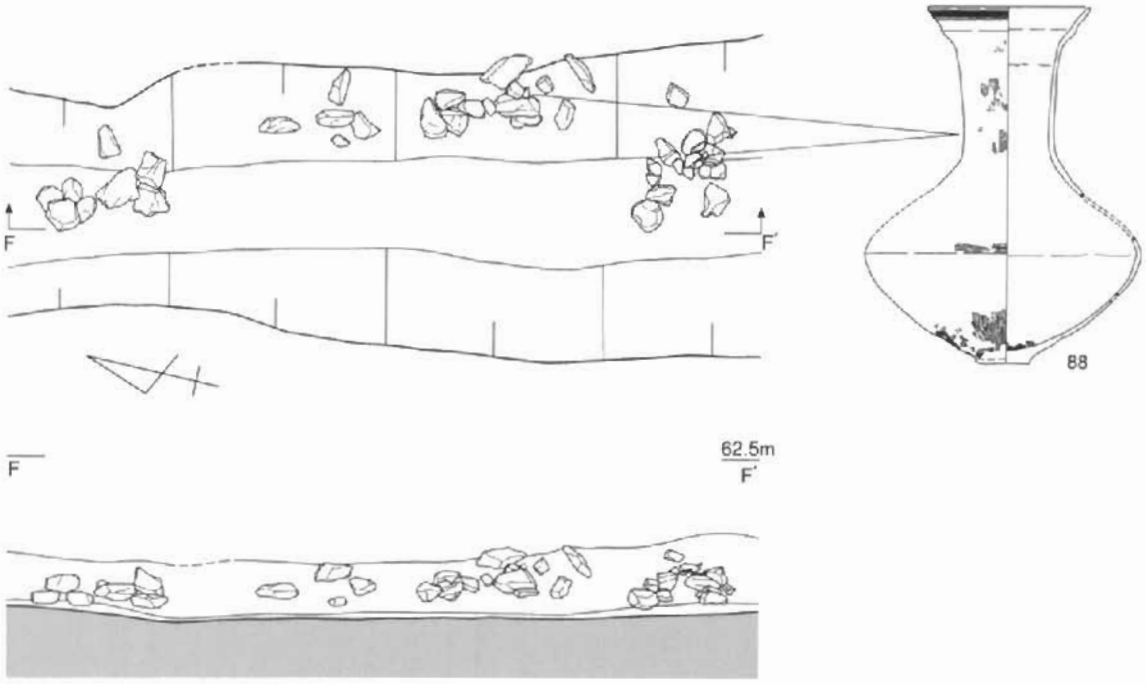
A地区周溝墓

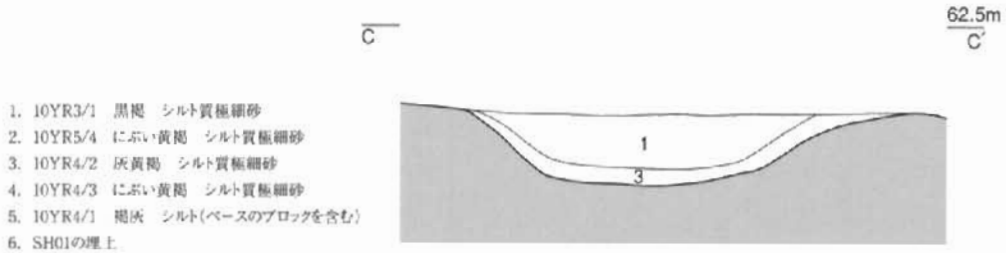


1. 2.5Y6/3　にぶい黄　シルト質極細砂(小礫を含む)
2. 2.5Y6/4　にぶい黄　シルト質極細砂(小～中礫を多く含む)
3. 2.5Y6/4　にぶい黄　シルト質極細砂(小礫を含む)
4. 2.5Y5/3　黄褐　シルト質極細砂
5. 2.5Y5/4　黄褐　シルト質極細砂(粗砂を含む)
6. 2.5Y5/3　黄褐　シルト質極細砂
7. 2.5Y6/4　にぶい黄　シルト質極細砂

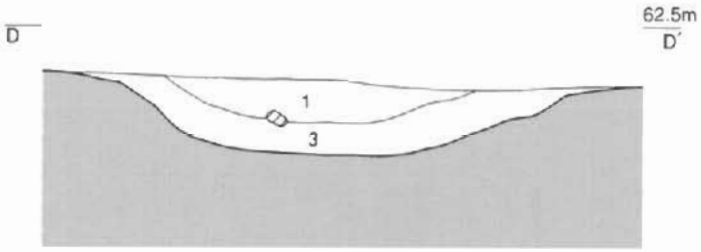
0　2m

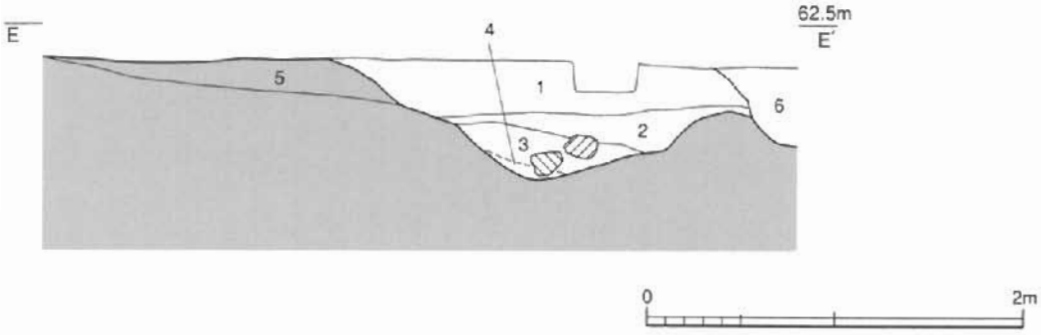
A地区周溝墓主体部



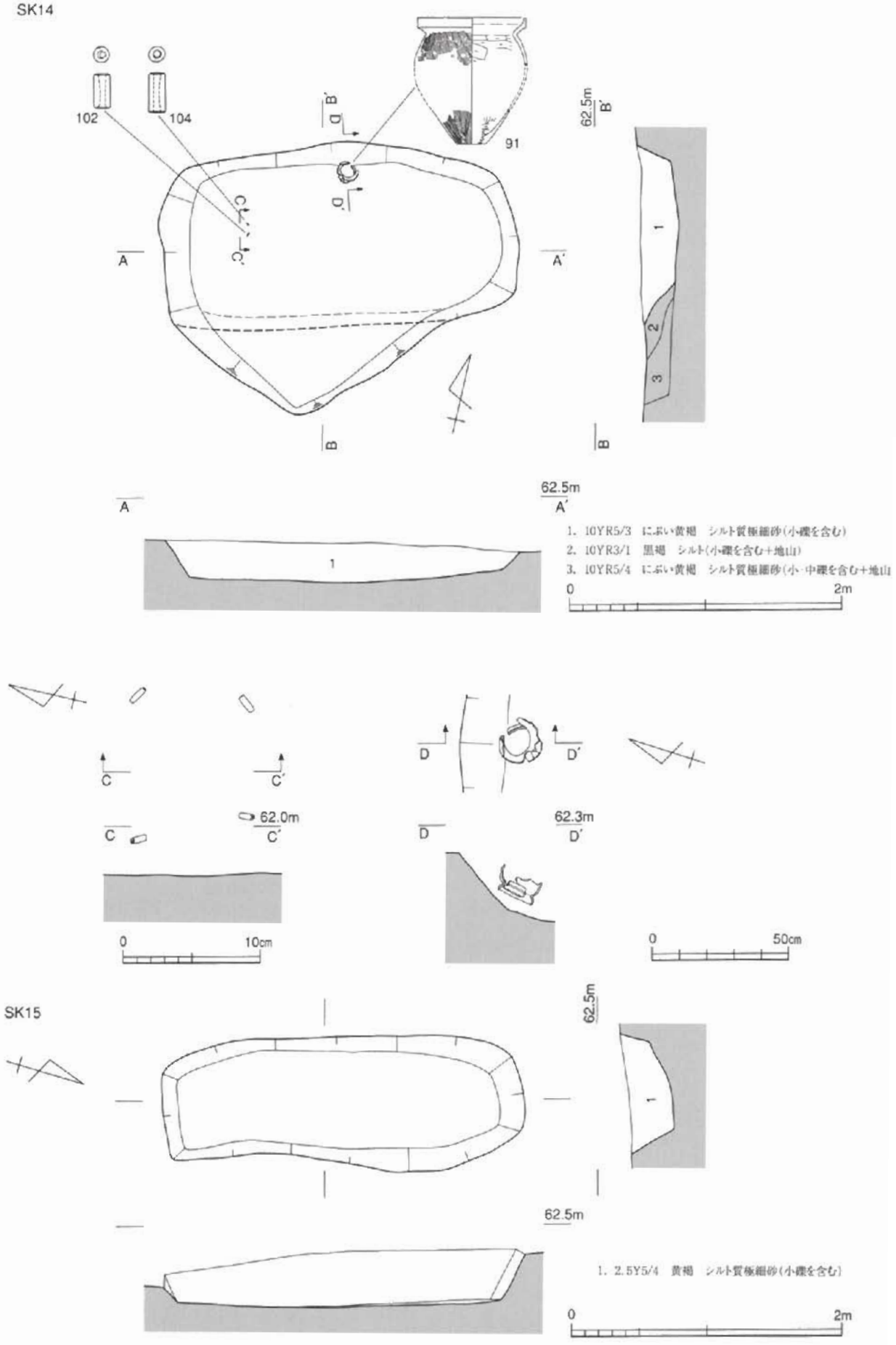


1. 10YR3/1　黒褐　シルト質極細砂
2. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂
3. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂
5. 10YR4/1　褐灰　シルト(ベースのブロックを含む)
6. SH01の埋土



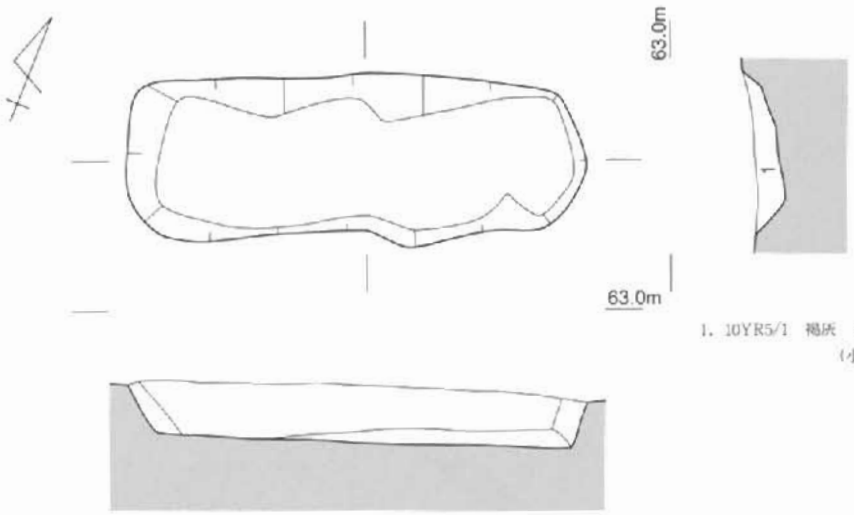


A地区周溝墓周溝


SK14
102
104
91
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
62.5m
1
2
3
1. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂(小礫を含む)
2. 10YR3/1　黒褐　シルト(小礫を含む+地山)
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂(小・中礫を含む+地山
0
2m
62.0m
62.3m
10cm
50cm
SK15
1. 2.5Y5/4　黄褐　シルト質極細砂(小礫を含む)

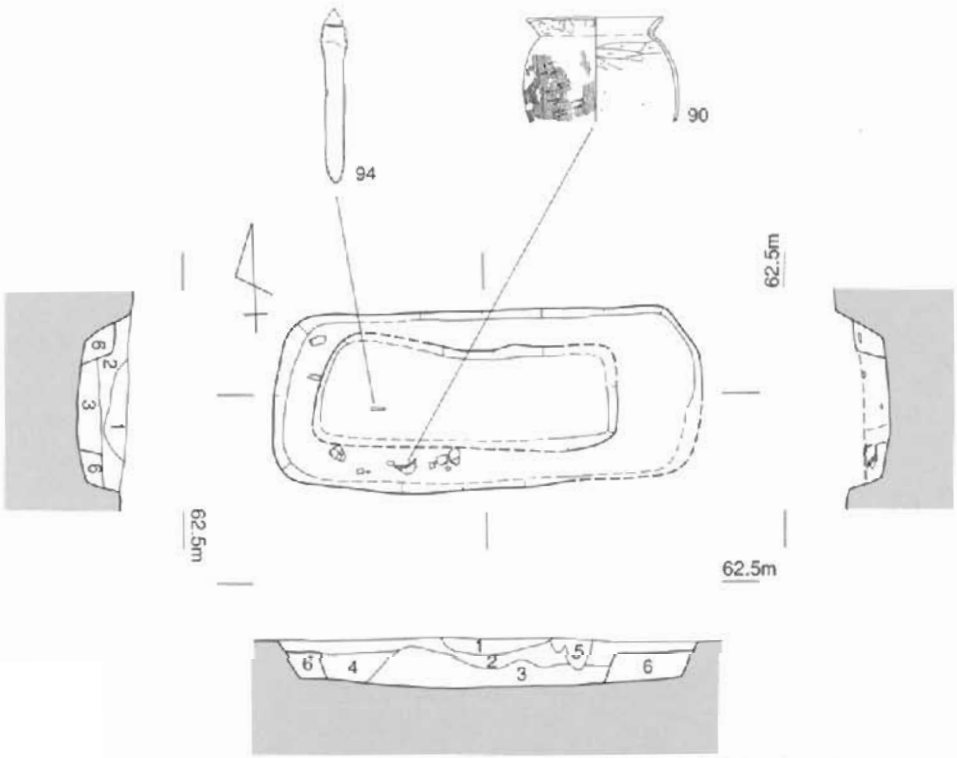
A地区SK14・15

SK16



1. 10YR5/1　褐灰　シルト質極細砂
(小・中礫混じり)

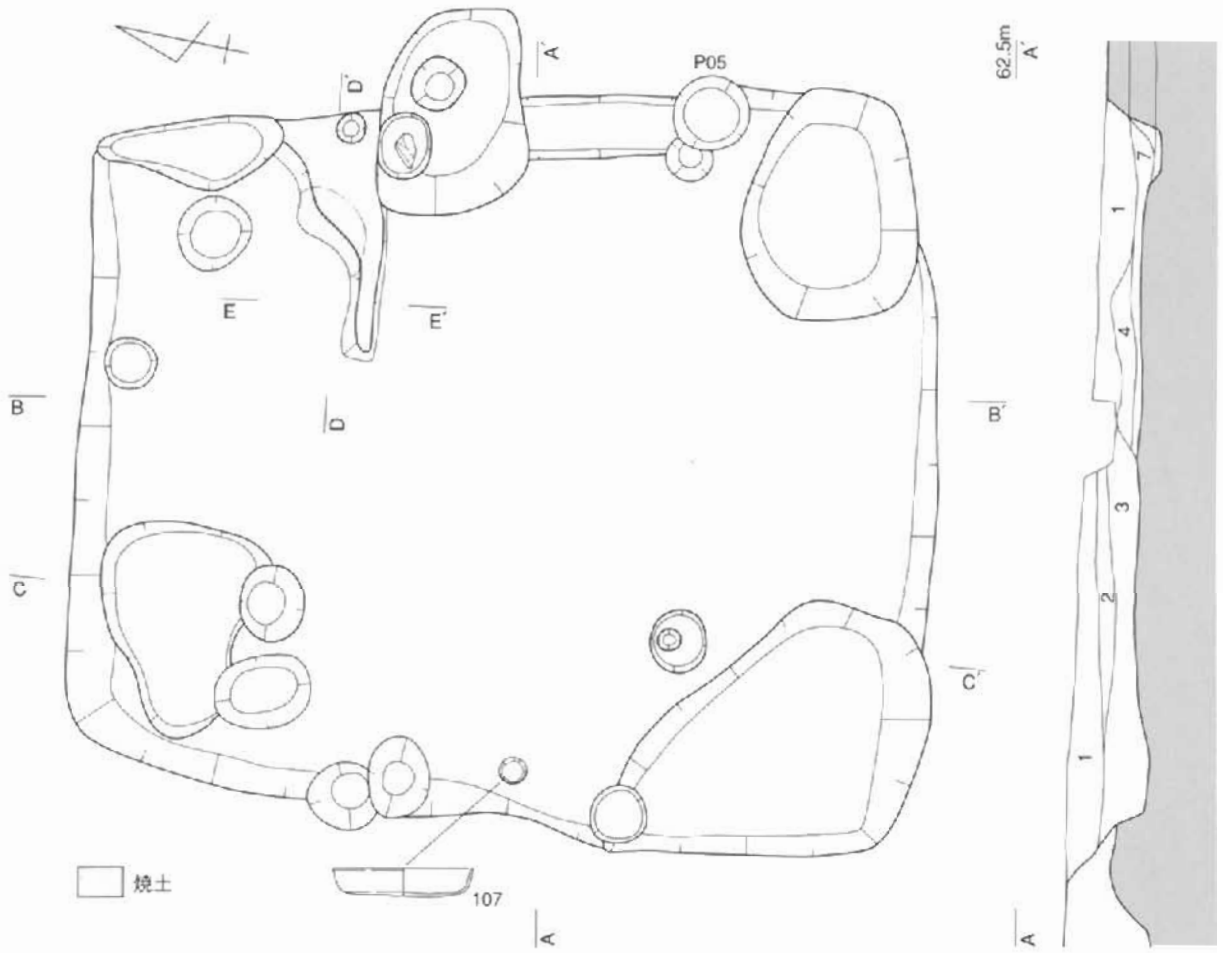
SK20

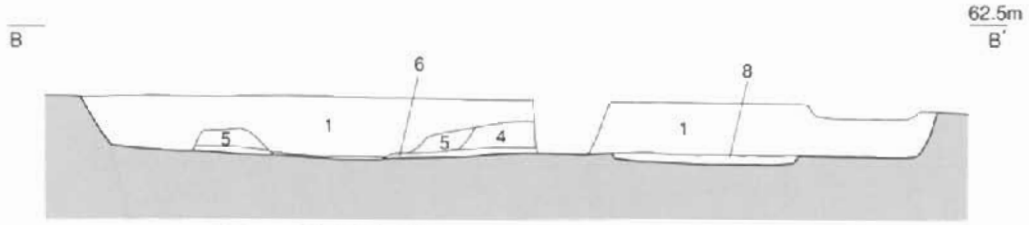


1. 10YR3/3　暗褐　シルト質極細砂
2. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂
3. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂(土器を含む)
5. 10YR2/3　黄褐　シルト質極細砂
6. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂

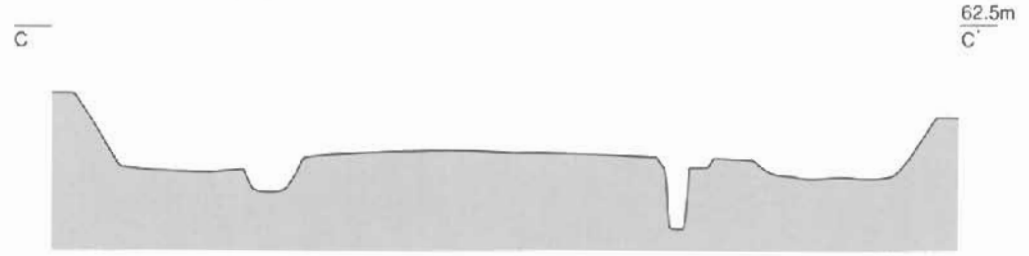
0　2m

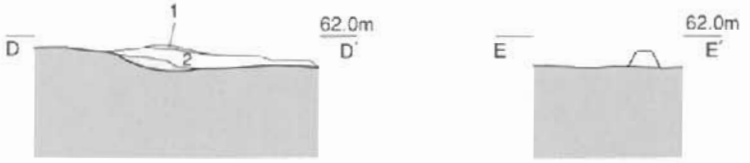
A地区SK16・20





1. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂(小礫を含む)
2. 10YR5/6　黄褐　シルト質極細砂(小礫を含む)
3. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂
4. 2.5Y7/6　明黄褐　細砂
5. 10YR6/4　にぶい黄橙　シルト
6. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂(炭を多く含む)
7. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂(小礫を含む)
8. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂

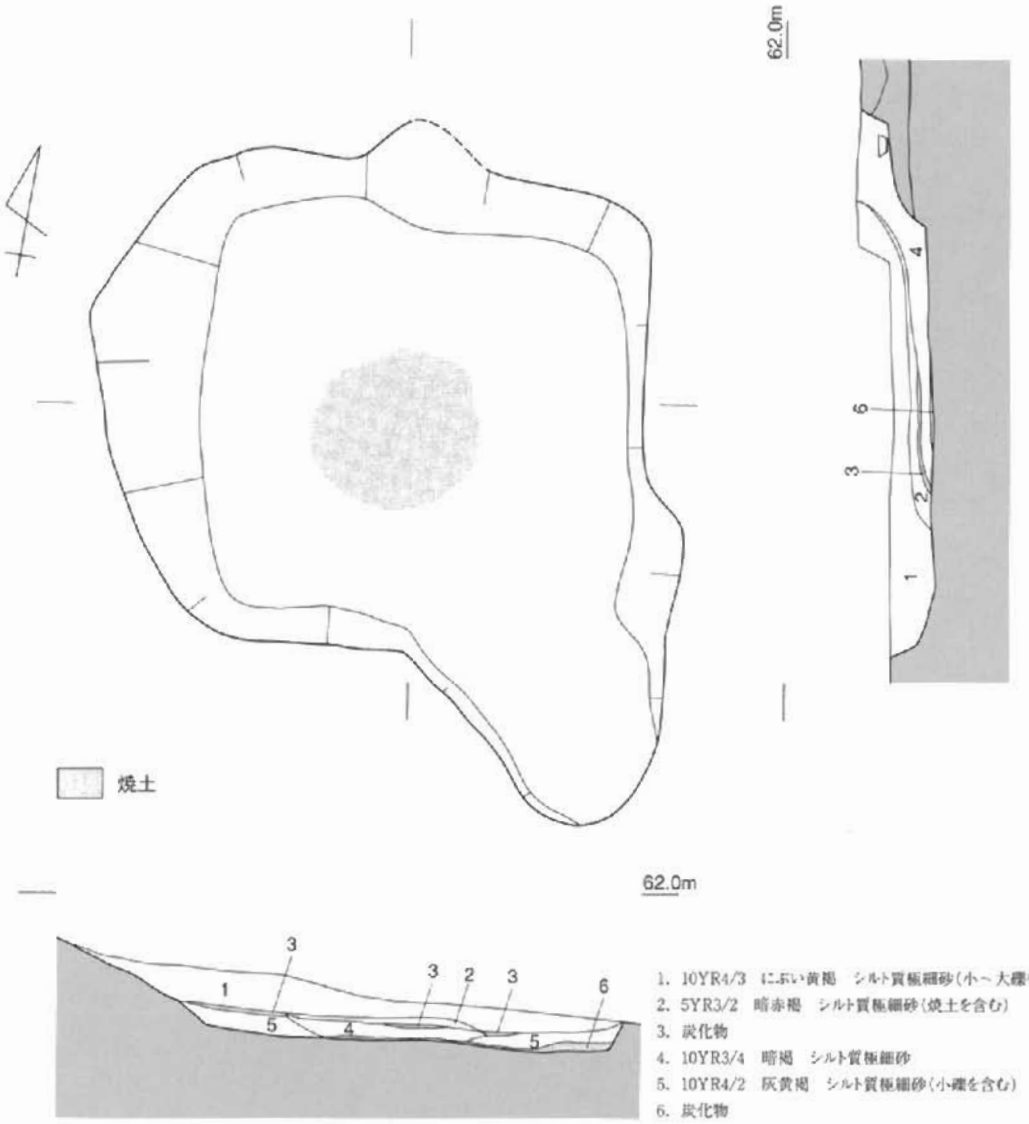




1. 焼土
2. 5YR5/4　にぶい赤褐　シルト質極細砂(炭・焼土を含む)

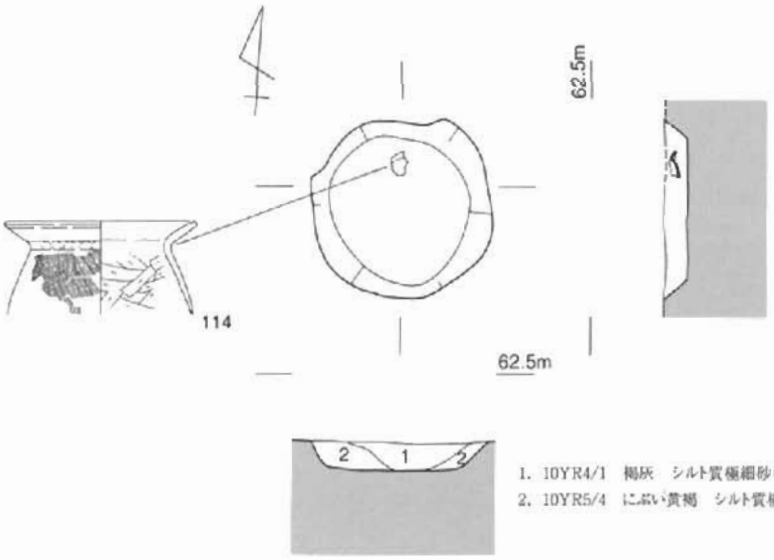
A地区SH01

SK01



1. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂(小～大礫を含む)
2. 5YR3/2　暗赤褐　シルト質極細砂(焼土を含む)
3. 炭化物
4. 10YR3/4　暗褐　シルト質極細砂
5. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂(小礫を含む)
6. 炭化物

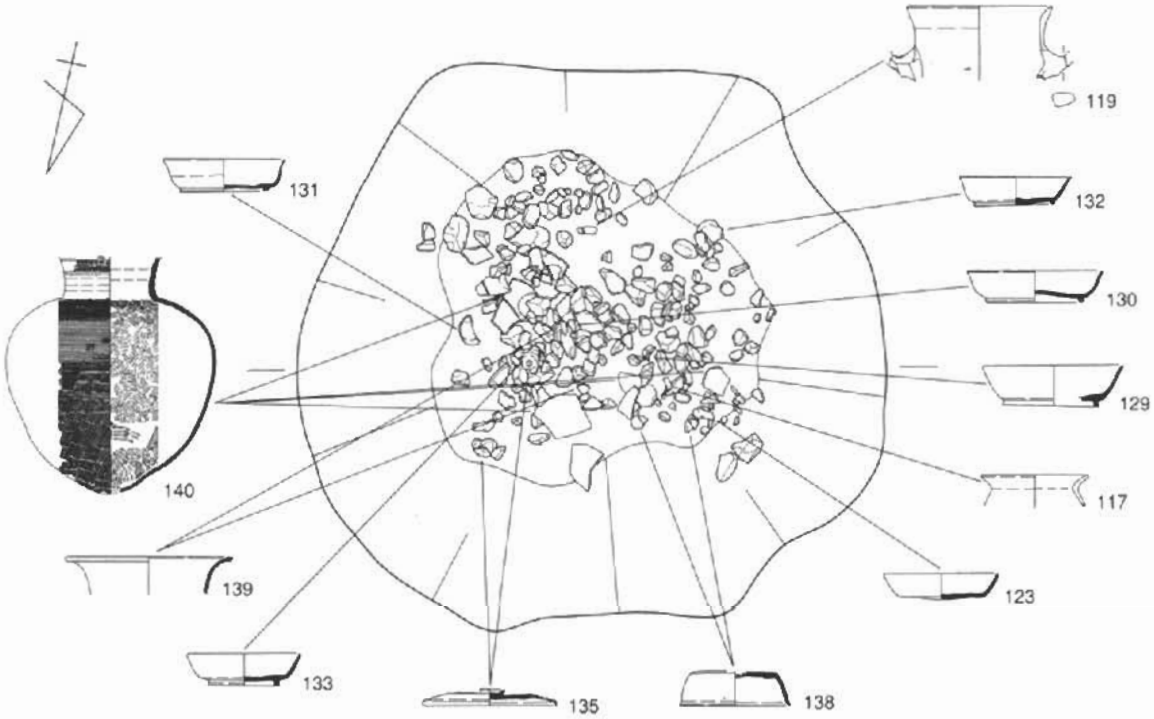
SK13

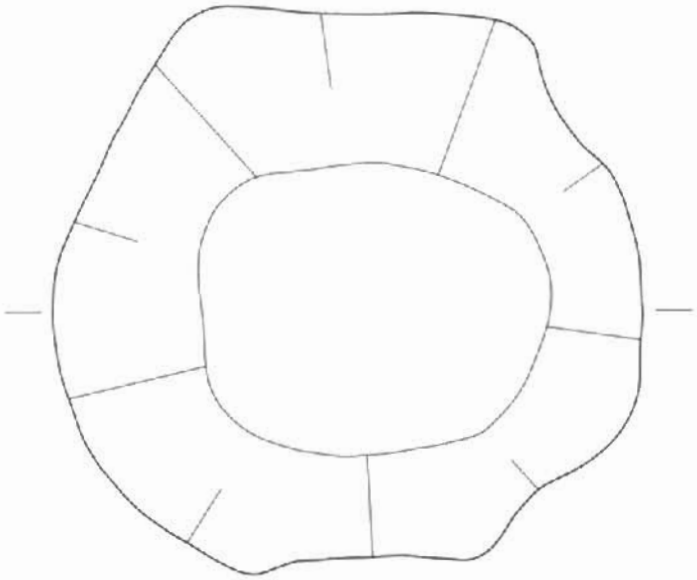


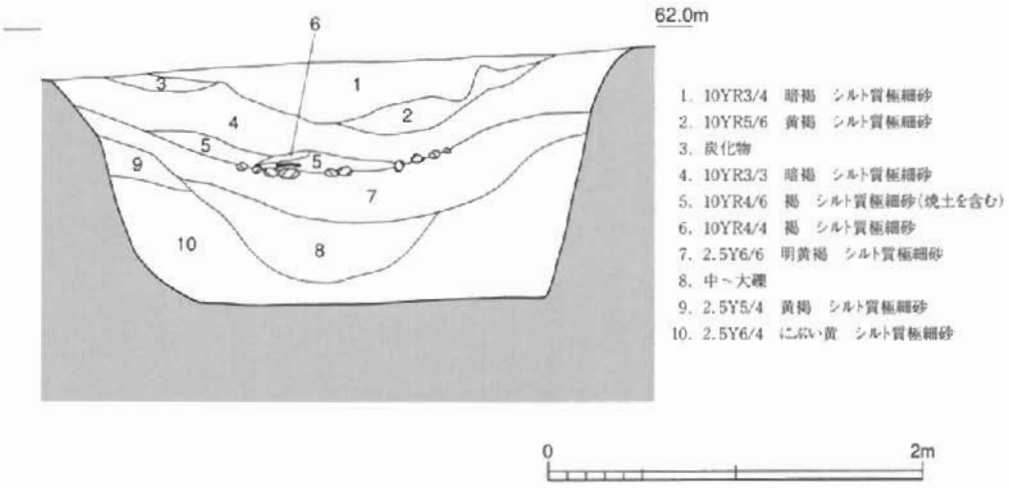
1. 10YR4/1　褐灰　シルト質極細砂(炭を含む)
2. 10YR5/4　にぶい黄褐　シルト質極細砂(炭を含む)

0　2m

A地区SK01・13

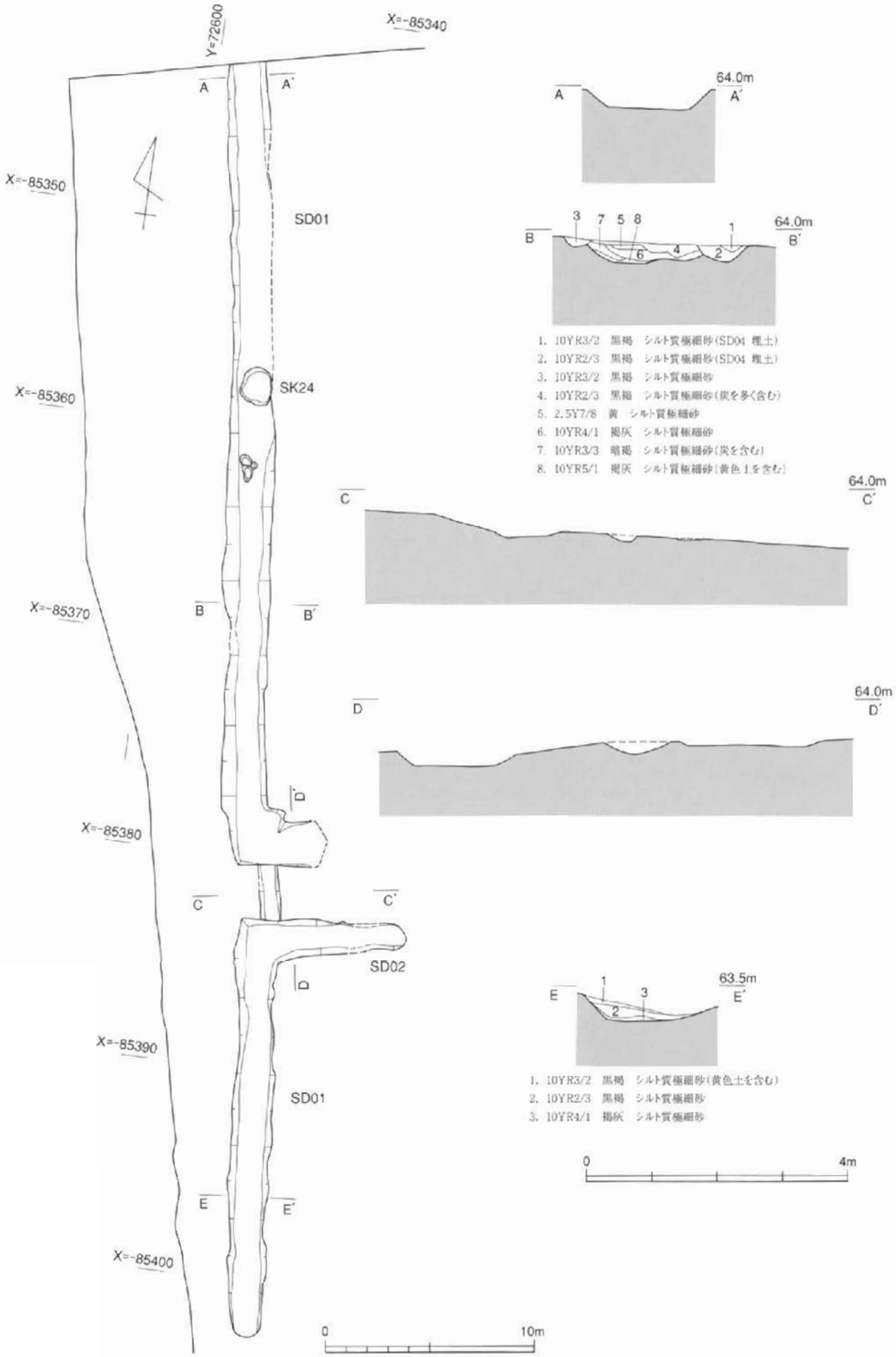

119
131
132
130
129
140
117
139
123
133
135
138



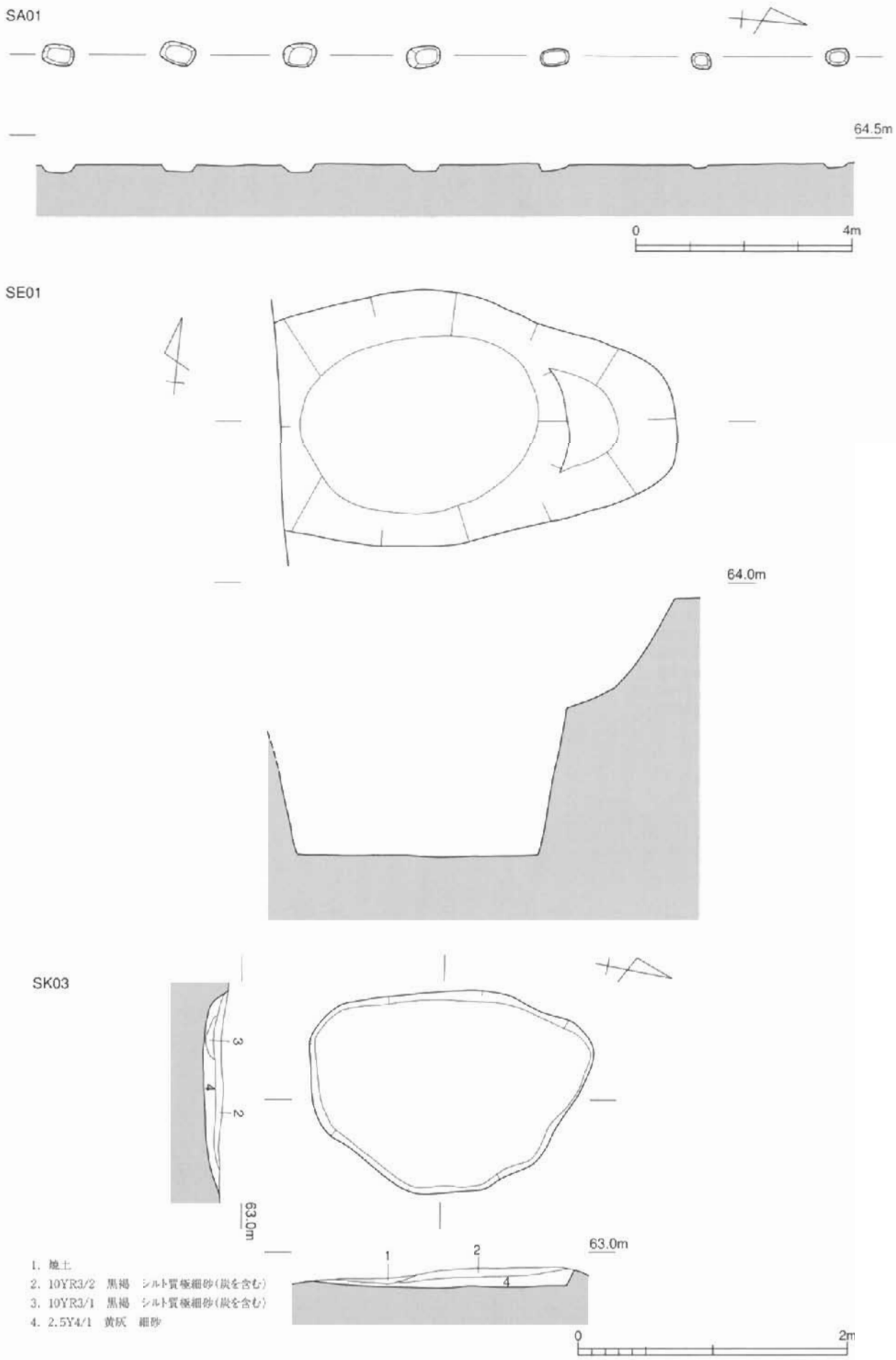

62.0m
1. 10YR3/4　暗褐　シルト質極細砂
2. 10YR5/6　黄褐　シルト質極細砂
3. 炭化物
4. 10YR3/3　暗褐　シルト質極細砂
5. 10YR4/6　褐　シルト質極細砂(焼土を含む)
6. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂
7. 2.5Y6/6　明黄褐　シルト質極細砂
8. 中～大礫
9. 2.5Y5/4　黄褐　シルト質極細砂
10. 2.5Y6/4　にぶい黄　シルト質極細砂
0
2m

A地区SK02

図版26　上ノ段遺跡

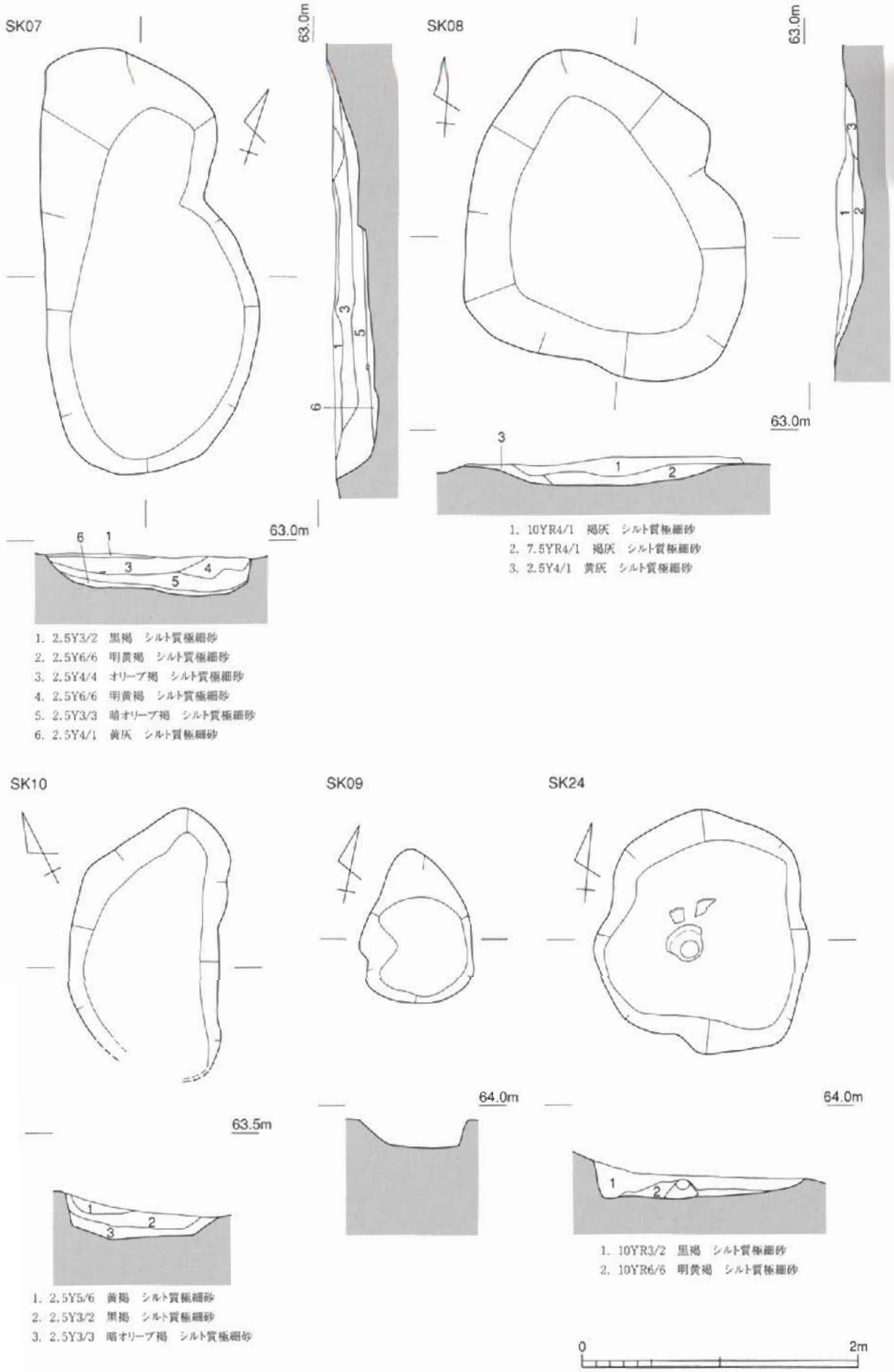


A地区SD01・02

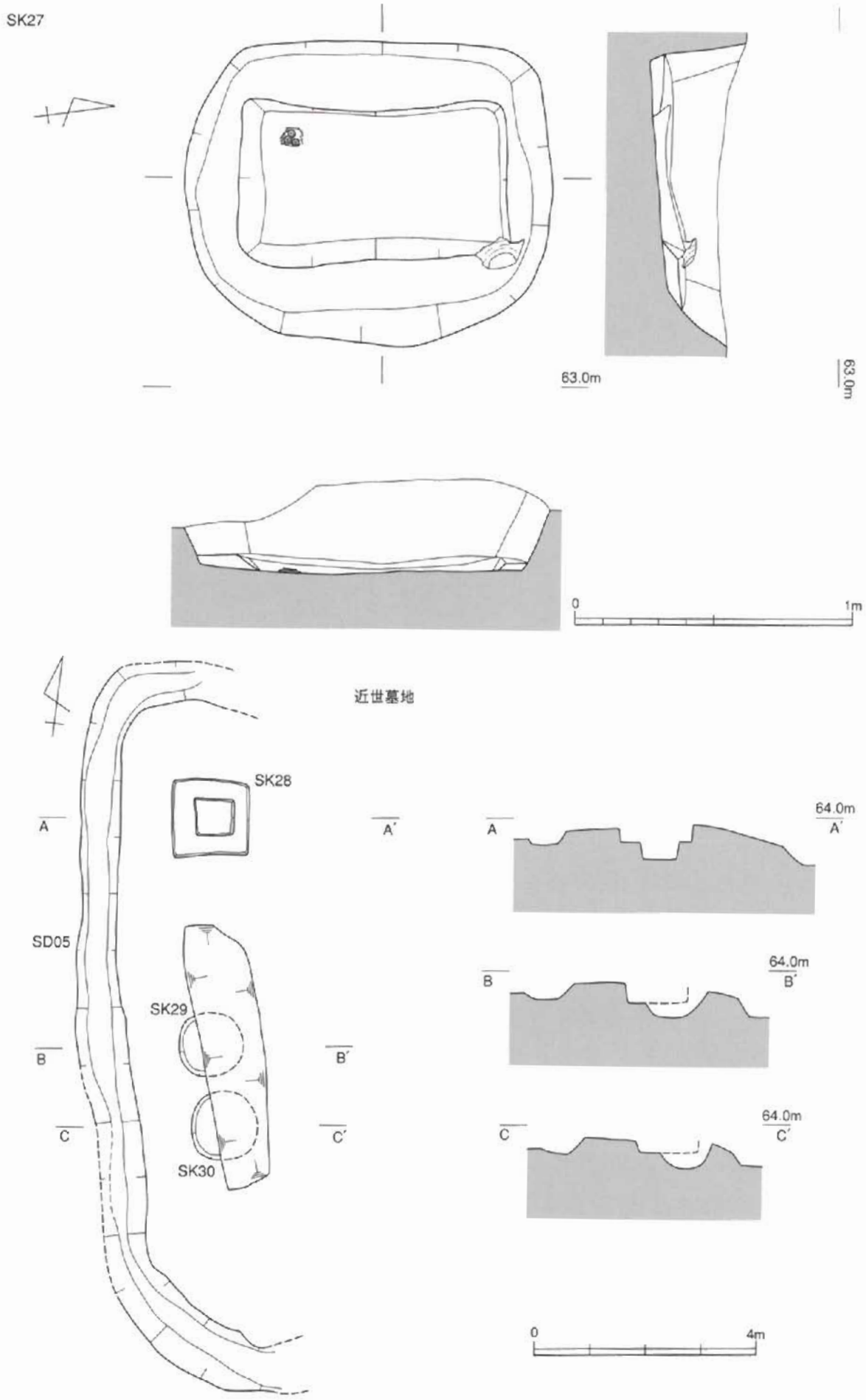


A地区SA01・SE01・SK03

図版28　上ノ段遺跡



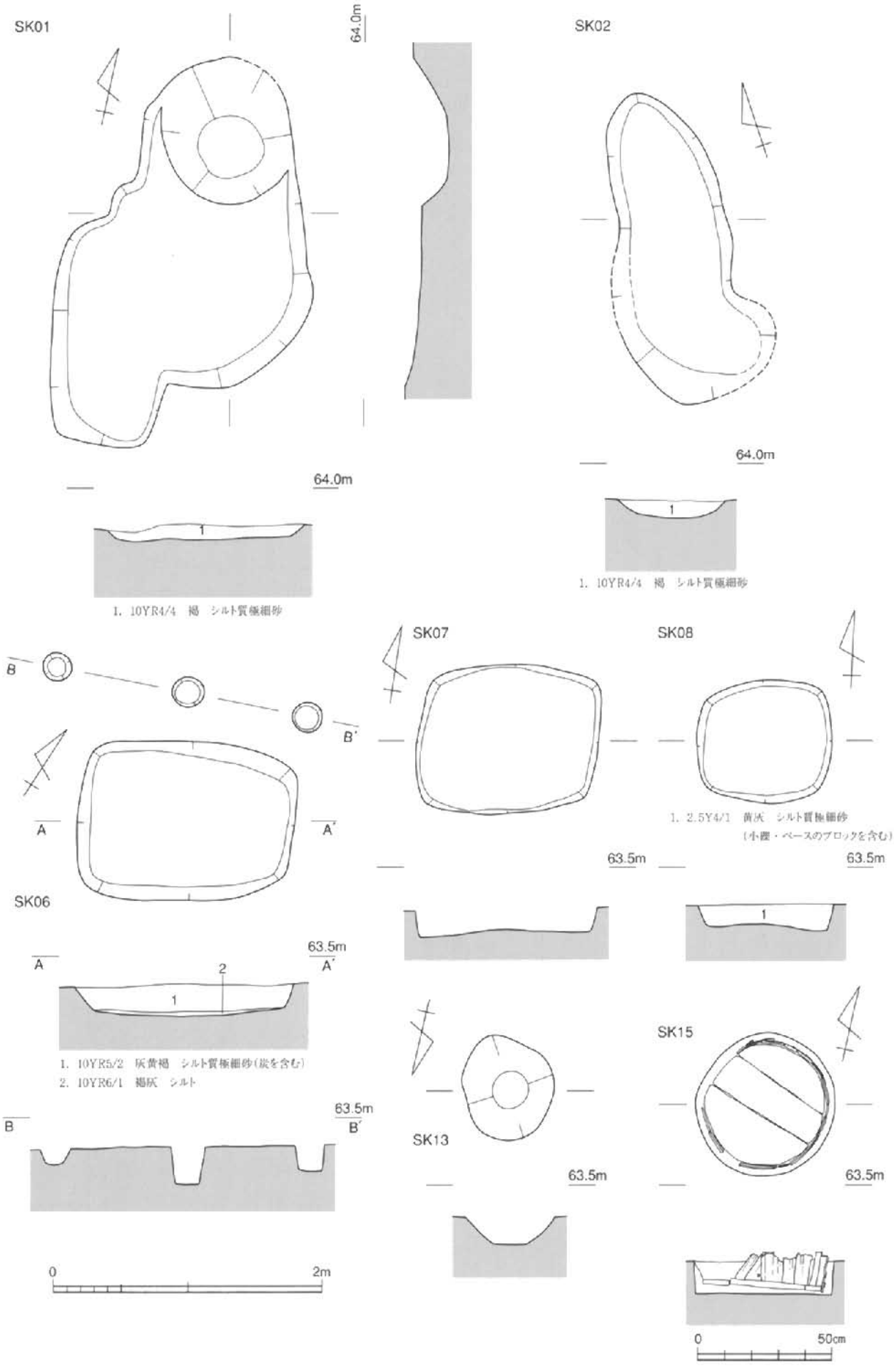
A地区SK07・08・09・10・24



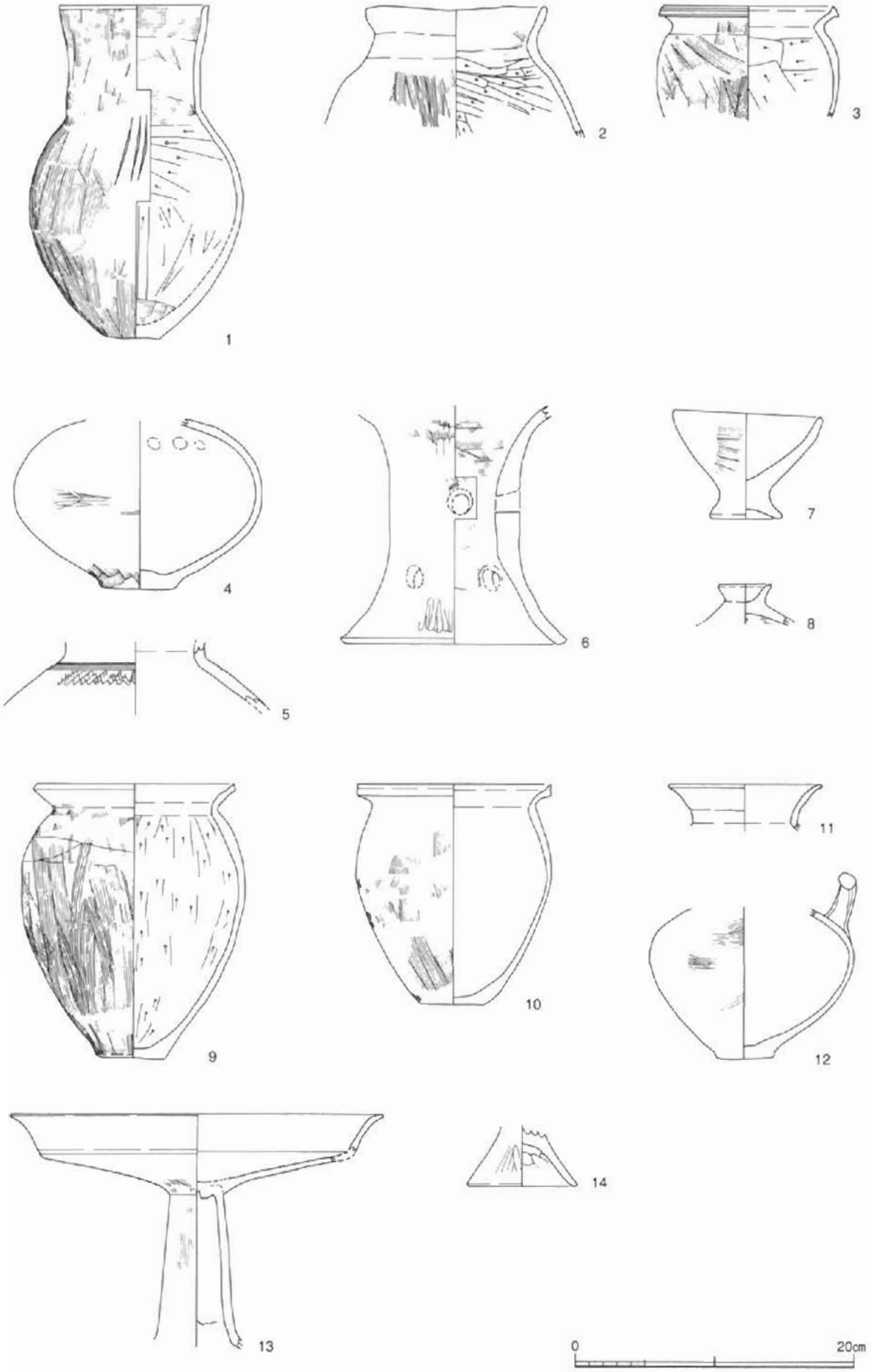
A地区SK27・近世墓地

P20
P25
SK16
P26
P06
A
P01
P22
P28
A′
SK01
B
P02
P14
B′
P19
SK02
P21
P18
P27
P04
64.0m
A
A′
64.0m
B
B′
0
4m

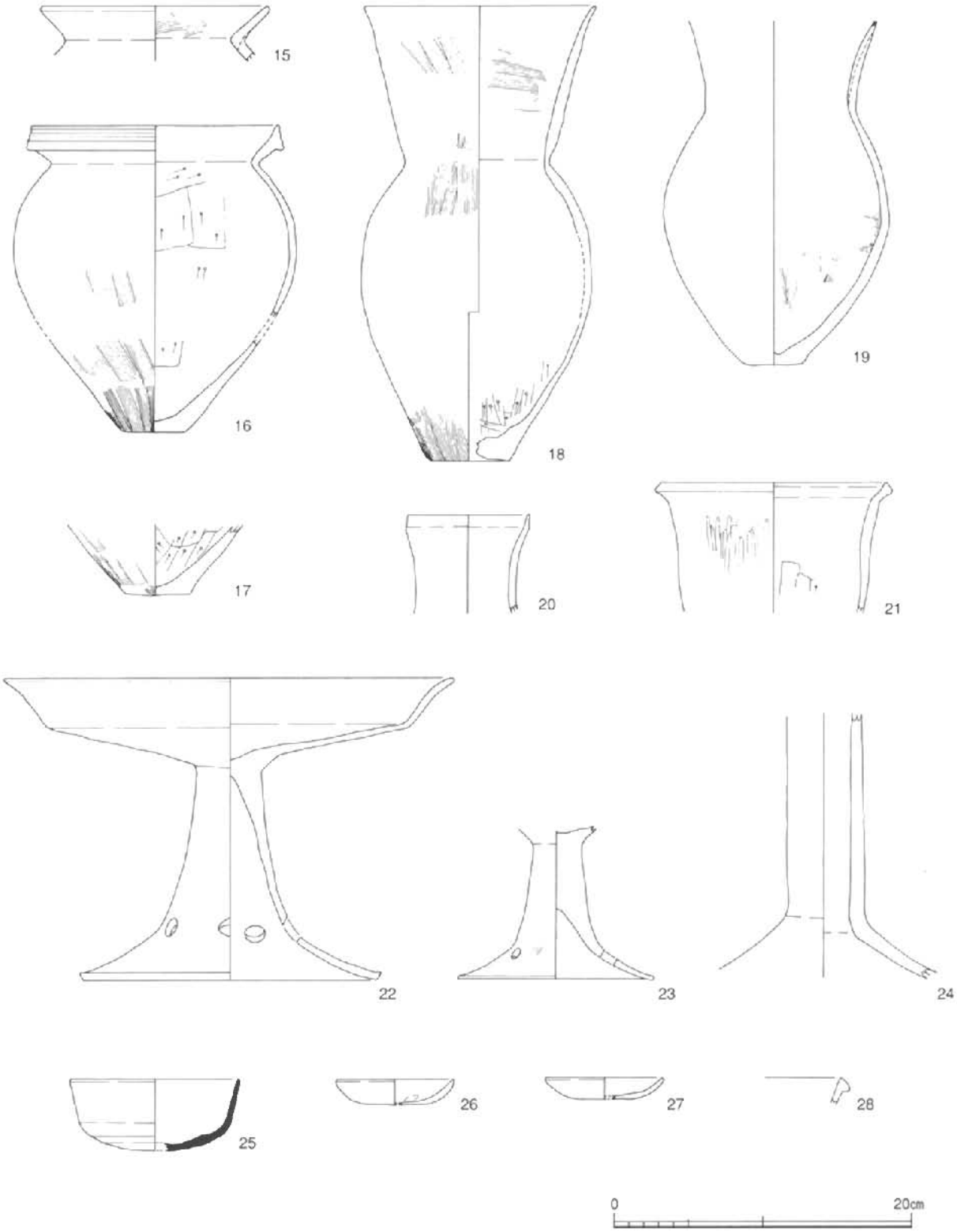
B地区西北部ピット群


SK01
64.0m
1
1. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂
SK02
64.0m
1
1. 10YR4/4　褐　シルト質極細砂
SK07
63.5m
SK08
1. 2.5Y4/1　黄灰　シルト質極細砂
(小礫・ベースのブロックを含む)
63.5m
1
B
B'
A
A'
SK06
63.5m
2
1
1. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂(炭を含む)
2. 10YR6/1　褐灰　シルト
B
63.5m
B'
0
2m
SK13
63.5m
SK15
63.5m
0
50cm

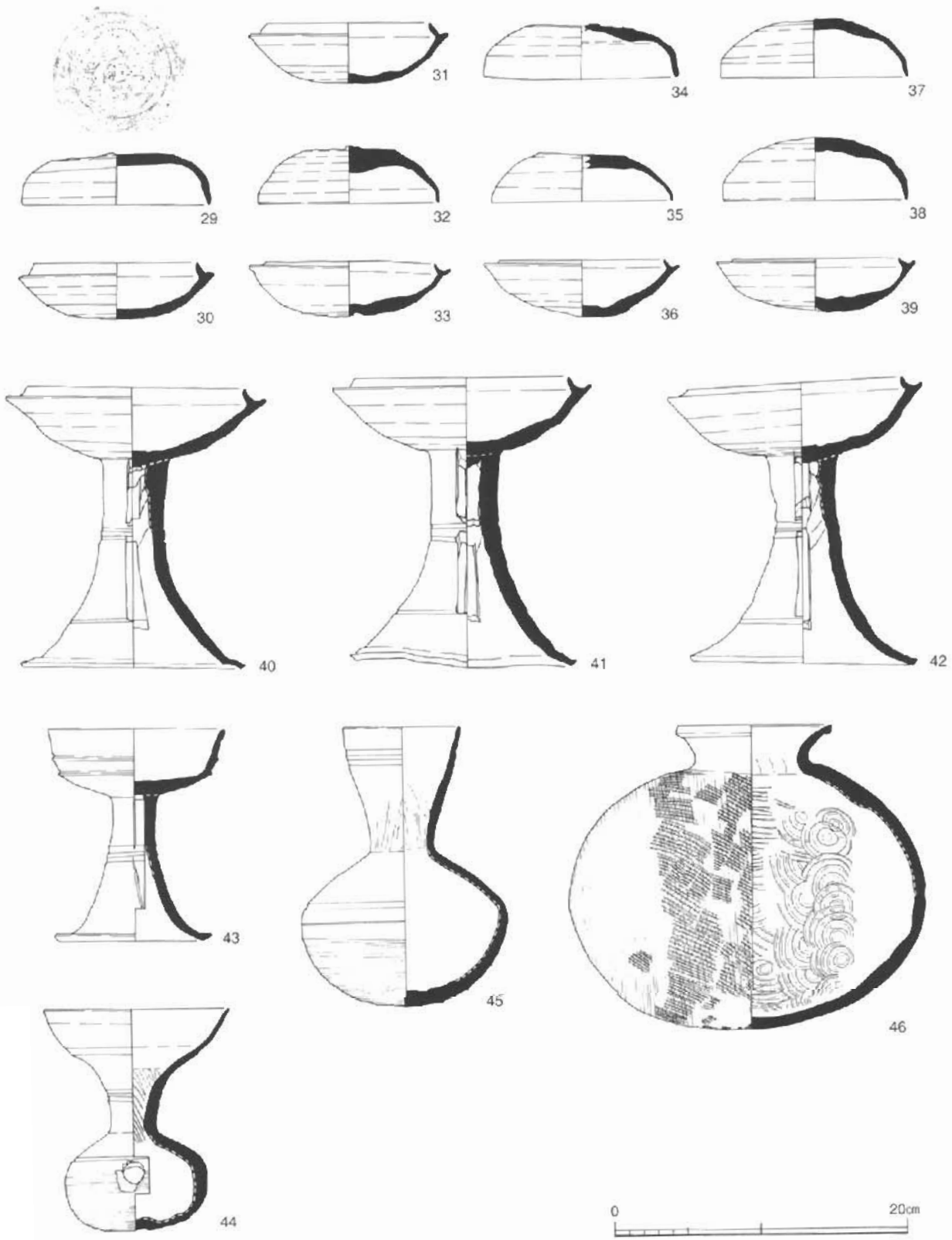
B地区土坑



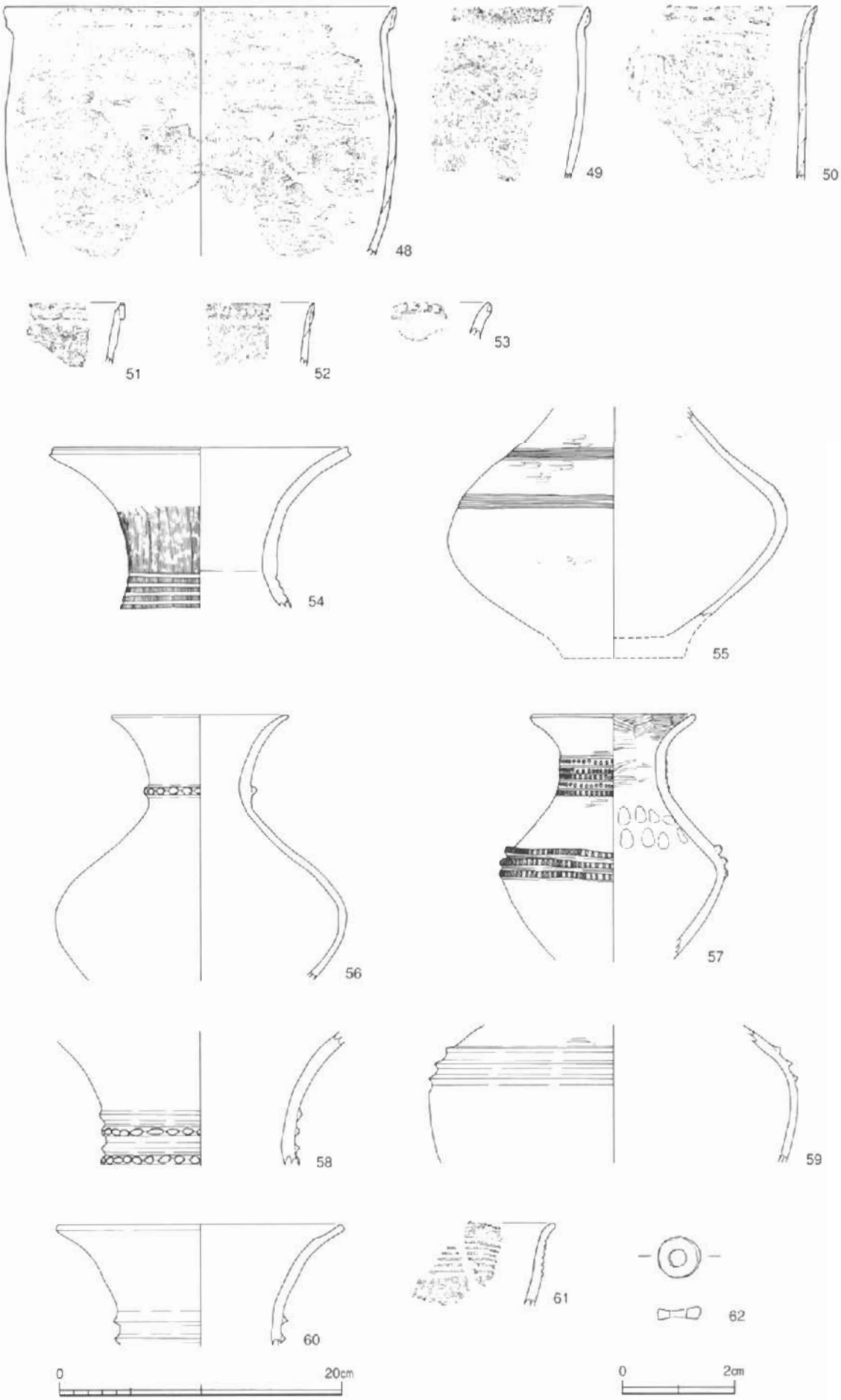
SH01～03出土遺物



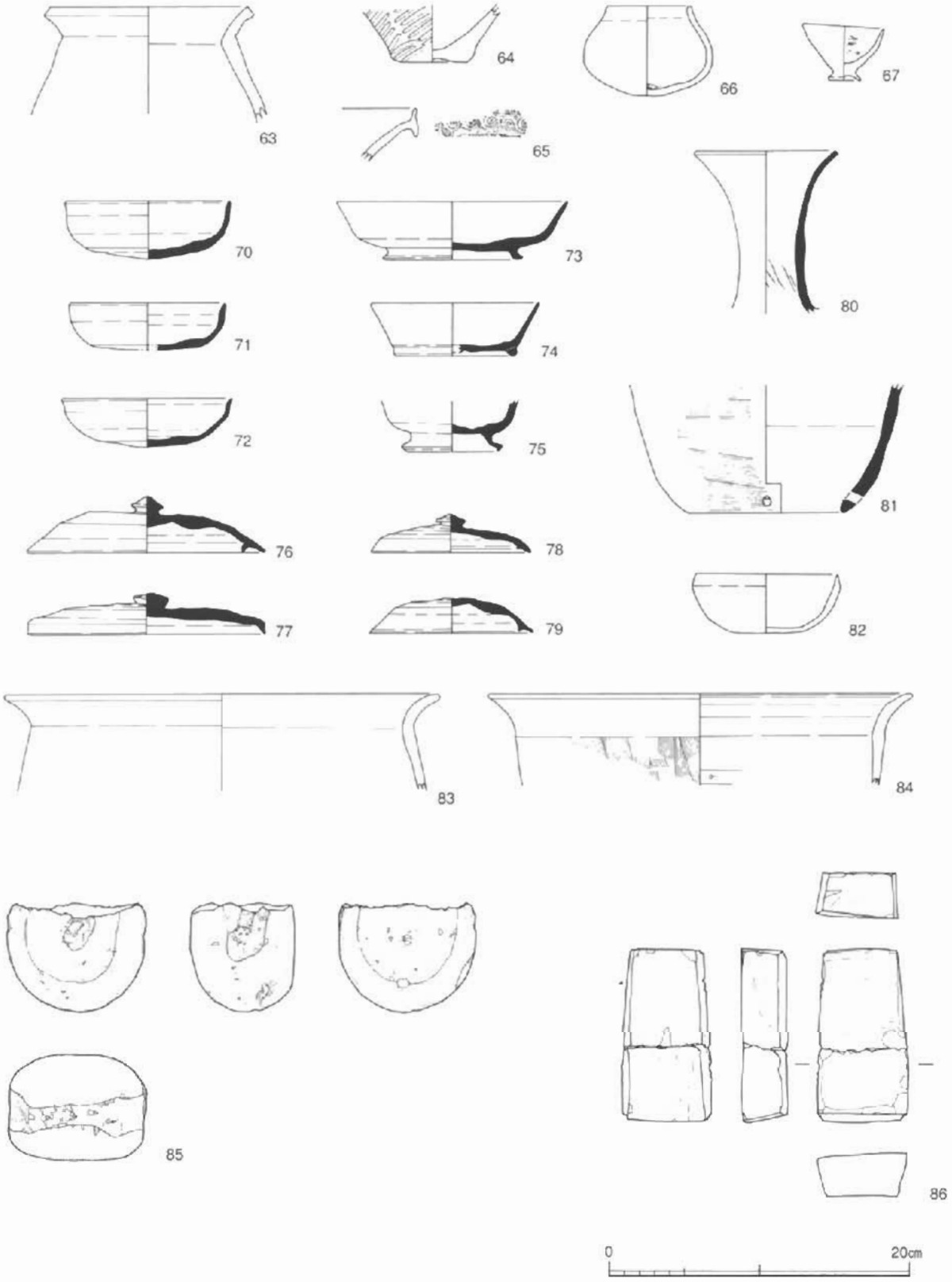
SH04・ピット出土遺物



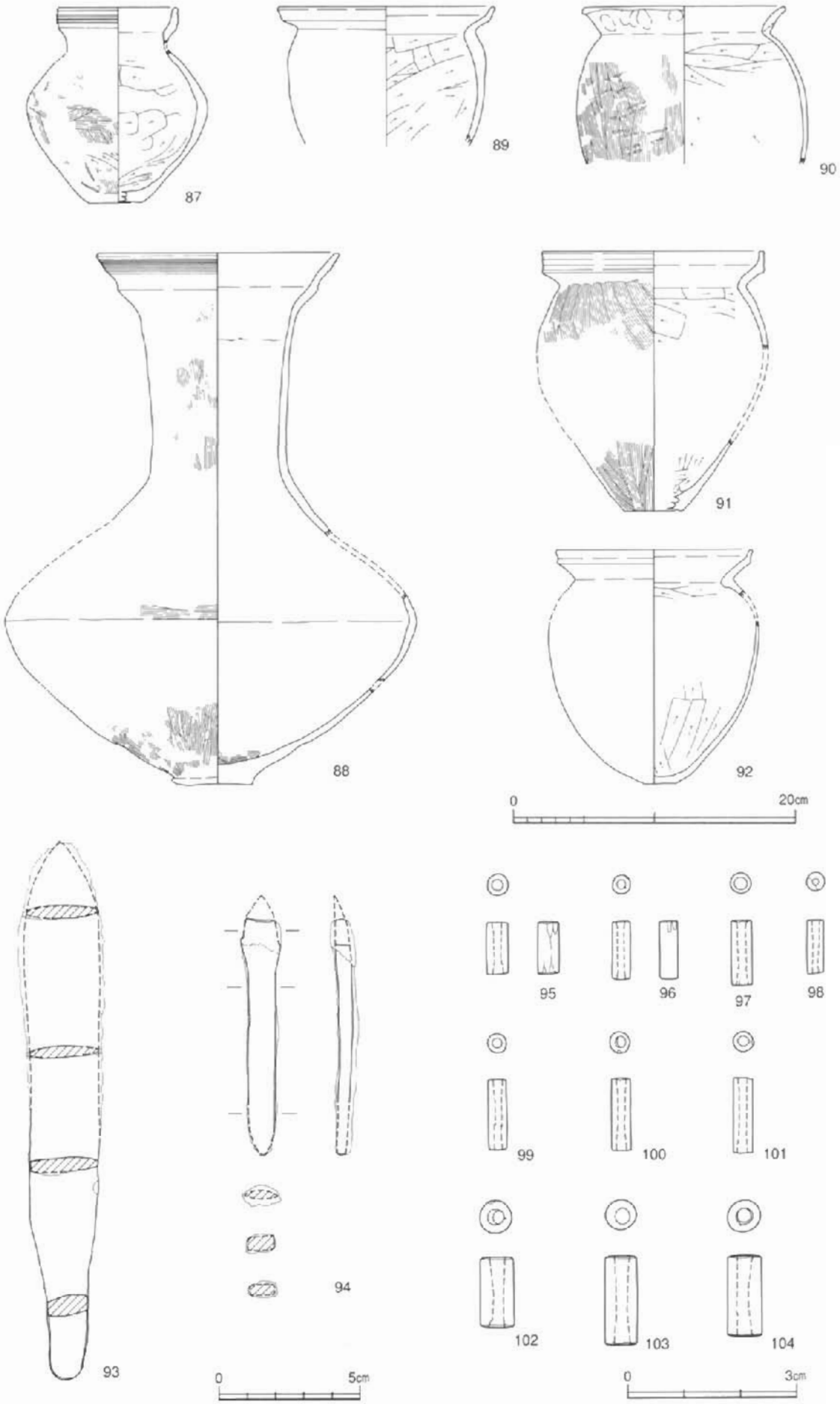
SK10出土遺物



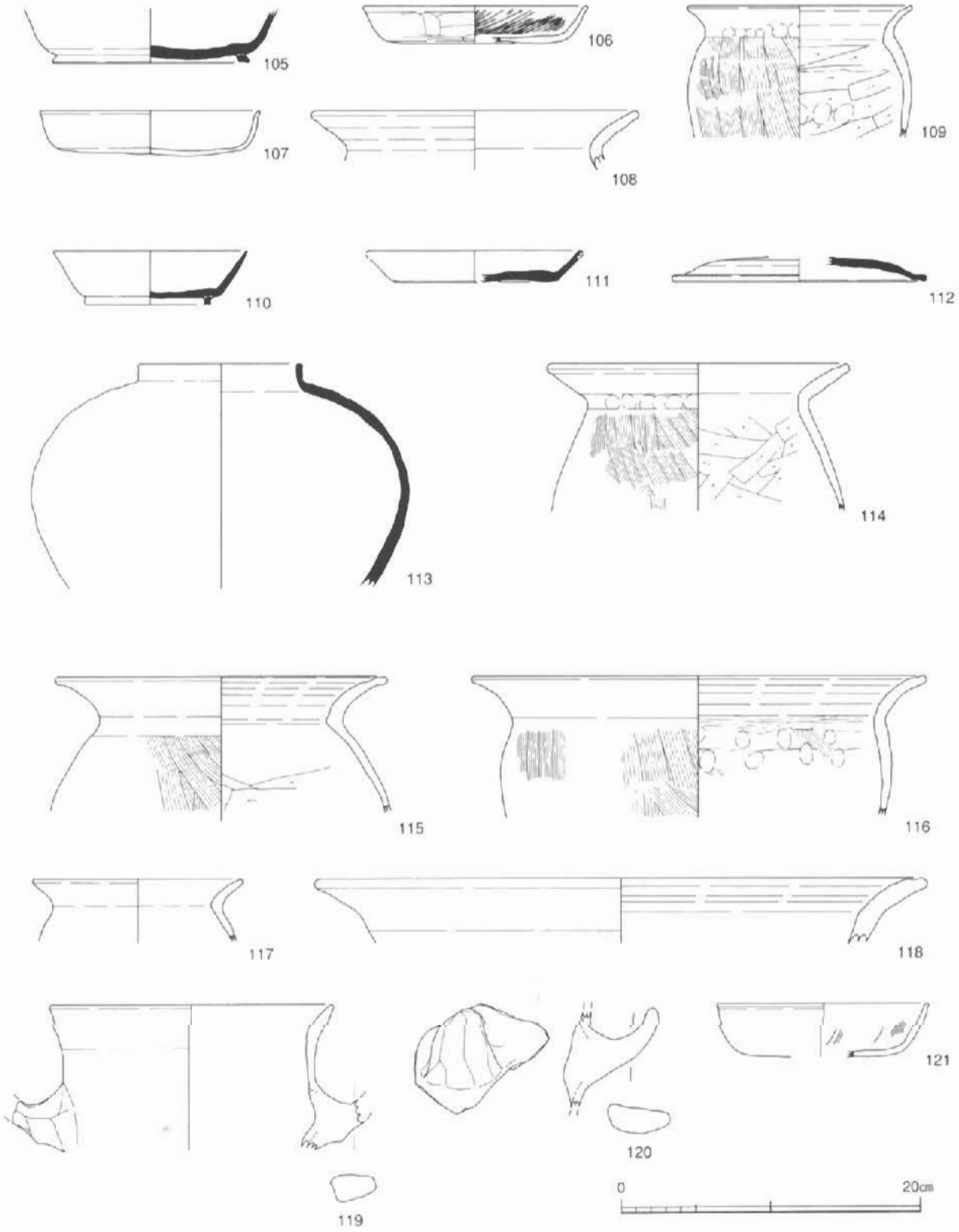
落ち込み・包含層出土遺物



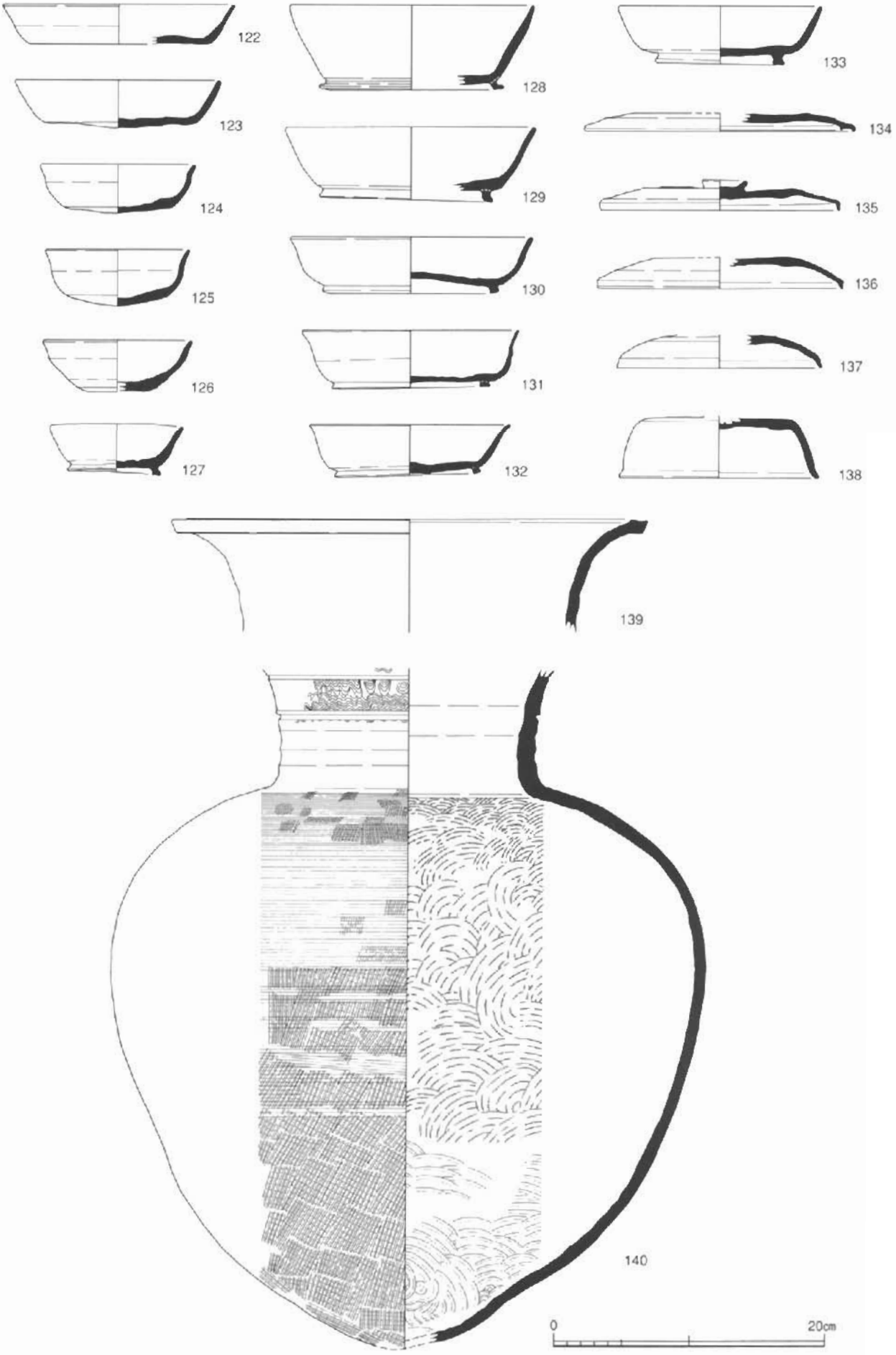
包含層出土遺物



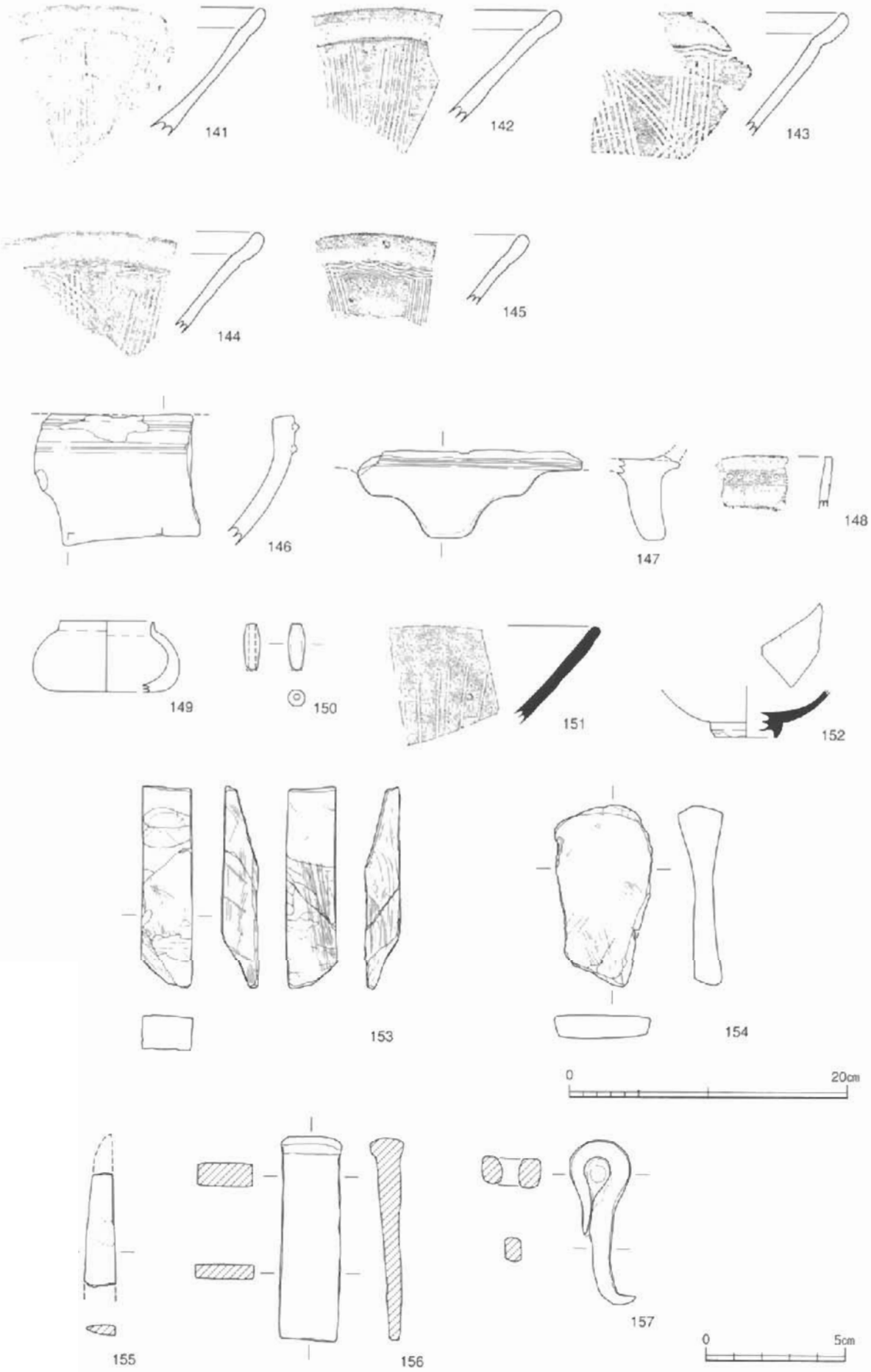
A地区弥生墳墓群出土遺物



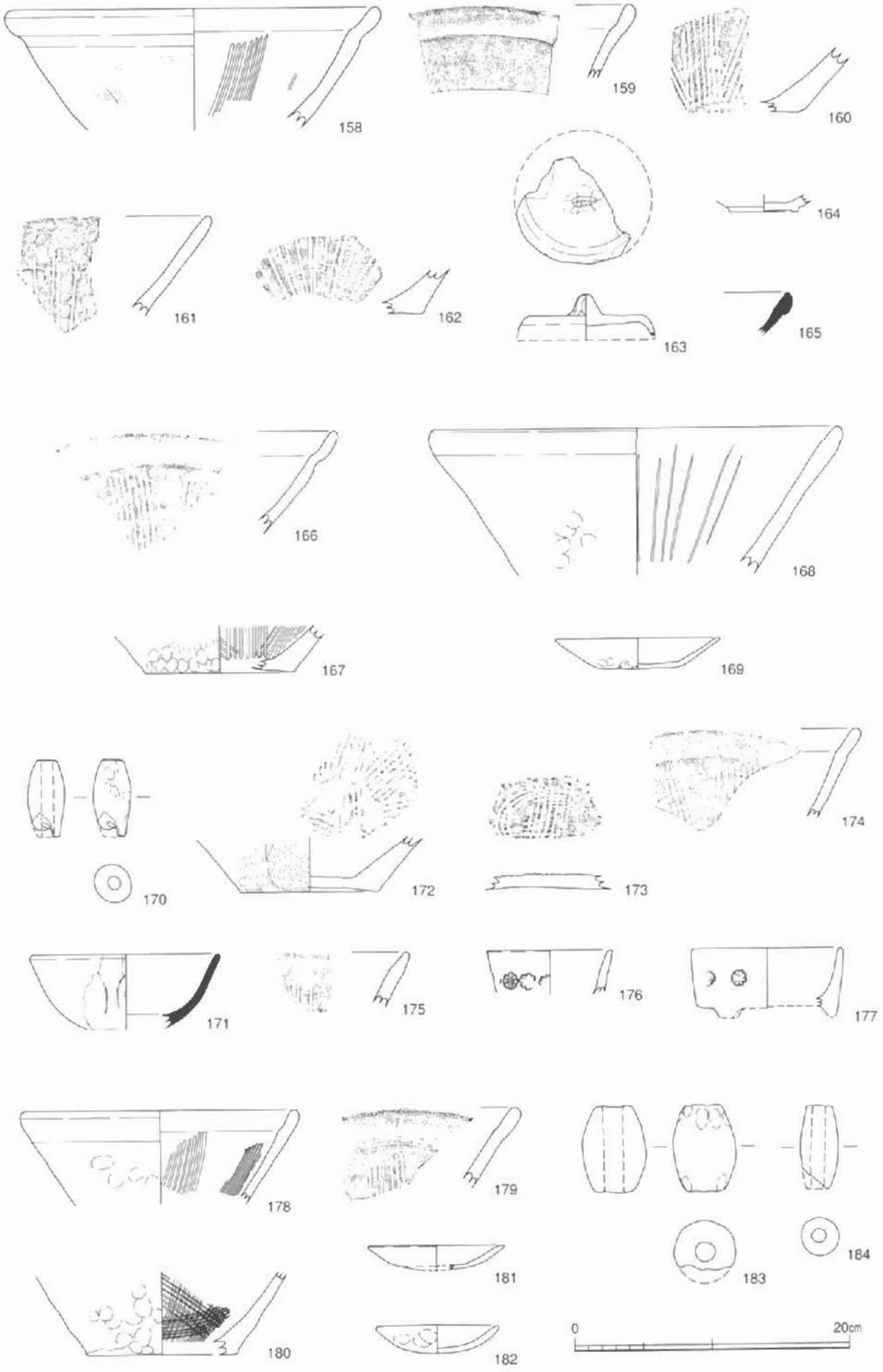
A地区SH01・SK02出土遺物



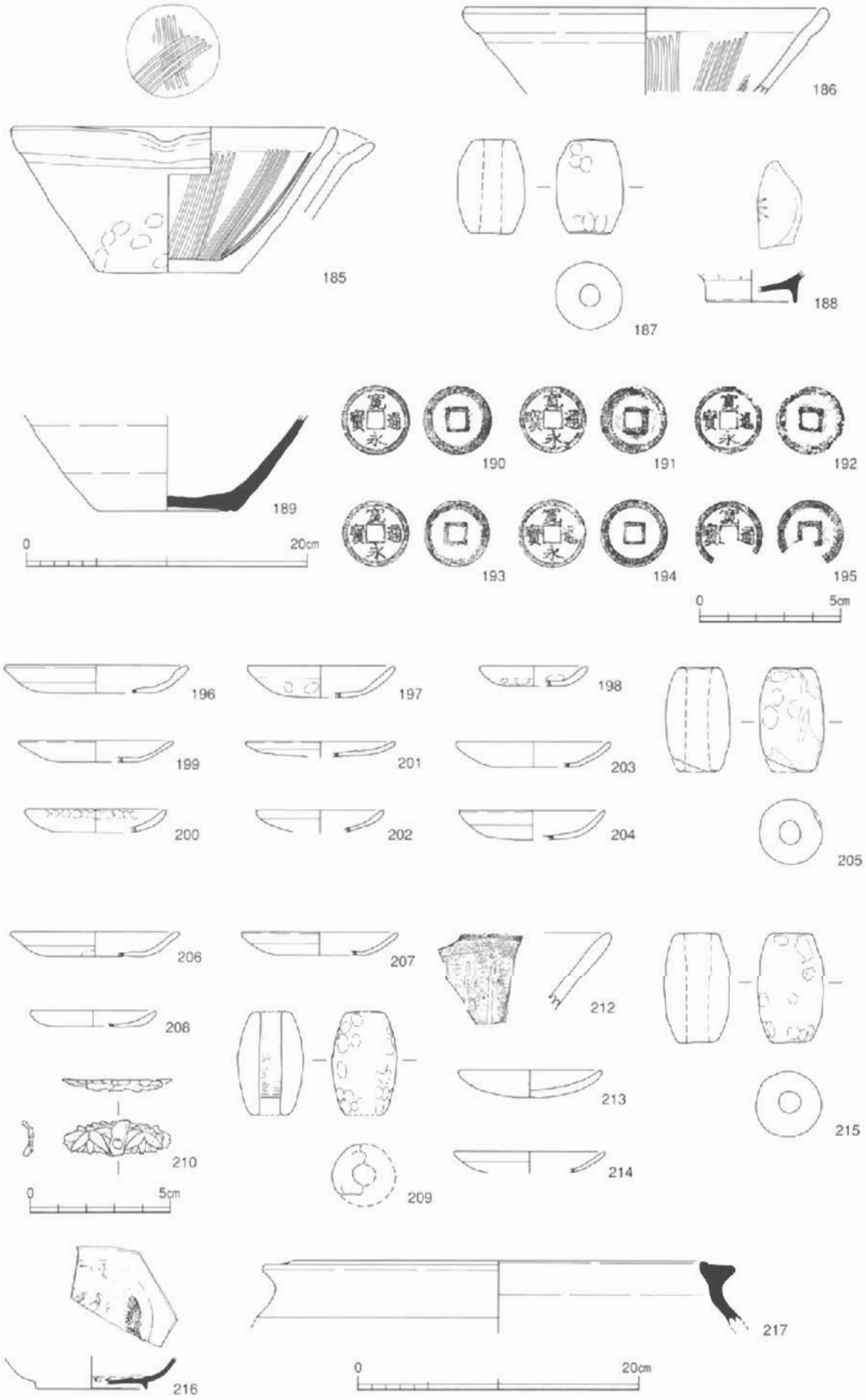
A地区SK02出土遺物



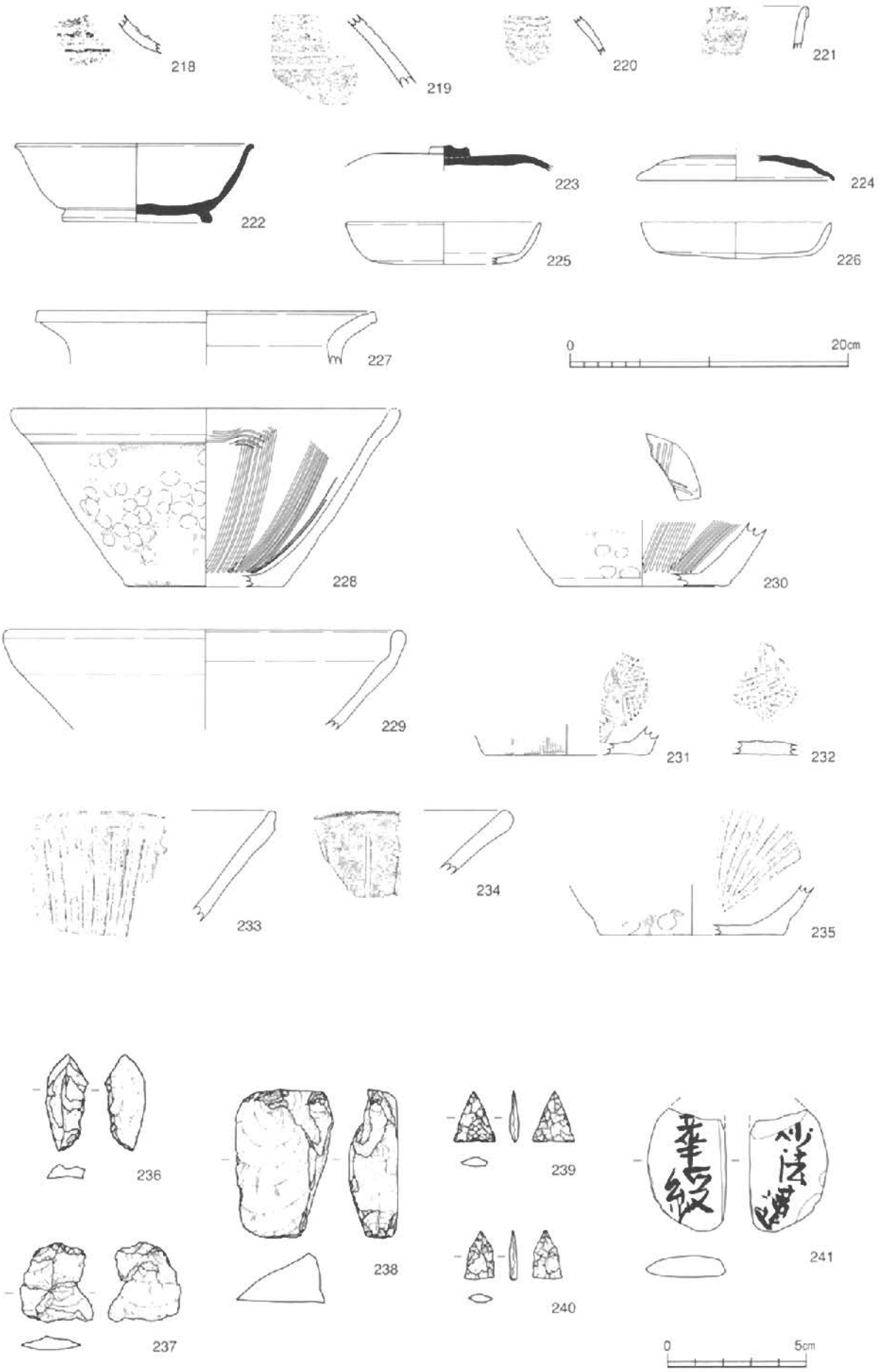
A地区SD01出土遺物



A地区溝・井戸・土坑出土遺物



A地区溝・土坑出土遺物
B地区ピット・土坑出土遺物


218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
0
20cm
228
230
229
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
0
5cm

包含層出土遺物

写真図版

調査地全景

調査地遠景（南から）

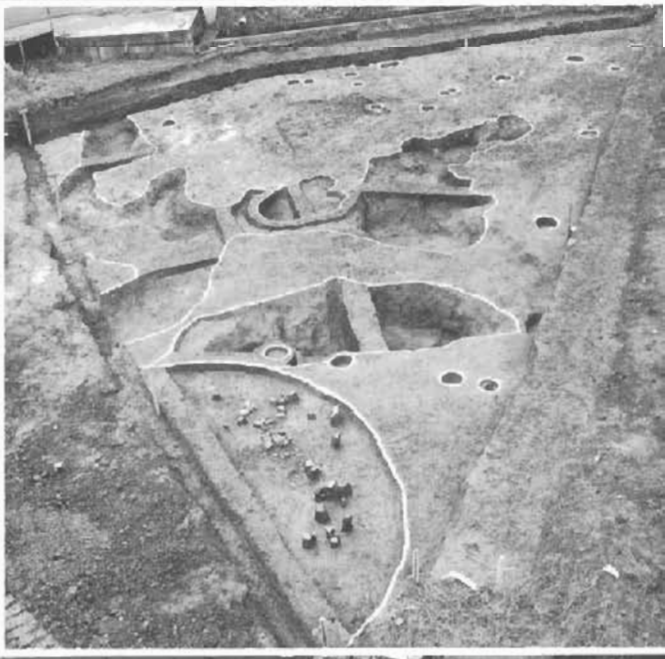
調査地遠景（北から）

調査地遠景（南から）

調査地遠景（東から）

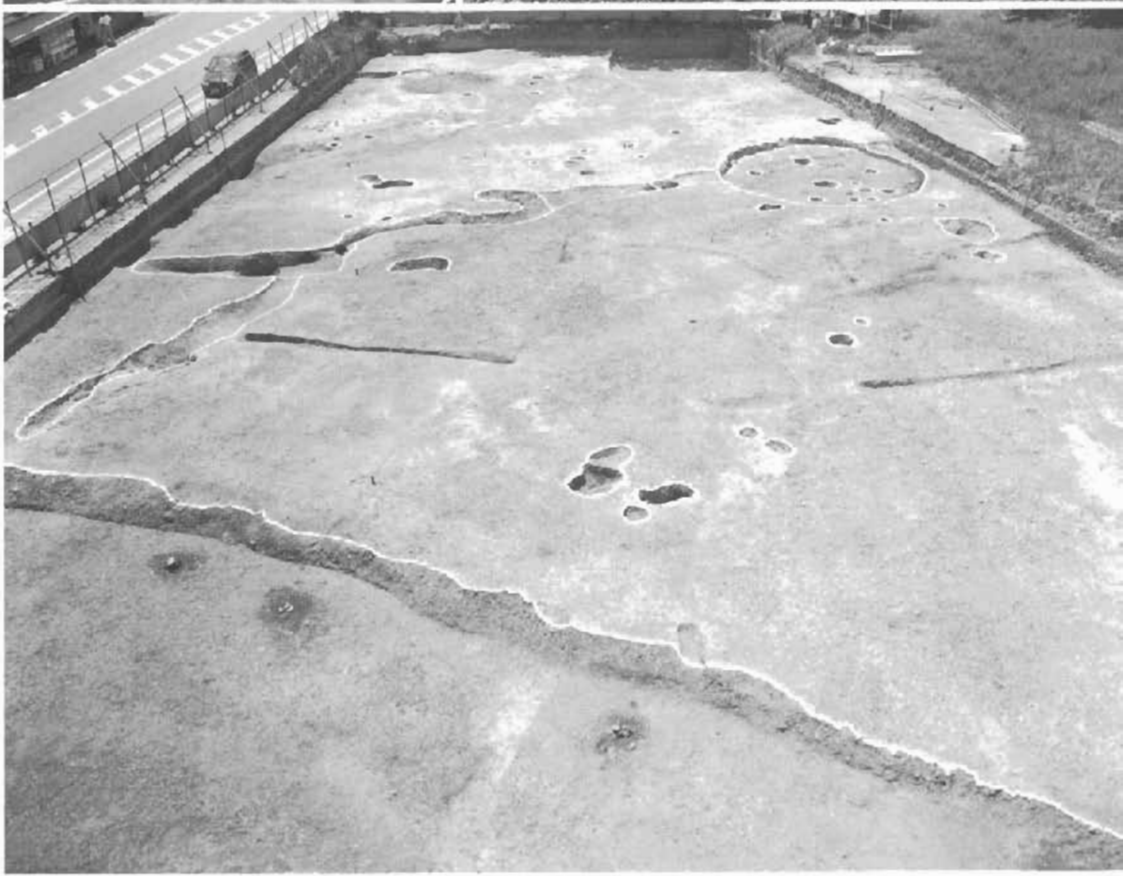
A・B地区全景

A地区全景（北から）

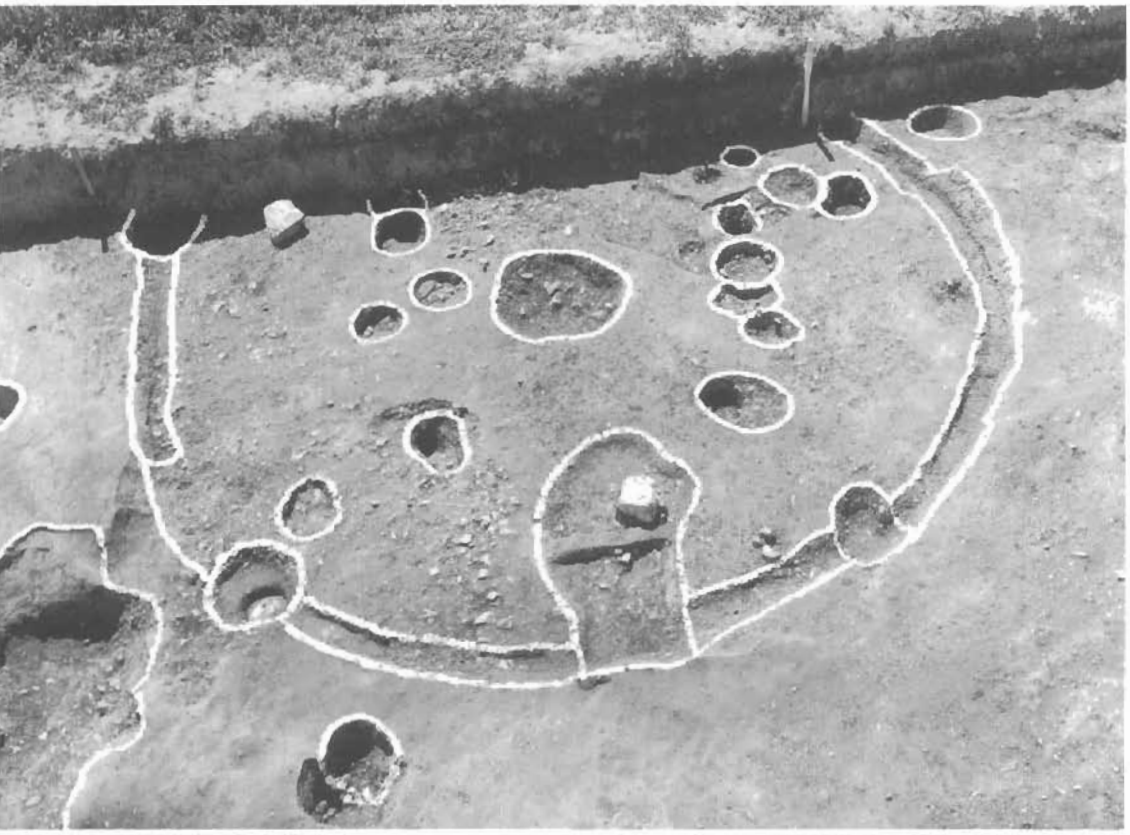


左
A地区全景（南から）

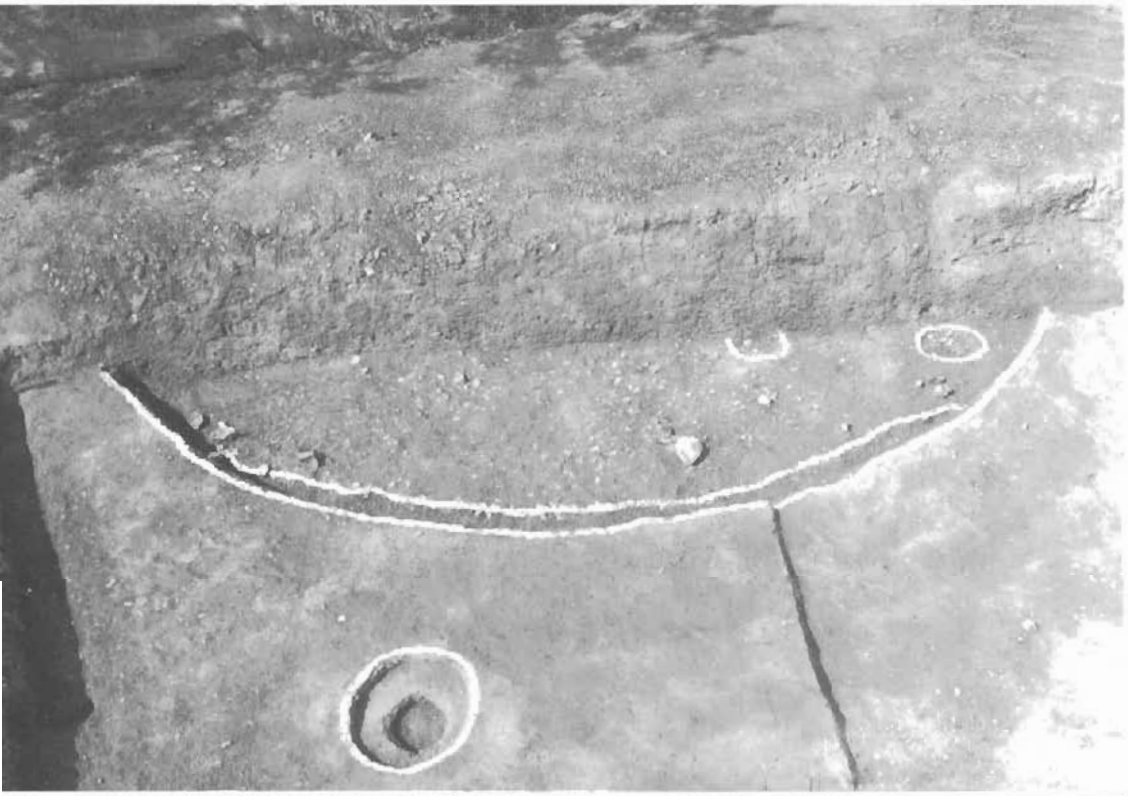
右
C地区全景（北から）



B地区全景（北から）



SH02（東から）



SH03（南から）

左
SH03
土器出土状況（南から）

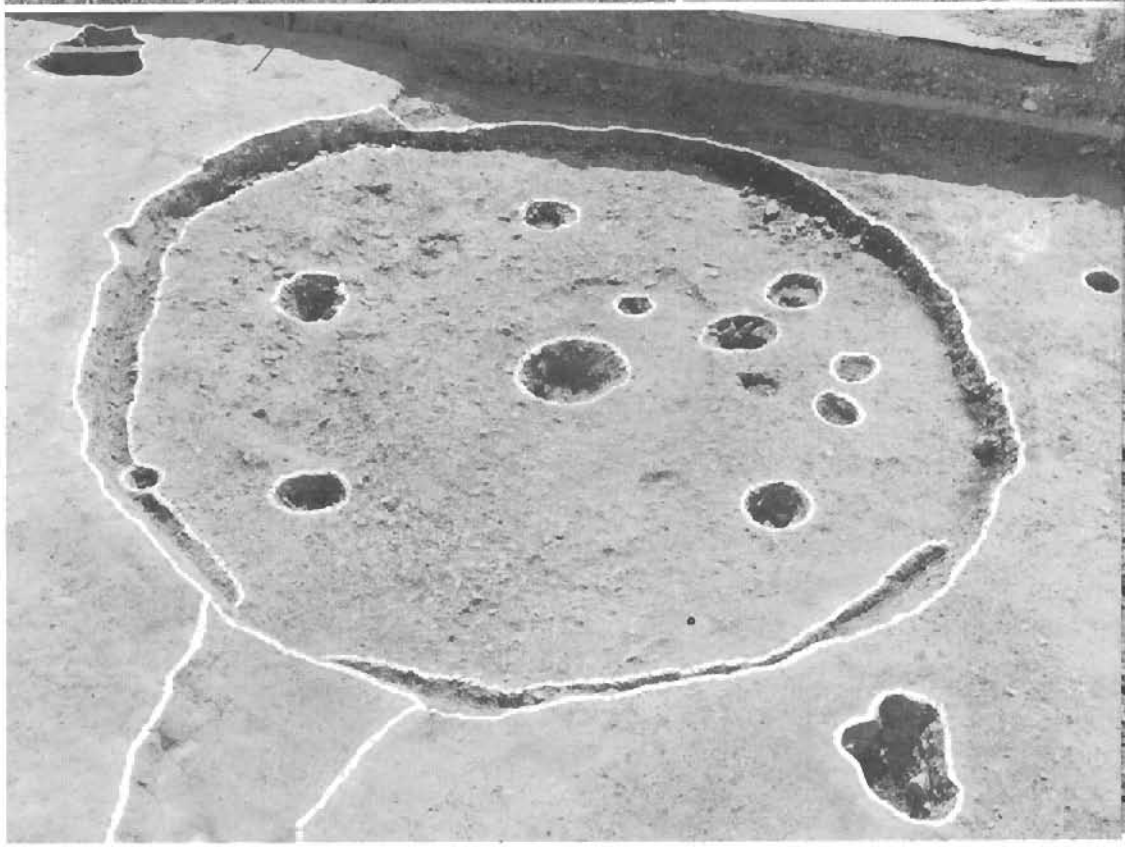
右
SH03
土器出土状況（東から）

左
SH04（南から）

右
SH04
土器出土状況（南から）

左
SH04
土器出土状況（南から）

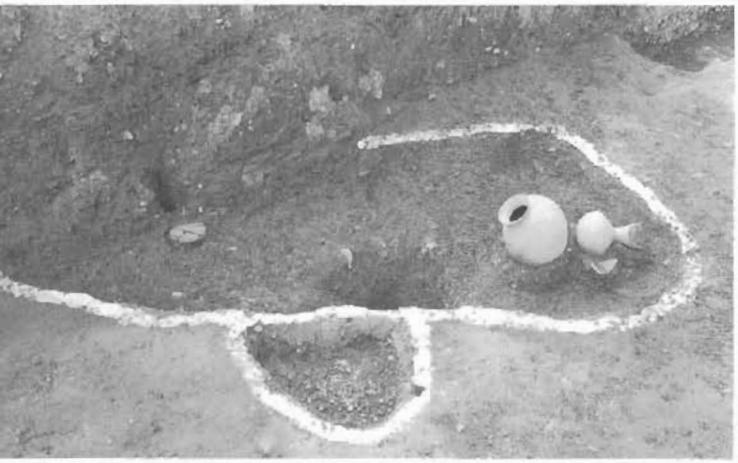
右
SH01
土器出土状況（南から）



SH01（東から）

左
SB01（南から）

右
SB02（北から）



左
SK10東半（東南から）

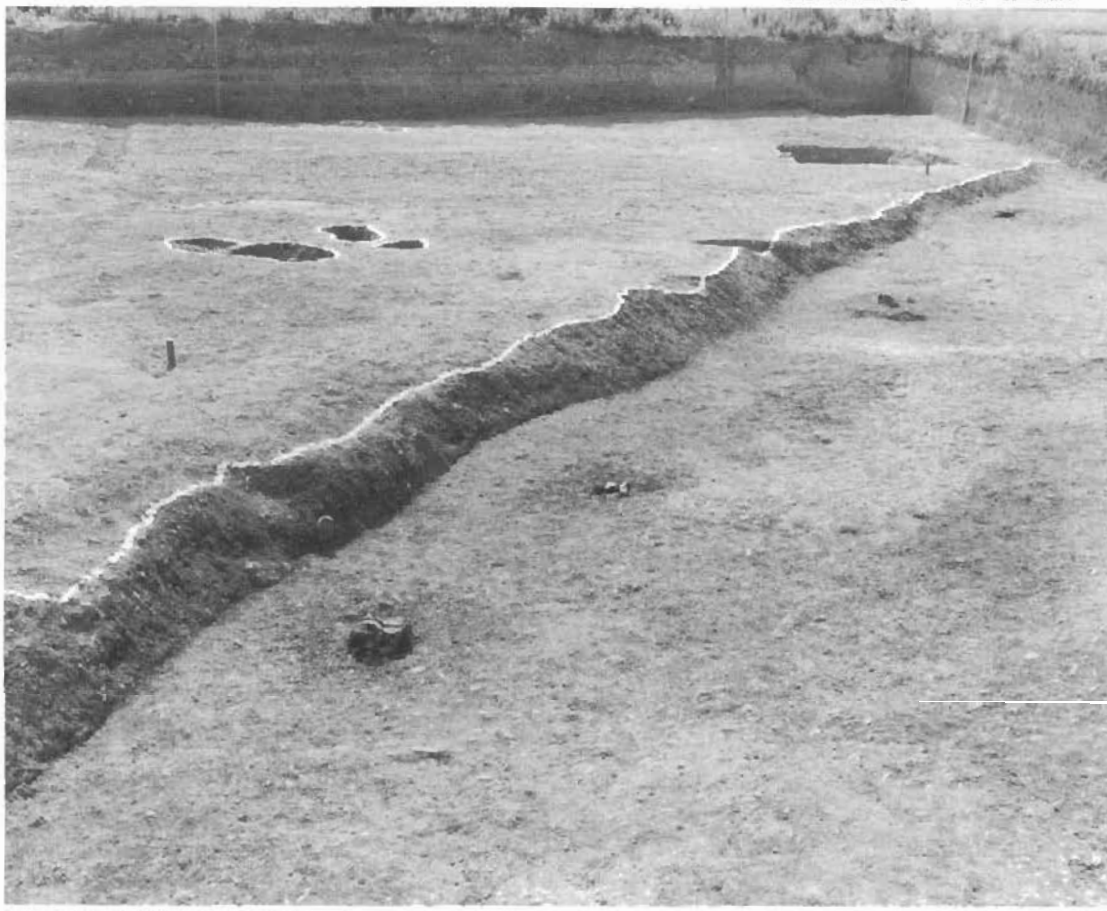
右
SK10東半（東北から）

左
SK10西半
土器出土状況（東南から）

右
SK10西半
土器出土状況復元（東南から）

左
SK10
土器出土状況復元（東南から）

右
SK10
土器出土状況復元（東北から）



落ち込み（東から）

左
落ち込み
土器55出土状況（西から）

右
落ち込み
結晶片岩様緑色岩製
小玉出土状況（北から）

左
落ち込み
土器56出土状況（西から）

右
落ち込み
土器57出土状況（西から）

写真図版10　上ノ段遺跡

遠景（東から）

A地区全景（南から）

B地区全景（南から）

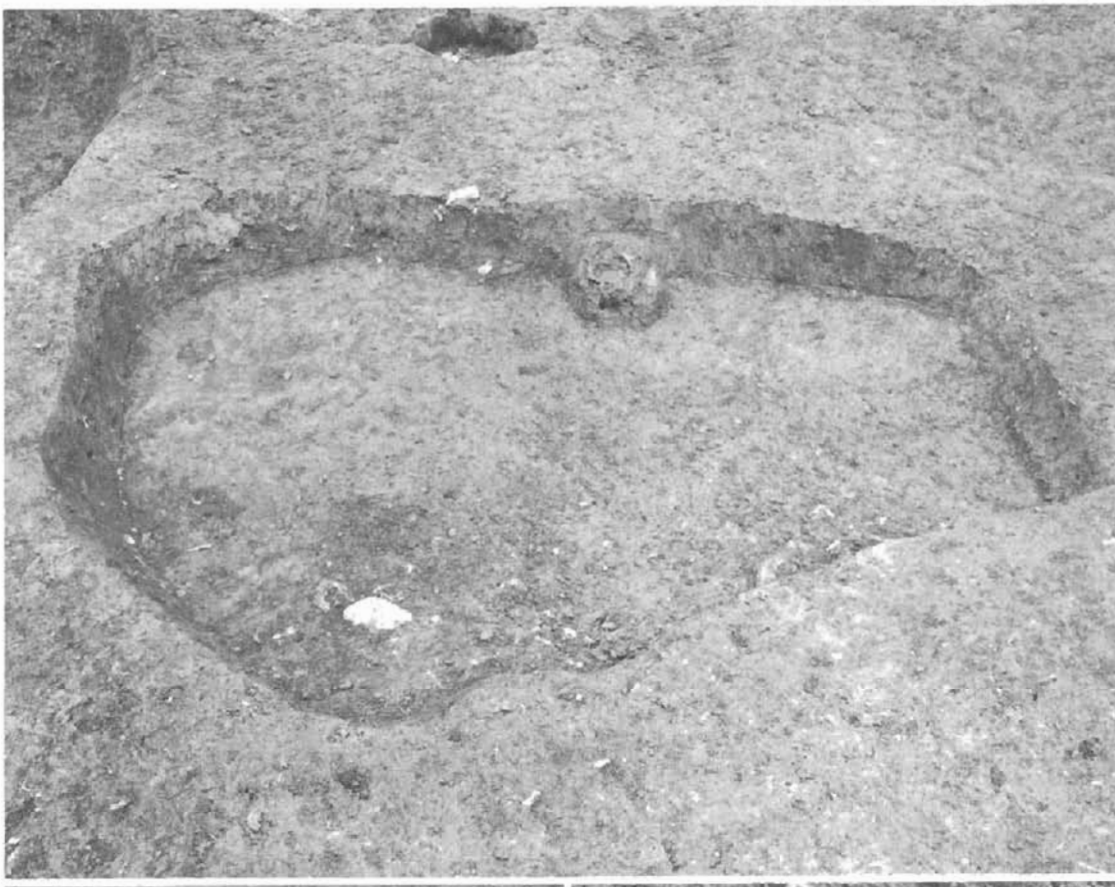
A地区墳墓群全景（西から）

A地区周溝墓（北から）

A地区周溝墓主体部
（西から）

A地区周溝墓北側周溝
（西から）

A地区周溝墓西側周溝内貼石
（南西から）



A地区周溝墓SK14
（南から）

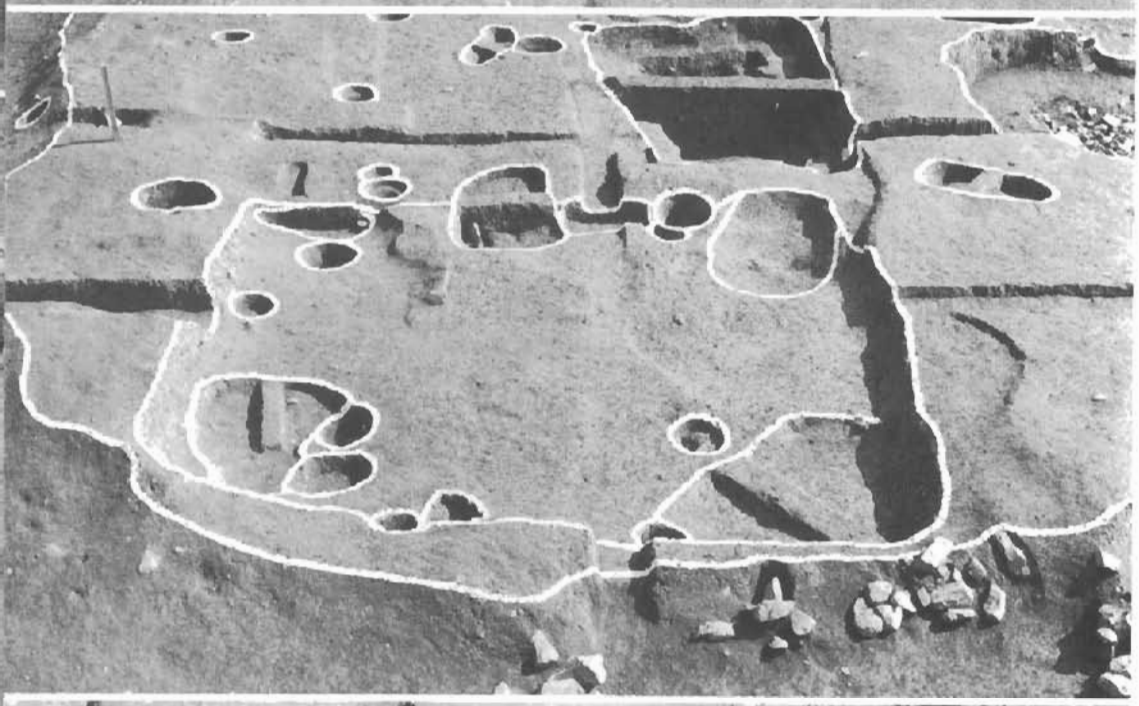
左
A地区周溝墓
SK14土器出土状況
（西から）

右
A地区周溝墓
SK14管玉出土状況
（東から）

左
A地区周溝墓SK15
（北から）

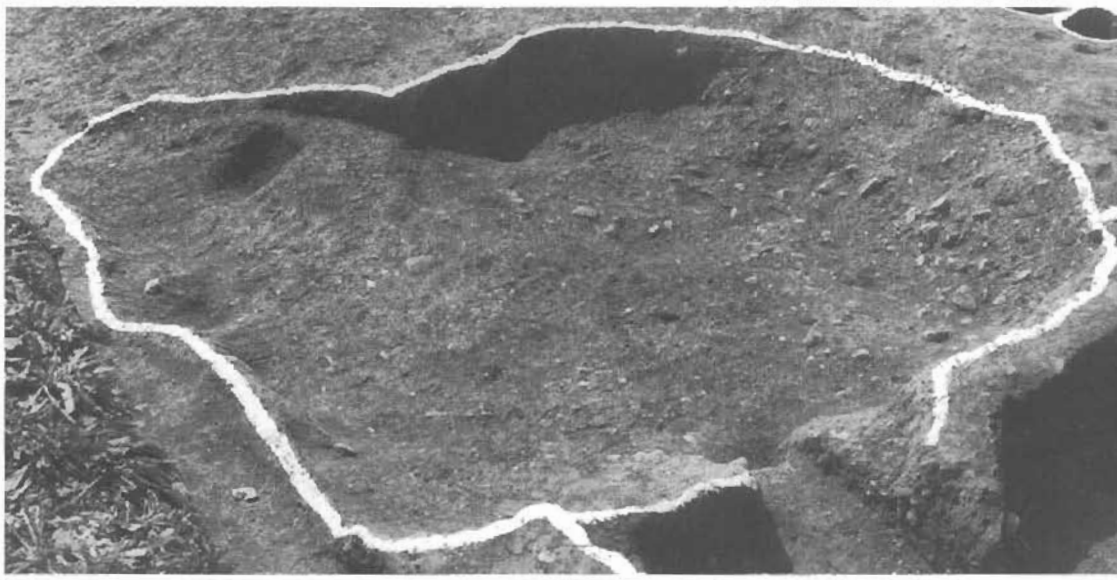
右
A地区周溝墓SK20
（西から）

A地区周溝墓SH01
（南から）



A地区周溝墓SH01
（西から）

A地区周溝墓SH01カマド
（西から）



A地区SK01（北から）

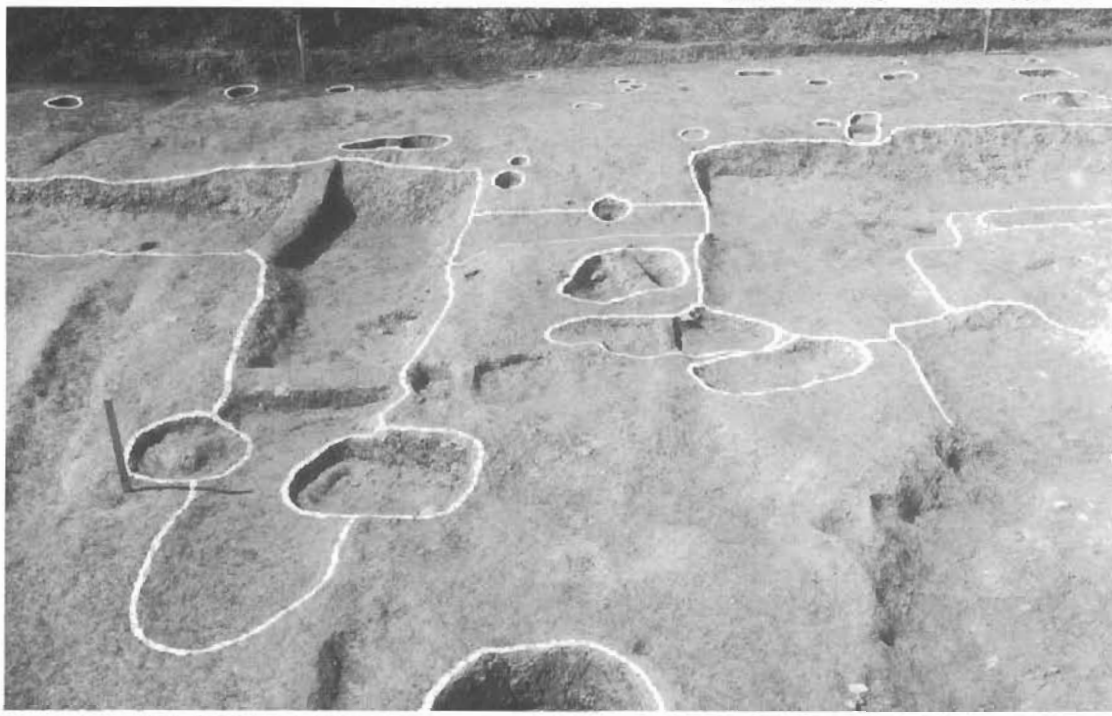
A地区SK02（東から）

A地区SK02
土器出土状況
（西から）

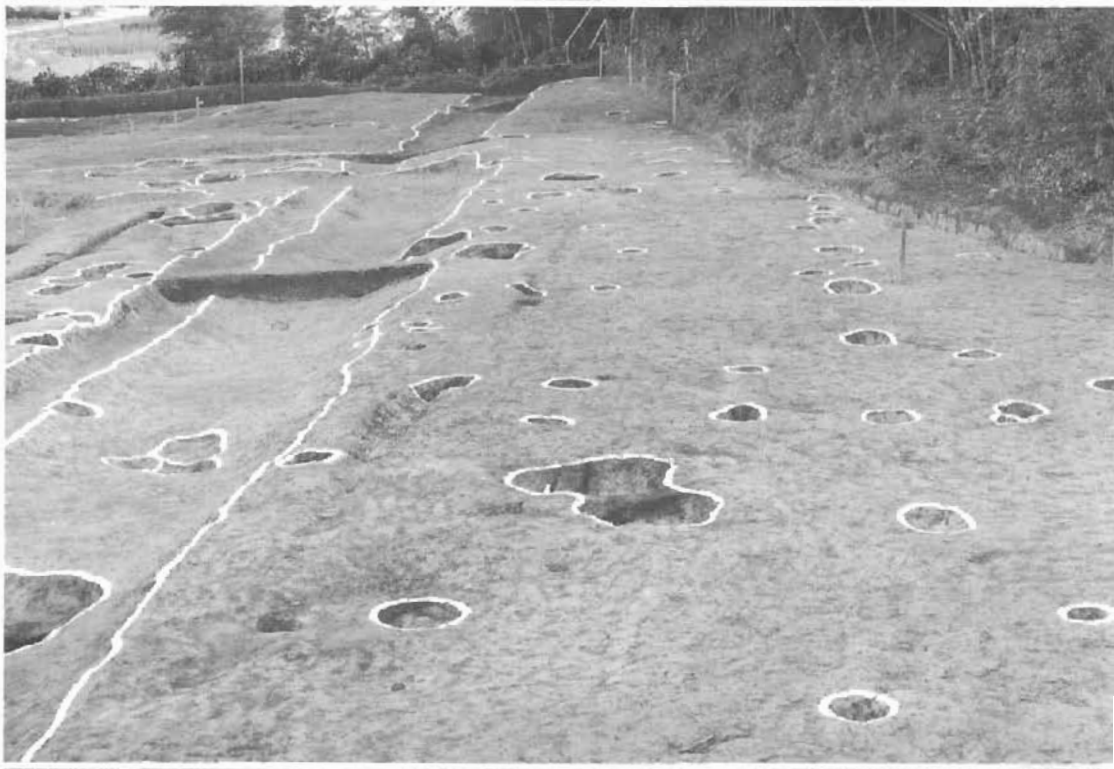
A地区東部（北から）

A地区北部（南から）

A地区SD01（南から）

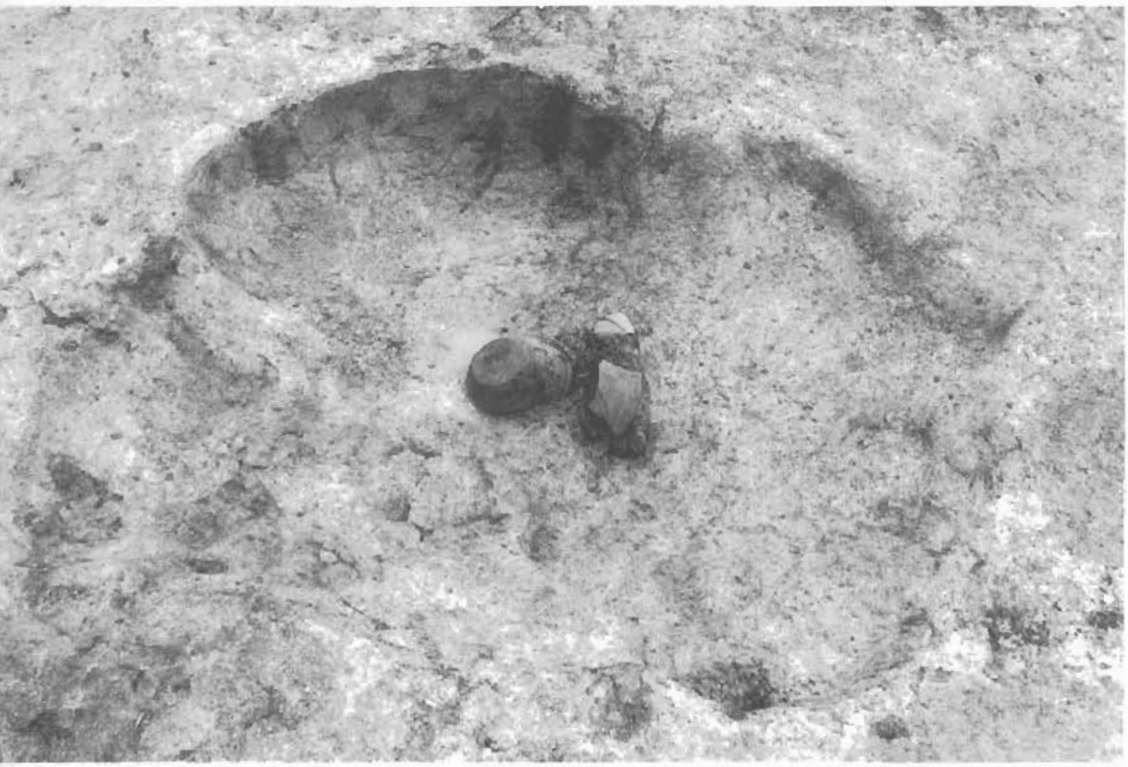


A地区SD01・02
入口部（東から）

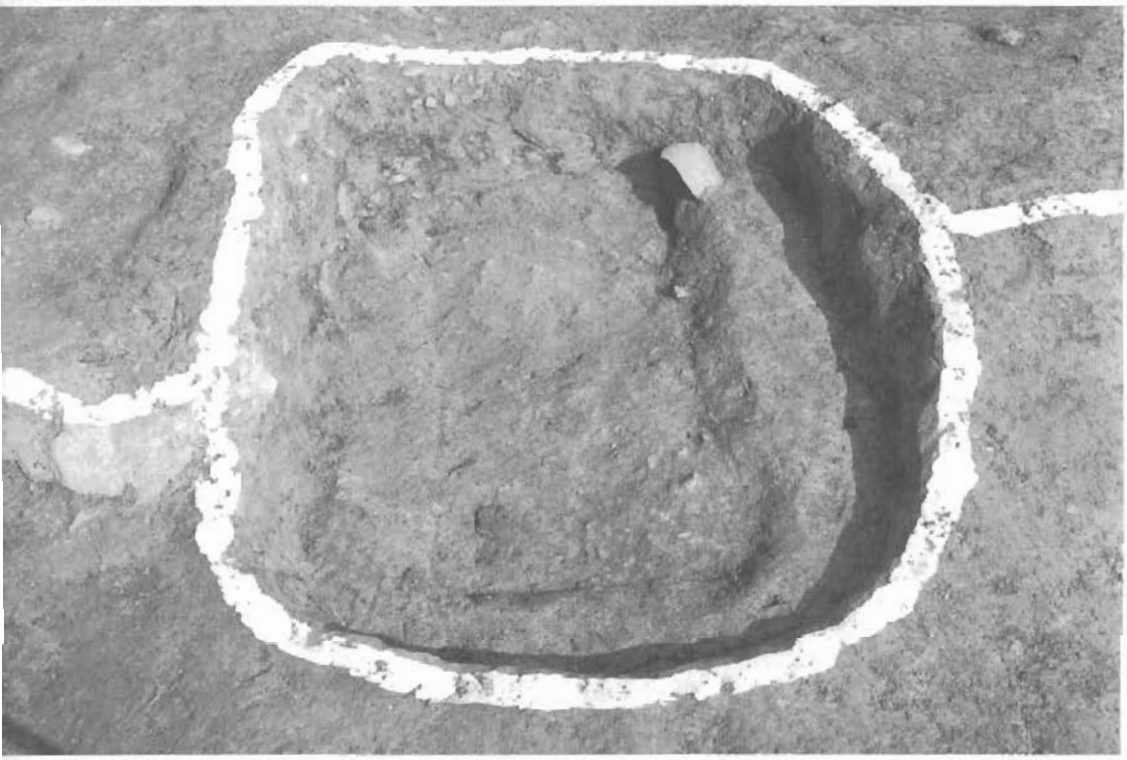


A地区東部ピット群
（北から）

A地区西部ピット群
（西から）



A地区SK24（東から）

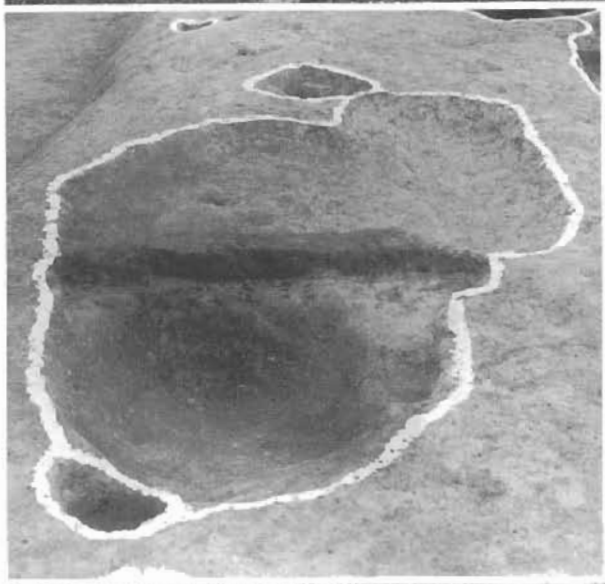


A地区SK27（南から）

左
A地区SK27
銅銭出土状況（南から）

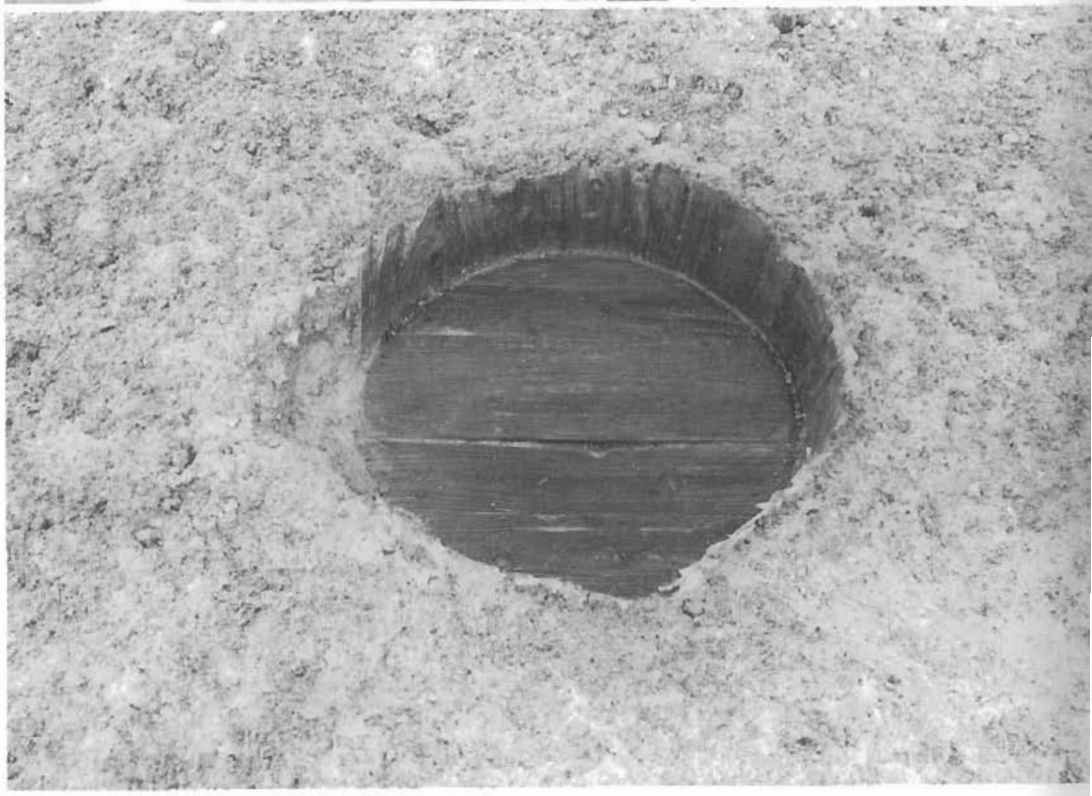
右
A地区SE01（東から）

B地区西北部ピット群
（西から）



左
B地区SK01（北から）

右
B地区SK02（北から）



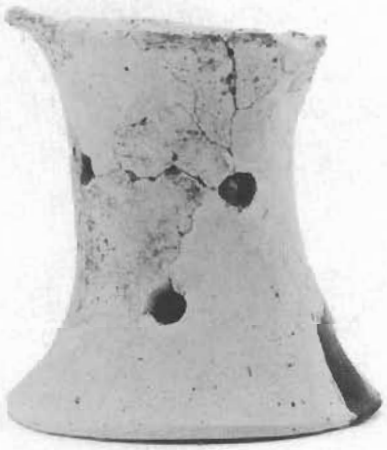
B地区SK16（南から）

1

2

3

4


6

5

8

7

SH01・02出土遺物

9

10

11

12

14

13

16

15

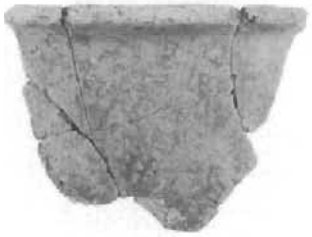
SH03・04出土遺物

18

19

17

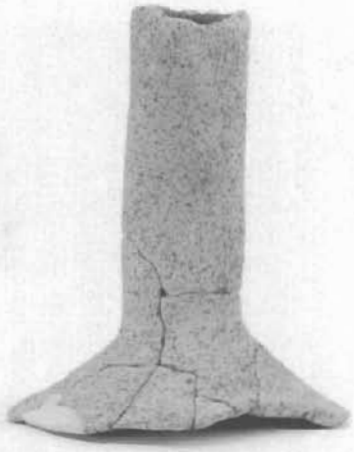
20


21

22

SH04出土遺物

23



24

29

30

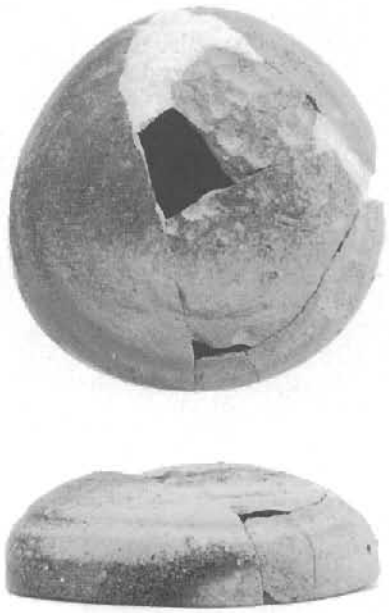
31

32

SH04・SK10出土遺物

33

36



35

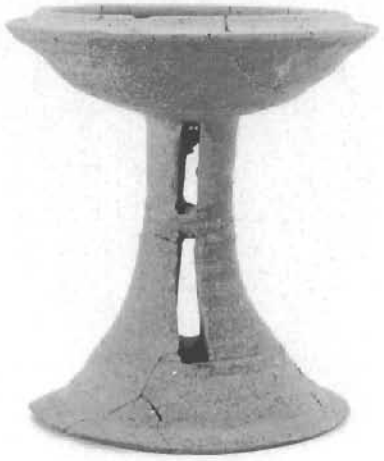
34

SK10出土遺物

37

38

39



40

41

42

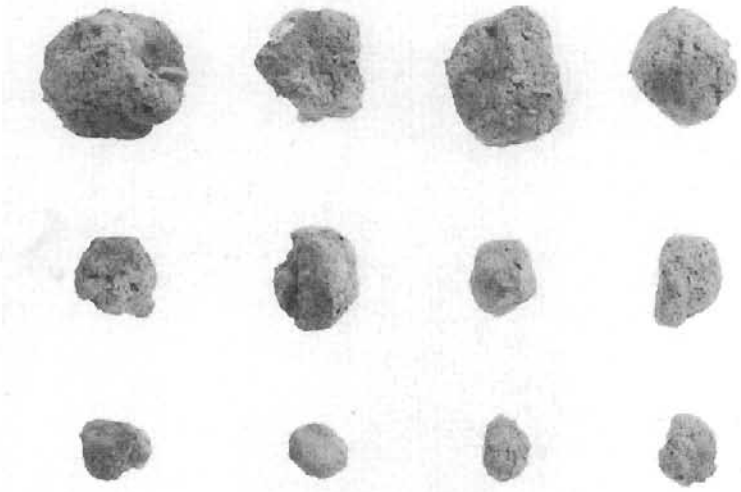
SK10出土遺物

43

44

46

45



47

SK10出土遺物

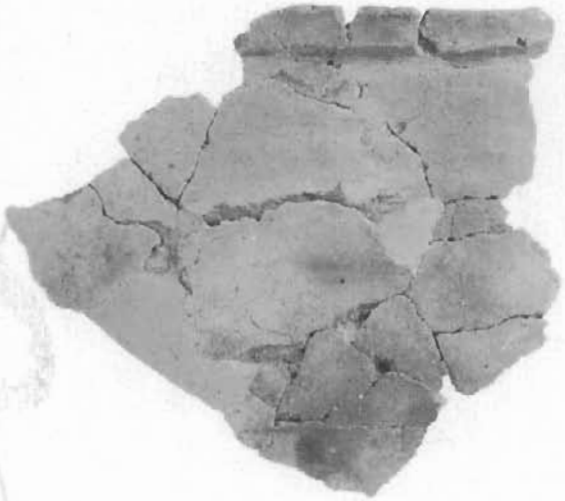
25

26

27

28

28


48

49

50

51

52

53

ピット・落ち込み出土遺物

54

55

56

57

58

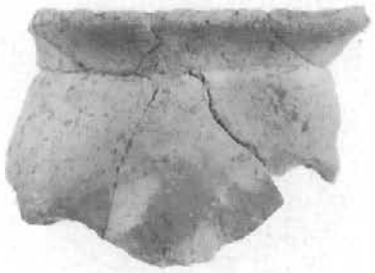
59

62

60

61

落ち込み出土遺物


63

64

66

65

68

69

67

70

71

72

73

74

75

76

77

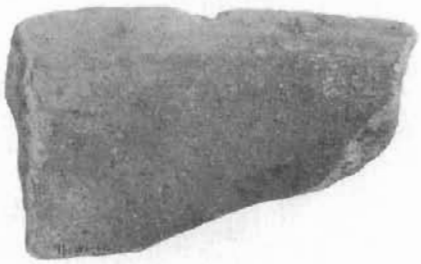
78

79

包含層出土遺物

80

81



84

82

83

85

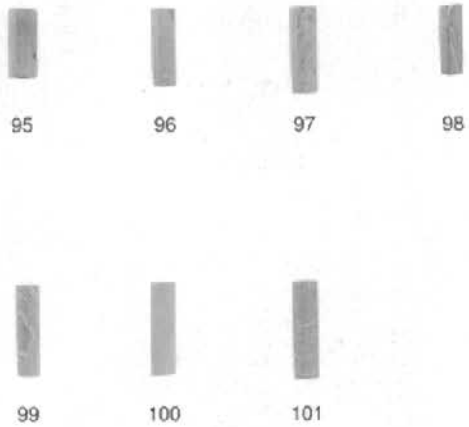
86

包含層出土遺物

87

88

93



95　96　97　98

99　100　101

90

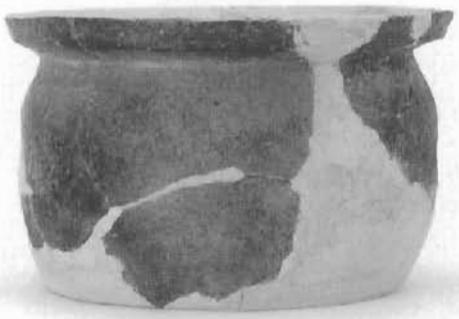
94

A地区周溝墓・SK20出土遺物

91

92

102　104　103


89

105

107

108

106

109

A地区SK14～16・SH01出土遺物

110

113

114

111

112

116

115

117

118

119

121

A地区SK01・02出土遺物

122

124

125

123

126

128

129

130

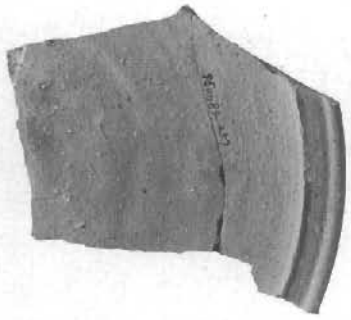
131

132

133

127

A地区SK02出土遺物



134

135

136

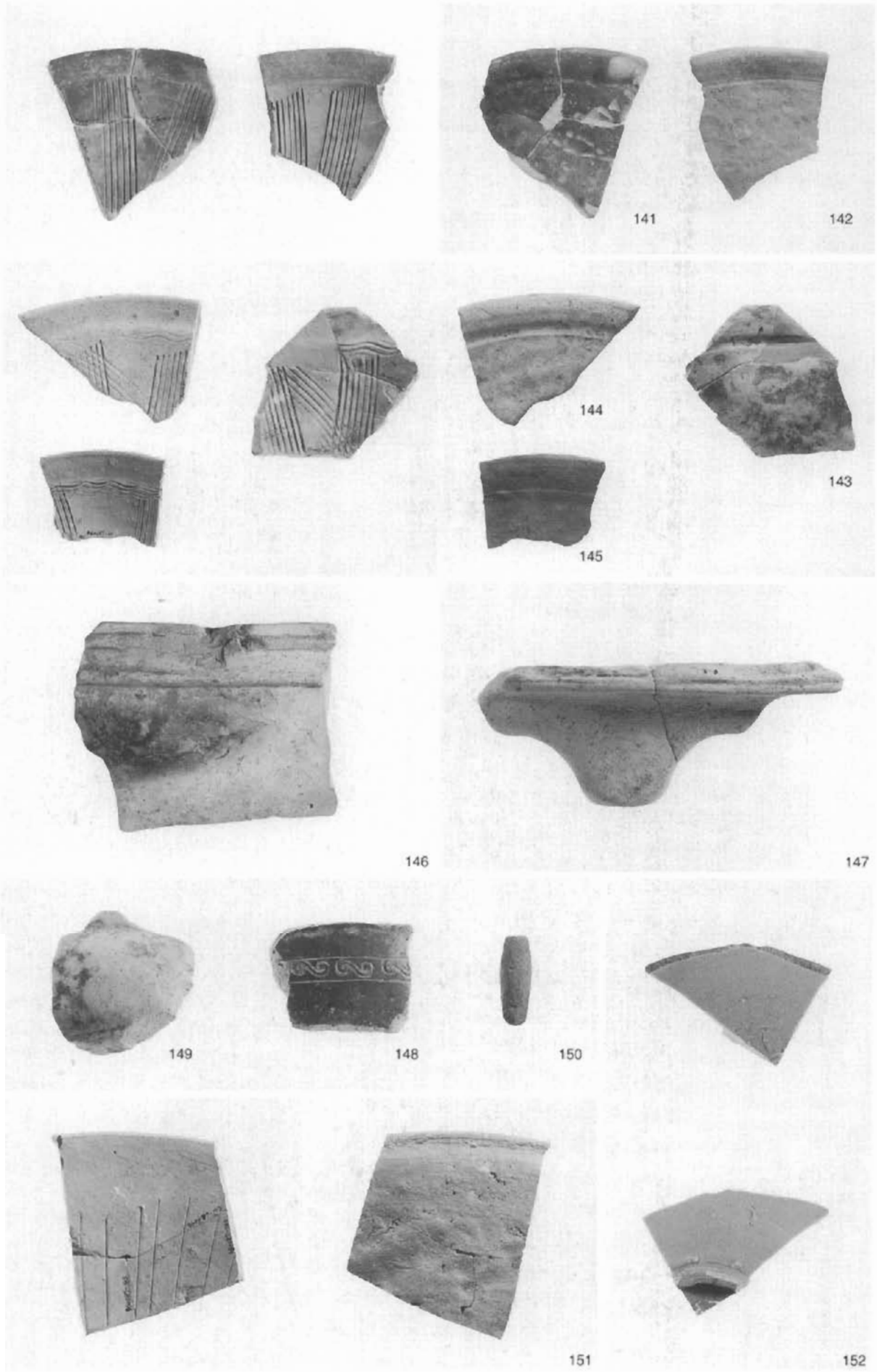
137

138

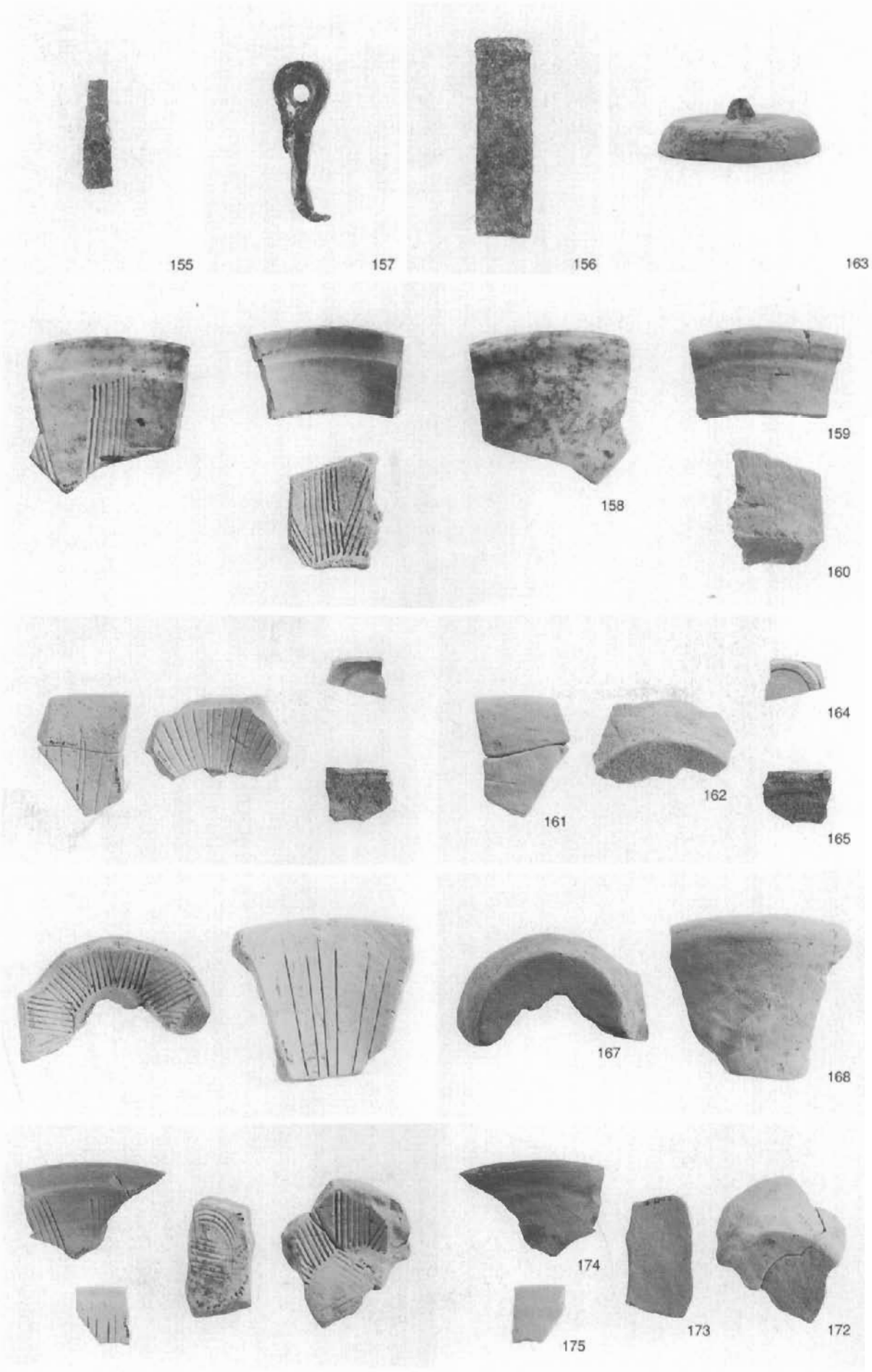
139

140

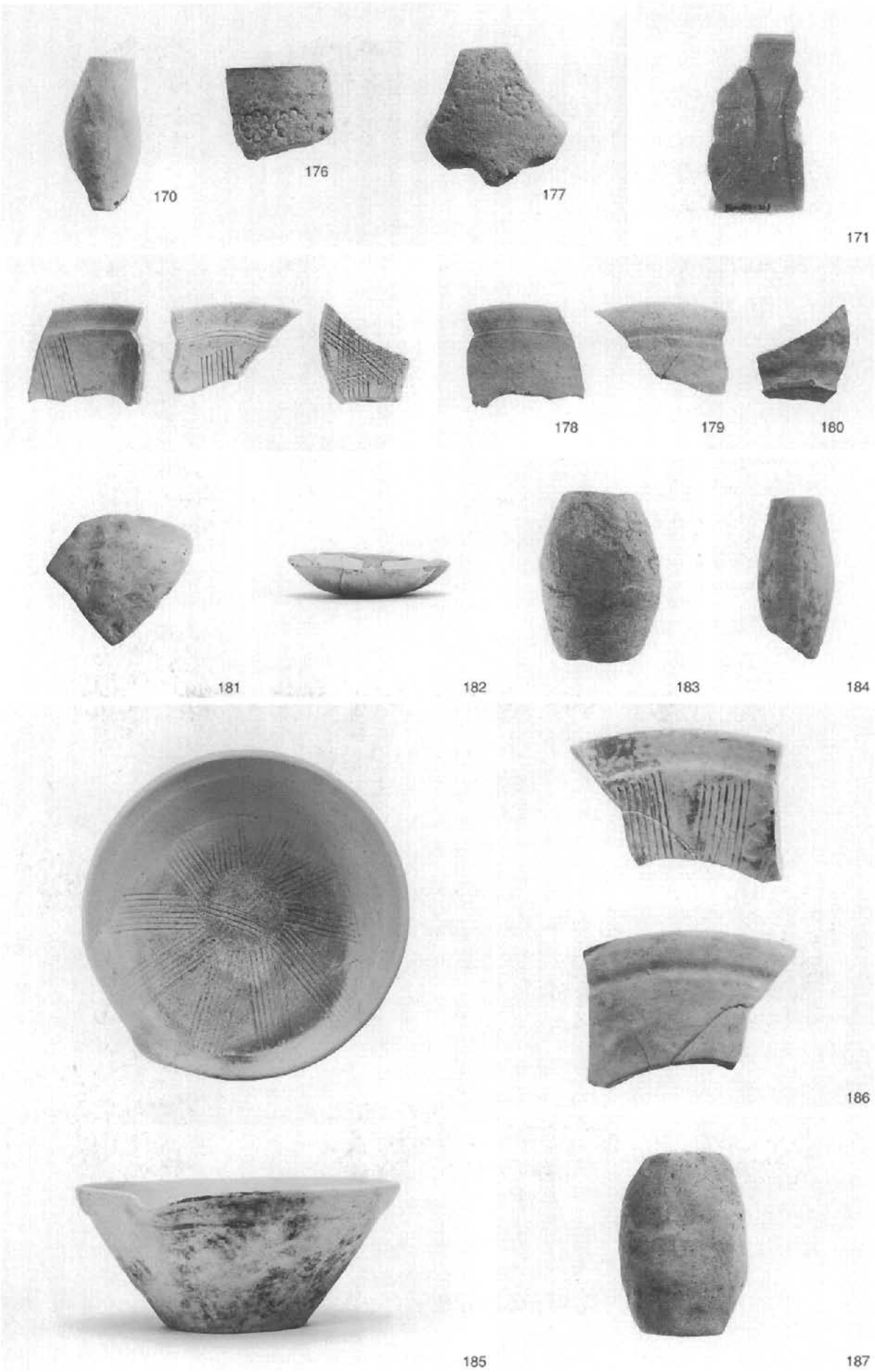
A地区SK02出土遺物



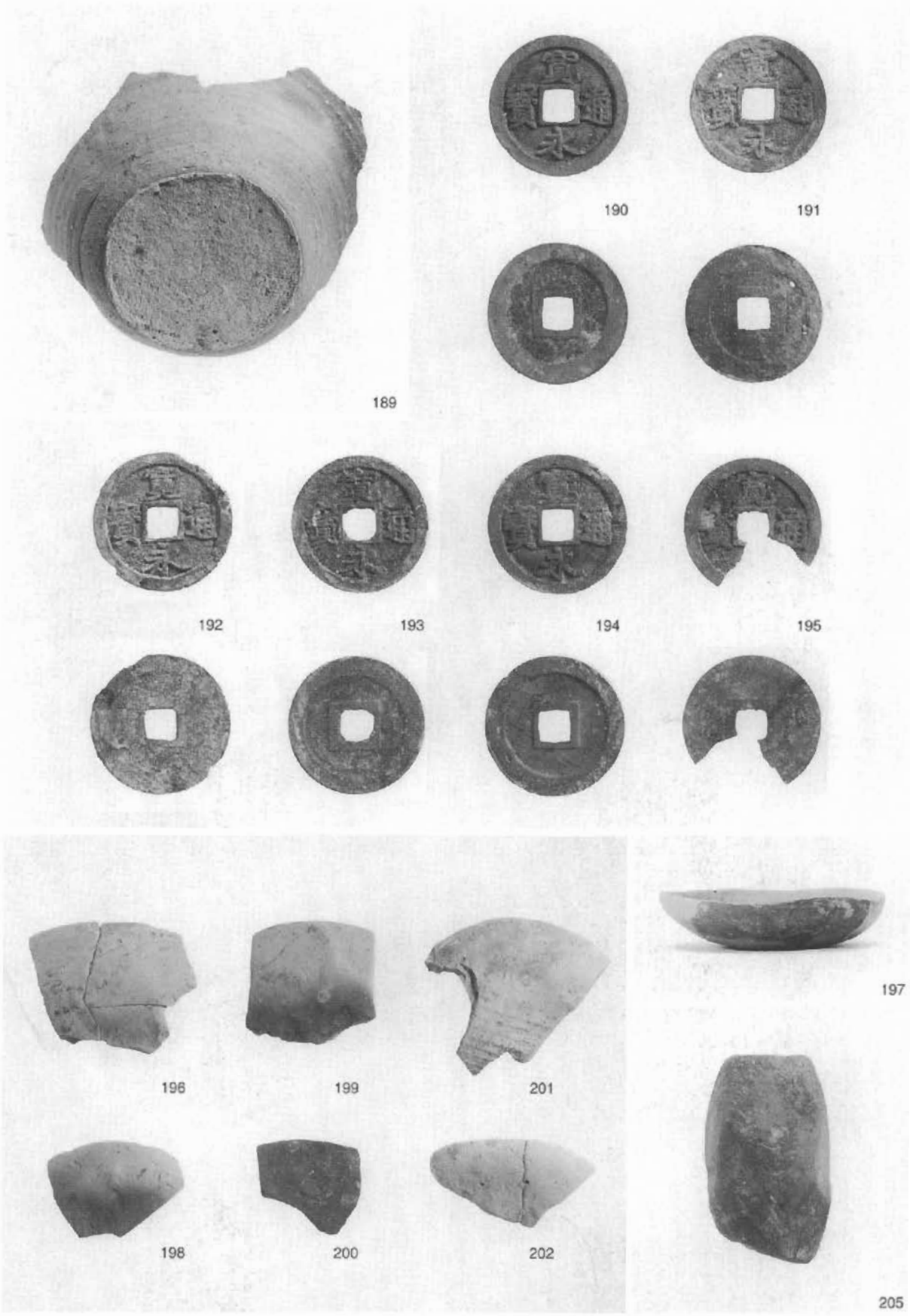
A地区SD01出土遺物



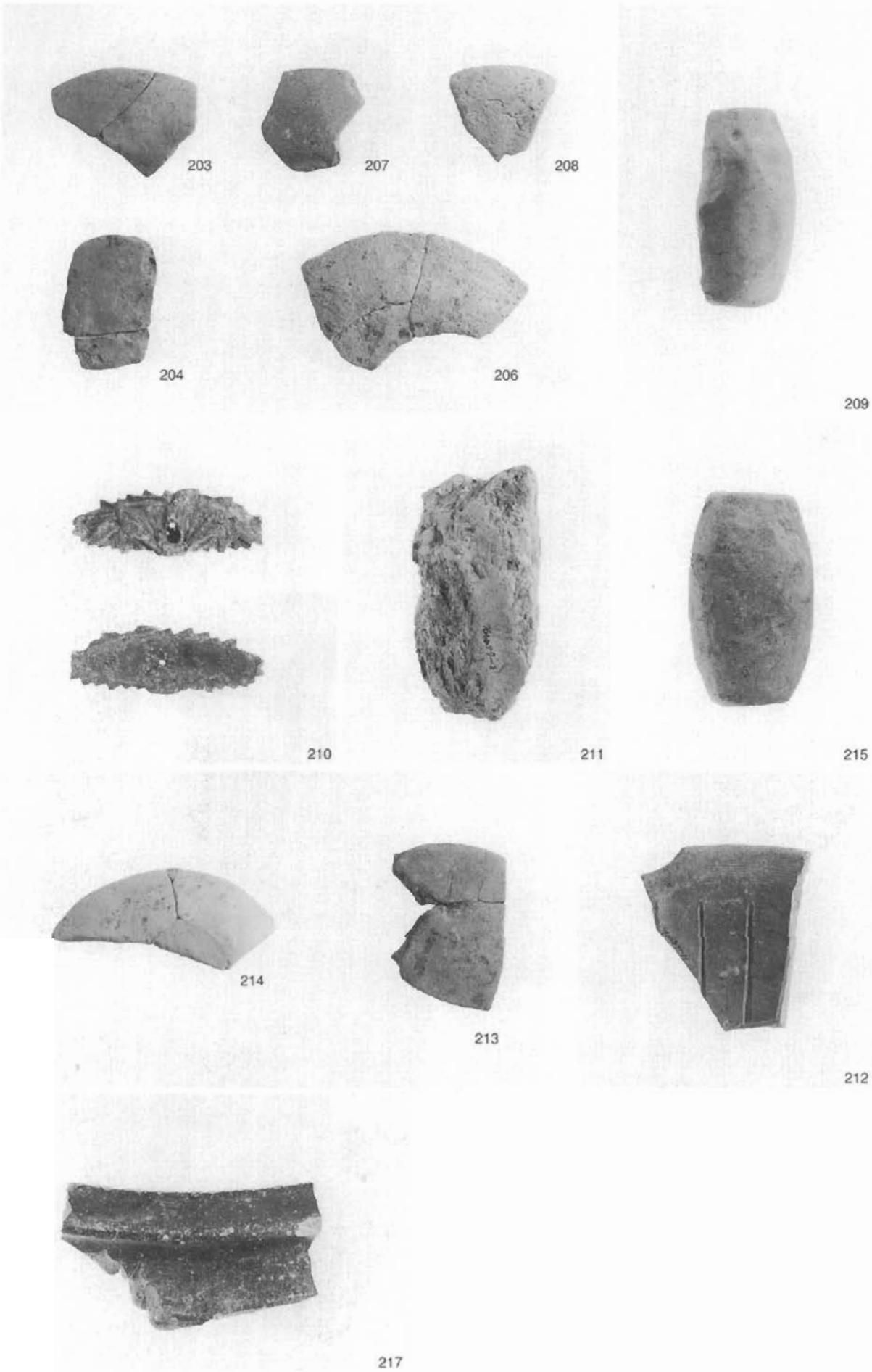
A地区溝・ピット・井戸・土坑出土遺物



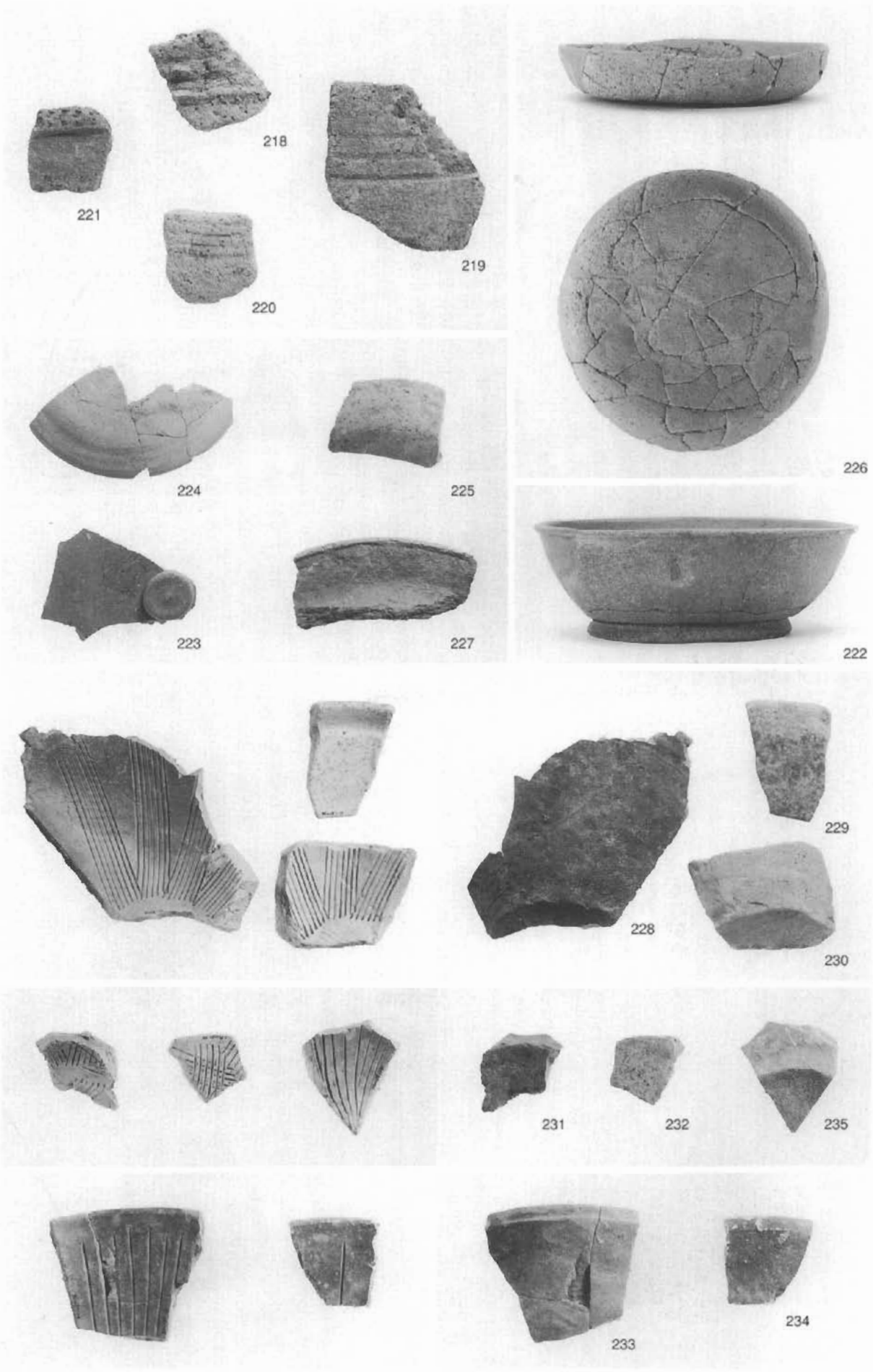
A地区土坑出土遺物



A地区SK27・B地区ピット出土遺物

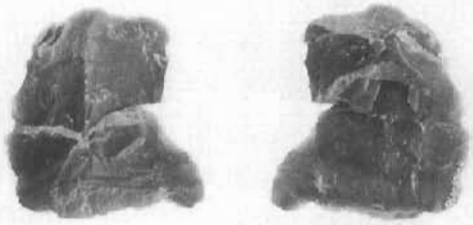


B地区ピット・土坑出土遺物

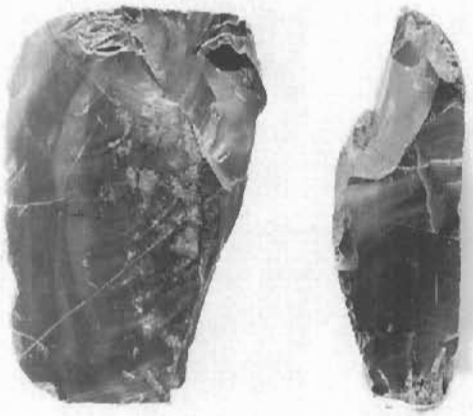

218
221
219
220
226
224
225
223
227
222
229
228
230
231
232
235
234
233

包含層出土遺物

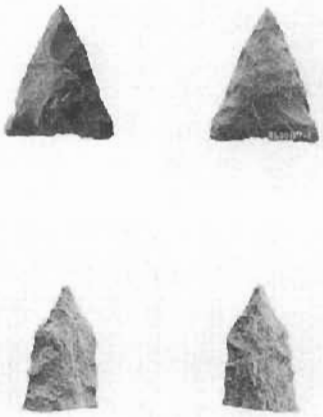
236



237



238



239

240

241

242

243

244

包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まとばいせき・うえのだんいせき
書名	的場遺跡・上ノ段遺跡
副書名	(国) 175号特殊改良第一種事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第225冊
編著者名	池田征弘・藤科哲男
編修機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
発行年月日	西暦2002年（平成12年）3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
まとば的場	兵庫県市島町上竹田	28646	960086	35°13′29″	135°7′55″	19960509～19961127	1840㎡	(国) 175号特種改良第一種事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	弥生時代前期	落ち込み	弥生土器・結晶片岩様緑色岩製小玉	
集落跡	弥生時代後期	竪穴住居跡	弥生土器	
墳墓跡	古墳時代後期	土壙墓	須恵器・焼土	
集落跡	奈良時代	掘立柱建物跡	須恵器・土師器	
集落跡	鎌倉時代	柵列跡	土師器	

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	調査番号					
うえのだん上ノ段	兵庫県市島町上竹田	28646	960087	35°13′41″	135°7′55″	19960509～19961127	2602㎡	(国) 175号特種改良第一種事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
墳墓跡	弥生時代後・末期	周溝墓・木棺墓	弥生土器・碧玉製管玉・鉄器	
集落跡	奈良時代	竪穴住居跡・土坑	須恵器・土師器	
集落跡	室町時代	区画溝・ピット・土坑	瓦質土器・土師器・丹波焼・青磁・鉄器	
墳墓跡	江戸時代	木棺墓	丹波焼・寛永通寶	

兵庫県文化財調査報告　第225冊

的場遺跡・上ノ段遺跡

(国)175号特殊改良第一種事業に伴う発掘調査報告書

平成14年3月22日発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078－531－7011

発　行　兵庫県教育委員会
〒652-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印　刷　船場印刷株式会社
〒670-0994　姫路市定元町4－2